

連合研究科共同研究プロジェクトG（平成18—20年度）

最終報告書

初等教育段階における系統的英語教育に関わる  
教師教育プログラムの協働開発  
—連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとして—

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

# 目次

序	1
全体概要	
1 はじめに	3
2 目的	4
3 組織	5
4 研究経過	6
5 報告書	8
課題1：国内の小学校英語教育関係の教育プログラムの分析	
1 アンケート実施にあたって	9
2 結果及び考察	9
(1) 小学校英語専攻・コース等の設置について	9
(2) 小学校英語活動（英語教育）を意識した授業の開設について	10
(3) 小学校英語活動（英語教育）と教育研究組織の改編について	12
(4) 小学校英語活動（英語教育）を意識した授業の内容について	13
① 授業形態	13
② 単位数	13
③ 開設クラス数及び履修者数	14
④ カリキュラム上の位置づけ	14
⑤ 履修者について	14
⑥ 担当者について	15
(5) シラバスに見られる授業内容等	16
(6) アンケート結果のまとめと考察	16
3 まとめと提案	17
4 資料：実施したアンケート	18
課題2：国内における教師のための教育・研修プログラム分析結果	
0 緒言	22
1 「小学校英語活動」の教師研修調査について	22
2 文部科学省小学校英語サポートにおける教師研修について	23
3 都道府県の教育研修センターなどにおける教員研修について	30
4 教師研修会のまとめと課題	36
課題3：初等教育段階での英語教育プログラム（英語活動）の概観一年間カリキュラムに焦点をあててー	
1 はじめに	38
2 報告書から見る各地域の英語活動	38
3 報告書に見る年間活動計画のカリキュラムに取り上げられた話題とその言語材料	43
課題4：諸外国の初等教育段階での英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムの分析	
1 大韓民国	53
2 中華人民共和国	58
3 台湾	63
4 フィンランド	69

課題5：初等教育段階における英語教育プログラムの開発

1 開発原理 (1) 学習の言語学的側面	75
(2) 学習の認知的側面	78
(3) 学習の伝達の側面	81
(4) 学習の社会的側面	84
(5) 学習の情意的側面	87
(6) 学習の方略的側面 — 「コミュニケーション方略」に焦点をあてて —	90
(7) 小学校英語教育における語彙指導：言語習得の観点から	93
(8) 言語教育政策的側面	96
(9) 小学校における外国語活動の経営的側面	102
2 開発原理の事例 (1) 言語的側面 (単数形) の事例	105
(2) 言語的側面 (複数形) の事例	107
(3) 言語的側面 (数えられない名詞) の事例	109
(4) 方略的側面 (コミュニケーション方略) の事例	111
(5) 言語的側面 (「三人称単数現在形」を気づかせること) の事例	113
(6) 異文化理解を指向した場面・状況を類推させること の事例	114

課題6 国際シンポジウム

1 パンフレット「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」	115
2 筆記記録	161

課題7 教師のための教育・研修プログラムの開発

1 プログラム	173
2 研修プログラムの基本理念と事例に基づくプログラム開発	183
3 小学校外国語 (英語) 活動のための知識ベース (Knowledge Base)	193

最終原稿執筆者 (大学) 一覧

序	勝野眞吾	(6) 平野絹枝
全体概要	兵庫教育大学	(7) 太田垣正義
課題1	鳴門教育大学	(8) 伊東治己
課題2	高橋美由紀	(9) 山森直人
課題3	石濱博之	2 (1) 石濱博之
課題4		(2) 石濱博之
1	今井裕之・大場浩正	(3) 石濱博之
	中田賀之・山森直人	(4) 平野絹枝・石濱博之
2	兼重昇	(5) 大場浩正・石濱博之
3	高橋美由紀	(6) 石濱博之
4	伊東治己	課題6
課題5		1 全員
1 (1)	大場浩正	2 山森直人
(2)	山岡俊比古	課題7
(3)	今井裕之	1 兵庫教育大学
(4)	吉田達弘	2 高橋美由紀
(5)	中田賀之	3 山岡俊比古

## 序

兵庫教育大学連合大学院では、連合大学院の利点を生かし、構成大学の教員が所属大学、専門領域の枠を越えて連携・協働するプロジェクト型の共同研究が平成15年から推進されている。

本報告書は、平成18年度から3年間にわたる共同研究プロジェクトGとして採択された「初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協働開発－連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとして－」の成果をまとめたものである。

小学校段階での英語教育については、平成17年10月中央教育審議会が、その答申「新しい時代の義務教育を創造する」において「小学校段階における英語教育を充実する必要がある」とし、それを踏まえて、同審議会教育課程部会において、(1)英語教育を必修とするかどうか、(2)国語力育成との関係はどのようにするか、(3)中・高等学校の英語教育との関係はどのようにするか、(4)必修とする場合、開始学年、教育内容、教材、指導者の確保、実施時期をどうするか、などについて議論が進められた。平成20年3月に公示された次期の小学校学習指導要領にはその議論をもとに、第4章に外国語活動について記述されることとなった。そこでは、小学校第5年生および第6年生において、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるようにするとされ、外国語活動においては英語を取扱うことを原則とするとされて、小学校段階からの英語教育の導入が明示された。

平成18年にスタートした本プロジェクトは、初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協働開発を目的としたものであるが、まさに次期の学習指導要領とそのもとで展開される小学校段階の英語教育を先取りした試みである。

本プロジェクトでは、Ⅰ)初等教育段階における英語教育の開始学年、教育内容、教材、実施時期などの総合的研究、Ⅱ)小学校英語教育プログラムの開発、Ⅲ)教師のための系統的な教育・研修プログラムの構築、の3つを具体的課題とし、これらの課題に対して、共同プロジェクトに参加する上越教育大学、兵庫教育大学、鳴門教育大学が、それぞれひとつの研究課題の主担当校となり、関連する研究課題には、教員全員が参加して検討を行った。

本研究プロジェクトでは、三大学の副学長、理事を各大学のチームリーダーとしたが、具体的研究は兵庫教育大学言語系教育連合講座の山岡俊比古教授を中心に、上越教育大学平野絹枝教授、大場浩正准教授、鳴門教育大学太田垣正義教授、伊東治己教授の連携のもとに進められた。この試みは教員養成系大学としての共通性を持ちながら、それぞれの地域に密着して独自の個性を持つ各大学の「連合」という特性を生かし、学校教育実践学構築のためのひとつのモデルを提示しようとしたものである。

プロジェクトGチームリーダー  
兵庫教育大学 副学長  
勝野 眞吾



## 全体概要

### 1 はじめに

本プロジェクト研究は、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科が行う共同研究プロジェクトの一つであり、平成18年4月1日から平成21年3月31日まで三カ年をかけて行われた研究である。本研究は、通称プロジェクトGとも呼ばれる。ここのアルファベットのGは、Aから始まって6番目のプロジェクト研究であることを示している。

本研究科が行うこの共同研究プロジェクトのねらいの一つは、連合大学院の利点を生かし、構成4大学の教員が所属大学と専門領域の枠を越えたプロジェクト型の共同研究を行うことである。本共同研究プロジェクトの名称である「初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協働開発」に「連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとした」とする副題がついているのは、このためである。

しかしながら、本研究プロジェクトが連合大学院の構成4大学のすべてではなく、上越教育大学、兵庫教育大学、鳴門教育大学の3大学に限定されているが、その理由については執筆者は知るところにない。なお、この研究には15名の教員が関わっているが、実質的に研究を行ったのは英語教育に直接に関わっている12名（上越教育大学3名、兵庫教育大学5名、鳴門教育大学4名）である。

本研究プロジェクトは、関係者12名が節目に一堂に会して全体会議を開く以外は、もっぱらRCSによるTV会議を利用して行われた。このTV会議に当たっては、事前に会議資料を電子メール等で配信し、それを持って各教員がそれぞれ以下の所属大学の指定された部屋に集まり、相互に映像を見ながら行われた。なおTV会議は合計11回行われた。

上越教育大学：人文棟 2F 「SCSスタジオ」

兵庫教育大学：共通講義棟 3F 「SCS教室」

鳴門教育大学：地域連携センター 2F 「教授スキル演習室」

全体会議は以下のとおり、3回行われた。

第1回：日時：平成18年5月21日（日） 10:00～15:00

第2回：日時：平成18年9月19日（火） 11:00～16:00

第3回：日時：平成19年9月23日（日） 12:00～17:00

開催場所は第1回と第3回が連合大学院大阪サテライト・キャンパス・イノベーションセンター（大阪地区）で、第2回が兵庫教育大学教育・社会調査研究センター（東京オフィス）であった。

また、課題の一つである、国際シンポジウムを「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」というテーマで、大韓民国、中華人民共和国、アメリカから専門家を招き、平成20年7月20日（土）にニチイ学館神戸ポートアイランドセンターにおいて、開催した。ほぼ予定どおりの参加人数（126名）を得た。

法人化以降、各大学とも多忙を極める中、このプロジェクト研究の参加者はその目的を達成すべく、研究を進め、この度、その成果の報告書の出版までこぎ着けた。各参加者の努力に敬意を表するものである。

なお、共同研究プロジェクトにはその成果として、いわゆるA論文の公表という責務が課せられているが、本プロジェクト研究においては、以下の4点のA論文の公表が行われた。

- 1 山岡俊比古（2008）「小学校英語学習における認知的側面—認知的発達段階に即した学習とその促進—」『教育学実践論集』第9号、pp.75-86.
- 2 伊東治己（2008）「フィンランドにおける小学校英語担当教員養成システムに関する研究」『教育学実践論集』第9号、pp.103-117.
- 3 山岡俊比古（2008）「英語を学ぶ日本語話者の /æ/ の発音学習について」『日本教科教育学会誌』第30号、第4巻、pp.49-58
- 4 Yamaoka, T. (2008) “Effects of Pronunciation Practice of the English /æ/ Sound Utilizing the Japanese Contracted Sound [mjæ]: Type Frequency in Terms of Distributional Variety and the Effects of Practice with Increased Distributional Type Frequency” *Annual Review of English Language Education in Japan*, Vol. 19, pp. 61-70.

## 2 目的

本プロジェクト研究の目的は、以下のとおりである。

「初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協同的開発」

この主目的に加えて、本連合大学院の特性との関係で、以下の副目的も添えられている。

「連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとして」

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは以下の3つの具体的目標を定めた。

- (i) 初等教育段階における英語教育の開始学年，教育内容，教材，実施時期などの総合的検討
- (ii) 小学校英語教育プログラムの開発
- (iii) 教師のための系統的な教育・研修プログラムの構築

上記の3つの目標を達成するために、さらに具体的な研究課題を下記のとおり、9つ設けた。

- ① 国内の教員養成課程において行われている小学校英語教育関係の教育プログラム等について資料を収集，整理し，その目的，内容，方法，教材，評価法等について比較分析する。
- ② 国内の教師のための教育・研修プログラムについて資料を収集，整理し，その目的，内容，方法，教材，評価法等について比較分析する。
- ③ 国内における初等教育段階での英語教育プログラムについて調査，分析する。
- ④ 諸外国の初等教育段階での英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムについて調査，分析する。
- ⑤ 初等教育段階における英語教育プログラムの開発を行う。そのための開発原理を探索し，それを基にして，カリキュラムの構成，教育内容と方法をふまえて教材開発を行い，評価法を明らかにする。
- ⑥ 国際シンポジウムを開催する。
- ⑦ 教師のための教育・研修プログラムを作成する。
- ⑧ 初等教育段階における英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムを試行し，修正し，改良する。
- ⑨ 報告書を作成する。

また、本プロジェクトの副目的を達成するために、すべての課題に関係者全員が関わることを前提とし、①を鳴門教育大学、⑤を上越教育大学、⑦を兵庫教育大学でそれぞれ主担とすることにした。

### 3 組織

本プロジェクト研究に関わったメンバーの組織は以下の表のとおりである。ただし、この表はプロジェクトG研究の終結時のものである。開始時との違いについては、必要と思われるもののみ [ ] に示した。

氏名	配属	学位	おもな役割分担 (◎はチームリーダー)
勝野 眞吾	兵庫教育大学 副学長	健康教育学 薬学博士	◎ 研究の総括
戸北 凱惟	上越教育大学 副学長	理科教育学 博士 (教育学)	上越教育大学における研究の総括
田中 雄三	鳴門教育大学 理事	精神医学 医学博士	鳴門教育大学における研究の総括
平野 絹枝	上越教育大学 教授	英語教育学 修士 (文学)	上越教育大学における研究の計画立案とまとめ
大場 浩正	上越教育大学 准教授	英語教育学 修士 (教育学)	国内の初等教育段階における英語教育プログラムの開発
石濱 博之	上越教育大学 准教授	小学校英語教育 修士 (教育学)	国内の初等教育段階における英語教育プログラムの開発・国内における初等教育段階での英語教育プログラムの分析
山岡俊比古	兵庫教育大学 教授	英語教育学 博士 (教育学)	兵庫教育大学における研究の計画立案とまとめ
高橋美由紀	愛知教育大学 教授 [発足時は兵 庫教育大学助教授]	応用言語学 博士 (地域研究)	初等教育段階における英語教育に関する教師教育プログラム開発・国内の教師のための教育・研修プログラムの分析
今井 裕之	兵庫教育大学 准教授	英語教育学 修士 (教育学)	初等教育段階における英語教育に関する教師教育プログラムの開発
吉田 達弘	兵庫教育大学 准教授	英語教育学 修士 (教育学)	初等教育段階における英語教育に関する教師教育プログラムの開発
中田 賀之	兵庫教育大学 准教授	英語教育学 博士 (応用言語学)	初等教育段階における英語教育に関する教師教育プログラムの開発
太田垣正義	鳴門教育大学 教授	応用言語学 修士 (文学)	鳴門教育大学における研究の計画立案とまとめ
伊東 治己	鳴門教育大学 教授	英語教育学 博士 (教育学)	初等教育段階における英語教育プログラムの分析
兼重 昇	鳴門教育大学 准教授	英語教育学 修士 (教育学)	初等教育段階における英語教育プログラムの分析
山森 直人	鳴門教育大学 准教授	英語教育学 博士 (教育学)	初等教育段階における英語教育プログラムの分析



## 4 研究経過

研究経過を一覧と概要に分けて示す。

### (1) 一覧

平成 18 年

第 1 回全体会議	5 月 21 日 (日) に実施	第 2 回全体会議	9 月 19 日 (火) に実施
第 1 回 T V 会議	7 月 20 日 (木) に実施	第 2 回 T V 会議	12 月 14 日 (木) に実施

平成 19 年

第 3 回 T V 会議	2 月 22 日 (木) に実施	第 3 回全体会議	9 月 23 日 (日) に実施
第 4 回 T V 会議	5 月 31 日 (木) に実施	第 6 回 T V 会議	12 月 12 日 (水) に実施
第 5 回 T V 会議	7 月 19 日 (木) に実施		

平成 20 年

第 7 回 T V 会議	3 月 27 日 (木) に実施	国際シンポジウム	7 月 20 日 (日) に実施
第 8 回 T V 会議	5 月 20 日 (火) に実施	第 10 回 T V 会議	9 月 24 日 (水) に実施
第 9 回 T V 会議	6 月 12 日 (木) に実施		

平成 21 年

第 11 回 T V 会議 3 月 13 日 (金) に実施

### (2) 概略

平成 18 年

#### 第 1 回全体会議

日時：平成 18 年 5 月 21 日 (日) 10 : 00 ~ 15 : 00

場所：大阪サテライト

議題：プロジェクトの共通理解と年次計画および役割分担の相互確認

#### 第 1 回 T V 会議

日時：平成 18 年 7 月 20 日 (木) 10 : 40 ~ 12 : 10

場所：各大学指定室

議題：課題①②③の役割分担再考、課題④見積

#### 第 2 回全体会議

日時：平成 18 年 9 月 19 日 (火) 11 : 00 ~ 15 : 00

場所：東京オフィス

議題：課題①②③④

#### 第 2 回 T V 会議

日時：平成 18 年 12 月 14 日 (木) 10 : 30 ~ 12 : 00

場所：各大学指定室

議題：課題①②③

平成 19 年

#### 第 3 回 T V 会議

日時：平成 19 年 2 月 22 日 (木) 10 : 00 ~ 12 : 00

場所：各大学指定室

議題：課題①②③④⑤⑥⑦

#### 第 4 回 T V 会議

日時：平成 19 年 5 月 31 日 (木) 10 : 30 ~ 11 : 30

場所：各大学指定室

議題：課題①②③④⑤⑥⑦

第5回TV会議

日時：平成19年 7月19日（木） 10：30～12：00

場所：各大学指定室

議題：課題①②③④⑤⑥⑦

第3回全体会議

日時：平成18年 9月23日（日） 10：00～15：00

場所：大阪サテライト

議題：課題①②③④⑤⑥⑦⑧

第6回TV会議

日時：平成19年12月12日（水） 15：00～16：30

場所：各大学指定室

議題：課題①②③④⑤⑥⑦⑧

平成20年

第7回TV会議

日時：平成20年 3月27日（水） 15：00～16：30

場所：各大学指定室

議題：課題①②③④⑤⑥⑦

第8回TV会議

日時：平成20年 5月20日（火） 13：00～15：00

場所：各大学指定室

議題：課題⑥

第9回TV会議

日時：平成20年 6月12日（木） 10：30～12：00

場所：各大学指定室

議題：課題⑥

国際シンポジウム

日時：平成20年 7月20日（日） 9：30～17：00

場所：ニチイ学館神戸ポートアイランドセンター

主題：アジアにおける初等英語教育の今後の展開

招聘講師：バトラー後藤裕子（Yuko Goto Butler）（米国）ペンシルベニア大学准教授

金榮淑（Yongsuk, Kim）（大韓民國）大邱教育大 學校英語教育科教授

金美京（Mekyoung, Kim）（大韓民國）大邱臥龍初等學教諭

周琳（Zhou Lin）（中華人民共和國）北京首都師範大學初等教育學部助教授

Richard Steinsiek（リチャード スタインジーク）（日本）兵庫教育大學附屬小學校教諭

第10回TV会議

日時：平成20年 9月24日（水） 10：30～12：00

場所：各大学指定室

議題：課題①②③④⑤⑥⑦⑧⑨

平成21年

第11回TV会議

日時：平成21年 3月13日（金） 10：30～12：00

場所：各大学指定室

議題：課題⑨

## 5 報告書

本報告書はこの共同研究プロジェクトが担った課題ごとにその成果を報告している。それぞれの概要は以下のとおりである。

### 課題1：国内の小学校英語教育関係の教育プログラムの分析

この課題については、アンケート調査を基にして行われた。国内の関係機関へアンケートを郵送し、その結果に基づいて分析が行われた。アンケートの作成においては全員が関わり、その結果の分析については、兼重昇を中核として、鳴門教育大学が中心となって行った。

### 課題2：国内の教師のための教育・研修プログラムの分析

この課題については、小学校英語教育の専門家である石濱博之、高橋美由紀、兼重昇を中心に研究が進められ、その結果について全員で検討を行った。とりわけ高橋がその中核を担った。

### 課題3：国内における初等教育段階での英語教育プログラムの分析

この課題については、小学校英語教育の専門家である石濱博之、高橋美由紀、兼重昇を中心に研究が進められ、その結果について全員で検討を行った。とりわけ石濱がその中核を担った。

### 課題4：諸外国の初等教育段階での英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムの分析

この課題については、以下のとおり4つの国を分担して訪問し、その成果としての分析が国ごとに行われた。

- 1 大韓民国：今井裕之、大場浩正、中田賀之、山森直人
- 2 中華人民共和国：兼重昇
- 3 台湾：高橋美由紀
- 4 フィンランド：伊東治己

### 課題5：初等教育段階における英語教育プログラムの開発

この課題に関しては、プログラム開発にかかる原理を9つの側面から提示し、それに基づいてプログラムの開発が行われた。9つの原理の提示は9人の教員によってそれぞれ行われた。プログラムの開発は石濱を中核として上越教育大学が中心となっており、最終的に全員で検討した。

### 課題6：国際シンポジウム

この課題については全員が関わり、以下のとおり行われた。この課題に関する本報告書の内容は、この国際会議のパンフレットを再録したものと、シンポジウム全体の筆記記録である。

- 1 開催日：2008年7月20日
- 2 開催時間：9：30～17：00
- 3 開催地：ニチイ学館 神戸ポートアイランドセンター
- 4 参加人数：126名（県内57名、県外65名、海外4名）

### 課題7：教師のための教育・研修プログラムの開発

この課題については、まず、研修は指導者養成研修、中核教員研修、現職教員研修（校内研修）の3つレベルで行われるが、このプロジェクトでのプログラム開発は現職教員研修（校内研修）のレベルを対象とすること、次に、配当時間は10時間とすることを全員で決め、プログラムの開発は兵庫教育大学を中心に行い、その結果を全員で検討した。なお本報告書には、そのプログラム案と、高橋美由紀が関わった研修プログラムに基づいた理念的検討と事例研究が含まれている。

## 課題1：国内の小学校英語教育関係の教育プログラムの分析

「小学校英語教育」を視野に入れた教員養成カリキュラム開発にかかわるアンケート

### 1 アンケート実施にあたって

本調査は、初等教員養成課程を設置している大学が、教員養成カリキュラムとして「小学校英語教育」についてどのような対応を取っているかを明らかにするもので、その実態調査が今後の教員養成大学としてのカリキュラムの在り方を検討する際の資料として資するものと考えて行った。

なお、本調査は平成19年3月に実施したものであり、この実施時期は小学校学習指導要領が告示された平成20年3月28日よりも以前のものである。そのため、本調査結果は平成19年度時点での各大学の小学校英語に対する実態を表すものであることを付記する。

#### (1) 調査内容

本調査では、まず次の2点について(①小学校英語専攻・コースの設置及びその予定について②小学校英語教育に関する授業の開設及びその予定について)問い、その中で授業を既設及びその設置予定がある大学には、併せて別紙1, 2を利用して、③小学校英語教育に関する授業の教育課程上の位置づけ及び担当者について、④小学校英語教育に関する授業のシラバス等について、回答を求めた。また、小学校英語活動(英語教育)に対応すべく大学・学部単位での教育研究組織の改編・改編の有無、その内容についてたずねた。アンケート用紙の詳細は本セクションの最後にある資料を参照されたい。また、この他にも各大学で小学校英語教育に関する取り組みを実施している場合は、その資料等の送付を協力依頼した。

#### (2) 実施方法

平成19年3月末に、初等教員養成課程を有する大学の各学部及び分校を含む141校(内訳133大学(国立大学法人58大学、私立大学75大学))にアンケート用紙を配付し、平成19年4月21日までに回収できたものを結果として利用した。同じ大学でも複数学部において初等教員養成を行っている場合は、別途調査用紙を送付し回答を求めた。調査用紙は基本的に無記名とし、問い合わせ先等が未記入の場合は、回答大学名は特定できない。

#### (3) 分析方法

結果の提示及び分析にあたっては、アンケート調査票に基づき、まず各調査項目の結果を記述する。次に別紙1, 2に基づいてシラバス等の資料がある場合は公表可能と回答のあった大学のもののみ併せて紹介する。

## 2 結果及び考察

本アンケート調査は、141大学学部のうち85大学学部(北海道教育大学等は各校別として扱う)から回答が得られた。回収率は、60.3%である。先述のように、無記名回答を基本としたため、各大学・学部名は不明なものも多くあるが、この回収率は回答に協力していただいた大学・学部の小学校英語教育への対応について関心が高いということも言えるだろう。

以下、アンケート質問紙に基づいて、調査項目ごとにその結果を示す。

### (1) 小学校英語専攻・コース等の設置について

図1は、各大学・学部の小学校英語教育専攻・コースの設置状況である。これをみると平成19年4月段階では、本調査の協力校の内90%以上が特別に小学校英語教育専攻・コースを設置していないことが分かる。また、既に設置していると回答した8校のうち、平成19年に新たに専攻・コースを設置したものが4校であり、いずれも新規に小学校英

語に対応していこうという方針が見られる。未設置の大学においては、調査実施時点での平成 20 年度以降の新規専攻・コースの設置については、全ての大学において未定であった。本調査対象大学としては含めていないが、鳴門教育大学でも、小学校英語教育専攻を設置して教員養成を行ってきたが、これまで小学校では、教科として取り入れられていない現状を鑑みると、特別のコース・専攻を設けることは、(調査した時点では) 一般的ではないと言えよう。また、初等教員養成課程として、その内を細分していない大学・学部もあるため、このような結果になったのではないかと解釈できる。

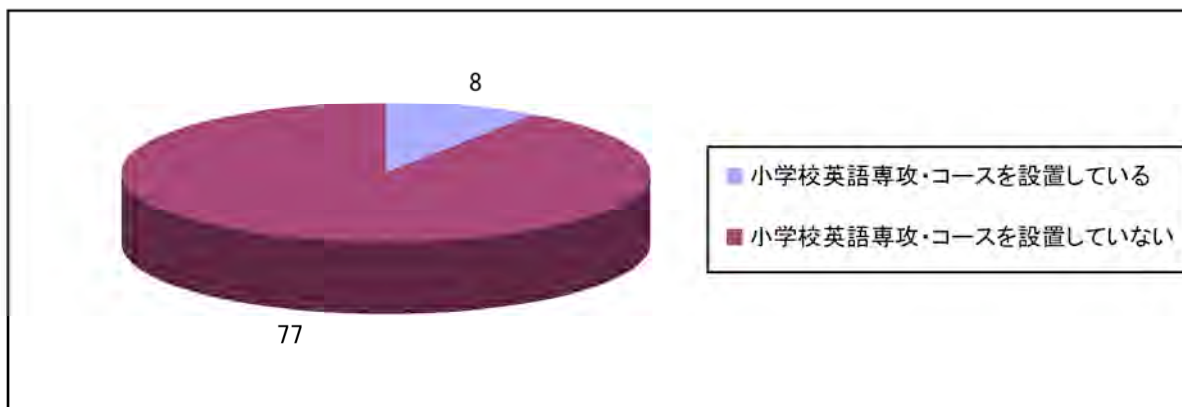


図 1. 各大学の小学校英語教育専攻・コース設置状況 (平成 19 年 4 月現在) ※数値は校数

なお、実際に各大学での専攻・コースの名称は、次の通りである。

- ①学校カリキュラム開発専攻英語グループ (北海道教育大学釧路校),
- ②初等教育教員養成課程英語選修 (東京学芸大学)
- ③児童英語教員養成プログラム (共愛学園前橋国際大学),
- ④初等教育教員養成課程英語選修 (愛知教育大学)
- ⑤小学校英語教育(上越教育大学),
- ⑥初等教育教員養成課程英語コミュニケーション (宮城教育大学)
- ⑦異文化コミュニケーション専修 (千葉大学),
- ⑧小学校教育コース英語専修 (岡山大学)
- ⑨小学校英語教育コース (鳴門教育大学) ※アンケート結果には含めず

## (2) 小学校英語活動 (英語教育) を意識した授業の開設について

図 2. は、各大学の小学校英語教育関連授業開設・予定 (校数) である。但し本データの内、4 校は、複数回答をされており、「既存の授業に内容を加えて対応」及び「既に開設」が 1 校、「既存の授業に内容を加えて対応」及び「開設予定」が 1 校、「既に開設」及び「開設予定」が 2 校である。このような複数回答を考慮しても、各大学・学部で専攻・コースは設けていないものの、小学校英語活動 (英語教育) を意識した授業を開設・開設予定の大学が半数以上あることが分かる。今後の小学校英語導入を見通して、カリキュラム上に新規に授業開設をすることが困難であっても、既存の授業を活用しながら、教員養成課程の学生に小学校英語に関する情報を提供する機会を作っている取り組みがみられる。

一方、31 校の開設未定と回答した大学・学部についても、本調査と前後して、新学習指導要領の告示に伴い、今後の方針に変更を行ったということも調査後のインタビューでうかがうことができた。

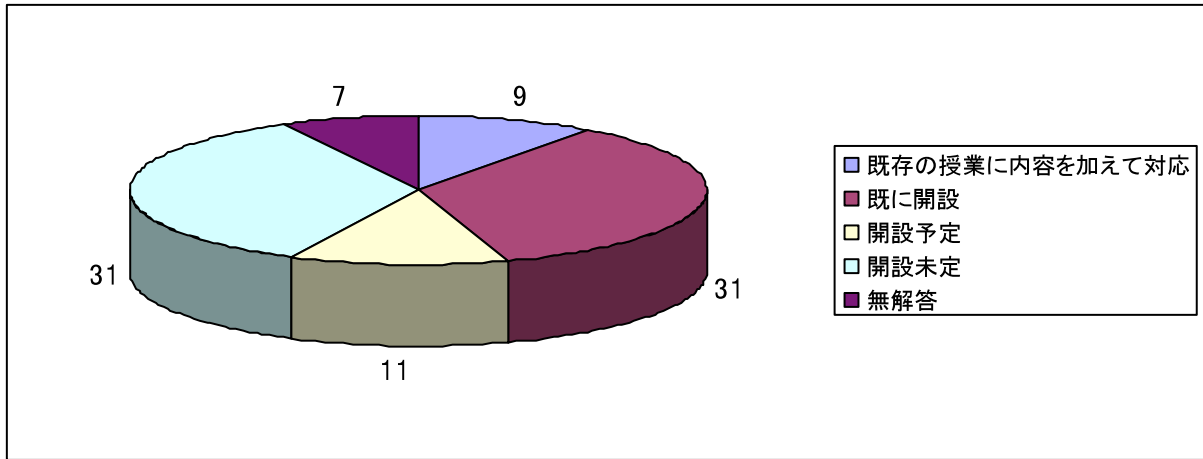


図2. 各大学の小学校英語教育関連授業開設・予定 (平成19年4月現在) ※数値はのべ校数

各大学の具体的な開設授業名については、以下に示すとおりである。ここに挙げた開設授業名については、調査回答用紙を基にしており、回答大学・学部の提供された資料による。

授業の名称に注目すると、ある特徴がうかがえる。私立大学の多くが、「児童英語」という表現を使っているが、国立大学法人では、「小学校英語」という表現を使う傾向にあることである。また、特徴的なのは、新潟大学教育人間科学部においては「初等英語科教育法」という表現を使っている。この傾向については、当該授業開設の時期によるものと考えられる。私立大学では、比較的早い時期から「児童英語」としての授業を開設しており、それを継続して現在も実施している。一方、国立大学法人など、新規に授業開設をした大学・学部では、文部科学省の方針に合わせて「小学校英語」という表現を利用していると予想される。

既存の授業との兼ね合いで取り組んでいる大学では、いわゆる「英語教育関連授業」を利用するものや「総合演習」「総合的な学習の時間」を利用した授業もみられることがわかる。そのため、ここに挙げられた授業を全て同じ範疇で分析することは適切でないかもしれないが、いずれにしても各大学・学部が積極的に小学校英語に関する授業を実施しようとしている。

なお、各授業の教育課程上位置づけなどについては、(4)で取り上げるものとする。

北海道教育大学札幌校	(小学英語 I, 小学英語 II)
北海道教育大学釧路校	(早期英語教育)
奈良教育大学	(小学校英語教育論, 早期英語教育論)
東京学芸大学	(児童英語教育概論 I, 児童英語教育概論 II, 小学校英語教育演習 I, 小学校英語教育演習 II)
埼玉大学教育学部	(英語科指導法 D, 英語科指導法 C (過年度まではこちらで対応))
新潟大学教育人間科学部	(初等英語科教育法)
熊本大学教育学部	(総合演習, 英米文学講義 II)
大阪教育大学	(児童英語教育)
岩手大学	(小学校の英語教育 I, 小学校の英語教育 II)
秋田大学教育文化学部	(英語教育学概論 I, 英語科教育学演習)
静岡大学教育学部	(児童英語教育論)
香川大学教育学部	(英語教育実践演習)
高知大学教育学部	(児童英語)
愛知教育大学	(英語科研究 B II, 英語科教育 B)
上越教育大学	(小学校英語教育概論 (学部), 小学校英語教育特講 (大学院), 小学校英語コミュニケーション演習 (大学院),
宮城教育大学	(英語コミュニケーション教育実践体験演習, 英語学演習 C)
島根大学地域学部	(英語学習指導論, 英語学習の基礎)

神戸大学人間発達環境学研究科	(異言語指導論)
宮崎大学教育文化学部	(英語科教育演習Ⅱ)
山口大学教育学部	(語学教授法, 語学教育法演習)
信州大学教育学部	(小学校英語)
茨城大学教育学部	(小学校英語Ⅰ, 小学校英語Ⅱ)
福井大学	(国際理解基礎, 英語科教育講義Ⅲ (開設予定))
滋賀大学教育学部	(中等英語科教育法(Ⅰ), 中等英語科教育法(Ⅱ), 中等英語科教材内容論(Ⅰ), 中等英語科教材内容論(Ⅱ), 英語科授業研究)
千葉大学教育学部	(総合的な学習の時間(小学校英語入門), 総合的な学習の時間(小学校英語音声指導), 総合的な学習の時間(小学校英語演習), 総合的な学習の時間(小学校英語実践))
群馬大学教育学部	(小学校英語教育の基礎英会話A, B, 小学校英語活動指導法A, B, 小学校英語活動演習A, B, 言語教育と異文化理解Ⅰ)
金沢大学教育学部	(総合演習)
岐阜大学教育学部	(児童英語教育, 小学校国際理解・英語活動,)
京都教育大学	(小学校英語(平成18年度以降入学生用), 児童英語教育(平成17年度以前入学生用))
富山大学人間発達科学部	(小学校英語教育)
岡山大学教育学部	(こどもと異文化理解, 小学校における英語活動)
横浜国立大学教育人間科学部	(中等英語科教育法)
琉球大学教育学部	(英語科教育研究Ⅰ, 英語科教育研究Ⅱ, 小学校教員免許取得希望者に対して、学部改組において小学校英語指導法(選択)の開設を予定)
盛岡大学	(児童英語教育)
立命館大学産業社会学部	(小学校英語教育研究, 小学校英語授業研究)
帝京大学	(小学校英語活動, 小学校英語活動指導法)
京都ノートルダム女子大学	(こどものための英語教育(理論篇), こどものための英語教育(実践篇), 児童英語教育Ⅰ, 児童英語教育Ⅱ)
聖心女子大学	(教育学特講3, 教育学特講4)
共愛学園前橋国際大学	(児童英語概論, 児童英語教材研究, 児童英語教授法演習Ⅰ, 児童英語教授法演習Ⅱ)
関西国際大学教育学部	(Kids EnglishⅡ, 初等英語教育研究, 初等英語教育演習)
京都橘大学	(教育実践発展研究e(児童英語教育論))
聖学院大学児童学科	(児童英語教材研究)
安田女子大学	(児童英語教育論, 児童英語教育演習)
武庫川女子大学	(英語学入門, アメリカ文学鑑賞, イギリス文学鑑賞, スピーキングⅢ, リスニングⅢ, ライティングⅢ, 英語プレゼンテーション, 異文化コミュニケーション, アメリカの教育)
玉川大学	(英語リテラシーⅡ, 英語リテラシーⅢ, 児童英語コミュニケーション, 児童英語指導論A, 児童英語指導論B, 異文化理解と教育, アメリカの教育と文化環境)
大学名不明A	(英語教育法, 教職英語Ⅰ, 教職英語Ⅱ)
大学名不明B	(児童英語)

### (3) 小学校英語活動(英語教育)と教育研究組織の改編について

図3は、各大学の小学校英語教育に対応した教育研究組織改編状況である。多くの大学で教育研究組織の改編については未定であるが、検討中も含めて改編を実施及び予定の大学・学部が15校に及ぶ。

その具体的な改編内容について、例えば、宮城教育大学では、初等教育教員養成課程を平成19年度に再編するとともに、その中に英語コミュニケーションコースの設置を行なっている。また、平成17年度には、(調査実施段階では)教員はすべて兼任という外国人児童の日本語教育及び日本人児童の英語教育のために国際理解教育センターを設置している。上越教育大学では、平成16年度に言語系英語講座に「小学校英語教育」分野を設置している。

この他にも、立命館大学では、平成19年度に産業社会学部の学科再編を行い、現代社会学科のもとに5専攻を設置

し、その中の「子ども社会専攻」に小学校一種免許課程を新たに開設している。その際に、小学校英語教育を視野に入れ、「小学校英語教育研究」、「小学校英語授業研究」の2科目を専攻の専門科目として開設したが、(調査実施段階では)課程認定は受けていないとのことである。また、北海道大学札幌校においては、小学校英語活動に対応すべく英語グループ(コース)を設置し、英語科教育を専門とする職員を2名増加している。

組織改編の背景については、学生に複数免許取得を可能にするプログラムの開発やGPとの関連など様々で、多くはないものの、小学校英語活動(英語教育)を視野に入れた、研究組織も含めた対応をしている大学・学部もあることがわかる。

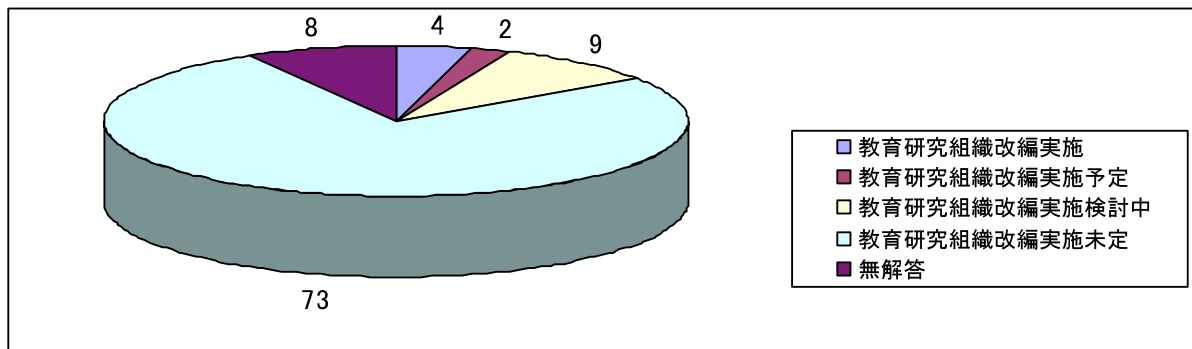


図3. 各大学の小学校英語教育に対応した教育研究組織改編状況(平成19年4月現在) ※数値は校数

(4) 小学校英語活動(英語教育)を意識した授業の内容について

上の(2)で示した具体的な授業科目について別紙1, 2及び公表されたシラバスをもとに次の6点について結果を整理する。対象となる資料は、回答を得られた44校のものを利用し、同じ大学・学部が複数の授業を開設している場合があるため、母数は授業数に基づいて結果を示す。

- ①授業形態,      ②単位数                      ③開設クラス数及び履修者数      ④カリキュラム上の位置づけ
- ⑤履修者について                      ⑥担当者について

① 授業形態

図4は、開設授業の授業形態に関する結果である。他教科領域に関する授業との比較が必要であるが、理論的な内容にとどまらず、演習形式でより実践的な内容を授業に含めていると解釈できる。

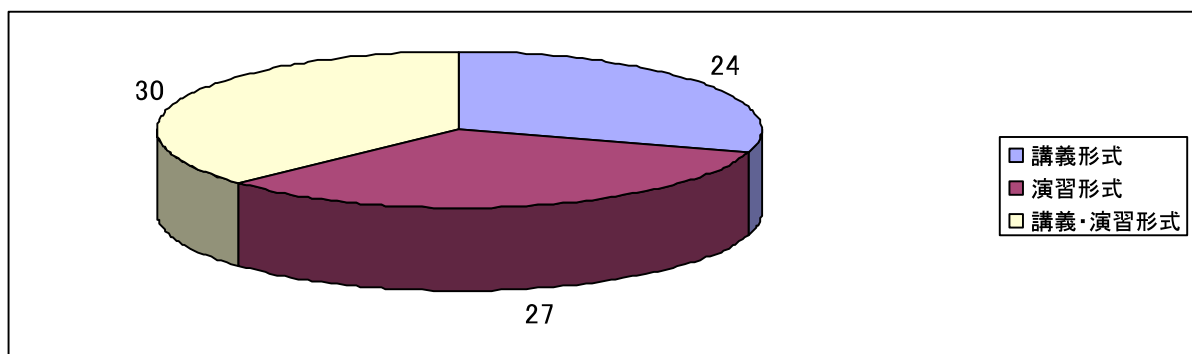


図4. 開設授業の授業形態 ※数値は授業数

② 単位数

当該授業の単位数を示したものが図5である。ほとんどの授業が2単位で取り扱われており、1単位に設定されている授業科目は、「演習」として位置づけられているものがある。



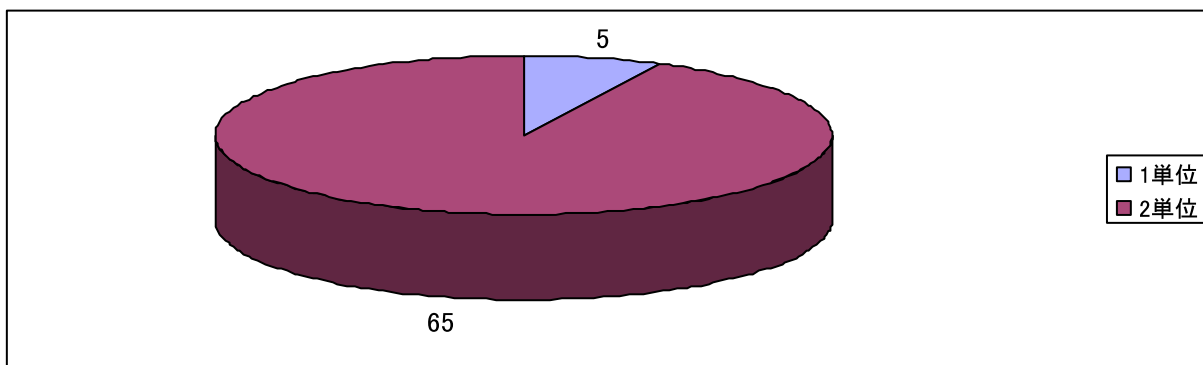


図5. 開設授業の単位数 ※数値は授業数

③ 開設クラス数及び履修者数

開設クラス数及び履修者については、対象学生によって異なるが、履修対象学生が英語専攻生の場合は、明らかに上限を設けていないもの10名程度が受講者数である。一方、全学的に履修を開放している場合は、40名から60名程度の大人数になる授業が多い。

④ カリキュラム上の位置づけ

当該授業のカリキュラム上の位置づけを表したものが図6である。この結果の解釈は慎重に行う必要がある。その理由は、現在の免許法上では、「小学校英語」という名称の授業を免許必修単位とすることは困難であることと、本調査結果の免許取得必要単位と回答された授業は、既存の免許取得必要科目を活用して小学校英語関連の内容を提供しているものがほとんどであるためである。「小学校英語」という名称の授業は、各大学・学部単位で、独自に卒業要件に含めるなど、必修科目としての位置づけをしている大学は若干あるものの（調査時点では）、免許法上必要単位としては、認められにくいという現状がある。千葉大学などでは、「総合的な学習の時間」との関連づけを行うことで解決している事例もある。

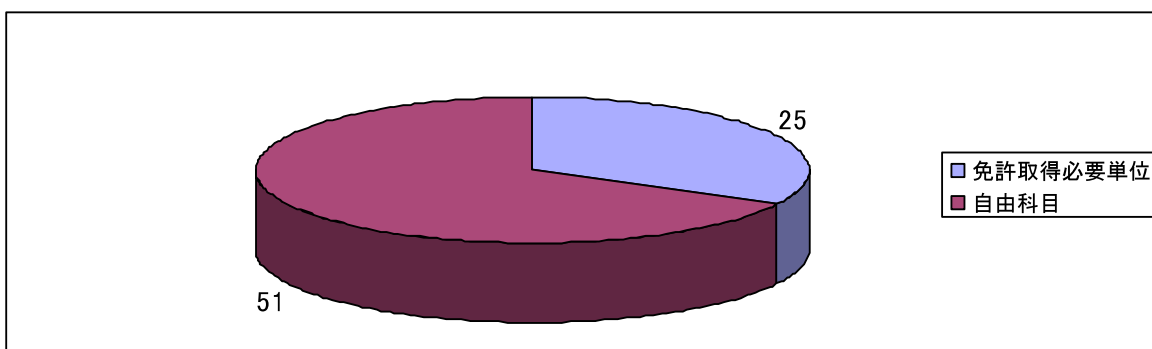


図6. カリキュラム上の位置づけ ※数値は授業数

⑤ 履修者について

対象学年は、多岐に及ぶが概して2年生上を対象としている授業がほとんどである。1年生を対象としている授業は全てのうちで10授業のみである。特に全学的に開放している授業の場合、対象履修学年を広げている傾向にある。

対象学生については、図7に示すとおりである。多くの授業が在籍している全ての学生に開放されているものであり、該当授業については、全学的に提供している授業であることがわかる。

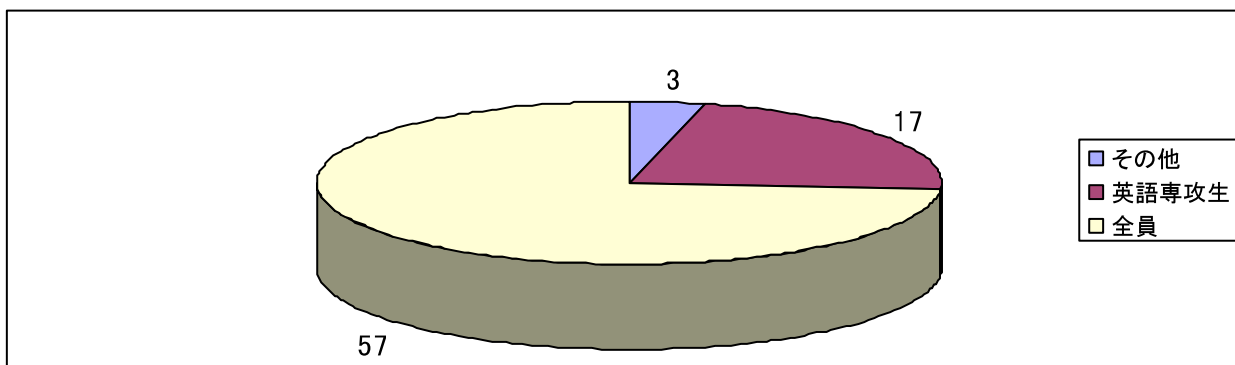


図7. 対象学生 ※数値は授業数

履修者の制限については、対象授業の70%程度が制限をしていないが、30%程度が履修制限をかけている。これは、図7に示す、履修者の専攻を指定するものを含め、加えて特定の授業科目を履修しておかないと履修ができないという指定である。必要とされる特定授業については、一般英語の場合や、連続した授業科目（「小学校英語2」の授業には「小学校英語1」受講が求められる等）である場合がある。

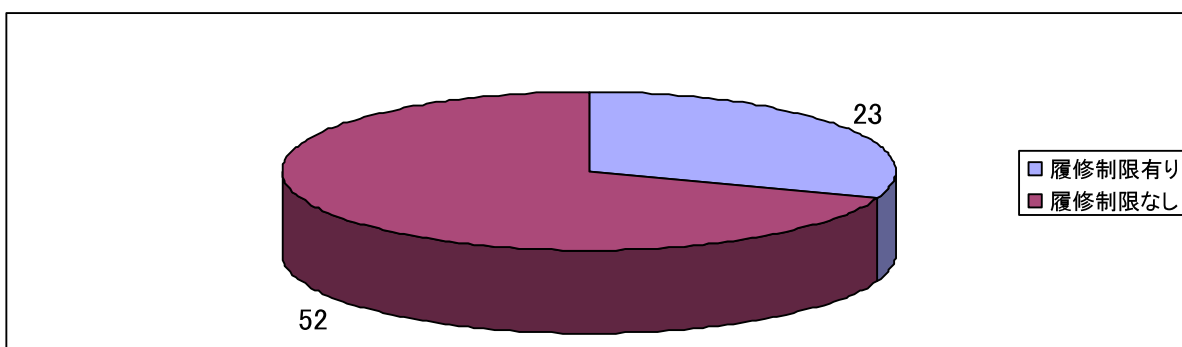


図8. 履修制限の有無 ※数値は授業数

#### ⑥ 担当者について

図9は、当該授業の担当者の形態を示したものである。この図から、小学校英語関連授業は専任教員や非常勤講師による単独授業がほとんどを占めていることがわかる。オムニバス形式の授業では、文学・言語学担当教員も担当しているが、割合は非常に少ない。開設授業数が多くないことや実質的に小学校英語教育を担当できる教員が不足していることなども原因の一つとして考えられよう。

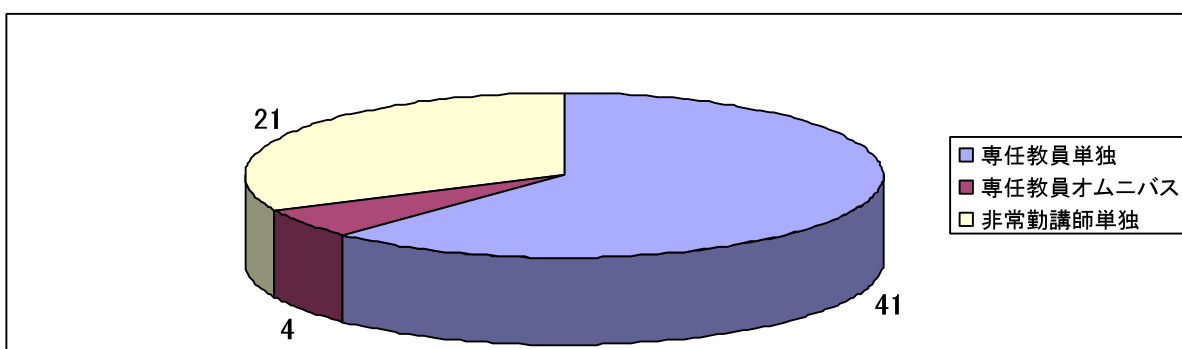


図9. 担当者の形態 ※数値は授業数

担当者として現職小学校教員等の実戦経験のある教員の協力を得ているかどうかを表したものが図10である。図4

で示したように、多くの授業で演習形式を取り入れているものの、小学校での実践者の不足や平日に大学の授業への現職小学校教員の協力を得にくい環境などもその原因と考えられよう。

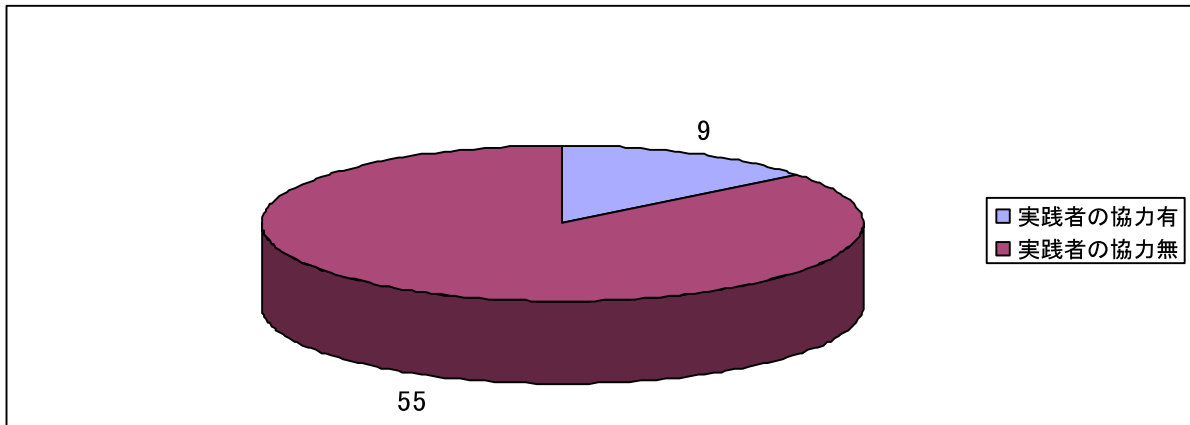


図 10. 現職小学校教員等（実践者）の協力の有無 ※数値は授業数

#### (5) シラバスに見られる授業内容等

公表され、提供されたシラバスを概観すると、内容に関しては次のような傾向が見られる。

- ・小学校英語，早期英語教育の理論的概括：是非論
- ・アクティビティーの紹介
- ・授業作り
- ・模擬授業

調査当時では、学習指導要領も告示される前であったため、多くの授業の依って立つものが、文部科学省編『小学校英語活動実践の手引』である。これを基本として様々な活動の紹介を行うとともに、受講者による授業作りや模擬授業をするという形式が最も一般的な内容である。また、様々な出版社が作成した「テキスト」「副読本」と呼ばれる教材を利用した授業作りの演習も多く見られる。

一方で、いわゆる「児童英語」と呼ばれる書籍を利用した理論を基に授業構成を行っていかうとするものや「言語習得論」を核にした授業も見られる。受講対象者やカリキュラム上の位置づけなどを考慮して、授業内容を構築する必要があるだろう。

#### (6) アンケート結果のまとめと考察

本調査では、平成 19 年 4 月当時の教員養成課程を有する大学・学部での小学校英語活動(英語教育)に関わる授業や教育研究組織などを調査した。その結果として、コースや専攻などの整備は多く行われていないものの、各大学・学部で新設の授業をつくるだけでなく、既存の授業を有効活用するなど工夫して小学校英語に関する情報を提供しようという方針がみられた。また、担当者としても専任教員による単独授業や非常勤講師による単独授業が行われている傾向が明らかになった。現在は、開設クラス数が複数あるわけではないために、オムニバス形式の授業ではなく、教員が単独で授業する方針で進んでいると解釈できる。また、非常勤講師への依頼が多く見られることから、いわゆる小学校英語教育の専門的指導を行える教員の不足も否めない。一方で、小学校などで実戦経験のある教員の協力を十分に受けていないという現況も明らかになっている。理論的側面と実践的側面の有効な関連づけがなされる必要があろう。

### 3 まとめと提案

平成 20 年 3 月に学習指導要領が告示された。今後、教員免許法も改正され小学校における外国語活動に関する授業もカリキュラム上必修となることが十分考えられる。既に、平成 19 年度の本調査実施時点で 3 分の 2 程度の大学・学部で何らかの対応を既に行っている、もしくはその予定であると回答を得ている。しかしながら、この全体の 3 分 2 のうち、15%程度が英語専攻学生のためだけの授業提供にとどまっている。新学習指導要領では、「外国語活動」は「道徳」と同様の位置づけ、すなわち「領域」と解釈できるよう。この状況を鑑みると、現行の免許法上と照らし合わせ、「外国語活動教育法」にあたる授業科目を 1 コマ設定すればよいことになる。しかし、実際にはわずか 1 コマでは、外国語活動を十分に行うことができるとは言い難い。この点については、大学全体のカリキュラムを考慮し、例えば、いわゆる一般英語との効果的な融合を図るなどして、初等教員養成課程で学ぶ全ての学生が外国語活動を行えるような環境整備をしていかなくてはならないだろう。また、小学校英語に関する実践的な指導が行える教員が不足していると考えられるため、小学校現場で実戦経験の豊富な教員の協力を得られるような手続きを確立させていくことも必要であろう。

4 資料：実施したアンケート

「小学校英語教育」を視野に入れた  
教員養成カリキュラム開発にかかわるアンケート

1. 貴学において、小学校英語専攻・コース等を設けていますか。

( ) はい (正式名称： ) ( ) いいえ

2. 既に設置されている場合、何年度より学生募集をはじめましたか。また、1. で「いいえ」と回答された場合、今後設置の予定があれば、その年度をお書きください。

( ) 年度開始

( ) 年度開始予定

3. 小学校英語活動（英語教育）を意識した授業を開設していますか、もしくは開設予定ですか。開設されている場合、開設予定の場合、その科目名をお書きください。既存の授業科目内で扱っている場合も、その科目名をお書きください。

( ) 既存の授業に内容を加えて対応している。

( ) 既に開設している。

( ) 開設予定である。

( ) 開設は未定である。

開設科目名（1）： \_\_\_\_\_

開設科目名（2）： \_\_\_\_\_

開設科目名（3）： \_\_\_\_\_

開設科目名（4）： \_\_\_\_\_

開設科目名（5）： \_\_\_\_\_

開設科目名（6）： \_\_\_\_\_

開設科目名（7）： \_\_\_\_\_

4. それぞれの開設科目について、別紙のご質問にお答えください。開設予定の場合は、現在の予定でお答えください。（開設等未定の場合は、5へお進みください）

※別紙用紙は5部同封しておりますが、不足の場合はコピーしてご利用くだされば幸いです。

5. 「小学校英語活動（英語教育）」に対応すべく、貴学（部）では教育研究組織に何らかの改編を実施されましたか。

( ) はい ( ) いいえ

6. 教育研究組織の改編を実施された場合は、その概要（例えば新しく設けられた組織や講座名）をご記入ください。

※専任教員の配置などあれば併せてご記入ください。

7. 教育研究組織の改編を実施されていない場合は、今後そのような予定はありますか。

( ) あり ( ) なし ( ) 検討中

8. 改編の予定あり、または検討中とお答えの場合は、具体的にどのような内容ですか。差し障りのない範囲でお答えください。

9. この他、小学校英語活動（英語教育）に関する貴学（部）での取り組みとして、すでに現職教員に対する研修などを開設されていたら、その概要をご記入ください。

お 願 い

貴学（部）の「小学校英語活動（英語教育）」に関する貴学（部）発行の報告書等がございましたら、同封致しました返信用封筒を使ってそれらをお送りいただけないでしょうか。いずれも当該ページ・箇所のコピーだけでも結構です。

ご協力有り難うございました。4月21日頃までにご返送頂けると幸甚に存じます。

別紙 1

- (1) 開設科目名 ( )
- (2) 授業形態 ( ) 講義形式 ( ) 演習形式 ( ) 講義・演習形式
- (3) 開設年度 ( ) 年度より開始
- (4) 単位数 ( ) 単位
- (5) 開設クラス数及び履修者数 ( ) クラス 1クラスあたりの履修者 約 ( ) 人
- (6) カリキュラム上の位置づけについて (○をおつけください)

( ) 免許取得に必要な単位として開設している。

( ) 自由科目である。

※課程認定を受けている場合の範疇についてお答えください (○をおつけください)。

(教科専門科目, 教職専門科目, 教科専門科目又は教職専門科目, 教養科目, 自由科目)

- (7) 履修者について

①対象学年 ( ) 年次 (前 後) 期

②対象学生

( ) 英語専攻生 (英語免許取得希望者) のみ

( ) 全員

③履修制限

( ) 制限有り ( ) 制限なし

※履修制限の条件についてお答えください (先着順, 履修した単位, 英語学力など)。

( )

- (8) 担当者について

①担当者 (○をおつけください)

( ) 専任教員が単独で担当 ( ) 専任教員がオムニバス形式で担当

( ) 非常勤講師が単独で授業

②担当教員の専門領域 (英語学, 英米文学, 英語教育など) 及び担当時間数

( ) ( ) 時間

( ) ( ) 時間

( )

( )

③現職の小学校教員等の実践者に協力をお願いしている。

( ) はい ( ) いいえ

差し支えなければ, 担当者のお名前をお書きください。

( )

- (9) 授業内容

①授業内容

シラバスを外部から閲覧可能, コピーできれば, 記載は不要です。

シラバスを外部から閲覧できるかどうか 可 不可

閲覧不可の場合, コピー等の入手が可能かどうか 可 不可

i) 授業の概要・目標

ii) 授業計画・内容を具体的に記述してください。

iii)成績評価の方法を記述してください。

iv)受講の際の履修条件・注意事項を記述してください。

v)教科書・参考書等

vi)その他



## 課題 2：国内における教師<sup>1</sup>のための教育・研修プログラム分析結果

高橋美由紀（愛知教育大学）

### 0. 緒言

2008年3月に小学校学習指導要領が告知され、2011年度から公立小学校で5・6年生を対象に「外国語活動」が、週1回、年間35時間実施されることになった<sup>2</sup>。

「外国語活動」を実施するための国家レベルでの教師研修は、独立行政法人教員研修センター主催、文部科学省、開催府県教育委員会協賛により初めて実施された。この研修は、「北海道・東北ブロック」「関東・甲信越ブロック」「東海・北陸ブロック」「近畿・中国ブロック」「四国・九州ブロック」の5つのブロックで実施された。2007年度は、10月15日（月）から12月7日（金）まで各ブロック5日間の日程で開催されて、研修内容は、「小学校における英語活動など国際理解活動の在り方」の課題協議、「学校経営の視点で捉えた小学校英語・校内研修の実際」の事例発表、「TTでのコミュニケーション活動」「歌・チャンツの利用」「マイクロティーチング」の演習等であった。また、この研修は2008年度も同様に実施された。しかしながら、この研修を受講する対象者は、教育委員会の指導主事及び教育センターの研修担当主事並びにそれに準ずる者であり、一般の現職教師ではなかった。しかしながら、2002年度に新設された「総合的な学習の時間」の枠組みの中で「国際理解教育の一貫として実施されている英語活動」の教師研修は、文部科学省<sup>3</sup>をはじめとし、地方自治体や大学の公開講座等、民間企業等、様々な教育機関・団体で実施されている（松川 2004: 181-193）。

本稿は、「英語活動」における「教師のための教師研修プログラム」の実態調査と分析結果を述べ、さらに、これらの調査の課題から、「外国語活動の教師のための教育・研修」を効果的に、充実させたものとするための在り方を考察する。

### 1. 「小学校英語活動」の教師研修調査について

2006年のベネッセの調査<sup>4</sup>によれば、これまで、小学校英語の教師研修を受けたことがない教員が多い。この調査結果では、「校内研修を実施していない」が54.9%、また、英語教育担当の教師の校外研修については、「殆ど参加していない」が62%であった。また、校外研修を実施している機関・団体の中で、研修の実施主体は、小学校を管轄する市区町村やその上部組織である都道府県の教育委員会等が主体となって実施している研修会が83.3%であり（「市区町村」が52.8%、「都道府県」が30.5%）、教育委員会での教師研修の大半を占めている。したがって、教師研修についての実態調査では、国家レベルの教師研修と教育委員会主催の教師研修について把握することが重要である。

本調査は、上記の調査と同年2006年に、文部科学省と（小学校の管轄内の）市区町村教育委員会及び都道府県の教育委員会主催の教師研修について実施した。

#### 1.1 調査目的

小学校英語活動における都道府県レベルでの現職教師研修について、その内容、期間、対象、受講者等についての分析を行うことを目的とする。

#### 1.2 調査期間 2006年度

#### 1.3 調査対象

対象は、以下の機関とした。

(1) 文部科学省小学校英語サポート事業の採択機関のうち、パターンⅡ「指導力向上のためのワークショップ、協議会等の開催」とパターンⅢ「パターンⅠ・Ⅱの組み合わせや、教材開発、指導計画向上等を組み込んだ活動」について調査した。なお、パターンⅠは、「指導方法の改善・向上等のための小学校における実践活動」であるため、今回の調査から省いた。対象数は、2005年度5件、2005～2006年度3件、2006年度2件、2006～2007年度1件である。

(2) 都道府県の教育委員会、教育研究所、教育総合センター等において、「小学校英語活動の教師研修」について調査した。対象数は、2006年度実施の53件である。

<sup>1</sup> 教育委員会により「教師」と「教員」のどちらも使用している。したがって、本稿ではこれらを同義語で使用する。

<sup>2</sup> 2009年度から2年間の移行措置があり、準備ができた小学校から「外国語活動」を始めることができる。

<sup>3</sup> 文部科学省は、2001年度から独立行政法人教員研修センターとの共催で「小学校英語活動研修講座」を実施した。この研修の受講者は主に、教育委員会や管理職であった（松川 2004: 181-193）。

<sup>4</sup> 調査対象者は、全国の公立小学校の教員（教務主任）3,503名（配布数10,000通、回収率35.0%）であり、調査期間は2006年7月～8月であった。また、調査目的は、現在の英語教育（活動）の実態把握と小学校英語についての教員の意識である。

## 2. 文部科学省小学校英語サポートにおける教師研修について

### 2.1. 調査対象とその方法

「文部科学省小学校英語サポート事業」に採択された機関への電話での聞き取り調査、ホームページ（HP）による調査、面接調査と参与観察（北海道教育大学、北海道教育委員会、札幌市教育委員会）調査を実施した。また、兵庫教育大学については事例研究として詳細を述べる。

### 2.2. 「文部科学省小学校英語サポートにおける教師研修の調査」

「文部科学省小学校英語サポート事業」での教師研修の目的や研修形態、内容等については、以下の(1)と(2)にカテゴリ別にとまとめた。なお、詳細は、表1に機関別に、「研修の目的」と「研修内容」、「期間」、「研修対象」を明記した。

表1：文部科学省小学校英語サポートにおける教師研修の機関、目的、研修内容、期間、対象等

事業名	機関名	目的（ねらい）と主な研修内容		期間・対象・人数等
		目的（ねらい）	具体的な内容	
1 文部科学省小学校英語サポート事業	茨城県 茨城大学 茨城県教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	ワークショップを開催して、小学校英語活動の基本的な考え方を理解させる、小学校英語活動の進め方、指導法、教材開発の具体に触れ、実践する。国際理解としての英語活動の視点から、授業方法や教材開発を考え、実践する。	H17年度
2 文部科学省小学校英語サポート事業	大阪府 大谷女子大学 大阪府教育委員会、富田林市教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	小学校英語活動のための指導技術向上のためのワークショップの開催、ALT との共同授業実施のためのコミュニケーション能力を向上させる。	H17年度
3 文部科学省小学校英語サポート事業	中国短期大学 岡山県、岡山市、倉敷市の各教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	小学校英語活動を支援するためのワークショップの開催、小学校英語活動にボランティア参加できる学生の育成、地域の知的情報センターとして、小学校英語活動に貢献できる体制づくりの整備に取り組む	H17年度
4 文部科学省小学校英語サポート事業	鳴門教育大学 徳島県、鳴門市、徳島市、小松島市、阿南市の各教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	ワークショップの開催、検討会の開催、実践報告を含めたフォーラムを開催する。	H17年度
5 文部科学省小学校英語サポート事業	大分大学、 別府大学短期大学部 大分県教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	大学等と連携し、小学校英語活動指導力向上講座を開講し、講義、講演、ワークショップ、模擬授業などを実施して、教員の指導力向上を図る。	H17年度
6 文部科学省小学校英語サポート事業	北海道教育大学 北海道教育委員会、 札幌市教育委員会	札幌キャンパスに小学校英語活動リソース・センターを設置して、検討会の成果を中心に、教材、授業実践の記録（指導案、ビデオ等）などを広く公開する。	<b>1年目の取組</b> ①実態調査実施、教員による研究グループ設置、各キャンパスにおいて検討会実施、交流会実施、報告書作成 <b>2年目の取組</b> 各キャンパスにおいて検討会実施、交流会実施、報告書作成	H17～18年度
7 文部科学省小学校英語サポート事業	津田塾大学 小平市教育委員会、 渋谷区教育委員会	ALT 導入による英語活動の成果を最大限引き出すため、教師研修と教授法や教材・教具の改善・整備を行う。また、英語教育理論を踏まえたうえで、有用性のある実践的英語活動を目指す。	<b>1年目の取組</b> ①担任のためのワークショップの開催、ALT のためのワークショップ及び講習会の開催、適宜、教材・教具開発及び教案の検討会等を希望する学校に出向き実施 <b>2年目の取組</b> 新たな教材開発の実施、開発した教材を使い研修会を実施、実際に授業で新教材を使用し、年間指導計画を改善、2年間の研究成果の発表・振り返り会の実施	H17～18年度
8 文部科学省小学校英語サポート事業	福岡女学院大学 福岡市教育委員会	手引作成や教員研修等を通じて、市内全小学校の英会話活動の充実を図る。	「福岡市英会話活動の手引」作成、研修会開催、市単独事業のALT 招聘事業の協力支援、外部講師を招き小中英語教育連絡協議会の実施	H17～18年度
9 文部科学省小学校英語サポート事業	兵庫教育大学 兵庫県教育委員会、 神戸市教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	担任主導の英語活動の実践的指導力を養成するため、訪問型と集中型2種類による教員研修を中心とした支援の実施 ①「訪問型」・「集中型」の教員研修の開催、②小・中連携も視野に入れた推進協議会の設置、③フォーラムの開催	H18年度
10 文部科学省小学校英語サポート事業	鹿児島純心女子大学 薩摩川内市教育委員会	指導力向上等のためのワークショップ、協議会等の開催	薩摩川内教育委員会との連携により先進校の成果の市内他校への普及を推進し、小中連携の充実も踏まえた支援の実施。①小学校担任を対象とした夏休み・冬休み、及び月例のワークショップの開催、②ALT を対象としたワークショップの開催、③小中英語教育連絡協議会による情報の共有と指導の格差解消のための研究	H18年度
11 文部科学省小学校英語サポート事業	岩手大学、 二戸市教育委員会、 盛岡市教育委員会、 宮古市教育委員会、 遠野市教育委員会	「持続可能な未来のための地域サポート」をテーマに、①地域の知財を基盤に教材・指導方法を持続する仕組み作り、②ワークショップを通じた実践内容の普及	1年目 ①連絡協議会による課題の確認、②英語活動テキストの作成、③会話ビデオ製作、④ワークショップ資料作成、⑤ワークショップ開催 2年目 ①ワークショップ資料集作成、②ワークショップII開催、③「振り返りの会」の実施、④教材・ビデオ・ボランティア学生などを登録したリソース・センターの開設	H18～19年度

## 2.3. 兵庫教育大学における「平成18年度 文部科学省委嘱事業 小学校英語活動地域サポート事業」

### 2.3.1. 課題やねらい

2005年2月の文部科学省調査では、「小学校英語活動」を導入している小学校が92.1%であり、その多くは担任教師主導で行なわれているという結果であった。しかしながら、担任教師の多くは英語を指導した経験がない。本学では、小学校英語活動の指導者研修への要請に応えるために、現在まで以下の支援を行ってきた。

- ① 実技教育研究指導センターにおいて、2004年10月より毎週英語活動のワークショップを開催している。
- ② 2005年度に現職教員研修講座として「小学校『英語活動』の実践」を開催した。
- ③ 本学の「スクール・パートナーシップ事業」により、小学校や教育委員会が行う研修会に教員を派遣し、小学校英語活動の講演、ワークショップ、アドバイスなどを行っている。

これらの講座に積極的に参加している受講者は、英語活動に意欲的に取り組んでいるが、多くは個人レベルの参加である。したがって、受講した内容を所属の小学校に伝達、浸透させることは、参加者の努力に委ねられており実質的には困難である。また、担任教師主導で英語活動を効果的に進めていく上では、小学校全体で取り組む必要があることも認識された。さらに、複数の小学校から児童が進学する中学校では、英語活動経験の有無による学習歴の差への対応などの課題も生じている。

本事業では、このような課題を解決するために、これまでの①と②の活動を「集中型教員研修」とし、③の活動を「訪問型教員研修」として発展させ、小学校で担任教師が主導で英語活動を実施できるようにするための支援を行った。さらに、「訪問型教員研修」では、小・中連携の英語教育を視野に入れた支援も行った。具体的には、教育委員会と連携し、地域レベルで小学校英語活動の実践指導を小学校の担任教師が主導で指導できるようにするために、担任教師へのアドバイスや指導力養成のためのサポートを行うとともに、地域の中学校の英語科担当教員にも推進協議会へ参加してもらい、連携のための課題の共有、協同解決を図った。

### 2.3.2. 推進体制

①体制：小学校英語活動地域サポート事業推進協議会

②構成

氏名	所属・職名	備考
山岡 俊比古	兵庫教育大学言語系（英語）教育講座・教授	
高橋 美由紀	兵庫教育大学言語系（英語）教育講座・助教授	
今井 裕之	兵庫教育大学言語系（英語）教育講座・助教授	
吉田 達弘	兵庫教育大学言語系（英語）教育講座・助教授	
中田 賀之	兵庫教育大学言語系（英語）教育講座・助教授	
松村 京子	兵庫教育大学附属小学校・校長	
高山宗寛	兵庫教育大学附属小学校・教諭（英語部会主任）	
名須川知子	兵庫教育大学附属幼稚園・園長	
マーク・テーラー	兵庫教育大学附属中学校・非常勤講師	
リチャード・スライジン	兵庫教育大学附属小学校・非常勤講師	
開敏之	兵庫県教育委員会義務教育課・主幹兼初等教育係長	兵庫県教育委員会
石飛弥生	兵庫県教育委員会義務教育課・指導主事	兵庫県教育委員会
臼井博美	神戸市総合教育センター・国際教育推進室・首席指導主事	神戸市教育委員会
田畑俊成	神戸市教育委員会指導課・国際教育担当 指導主事	

### 2.3.3. 活動実施内容

(1) 活動テーマ「担任教師主導の小学校英語活動の実践的指導力を養成するためのサポート」

—訪問型と集中型のメリットを活かした教員研修を中心として—

(2) 具体的内容

本事業は、担任教師主導で行う英語活動を効果的に進めることを目的として、「訪問型」と「集中型」の研修・サポートを本学の教員が関わり提供した。「訪問型」の対象は、例えば、同一中学校校区内の小学校、または個々の小学校で、学校全体における英語活動のカリキュラムや指導法等の開発支援として実施する。「集中型」は、地域レベルで、英語活動の指導力の育成、指導方法の向上を図るためのプログラムで行った。

本事業においては、兵庫県教育委員会をはじめ、市区町村教育委員会、専門的・実践的知識、有識者との連携のもと、

小学校英語活動を担任が主導で行うための実践力を養成するために、人的・物理的サポートを行った。

サポート事業としては、①訪問型研修を実施し、担当教員が小学校英語活動における、カリキュラムや教材・教具・授業研究等、様々な面からアドバイスをする。②担任教師主導の英語活動を展開するための教員研修を開催した。③小・中連携の英語教育や担任主導の小学校英語活動実施を推進するための推進協議会を開催した。④実践報告を含めたフォーラムを開催した。

【①と②教員研修の開催】

教員研修の開催方法は、担当者が小学校で行う「訪問型」と、大学で行う「集中型」の二つの方法で行った。

① 訪問型教員研修

主に、小学校でのカリキュラム作成や授業研究などの他、各小学校の特徴を活かした英語活動が実施できるようなアドバイスを行った。また、教材・教具を使用して、実際に児童に指導することなども行う。なお、担当教員は一月に一度程度訪問をした。

具体的には、サポート事業への参加を希望する、兵庫教育大学附属小学校「小学校における英語活動と英語学習」、稲美町天満東小学校「カリキュラム開発とチーム・ティーチングの実践」、小野市内8小学校・4中学校（小野市教育委員会）「小中連携による英語活動研修の在り方」として、各担当教員は、各々の小学校に適した、カリキュラム・デザインや授業研究、教材・教具・授業研究等、様々な面からアドバイスをした。なお、担当教員は、一人1中学校校下程度を受け持ち、1年間を通して、拠点校を中心とした授業研究とカリキュラム研究を軸に公開授業、校内研修を行った。また、必要であれば、各学校が希望する教材や資料等を大学で購入し貸与した。

内容		時間	担当者
実践指導力の理論と知識	カリキュラム研究	2時間	大学教員
	カリキュラム・デザイン	4時間	
	授業研究	4時間	
	教材・教具の知識・作成 (歌やチャンツ・ゲーム・絵本・マルチメディア教材・他教科の教材)	2時間	
実践指導力	クラスルーム・イングリッシュ	3時間	大学教員 英語母語話者
	英会話	4時間	
	教材・教具の指導法 (歌やチャンツ・ゲーム・絵本・マルチメディア教材・他教科の教材を取り入れた指導法)	3時間	
	チーム・ティーチング	2時間	
合計	1件あたり<1件=1地区、もしくは1小学校>	24時間	

② 集中型教員研修と研修に対するアンケート調査

小学校の担任教師が主導で英語活動を教えるために必要な英語コミュニケーション能力を養成することや、英語活動の基本的な知識、指導方法などについて学ぶことを目的とした、講義やワークショップを開催した。

講義では、「小学校英語の知識」「言語習得」「児童英語教授法」「教材・教具の知識」等、小学校英語についての基本的な理論を、ワークショップでは、「英語コミュニケーション」「教材・教具の使用法」「実践指導」等、実践力を習得することを目的とした。

<夏季研修>

8月9日(水) 3講座 ①10:40~12:10 ②13:10~14:40 ③15:00~16:30

- ①「英語教育と英語活動の基本的な理念」「言語習得理論と教授法」 山岡俊比古(兵庫教育大学)
- ②「英語コミュニケーション能力の養成」 吉田 達弘(兵庫教育大学)
- ③「英語活動実践指導力 Part 1」 高橋美由紀(兵庫教育大学)

8月10日 3講座 ①10:40~12:10 ②13:10~14:40 ③15:00~16:30

- ①「児童の発達と外国語教育」 山岡俊比古(兵庫教育大学)
- ②「英語活動実践力 Part 2」 高橋美由紀(兵庫教育大学)
- ③「英語コミュニケーション能力の養成」 マーク・テイラー(兵庫教育大学附属中学校)

<秋期研修>

10月8日 3講座 ①10:40~12:10 ②13:10~14:40 ③15:00~16:30

- ①「言語習得理論と教授法」「児童の発達と外国語習得」 山岡俊比古(兵庫教育大学)
- ②「英語コミュニケーション能力の養成」 今井 裕之(兵庫教育大学)
- ③「英語活動実践指導力」 清水万里子(トライデント外国語専門学校)

10月9日 3講座 ①10:40~12:10 ②13:10~14:40 ③15:00~16:30

- ①「小学校英語活動で利用できる教材・教具の知識」 高橋美由紀(兵庫教育大学)
- ②「英語活動実践指導力 Part 3」 高橋美由紀(兵庫教育大学)

- ③「英語コミュニケーション能力の養成」 マーク・テイラー（兵庫教育大学附属中学校）
- <冬期研修>
- 12月25日 3講座 ①10:40～12:10 ②13:10～14:40 ③15:00～16:30
- ①「英語コミュニケーション能力の養成」 今井 裕之（兵庫教育大学）
- ②「異文化間コミュニケーション・国際理解教育と小学校英語教育」 米田 尚美（岐阜聖徳学園大学）
- ③「英語活動実践指導力－英語で授業を進める方法 Classroom English」 高橋美由紀（兵庫教育大学）
- ④「実践事例報告」 稲美町立天満東小学校・小野市立下東条小学校・兵庫教育大学附属小学校
- 12月26日 3講座 ①10:40～12:10 ②13:10～14:40 ③15:00～16:30
- ①「英語活動の評価」 柳 善和（名古屋学院大学）
- ②「英語活動実践指導力 Part 4」 高橋美由紀（兵庫教育大学）
- ③「英語コミュニケーション能力の養成」 マーク・テイラー（兵庫教育大学附属中学校）
- ④「実践事例報告」 発表者は25日と同じ

表2:アンケート調査（詳細については『H18年度小学校英語活動サポート事業報告書』（兵庫教育大学2007）に掲載）

調査項目		<夏季研修>	<秋期研修>	<冬期研修>
研修会に参加した感想	とてもよかった	49%	63%	52%
	よかった	51%	37%	48%
研修は教育実践に有効でしたか？	大変役立つ	53%	52%	40%
	役立つ	47%	48%	60%
研修は、学校や先生方のニーズに適応したものでしたか？	適応している	36%	40%	22%
	おおむね適応している	60%	45%	67%
	やや適応している	4%	15%	11%
研修方法について	適当である	60%	83%	45%
	おおむね適当である	38%	17%	55%
	やや適当でない	2%	0%	0%
講師について	適当である	78%	65%	49%
	おおむね適当である	22%	35%	48%
	やや適当でない	0%	0%	3%
資料について	適当である	68%	57%	38%
	おおむね適当である	32%	43%	55%
	やや適当でない	0%	0%	7%
これからどんな小学校英語活動の研修を望みますか。 (複数回答可)	授業に役立つ指導方法	38名	13名	21名
	模擬授業形式での研修	23名	8名	13名
	カリキュラムについて	17名	8名	9名
	活動に必要な教材づくり	20名	9名	6名
	その他(教師の英語力)	2名	4名	1名

### 【③担任主導の小学校英語活動実施を推進するための推進協議会】

それぞれの小学校で中心となる教員と中学校の英語教員、さらに、大学の担当者、教育委員会の担当者などで、年間3回程度の推進協議会を開催し、各学校での取組みの情報交換や、運営、実践に関する共通理解を図る。(下記参照)

#### 【小学校英語活動地域サポート事業推進協議会(第1回)議事要旨】(文責企画課課員)

- 日時 2006年7月19日(水) 9時30分～11時20分
- 場所 兵庫教育大学事務局2階「中会議室」
- 出席者 勝野副学長、山岡教授、高橋助教授、今井助教授、吉田助教授、中田助教授、開兵庫教育委員会義務教育課主幹兼初等教育係長、石飛兵庫教育委員会義務教育課指導主事、臼井神戸市教育委員会指導課首席指導主事、田畑神戸市教育委員会指導課指導主事

<陪席者> 岩佐企画課広報・社会連携事務室長、藤木企画課主査、企画課課員

- 大学挨拶  
勝野副学長から、小学校英語活動地域サポート事業推進協議会の第1回目開催にあたり、事業の趣旨や内容及び応募や採択の経緯を含めた挨拶が行われた。引き続き、勝野副学長から、資料1に基づき、推進協議会委員の紹介がされた。

#### 5 資料確認(事務局)

#### 6 議事

##### (1) 座長の選出について

推進協議会の座長選出にあたり、勝野副学長から、事業申請主担当の高橋助教授を座長とすることについて提案が行われ、了承された。

## (2) 小学校英語活動地域サポート事業の推進について

### ○事業申請に至る経緯・採択結果について

高橋座長から、資料2、資料3及び参考資料に基づき、事業申請に至る経緯や採択状況及び事業の目的等について説明が行われた。

- ・事業の目的は、集中研修と訪問研修を併せて行うことにより、継続した実践的な英語教育支援を行うことである。なお、担任教師主導の英語活動を支援するものとする。
- ・訪問研修では、個別の状況に応じて、理論から教材開発まで、実践的な支援を行う。また、幼・小・中連携を考慮した地域的な支援も行う。
- ・集中研修では、対象を兵庫県内に広げて行う。講義により基本的事項を教示し、演習により実践力を養う。
- ・集中研修の受講者募集は、年間3回行う研修のそれぞれで行う。

### ○具体的な活動計画案について

高橋座長から、資料4に基づき、具体的な事業実施について説明が行われた。なお、訪問研修の対象となる小学校等への協力依頼及び集中研修の受講者募集について、兵庫県及び神戸市教育委員会関係委員に協力依頼が行われ、集中研修受講者募集の方法について意見交換が行われた。

## (3) その他

### ○その他の推進協議会の活動等について

高橋座長から、本事業についての評価は、2007年3月に実施予定のフォーラム及び研修受講者へのアンケートにより行うことについて説明が行われた。(以下省略)

## 【小学校英語活動地域サポート事業推進協議会(第2回)議事要旨】(文責企画課課員)

- 1 日時 2007年1月25日(木)10時30分～11時10分
- 2 場所 兵庫教育大学附属図書館1階「会議室」
- 3 出席者 山岡教授、高橋助教授、今井助教授、吉田助教授、中田助教授、松村附属小学校長、名須川附属幼稚園長、開兵庫県教育委員会義務教育課主幹兼初等教育係長、白井・田畑神戸市教育委員会指導課指導主事、  
〈欠席者〉 高山附属小学校教諭、マーク・テラー附属中学校非常勤講師、リチャード・スタインジック附属小学校非常勤講師、  
石飛兵庫県教育委員会義務教育課指導主事  
〈陪席者〉 岩佐企画課広報・社会連携事務室長、藤木企画課主査、企画課課員
- 4 座長挨拶、出席委員紹介(高橋座長)
- 5 資料確認(事務局)
- 6 議事

審議に先立ち、前回議事要旨について、修正等意見の申し出がなかったので、原案のとおり了承されたものとする旨の説明が行われた。

### (1) 集中研修のまとめ

高橋座長から、資料2に基づき、集中研修実施状況についての説明が行われた。併せて、各教育委員会担当者に対し、実施について協力へのお礼が述べられた。その後、今後の研修企画にあたっての課題等の意見交換が行われた。

(高橋座長)

- ・実施担当者から見て、受講者には好評であったように思われる。
- ・受講者アンケートの結果は後日取りまとめのうえ、3月に開催予定のフォーラムで報告する。
- ・各教育事務所の管轄ごとに受講者数を調査し、後日結果を報告することとする。

[参考意見](一部抜粋)

- ・長期休業中(夏休み等)の研修は比較的参加しやすい。
- ・担任教師自らが実践する場となってほしい。
- ・小学校教員の英語研修のノウハウを習得する機会となってほしい。  
→(夏期)・・広報期間が短期間であったため、訪問研修対象地域の受講者が多い。(秋期)・・休日に実施したため、さまざまな地区から参加があった。(冬期)・・訪問研修を受けた小学校の実践発表を行ったため、その学校の教員の受講が多かった。
- ・兵庫県内で統一した研修カリキュラムを開発することは大切。
- ・今後、大学では附属小学校とのタイアップで英語研修を進めていきたい。
- ・神戸市では、文科省方針とはいえ、5・6年生で英語学習時間を35時間確保するのが困難。また、小学校英語活動を誰が担当するのか(担任教師主導か、専任講師を採用するか)に検討課題を残している。
- ・冬期研修で行ったように、実践報告などでプレゼンテーション能力を養成する必要がある。
- ・ネイティブを講師にした研修で、英語聞き取り能力等を高める。
- ・「理論」(学習課程等)を学んだうえで実践を行った方がよい。「理論」と「実践」を組み込んだ研修を行う。
- ・どのような理論や実践が必要か。研修担当講師自身も現場を知る必要がある。
- ・ALTと日本人教師の役割分担を検討する。現在は、ALTは授業実践、日本人教師は授業計画作成という役割を果たすことが多い。
- ・実践は、振り返ってまとめると効果的である。

- ・学校がある地域がどのように関わっていくかが問題。学校ごとの取組みに温度差が見られる。地域をあげて取り組んでほしい。
- ・自分自身の実践を振り返る方法を教えるのも一つの方法である。
- ・教育委員会では、議会や保護者から結果が求められている。結果を残し、予算獲得につなげる。
- ・求められている結果とはどのようなものか。→教師の小学校英語に対する意識改革、教師自身の英語力向上等。
- ・何が重要か、研修の目的を明確にする。

(2) 小学校英語活動地域サポート事業フォーラムについて (3) その他 (以下省略)

#### 【小学校英語活動地域サポート事業推進協議会(第3回)議事要旨】(文責企画課課員)

- 1 日時 2007年3月15日(木) 15時35分～16時20分
- 2 場所 兵庫教育大学附属図書館1階「会議室」
- 3 出席者 高橋助教授, 高山附属小学校教諭, 名須川附属幼稚園長, リチャード・スタインジック附属小学校非常勤講師, 石飛兵庫県教育委員会義務教育課指導主事, 白井神戸市教育委員会指導課首席指導主事, 田畑神戸市教育委員会指導課指導主事  
 <欠席者> 山岡教授, 今井助教授, 吉田助教授, 中田助教授, 松村附属小学校校長, マーク・テラー附属中学校非常勤講師, 開兵庫県教育委員会義務教育課主幹兼初等教育係長  
 <陪席者> 岩佐企画課広報・社会連携事務室長, 藤木企画課主査, 企画課課員
- 4 座長挨拶, 出席委員紹介(高橋座長)
- 5 議事

#### (1) 小学校英語活動地域サポート事業フォーラムの実施について

高橋座長から、資料2、資料3に基づき、3月4日(日)に開催した「小学校英語活動地域サポート事業フォーラム」が無事終了したことについて報告を行うとともに、委員の協力に対し、お礼が述べられた。引き続き、フォーラムの評価や課題について意見交換が行われた。

#### [参考意見]

- ・小学校英語に係る今後の大学での取組みについて、前向きな発言があればなお充実したものになったのではないかと。
- ・意欲のある多数の関係者が参加していたのに驚きを感じた。小学校英語活動に対するニーズの高さ、期待の大きさが伺える。
- ・小学校英語活動地域サポート事業の一環として行ったそれぞれの研修は、参加者には好評であった。
- ・取組みの継続が重要。今後の取組みにおいては、大学と教育委員会の連携を深めたい。
- ・分科会においては、発表者側も得るものがあつた。
- ・第1分科会では、文字の導入、英語活動の評価に向けての提案を行った。提案に関して、参加者の反応は好意的であった。
- ・小中連携をテーマにした第3分科会には、教育委員会関係者の参加が多かった。教育委員会の予算の関係上、充実した取組みが行えないという意見があつた。
- ・各分科会において、進行や配布資料にばらつきがみられた。足並みをそろえることも重要である。
- ・シンポジウムのパネリストの提案がすばらしかった。
- ・シンポジウムでは、小学校英語教育の最前線で活躍する先生方の発表があり、小学校英語の現状が理解できた。
- ・シンポジウムの際、現場の立場から参加できる部分があればなおよかったと思う。
- ・シンポジウムのパネリストの立場からは、各パネリストの発表の順をおって今後の小学校英語活動に関する課題を投げかけた。しかし、それぞれの発表者間のつながりがうまくいかなかった面がある。
- ・地域間のネットワークづくりが重要。さまざまな地域での取組みについて情報交換を行う機会が欲しい。
- ・大学が主体となり、小学校英語活動に関する取組みのリーダーシップをとって欲しい。
- ・午前中に上映した公開授業の内容を即授業に生かしてもらいたい。

意見交換の後、高橋座長から、今後の取組みの参考として、フォーラムの内容を収録したDVDを後日各委員へ送付する旨の説明が行われた。

#### (2) 訪問研修の総括

高橋座長、高山附属小学校教諭から、訪問研修の内容について説明が行われた後、今後の課題等、意見交換が行われた。

#### [参考意見]

- ・今回、訪問研修の対象とならなかった地域、学校への今後の対応が課題である。
- ・講師側、研修対象側双方において研究に進展があつた。
- ・授業カリキュラム作成、教材開発の方法等に関する研修は今年度充実したものが提供できた。今後は、教員自身の指導力や英語力を高めることが課題である。
- ・大学と学校現場との連携、現場の教員間の連携が重要である。
- ・集中研修ではトレーニングが主となる。訪問研修の役割は、ディベロプメント(発展、定着)である。
- ・訪問研修により現場の状況を知ることで課題が明確になる。
- ・今回訪問研修を行った兵庫県小野市では、教員の意識改革が進んだ。最初、大学教員が手本となり授業を行う。次に担任教師と分担して授業を進める。最後に担任教師1人で公開授業を行うという取組みを行った。それにより自信を持つ教員が多く、生徒についても、英語に対する「かべ」が取り除かれた。
- ・小学校英語活動については、担任教師よりも外部講師等に委託して進めているのが現状である。ALTの充実についても予算面に課題がある。
- ・常に大学のサポートを受けられる体制づくりが重要である。今回の取組みの継続を強く望む。
- ・各学校に英語活動の中心となる人材を育成することが必要である。これに関して、大学のサポートが重要となる→文部科学省では、

「小学校英語活動地域サポート事業」を発展させた事業として「小学校英語条件整備推進プラン」が2007年度から実施される予定。この事業の詳細は未定であるが、関連事業も調査のうえ、取組みの継続に向けて検討したい。その際、これまで以上に教育委員会との連携を深めたい。(以下省略)

#### 【④実践報告を含めたフォーラムの開催】

1. 日 時 2007年3月4日(日) 10時～17時
2. 場 所 兵庫県私学会館
3. 内 容 ①成果発表と集中研修公開授業ビデオ上演  
②訪問研修の成果発表  
兵庫教育大学附属小学校 高山宗寛・今井裕之「小学校における英語活動と英語学習」  
稲美町立天満東小学校 橋本稔子・吉田達弘「カリキュラム開発とティーム・ティーチングの実践」  
小野市教育委員会学校教育課 神戸典世・高橋美由紀「小中連携による英語活動研修の在り方」  
③シンポジウム「小学校英語活動の到達点と今後の方向性」  
パネリスト 柳 善和(名古屋学院大学)・竹内理(関西大学)  
パネリスト・コーディネーター 高橋美由紀(兵庫教育大学)

#### 2.4. 「文部科学省小学校英語サポート事業における教員研修」の調査結果のまとめと分析

以下は、兵庫教育大学と北海道教育大学で実施した「文部科学省小学校英語サポート事業における教員研修」の事例研究と、電話等による他の「サポート事業における教員研修」の調査結果から、(1)研修の目的や、形態、(2)研修内容、等についてまとめたものである。

##### (1) 目的や研修形態、研修対象、内容等について

教員研修は、「英語活動について教師の理解を深めるもの」や、「小学校現場で指導するための方法」などが中心であり、小学校の教員が小学校英語の実践力を習得できることを目的とした研修が多かった。

- ・指導力向上のためのワークショップ。
- ・協議会等の開催。
- ・小学校英語活動リソース・センターを設置して、検討会の成果を中心に、教材、授業実践の記録(指導案、ビデオ等)等を公開する。
- ・ALT導入による英語活動の成果を最大限引き出すため、教員研修と教授法・教材・教具の改善・整備を行う。
- ・英語教育理論を踏まえたうえでの、有用性のある実践的英語活動を目指す。
- ・手引作成や教員研修等を通じて、市内全小学校の英会話活動の充実を図る。

##### (2) 研修内容

具体的な研修内容は、小学校英語の実際、教材・教具開発、模擬授業等、受講者が体験できる研修と、フォーラムや研究成果の発表等の実践報告による研修、さらに、政策や事業援助として実施されるものがあった。

##### ① ワークショップなどの実践によって指導力を育成する

- ・ワークショップを開催して、小学校英語活動の基本的な考え方を理解させる。
- ・小学校英語活動の進め方、指導法、教材開発の具体に触れ、実践する。
- ・国際理解としての英語活動の視点から、授業方法や教材開発を考え、実践する。
- ・小学校英語活動のための指導技術向上のためのワークショップの開催。
- ・ALTとの共同授業実施のためのコミュニケーション能力を向上させる。
- ・地域の知的情報センターとして、小学校英語活動に貢献できる体制作りの整備に取り組む。
- ・担任のためのワークショップの開催、ALTのためのワークショップ及び講習会の開催。
- ・担任主導の英語活動の実践的指導力を養成するため、訪問型と集中型による教員研修を中心とした支援の実施。
- ・「訪問型」・「集中型」の教員研修の開催。

##### ② 模擬授業・公開授業等の授業研究

- ・大学等と連携し、小学校英語活動指導力向上講座を開設し、講義、講演、ワークショップ、模擬授業などを実施して、教員の指導力向上を図る。

##### ③ フォーラムや検討会の開催

- ・検討会の開催、実践報告を含めたフォーラムを開催する。
- ・研究成果の発表・振り返り会の実施。
- ・外部講師を招き小中英語教育連絡協議会の実施。
- ・小中連携も視野に入れた推進協議会の設置。
- ・フォーラムの開催。

##### ④ 教材・教具、手引き書等の開発

- ・教材・教具開発及び教案の検討会等を希望する学校に出向き実施。
- ・新たな教材開発の実施、開発した教材を使い研修会を実施。
- ・実際に授業で新教材を使用し、年間指導計画を改善。
- ・「〇〇市英会話活動の手引」作成。

##### ⑤ 政策や事業援助

- ・市単独事業のALT招聘事業の協力支援
- ・「訪問型」・「集中型」の教員研修の開催



### 3. 都道府県の教育研修センターなどにおける教員研修について

#### 3.1. 調査対象とその方法

東京都・新潟県・徳島県を除く、全都道府県に対して、電話による聞き取り調査、ネット利用の調査、面接調査を行った。ただし、鳥取と島根は合同で開催されているので、両県で1件とした。また、東京都・新潟県・徳島県は「無回答」とデータ処理をした。

#### 3.2. 研修の実施期間と目的、内容について

詳細は、表3に「各都道府県教育委員会レベルでの教師研修の機関、目的、研修内容、期間、対象等」に示した。

表3：各都道府県教育委員会レベルでの教師研修の機関、目的、研修内容、期間、対象等

各都道府県教育委員会レベルでの教師研修				
事業名	機関名	目的（ねらい）と主な研修内容		期間・対象・人数等
		目的	内容	
1 英語力向上推進事業	北海道教育委員会	児童生徒の英語力の向上を図るため、アルバータ州立大学への教員派遣、小学校英語活動に関する研修講座、英語教員を対象とした研修等を実施し、英語教育の改善・充実に資する。		H17年7月～3月 小40名、中105名 高105名
2 カナダ(ESL)コミュニケーション能力と英語活動の充実を求めて	北海道立教育研究所	カナダ・アルバータ大学からESL(第2言語としての英語)の専門家を招き、理論と実践を通して、コミュニケーション能力の向上を図るとともに、具体的な指導法の習得を目指します。	ワークショップ:「小学校英語活動と中学校における英語教育の現状」「ESLオリエンテーション」 「ALTを生かしたティーム・ティーチング」 「教材・教具の準備」 実践発表:「小学校英語活動～実践的・効果的な指導の在り方～」「他の教科や中学校との連携」 「英語活動を行う授業の効果的なつくり方」 「小学校英語活動に望まれること」 「授業を取り巻く環境(雰囲気)づくり」 「学習環境の整備と活用」 「所外研修〇〇市立〇〇小学校」 ピラッシュ博士による模擬授業	H18年 9月4～8日 5日間
3 小学校英語活動研修講座	青森県総合学校教育センター	小学校における英語活動のねらい及び英語を楽しく学ばせるための指導の在り方について研修を行い、小学校において英語活動を推進していくための基礎的な能力を養成する。	講義:「英語活動のねらいー楽しく英語を学ばせるために」 演習:「ALTとのコミュニケーション活動」「児童に興味・関心を持たせるためのティーム・ティーチングの在り方」 講義・演習:「英語活動の指導の在り方」 松香洋子 松香フォニックス実践発表 大鰐町立大鰐第二小学校教諭三浦千佳子	8月29日 8月30日  小・盲・聾・養 70名
4 小学校英語活動	岩手県立総合教育センター	小学校英語活動の基本的な考え方、実際の進め方について研修を行い、小学校英語活動の指導の充実を図る。	「小学校英語活動の基本的な考え方と進め方」「授業における活動内容・指導方法の実際と工夫(英語活動体験による参加型研修)」「授業プラン作りと授業準備(グループワークによる研修)」「授業プランの発表と意見交流(模擬授業による研修)」	平成18年7月31日(月)1日間 小学校教員(20名)
5 小学校における楽しい英語活動	秋田県総合教育センター	小学校の総合的な学習の時間における英語活動の展開について研修するとともに、教員のコミュニケーション能力向上のための研修を行う。	「小学校英語の在り方(講義・演習)」 「英語活動の実際(発表・協議)」 「コミュニケーション・プラクティス(演習)」	平成18年6月22日10時から16時 小学校・特殊教員 20名
6 小学校英語活動研修会	宮城県	県内の小学校教員を対象として、現在広く行われている小学校英語活動の在り方について研修を深めるとともに、県小学校英語教育推進事業実践校及び先進校の成果を普及し、県内小学校英語活動の改善・充実に資する。	講話 「英語活動の理論と実践」 角田市立角田小学校教諭 高橋和子 分科会 小学校8校の実践発表	11月13日
7 小学校英語活動指導者要請研修	山形県教育センター	小学校における英語活動の指導内容および指導方法等について、小学校教員に対して必要な知識・技能を習得させるとともに、受講者が、本研修内容を踏まえ、各地域において研修の講師として活動したり、各学校における実践指導・助言者として活動できるようにする。	説明:「小学校英語活動を進めるにあたって英語活動指導者要請研修の進め方」 講義:「小学校英語活動の進め方:その基本的な考え方について」文京学院大学教授 渡邊寛治 講義・演習:「効果的な活動と校内指導体制の在り方」 山形市立第十小学校 鹿野美紀子教諭 堀内小学校の授業参観、研究協議、ワークショップ 説明:「今年度の小学校英語活動の動向について」 講義・演習: 「小学校英語活動の具体的な実践について」 村山市立神崎小学校教諭 青山博文 計画的な小学校英語活動の進め方 舟形町立堀内小学校長 井上洋子 協議:今後の実践の充実に向けて	第1回 18年9月8日  第2回11月1日 第3回19年 2月1日  各30名
8 小学校英語指導者講座	福島県教育センター	小学校英語活動のねらいと英語を楽しく学ばせる指導の在り方について研修し、英語活動を推進していくための基礎的な能力を育成する	「言語習得過程のメカニズム」75分 「子どもを元気にする英語活動」60分 「具体的な英語活動の進め方(What & How)」180分	H18年7月21日、 8月1日・4日の内 1日
9 小学校英語活動推進者養成研修	栃木県総合教育センター	小学校の「総合的な学習の時間」等における英語活動を促進し、その充実を図るために、その活動において指導的	・小学校英語活動の現状と展望 ・英語活動の基本的理論 年間活動の構想、教材・教具の作成、授業の構想・	H18年8月7・8・9・ 11日の4日間

			な立場を担う教員を養成する。	構成 ・ワークショップ 実践紹介、授業の構想 ・模擬授業準備 ・模擬授業・意見交換・まとめ	
10	小学校英語活動研修講座	群馬県総合教育センター	小学校での国際理解教育の一環としての英語活動に関して、児童が楽しく取り組む方法や留意点等について、授業参観、講義、実践発表、演習などを通して研修します。	「小学校英語活動の現状及び今後」 「自校の英語活動の紹介（実践発表）」 「ALTとTTで英語活動を実施し、効果的な方法を考えよう（演習）」 「ALTから英語活動で役に立つ英語表現を覚えよう」 「国際理解教育の一環としての英語活動（授業参観及び授業研究）」 「これからの小学校英語活動の方向性及び具体的な進め方（実践発表及び研究協議）」 「小学校における英語活動の成果と課題（研究議）」	H18年9月27日、11月7日 40名
11	英語活動授業づくり研修会	埼玉県立総合教育センター	小学校の「総合的な学習の時間」における英語活動の年間指導計画及び学習指導案の作成方法、教材づくり等の研修を通して英語活動授業の充実を図る	講義：「これからの英語活動」 協議・演習：「系統的なカリキュラム・活動案づくり」 演習：「効果的な教材づくり」 成果発表	H19年1月16・26日 小学校・特殊教員諸学校教員で英語活動を担当している教員30名
12	小・中学校における英語指導の在り方	千葉県総合教育センター	小学校英語教育と中学校英語教育の連携を言語活動を通して学ぶ。（実際の授業例を中心に、小学校・中学校の英語教育の在り方を考える）	小・中学校における英語教育の在り方	H18年7月24日3時間 20名
13	国際理解・小学校楽しい英語研修講座	茨城教育研修センター	小学校の総合的な学習の時間における、国際理解教育の一環としての外国語会話（英語活動）について研修を行い、指導力の向上を図る。	1日目 講義「国際理解と小学校英語活動」 東京学芸大学名誉教授 伊藤嘉一 演習「楽しい英語活動の展開の工夫」 2日目 講義「小学校英語活動の在り方」 授業参観・研究協議 3日目 実践発表・演習	8月22日 10月11日 11月17日 3日間で30日
14	ステップアップ、小学校英語活動研修	千葉県総合教育センター	小学校における英語活動の基本的な考え方や、到達目標の設定及び年間指導計画作成方法を具体的に学ぶ。	講義：「小学校英語活動のねらいと活動の在り方」 演習：「到達目標の設定と年間指導計画の作成」	H18年6月10日、9月30日、10月21日のいずれか1日 各日30名
15	楽しく学ぶ小学校英語	神奈川県立総合教育センター	小学校における英語学習の実践的な指導力の向上を目指します。	演習：「ALTとの効果的なチーム・ティーチング」 講義：「小学校英語の現状とこれから」 講義・演習：「楽しい小学校英語の実践」 実践報告：「小学校英語の実践」	平成18年8月1日（火）、10月16日（月）の2日間 小・盲・聾養40名
16	総合的な学習の時間における小学校英語活動指導研修会	山梨県総合教育センター	国際理解教育の一環としての英語活動の指導法および基礎的な英会話の演習	「総合的な学習の時間における小学校英語活動」 「国際理解教育の在り方および英会話等の指導」 「基礎英会話演習」	H18年8月10・11日 40名
17	小学校たのしい英語活動A	長野県総合教育センター		A 講義「小学校英語活動のねらいと留意点」 ワークショップ「子どもと楽しむ小学校英語活動」 演習「小学校英語活動の体験」 B 講義「小学校英語活動のねらいと留意点」 授業参観「塩尻市立片丘小学校」 演習「実際の教材・教具を使つての演習」	6月6日15名・15日20名 7月3日20名・11日15名 11月17日20名 21日20名
18	小学校英語活動研究会	富山県教育委員会（富山県総合教育センター教育研修部）	小学校「総合的な学習の時間」における英語活動の在り方や進め方について研修を行い、指導力の向上を図る。	○講演 「小学校の英語活動について」 ○ワークショップ ・活動の展開・目的に合ったゲーム、活動 ・学年に応じた教材・活動の工夫 ○分科会 班別協議 「模擬授業の活動案作成」 「模擬授業の活動案作成と発表準備」 ○全体会 模擬授業発表会	H18年7月27・28日
19	小学校英語活動訪問研修	富山県教育委員会（富山県総合教育センター教育研修部）	小学校における英語活動の進め方や具体的な指導方法等について研修し、指導力の向上を図る。	○ワークショップ ・活動事例の実習 ・英語活動の授業の構成 ・英語活動を設定する際のポイント ○協議 ・英語活動の進め方等	9月上旬から12月下旬までの総合教育センター職員が訪問可能な日 午後3～5時迄の60～90分 小学校（6校程度）
20	小学校英語活動	石川県教育センター	学級担任がコーディネーターする英語活動：児童英語教育の講義・演習・研究授業を通して小学校英語活動のよりよい在り方を探る。	講義：英語活動の実践的指導について 演習：指導法演習や教師の英語運用能力を高める演習の実施 研究授業と協議	7月21日、10月13日、50名
21	小学校英語活動（I）（特設）研修講座-小学校における「英語活動」の理論と実践	福井教育研究所	国際理解に関する学習の一環としての英語活動に関する講義・演習を通して、指導力の向上を図ります。	1 小学校における英語活動のねらいと指導の在り方（講義・演習） 2 具体的なカリキュラムと実践例（実践発表・演習）	平成18年6月15日（木）
22	小学校英語活	福井教育研	国際理解に関する学習の一環として	1 英語活動で使用する表現と使用上の留意点（講	平成18年7月25

	動(Ⅱ)(特設)研修講座-小学校における英語活動のための英語会話と実践例一	究所	の英語活動に関する実践例を通して、英語会話力の向上を図ります。	義・演習) 2 ティーム・ティーチングにおける基本的な表現の発音練習(講義・演習) 3 ティーム・ティーチングの実践例と演習(講義・演習)	日(火)
23	小学校英語活動実践力向上講座	岐阜県総合教育センター	小学校段階における基本的な英語活動の在り方を理解するとともに、英語運用能力、授業構想力及び具体的な授業実践力の向上を図る。	・実践校の授業参観等を含めた現地研修 ・小学校における英語活動のねらいと実践上の配慮事項 ・授業に生きる英語活動演習及び英語実技研修 ・具体的な英語活動の事例(実践発表) ・実践推進校を交えた課題研修 ・各学校の実態に応じた英語活動の在り方(実践交流)	H18年6月23日、8月24日、11月21日の3日間 英語活動を実際に行っている教員・30名
24	小学校英語活動講座 理論と実践コース	愛知県総合教育センター	小学校における国際理解に関する学習の一環として、英語活動の在り方・進め方について研修を行い、指導力の向上を図る	・小学校の英語活動に関する基本的理念 ・実践事例 ・児童の喜ぶ英語活動について	小・中学校教員 20名
25	小学校英語活動講座 音声クリニックコース	愛知県総合教育センター	小学校の英語活動を担当する教員に対して、音声技術を中心に支援する	・発音クリニック	小学校教員 特になし
26	小学校教員のための英語指導講座	静岡県総合教育センター	英語活動の効果的な指導法や、教材作成、カリキュラム作成に必要な知識・技能を身に付けるとともに、指導者として英語で話したり聞いたりするための基礎的な英語力の向上を図る。	協議:各校の情報交換及び小学校英語の在り方・進め方について 演習:①英語活動の具体的な活動案とその体験、②演習を通して知る効果的な指導法、③教材作成実践、④指導者として話したり聞いたりするための英語練習、⑤カリキュラム作成	H18年8月17・18日 教員(小・養)16名
27	小学校英語活動	三重県総合研究センター	小学校英語活動で求められているカリキュラムを中心に研究を進めている先進校から学級担任が組立てるカリキュラムの工夫や知的好奇心をゆさぶるオリジナル教材・教具の開発等の具体的な実践について学ぶ。	実践発表:「他教科との関連を図った深まりのある英語活動」	H18年8月18日 50名
28	小学校における英語活動	三重県総合研究センター	「意欲的に楽しく取り組める英語活動」をねらいとし、モデル授業や実践事例を通して、指導法を学び、研修を深めます。	【午前】 校内研修 【午後】 公開授業 講義:「小学校英語を通して、子供につけたい力」	H18年10月5日 40名
29	指導力向上研修会(英語)	三重県総合研究センター	子どもたちが外国の文化や人々とのコミュニケーションに興味・関心を持てるよう、小学校の英語活動における授業の進め方や効果的な教材について研修します。	講義:「小学校英語、なぜ?どうやって?だれが?」	H18年8月21日
30	英語科・小学校英語指導力アップ	滋賀県総合教育センター	中学校英語科の授業参観と小学校英語活動の実践発表を通じ、実践的な授業の在り方について学ぶとともに、表現力を高める英語科、小学校英語の授業について学びます。	授業参観:「生徒が活き活きと話す授業の実践」 実践発表:「小学校英語活動の実践発表」 講義・演習:「表現力を高める英語科・小学校英語の授業」 関西大学 齋藤栄二教授	
31	研修	京都府総合教育センター	「総合的な学習の時間」の認識	指導力の向上 実践の取組み	7月27日
32	小学校「英語活動」研修	大阪府教育センター	小学校における英語活動を行うに当たっての効果的な指導計画作成及び授業の組み立て、指導方法、教材、教具について研修を実施する。		H18年7月26・27・28日 50名
33	小学校 楽しい英語活動研修講座	兵庫県立教育研修所	小学校の英語活動における実践校の活動例や各校の交流をとおして、児童が外国の文化や生活への関心を高めるための英語活動の在り方を探る。また、実習では、児童が楽しみながら取り組める様々な英語活動の工夫について研修する。	英語活動における取組みの工夫 「総合的な学習の時間」の取組み 特別活動の取組みなど 楽しい英語活動の実際 簡単なあいさつ、歌やゲーム、スキット等	H18年11月10・17日 の内の1日 30名
34	「これから始める英語活動」セミナー	奈良県立教育研究所	小学校英語活動を実施するために、基本的な考え方と教材についての知識を深めるとともに、実際に英語活動を体験してみる研修。初めて英語活動を実施するときに身に付けておきたい基本的なゲーム等の指導の知識や技術を身に付ける。	英語活動の基本を身に付けよう 歌とゲームのコラボレーション 簡単なごっこ遊び 教材を効果的に活用しよう	H18年5月13日、20日、6月3日、10日 4回2時間30分 20名
35	「英語活動のバージョンアップ」セミナー	奈良県立教育研究所	実際の英語活動の体験を通して、活動を広げ、深めるために必要な考え方と技能の習得を図る。既に英語活動の指導を経験されている方が、その活動にもう少し工夫を加え、より内容を深め、楽しい英語活動を創るためのセミナー。	英語活動をふりかえる。 英語活動を広げる工夫。 英語活動を深める工夫。 これからの英語活動	H18年9月2日、9日、10月7日、14日 4回2時間30分 20名
36	小学校における楽しい英語	和歌山県教育研修センター	「総合的な学習の時間」における国際理解教育に即した、小学校段階にふさ	英語活動の取組みについて(発表:小学校教諭) 小学校英語活動の基本的な考え方と指導について	H19年1月18日 10:30~16:00

	活動研修講座	ター学びの丘	わしい英語活動の基本的な考え方を 知り、演習を通して指導の在り方につ いて理解を深め、指導力の向上を図 る。	(講義・演習：指導主事)	35名
37	小学校英語活 動講座—学年 に応じた活動 プランを考え る	松江教育セ ンター 島根・鳥取 連携講座	小学校英語活動の指導の在り方や進 め方について、講義や実践演習など を通して理解を深め、各学校における指 導方法の工夫・改善および指導能力の 向上に資する。	講義：「これからの小学校英語活動について」「学年 に応じた望ましい小学校英語教材について」 演習：「学年に応じた具体的な指導方法と年間計画の 作成について」 実践発表：「小中一貫の小学校英語活動の取組み」 ワークショップ・協議	小学校 40名
38	やってみよ う！ 英語活動	広島 教育センタ ー	講義、授業参観、実践報告等を通して、 基礎的な理論、指導法について研修す ることで指導力の向上を図る。	講義：「授業作りの基本的な考え方」 参観：「授業の実際」 報告・協議：「楽しく進める英語活動」 講義・演習：「やってみよう！Classroom English」	6月23日 小学校60名 中学校20名
39	英語活動 Let's try together!	広島 教育センタ ー	指導者として必要な技能について研 修することで指導力の向上を図ると ともに、小学校英語の課題について実 践報告、協議等を行い研修を深める。	講義：「小学校英語の現状」「これからの小学校英語」 「小学校英語における課題」 演習：「楽しく学ぶClassroom English」 協議：「英語活動の進め方と指導法の実際1」 報告：「小学校英語の実践例」	9月15日 または 10月13日 小学校60名 中学校20名
40	小学校英語活 動研修講座	岡山県 教育センタ ー	総合的な学習の時間における小学校 英語活動の指導の在り方、指導技術に ついて、講義や実践発表、演習（実技 指導）などを通して理解を深め、指導 力の充実と資質の向上を図る。	講義：「担任主導の英語活動を始めてみませんか？— 小・中連携の英語教育のために」 兵庫教育大学大学院 高橋美由紀助教授 模擬授業：「児童の発達段階に応じた効果的な小学校 英語活動の進め方」 倉敷市立中島小学校 萱島淑美教諭 模擬授業・ワークショップ： 「デジタルコンテンツを活用した小学校英語活動」 岡山市立西小学校 藤井佐代子教諭 演習：「ITを活用した教員研修と小学校英語活動」 NPO法人イングリッシュサイズ 福田聖子代表	8月8日  8月23日  小・盲・聾・養の 教員 各80名
41	小学校楽しい 英語活動の進 め方	山口県教育 研修所	英語活動に関する知識・技能を高める ため、指導の内容と方法について研修 する。	講義・演習：「小学校における英語活動の進め方」 事例発表・研究協議：「楽しい英語活動の授業づくり 演習」「楽しい英語活動の実際」	6月16日 6月28日 の内1日
42	わくわく小学 校英語活動研 修講座	香川県教育 センター	小学校における英語活動の意義や理 論を学び、模擬授業の設計および実践 を通して実践的指導力を培う	講話：「小学校英語授業づくりのポイント」 グループ協議：「私の英語活動の実際」 実践発表：「小学校英語活動の取組み」 ワークショップ：「英語活動のアイデア」 グループ毎に模擬授業実践	8月17～18日
43	国際理解教育	愛媛総合教 育センター	国際理解教育	国際理解教育について	8月2～4日の3日 間
44	楽しい小学校 英語活動講座	高知県教育 センター	小学校の総合的な学習の時間におけ る国際理解教育の一環としての英語 活動について研修を行い、指導舞いよ うや指導方法の充実と向上に資する。	実践発表：河内長野市立高向小学校 梅本龍多教諭 講演・演習：関西大学大学院 齋藤栄二教授	8月24日 80名
45	Let's begin! はじめての英 語活動（小）	福岡県教育 センター	小学校英語活動の授業づくりを始め るために、ALTとのチーム・ティー チング、教材作成の在り方について、 講義・演習および、授業実践に基づく 協議を通して研修する。	講義：「小学校英語活動の意義と考え方」 演習：「英語活動授業づくりの基礎・基本」 実践発表：「授業作りのアイデア」 授業参観・協議：「効果的な1時間の授業づくり」 講義・演習：「効果的な英語活動の在り方」	7月21日 9月15日
46	小・中の連携 を生かした英 語教育の推進 （小・中）	福岡県教育 センター	各地域で今後予想される英語教育の 課題解決に向けて、小学校英語活動と 中学校英語科の授業交流、実践発表お よび講義を通して研修する。	協議：「小中学校の現状と連携のための課題」 「授業について」 実践発表：「小中連携を生かした英語教育の推進」 講義：「小中連携を生かした今後の英語教育の在り 方」「小中連携のための方策」 授業参観：「小学校・中学校における授業の実際」	7月25日 9月12日
47	小学校英語活 動講座 教室ですぐに 生かせる指導 のヒントあれ これ	佐賀県教育 センター	学級担任が中心となって行う英語活 動の理論と実践方法を理解する。 英語を使用したゲーム等の紹介やALT による教室英語を具体的に体験し、教 室ですぐに生かせる技術を身に付け る。	担任が行う英語活動の在り方 ALTと共同でつくる英語活動 ゲーム、活動、クラスルームイングリッシュの実際  授業についての説明、研究授業、授業研究会 担任ならではの英語活動の実際と演習	8月3日  10月5日 各30名
48	Brush-up! 小学校英語活 動研修講座	長崎県教育 センター	ALTとのチーム・ティーチングを通 じた実践的な研修を行い、小学校英語 活動における指導力の充実と向上を 図る。	講義・演習：「指導力の向上をめざして」（外部講師） 演習：「指導力向上を目指した情報機器の活用」 研究協議：「小学校英語活動における成果と課題」	9月11日 小学校教員 20名 （英語活動実践 者）
49	小学校英語活 動講座	熊本県立教 育センター	英語活動における指導法の基礎講座。 英語活動の基本的理論と学習指導の 進め方などの演習を通して、指導者の 資質と指導力の向上を目指す。	小学校英語活動の意義とすすめ方 小学校英語活動の実際（実践校紹介と質疑応答） 国際理解教育における人権教育の推進	6月26日 小学校20名
50	小学校総合的 な学習の時間 研修「英語活 動」	大分県教育 センター	総合的な学習の時間における英語活 動の意義とすすめ方、実践例につい ての講義・演習、発表・研究協議をと して、英語活動への理解を深め、実践 的指導力の向上を図る。	講義・演習：「小学校英語活動の意義とすすめ方」 講師・大学教授など 発表・研究協議：「学校、地域の特色を生かした小学 校英語活動の実際」 県内小学校教諭2名	8月29日 小学校・盲・聾・ 養護学校教員
51	小学校におけ	宮崎県教育	楽しく学べる学級づくりに役立てる	9日 小学校英語教育の展望について	11月9～10日

	る英語活動	研修センター		講義：宮崎大学 アダチ徹子助教授 ALT との英会話の演習 10日 附属小学校で研究授業の参観と研究会、実践発表、グループに分かれての発表・協議	
52	小学校英語活動講座	鹿児島県総合教育センター	小学校英語活動	英語学習指導のポイント	6月6日
53	前期小学校英語活動1日研修 後期小学校英語活動1日研修	沖縄県総合教育センター	小学校英語活動などの基本的な考え方や指導方法の向上を目指し、英語とITを融合した教科指導とバーチャル・イマージョン教育の指導力を高める。	前期 午前 学習指導の理論研修 午後 実践法の演習 後期 午前 学習指導の理論研修 午後 実践法の演習	各1日 60名  60名

### 3.3. 「各都道府県教育委員会レベルでの教師研修」の調査結果のまとめと分析

#### (1) 期間と時間等

研修は、夏季休暇等を利用して実施しているケースが最も多かった（27件）。しかしながら、長期休暇での研修であっても研修期間は1日であるケースが最も多かった（14件）。また、通常日での実施は、29件であり、長期と通常日の両方で実施している県が、福島。茨城。千葉。富山。神奈川。石川。福井。岐阜。愛知。三重。高知。福岡であった。

通常日での研修期間も、長期休暇と同様に、1日（13件）が最も多く、次いで2日（8件）であったが、6日（1件）もあった。時間は、終日が最も多かった（29件）。

#### (2) 研修対象

研修対象は小学校・養護学校のみの場合、大半は16名～50名であった。教師の実践力を育成する研修であれば、ワークショップや教材・教具の指導法、また、各学校に適したカリキュラム・デザインの創造等、具体的に体験型の演習形式の研修であれば、少人数で実施することが効果的であると思われる。

一方、小・中・高等学校等の教員が合同で研修を受ける場合は、100～200名程度が多かった。この場合は「小学校英語活動についての基本的な理念や理解を深めること」が目的の研修である場合が多く、講義や実践報告の研修であれば、大人数でも研修が可能である。また、「小学校教員で英語活動を担当している教員」に対象を絞った研修があるが、これは、①英語活動の担当として現場で中心となって活躍すること、②研修を受けた教員がその内容を校内研修で行うことで研修が小学校教員全員に浸透していくこと、が期待されていると推察できる。さらに、「中学校の英語科教員」も小学校教員とともに受講者としている研修もあった。この理由としては、①小学校英語の理解を深めるため、②小中連携の英語教育を推進するため、③小学校英語教員のスキル面でのサポート役、等が考えられる。

#### (3) 研修講師について（研修内容との関係から）

研修講師は、所属機関の研修員（指導主事など）、大学の教員、中・高の英語の教員、英語活動を実施している地域の小学校教員、先進校や開発学校等の小学校教員（含私立小学校）、地域ボランティア教師、ALTであった。

研修の目的と内容によって講師が異なっており、①小学校英語への基本的な理解や言語習得等の理論（指導主事や大学教員）、②模擬授業や現場での実践力育成（大学教員、中・高の英語の教員、英語活動を実施している地域の小学校教員、先進校や開発学校等の小学校教員（含私立小学校）、地域ボランティア教師）、③英語のスキルアップ（地域ボランティア教師、ALT）であった。研修講師（研修内容との関係）の比率は以下に提示した。

- ・現場の小学校教師、JETによる、自らの授業を公開したり、模擬授業を行ったりする形式（41%）。
- ・教育委員会の指導主事クラスの教員による、研修（25%）。  
 (例)兵庫県研修センターの研修では、指導主事の高等学校の国語科専攻の教師が小学校英語の実践を行った。  
 そのため、兵庫教育大学の「実技センター主催の実践指導講座」を毎週受講した。
- ・大学教員による研修（27%）。  
 他の研修より、大学教員が講師となっているのが少なかった理由  
 ①実践指導ができないことによる、受講者から「不満の声」が多い。  
 ②研究開発校等のビデオ視聴や指導計画書等を使用して説明してくれる教授もいたが、実践の基本的な知識や経験がないのが受講生からの「不満」がでた。
- ・実践家（7%）  
 ① 教材の指導法のみであり、言語習得や英語教育に対する理論的な背景についての説明が殆ど無かった。そのため、勧められる教材の効果を知らなかった受講生は多かった。

#### (4) 研修目的

研修目的は、小学校英語の基本的な理念や理解（37件）、実践指導力の向上（23件）、英語能力の向上（28件）であったが、目的が複数である研修もみられた。

- ・指導力向上のため・具体的な指導法
- ・授業実践のため（指導案）
- ・ALT導入による成果を引き出す
- ・教授法、教材、教具の改善、整備 ・教材作成と具体的な利用法
- ・英語教育理論を踏まえたうえで、有用性のある実践的英語活動を目指して
- ・手引き作成、教師研修を通して、英会話活動の充実を図る ・基礎的な英会話の練習
- ・児童の英語力の向上を図るため
- ・理論と実践を通してコミュニケーション能力の向上を図る
- ・国際理解教育の一環としての英語活動に関する取組み
- ・小中連携の英語教育について言語活動を通して学ぶ
- ・小学校における英語活動の基礎的な考え方と、到達目標の設定、年間指導計画の作成を学ぶ
- ・担任教師がコーディネートする英語活動をすすめるため

#### (5) 研修内容

具体的な指導内容としては、①小学校英語の基本的な理念や理解等の理論(32%)、②実践指導力の向上の実践・ワークショップ(33%)、③公開授業等の発表と参観(28%)、④自らの英語能力アップ(7%)であった。

実施された研修の目的（研修会が提示した文言）とその目的に対する具体的な研修内容を分類し、以下に提示した。

##### ①ワークショップなどの実践によって指導力を育成する

- ・理論と実践を通して、コミュニケーション能力の向上を図るとともに、具体的な指導法の習得を目指します。
- ・小学校英語活動の基本的な考え方、実際の進め方について研修を行い、小学校英語活動の指導の充実を図る。
- ・小学校の「総合的な学習の時間」等における英語活動を促進し、その充実を図るために、その活動において指導的な立場を担う教員を養成する。
- ・小学校における英語学習の実践的な指導力の向上を目指します。
- ・実習では、児童が楽しみながら取り組める様々な英語活動の工夫について研修。
- ・小学校英語活動を実施するために、基本的な考え方と教材についての知識を深めるとともに、実際に英語活動を体験してみる研修。初めて英語活動を実施する時に使用できる基本的なゲーム等の指導の知識や技術を身に付ける。

##### ②模擬授業・公開授業等の授業研究

- ・小学校での国際理解教育の一環としての英語活動に関して、児童が楽しく取り組む方法や留意点等について、授業参観、講義、実践発表、演習などを通して研修します。
- ・「意欲的に楽しく取り組める英語活動」をねらいとし、モデル授業や実践事例を通して、指導法を学び、研修を深めます。
- ・小学校の英語活動における実践校の活動例や各校の交流をとおして、児童が外国の文化や生活への関心を高めるための英語活動の在り方を探る。

##### ③教員の英語運用能力のスキルアップ

- ・小学校の総合的な学習の時間における英語活動の展開について研修するとともに、教員のコミュニケーション能力向上のための研修を行う。
- ・小学校英語活動のねらいと英語を楽しく学ばせる指導の在り方について研修し、英語活動を推進していくための基礎的な能力を育成する。
- ・国際理解教育の一環としての英語活動の指導法および基礎的な英会話の演習。
- ・小学校段階における基本的な英語活動の在り方を理解するとともに、英語運用能力、授業構想力及び具体的な授業実践力の向上を図る。
- ・指導者として英語で話したり聞いたりするための基礎的な英語力の向上を図る。

##### ④カリキュラムについて

- ・小学校の「総合的な学習の時間」の英語活動の年間指導計画及び学習指導案の作成方法、教材づくり等の研修を通して英語活動授業の充実を図る。
- ・小学校における英語活動の基本的な考え方と、到達目標の設定及び年間指導計画作成方法を具体的に学ぶ。
- ・英語活動の効果的な指導法や、教材作成、カリキュラム作成に必要な知識・技能を身に付ける。
- ・小学校英語活動で求められているカリキュラムを中心に研究を進めている先進校から、学級担任が組立てるカリキュラムの工夫や知的好奇心をゆさぶるオリジナル教材・教具の開発などの具体的な実践について学ぶ。
- ・子どもたちが外国の文化や人々とのコミュニケーションに興味・関心が持てるよう、小学校の英語活動における授業の進め方や効果的な教材について研修します。
- ・小学校における英語活動を行うに当たっての効果的な指導計画作成及び授業の組み立て、指導方法、教材、教具について研修を実施。

##### ⑤教材・教具、手引き書等の開発

- ・教材づくり等の研修を通して英語活動授業の充実を図る。
- ・知的好奇心をゆさぶるオリジナル教材・教具の開発などの具体的な実践について学ぶ。
- ・子どもたちが外国の文化や人々とのコミュニケーションに興味・関心が持てるよう、小学校の英語活動における授業の進め方や効果的な教材について研修します。

##### ⑥政策や事業援助

- ・小学校段階における基本的な英語活動の在り方を理解するとともに、英語運用能力、授業構想力及び具体的な授業実践力の向上を図る。

#### ⑦小・中の連携について

- ・小学校英語教育と中学校英語教育の連携について、言語活動を通して学ぶ。(実際の授業例を中心に、小学校・中学校の英語教育の在り方を考える)

### 4. 教師研修会のまとめと課題

#### 4.1. 研修会のまとめ

文部科学省の小学校サポートの研修は、実践指導や教材・教具等の作成とその指導法についての研修が多い。また、実践指導では、理論的な背景による実践指導を目標としているものが多い。他方、教育委員会が実施する研修は、実践指導の他に、カリキュラムや授業計画などに関する研修目標も多くみられた。

いずれの研修も、小学校教師が実践指導力を育成するために実施されている。そのため、ワークショップを伴った実践指導や教材・教具等の作成とその指導法についての研修が多い。そして、研修を受けた受講者は、はじめは実践的な指導法を望むが、今回は、その実践が英語活動にどのような点で有効であるのかなど、理論的な背景による実践指導の在り方についての研修を望んでいる。そのため、研修会を複数回実施する場合には、理論が伴う実践指導のあり方等の内容で実施された。また、カリキュラムや授業計画などに関する研修目標も多くみられた。これは、学校で英語担当者が中心となって、各学校の状況に適したカリキュラム・デザインをすることが望まれていることによると推察できる。

研修目的としては、「教師の指導力向上のため」であり、具体的には、①授業を進める上での指導力として、「教材作成と具体的な利用法」、「具体的な指導法」「児童の英語力の向上を図るための方法」、「教授法、教材、教具の改善・整備」、「小・中の英語教育の連携を言語活動を通して学ぶ」、②指導者のスキルアップとして、「英会話活動の充実を図る」、「ALT 導入による成果を引き出す」「基礎的な英会話の練習」③小学校英語の基本的な枠組として、「手引き作成・教師研修を通して」、「授業実践のため(指導案)」、「英語教育理論を踏まえたうえでの、有用性のある実践的英語活動を目指して」、「理論と実践を通してコミュニケーション能力の向上を図る」、「国際理解教育の一環としての英語活動に関する取組み」、「小学校における英語活動の基礎的な考え方と、到達目標の設定、年間指導計画の作成を学ぶ」、「担任教師がコーディネートする英語活動をすすめるため」という研修テーマがあった。また、①と②、③を組み合わせた形での研修として実施されたものもあり、以下はそれらのプログラムの例である。

講義：「小学校英語活動のねらい」「英語活動の教授法」「教材・教具の知識」「学年に応じた教材・活動とカリキュラム」  
演習：「具体的な授業の進め方」「授業アイデア」「教材・教具の使用法」「理論に基づいた実践」「チーム・ティーチングの実践例」「授業実践例(授業参観)」「模擬授業」「カリキュラム作成と実際」「他の教科や中学校との連携」「授業を取り巻く、教室などの雰囲気作り」「授業の準備(教材・教具・授業計画・クラスルーム英語等)」「ワークショップ」

英語運用能力の向上：「英会話」「指導で使用する英語」「コミュニケーション練習」

協議：「英語活動の進め方」「授業研究」「授業プランの発表と意見交流」「情報交換」「英語活動の成果と課題」

さらに、「英語圏の大学での研修に参加」のように教師の海外派遣を行っているケースや、海外から講師を招聘しているケースもあった。

研修対象者は、大半は、「小学校教師」であったが、小中連携で英語を実施するために、「中学校の英語科教員」も受講しているケースもみられた。研修期間は、1～5日間であったが、多くは1日間のみであった。また、研修人数は、「ワークショップや教材を使用するのレッスン等、実践的な研修」が多いため、演習形式は少人数での実施もあった。

研修の講師は、講義の内容により、「所属機関の研修員(指導主事など)」、「大学の教員」、「中・高の英語の教員」、「英語活動を実施している地域の小学校教員」、「先進校や開発学校等の小学校教員(含 私立の小学校)」、「地域ボランティア教師」、「ALT」であった。また、一人で全ての内容を網羅して行う講師もいた。教育委員会では、前年度の受講生の意見や感想を聞いて、当該年度の研修を講師に依頼している。しかし、講師依頼には、①交通費などの予算上の問題、②講師との日程調整、③毎年同じ講師でマンネリ化している、等の課題があった。研修形式は、講義、講義と演習、公開授業の参観等であった。

#### 4.2. 研修会の課題

以下は、小学校英語活動の教師研修についてそれぞれの立場からの意見を集約したものである。これらの意見を研修会の今後の課題とする。

##### (1) 教育委員会など、主催者側からの意見

###### 【小学校の取組み】

- ・小学校英語に対する取組みについて学校差が大きい。

- ・学校内でも教師の意識の差が大きい。
- ・積極的に研修に参加する人は決まっている。そのため、学校から1名など、教育委員会からお願いする場合もある。

#### 【政策等について】

- ・全ての受講者の要望に応じた研修指導の講師を捜すのが難しい。(単なる講話だけでなく、実践的な指導方法があると受講者は意欲的になる)
- ・カリスマ的な教師の発表は、現場の教師に「あのように、(自分は) 教えられない」という意識を持たせてしまい、かえってマイナスとなった。
- ・研修のための予算が十分でない。
- ・小学校の教師が授業発表をする時の人選が難しい。

### (2) 受講者側からの意見

#### ① 実践指導

- ・授業ですぐに使用できる研修がしたい。
- ・研修内容が、子ども達の言語学習や国際理解にどのように効果があるのかを理論的に話されると納得する。実践に理論を裏付けして下さることがありがたいです。
- ・歌やチャンツの作り方など、様々な指導法を実践的に指導して頂いたことがよかった。

#### ② 講師が的確でないー小学校英語の研修者に適さない講師

- ・小学校英語の研修講師が不足していることはわかりますが、付け焼き刃で研究者でない人が講演をされると、受講者は直ぐにわかります。とても残念です。
- ・カリキュラム内容等の講義内容には、教材・教具の知識が必要
- ・カリキュラムの研修の時に、講師が、英語活動の具体的な教材や教具を知らなかったことが残念でした。カリキュラム研修というからには、講師がしっかり、教材や教具の研究をしてから、研修に臨んで欲しかった。
- ・カリキュラムの研修で、研究開発校のものを「先行研究」として講師が使用したが、そのカリキュラムを作成する際の具体的な学校の背景や子ども達の様子、他の教科との関連など何も情報がなかったため、講師自らがしっかり研究して、カリキュラムの講義に臨んで欲しかった。
- ・理論的背景から実践の具体例の提示が必要
- ・講義形式の抽象的な内容ばかりでは、具体的な指導に結びつかないと思います。
- ・ワークショップ形式の内容はとて有意義でした。
- ・教材・教具の作成や入手方法などを具体的に教えて頂いたことがよかった。

#### ③ 研修内容に関すること

【教師自身の英語のスキルアップ】 ・自身の英語力を磨く研修があつてよかった。

【小中連携の英語教育】 ・小中連携の英語教育の具体例を提示されたことは、中学校でも使用できるので参加してよかった。

【その他】・言語政策の内容が聞けてよかった。 ・日程調整をして欲しい。 ・小中高の教員が全員で研修ができたのはよかった。

### (3) 研修指導にあつた講師からの意見

- ・CD デッキなど、実践指導のための基本的な教具がない。
- ・1日(午前1講座・午後2講座)で、理論面、実践面など、全ての内容を盛り込んだ研修を要請されると準備が大変である。
- ・受講者の英語力、指導力、意識にかなりの差がある場合、講演の内容について、焦点を合わせるのが困難である。
- ・講師が実際に小学生に授業を行う場合、事前の準備や担任とのコミュニケーションは十分とることが大切である。
- ・教育委員会などが窓口の場合、現場の教師の率直な要望を伝えて貰うことが必要である。
- ・ALTが中心の英語活動にならないため、担任が意識を高めて欲しい。

### 参考文献

- ベネッセ 2006『第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)報告書』東京: Benesse 教育研究開発センター
- 兵庫教育大学 2007『平成18年度 文部科学省委嘱事業 小学校英語活動地域サポート事業』兵庫: 兵庫教育大学
- 松川禮子 2004『明日の小学校英語教育を拓く』東京: アプリコット
- 文部科学省 2006 「平成18年度小学校英語活動地域サポート事業」の採択について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/05/06052621.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/05/06052621.htm)



上越教育大学  
石濱博之

## 1. はじめに

「総合的な学習の時間」における英語活動は、2002年4月から国際理解教育の一環として各地域に導入された。その英語活動の開始と前後して、各地域では、文部科学省による地域サポート事業、教育委員会、及び地域の公立小学校等によって主体的に英語活動が実施されてきた。

本稿では、その総合的な学習の時間等における英語活動について、具体的にその英語活動のねらいや取り組みを概観すると共に、報告書で編成されている年間カリキュラム（話題や言語材料）から、その年間カリキュラムの特徴を述べる。そこから、これからの小学校外国語活動との関連で年間カリキュラムを分析する。

## 2. 報告書から見る各地域の英語活動

### 2.1 秋田市教育研究所小学校英語活動推進委員会の手引(2003)

平成15年1月、小学校英語活動推進委員会を発足し、「英語活動を始めたいが、何をどのように取り扱ったらよいかわからない。」「一時間の英語の学習イメージが湧かない。」「年間を通して、どのように活動を計画したらよieldろうか。」といった疑問に応え、秋田市すべての児童に外国人との英語活動を体験させることをねらいとして準備を進めてきている。秋田市教育研究所小学校英語活動推進委員会による『小学生のための楽しい英語活動』（2003）は、このような考え方に沿って各学校での英語活動の参考となるように、以下のような英語活動の構想にあたっての留意点が述べられている。

#### (1) 国際理解教育と英語活動

国際理解教育は、異文化理解、国際交流活動、英会話活動が相互関連を取りながら進められるべきものである。したがって、国際理解教育は、この3つの柱のどこから、どうアプローチしても実施可能である。それぞれの学校で、子どもたちや教職員の資質や能力、教育活動の重点や特性を生かした様々なアプローチが可能である。

しかし、どのようなアプローチであったにせよ、Native Speaker との会話、外国語そのものの特性を実感できる体験的活動を抜きにして国際理解教育は成立し得ない。柔軟な感覚・知覚、感受性をもつ小学生は、Native Speaker が話す耳慣れない言葉の音声的・音韻的特徴や身振り・表情等から、異なる文化や価値観の存在を直感的にとらえたり、簡単な英語表現を用いるだけでも彼らとのコミュニケーションが可能であることを実感したりするのである。

ここに、外国語、特に公用語としての性格の強い英語を用いた英会話活動、及び、英語を媒介とした体験的活動等の英語活動を国際理解教育の中心に位置づけることの意義がある。

#### (2) 小学校英語活動のねらい

小学校における英語活動は、英語そのものの習得を直接ねらうものではない。子どもたちは、言葉の音声的、音韻的特徴とそのときの相手の表情、身振り等に関連させ、それに反応したり行動したりしながら言語を獲得していく。「○○語をマスターしよう！」という確固たる目的や意志をもった言語習得を期待できるのはまだ先である。小学校段階の、精神を中心として、言葉や文化が違って、それを克服してコミュニケーションできるのだという体験をあげあわせたい。このことが、異文化理解を深め、国際交流活動に対する意欲を喚起し、中学校移行の英語学習、さらには、第2、3の外国語習得の基盤となっていく。

#### (3) 英語活動の実施にあたって

① まずは、やってみよう！！： 子どもたちは、積極的である。教師が戸惑うような場面でも、子どもたちは迷わず活動する。また、ALTや特別非常勤講師は有能である。まずは、ALT等の手助けを得ながら、ゲーム、歌、チャント等から始めてみればよい。適当な場と、多少の準備があれば十分に授業はできる。

② 子どもたちの思いや願いを大事にした活動に： 歌、ゲーム等から英語活動に入ることは自然である。これは、年齢段階によらないということも大事である。

### 2.2 秋田市立土崎南小学校の実践（平成16年度）

『平成18年度英語活動実施計画』（2006）によれば、「外国人と直接関わったり、外国の言葉や文化に触れることを通して、国際感覚とコミュニケーション能力を身につけた子どもを育てる」ことをねらいとして英語活動が実施され

ている。また、地域ボランティアや指導者を招いて英語活動を行っている。年間カリキュラムが示されているが、月ごとに話題が決められていない。

### 2.3 新潟県糸魚川市立西海小学校（平成 17 年度から現在も継続）（2006, 2008）

平成 17 年度より西海小学校校長の依頼を受け、筆者を講師として英語活動を行っている。表 1、表 2 の目標や活動のテーマに沿いながら低学年、中学年、高学年と分かれて英語活動を実践してきた。また、平成 18 年度でも、1 年生のみ 2 学期から英語活動を始め、その他の学年は昨年度から継続して行っている。そして、筆者の指導のもとに学級担任が英語活動を主体的に実践している場面も増えている。例えば、平成 17・18 年度の西海小学校の英語活動の目標と低・中・高学年の活動テーマは、表 1 と表 2 のとおりである。平成 20 年度は、学級担任主体の英語活動を展開している。なお、英語活動に位置づけは、年間 35 時間、週 1 回、45 分間で総合的な学習の時間を使って英語活動を行っている。

表 1 西海小学校の小学校英語の目標

英語活動をとおして、外国の言語や文化に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すこと（など）の実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。
1) 言葉や文化についての関心・理解・態度・・・言葉やその背景にある文化などに興味を持ち理解する。
2) コミュニケーションへの関心・意欲・態度・・・コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。
3) コミュニケーション能力・・・簡単な英語を聞いたり話したりして、互いの気持ちを伝え合う。

表 2 低・中・高学年の活動計画のテーマ

全学期	
学年	活動テーマ
低学年	歌や遊びなどをとおして楽しく活動する
中学年	簡単な英語で聞いたり話したりするやりとりを楽しむ
高学年	簡単な英語を使って、自分の考えなどを伝え合うことを楽しむ

### 2.4 石川県かほく市立小学校

平成 17 年度より本格的な英語活動が実施されてきた。そして、平成 18・19 年度は文部科学省委嘱「小学校英語活動地域サポート事業」『児童が楽しく取り組む英語活動の在り方を求めて一小中の連携を視野に入れた指導と評価の工夫—』で英語活動を展開しながら研究を推進してきた(2007)。

#### (1) 英語活動の基本的な考え

##### 1) 英語活動の基本方針

国際化が著しい今日、21 世紀のグローバル社会に対応するため広い国際的視野や異文化理解に基づく国際感覚を備えた人づくりが求められている。また、かほく市は姉妹都市メスキルヒ市との交流をはじめ積極的な国際交流を目指している。そのため、小学校段階から相互に理解しようとする態度の育成とともに異文化に触れることを通して自国の文化や自分自身に対する理解を深めることが大切である。そこで、かほく市全小学校において、小学生にふさわしい英語活動を通して、英語に触れる機会を多く持つことにより英語活動の推進を図る。

##### 2) 対象学年： 3 年生から 6 年生までを対象とする。

##### 3) 活動時間： 総合的な学習の時間、特別活動、及び学校の創意工夫によって生み出された時間を使う。

##### 4) 英語活動の目標

###### 全体目標

英語に慣れ親しむ活動を通して、英語を聞いたり話したりすることに味・関心を持ち、英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育てると共に、言語、文化、習慣などに対する興味・関心を高め、国際理解の基礎を培う。

###### 中学年目標

- ① 歌やゲームなどの身体や口を動かす活動を通して、身近な英語に触れ、英語を聞いたり話したりすることに慣れ親しむ。
- ② 異なる文化に興味を持ち、受け入れようとする態度を持つ。
- ③ 日常的で簡単な英語を聞いて理解し、英語であいさつしたり自分のことを積極的に伝えたりすることができる。

## 高学年目標

- ① 英語で簡単なやりとりする活動等を通して、相手の伝えたいことをわかろうとし、英語でコミュニケーションすることに慣れ親しむ。
  - ② 簡単な英語を聞いて理解し、自分の思いや言いたいことを伝えることができる。
- (2) 英語活動実施にあたって
- 1) 英語でのふれあいの場の設定
    - ① 英語の言葉(音声)を文字に置き換えたりせず、自然に英語に親しむようにする、② 歌、リズム遊び、ゲーム、動作、あいさつなどの身近な活動を通して、英語のリズムや音声に慣れ親しむようにする、③ 絵図、写真、音声、映像などの視聴覚教材の活用を図る、④ 世界地図、地球儀、外国の写真、国際交流資料などを掲示したり、校内に国際理解コーナーを設けたりするなど、環境を整備する、⑤ 朝や帰りの会、給食時などに英語の歌を放送したり、外国の様子がわかるビデオ等を放映したりする。
- (3) ALT との協力
- 英語活動の授業をするにあたり、学級担任(授業担当者)は指導計画と目標をしっかりと把握し、その授業の責任者として望むことは当然のことである。基本的な考え方は、ALT との TT を成功させるためには、担任と ALT がお互いに理解し尊重しあうことが大切である。そのためには、次の点に留意する必要がある。
- ① 活動前の打ち合わせとして、1. 活動の対象学年や学級、先生の名前や日課などの打ち合わせが事前に必要である、2. 学習に関しては、ねらい、活動内容、教材、既習事項などを綿密に打ち合わせる、3. 学級の雰囲気や配慮すべき児童など、生徒指導上重要だと思われる事項に関しても打ち合わせをする、としている。
  - ② 迎える準備： ALT 担当者配置、全校児童への紹介、職員と同じ待遇など、ALT が不便を感じないような配慮も必要である。
  - ③ 相互理解としては、1. 考え方や生活習慣等、日本人と異なる文化を持っていることを承知しておく必要がある、2. お互いの文化や習慣等について日ごろから話し合ったり、日本の文化体験の機会を通して相互理解を深めることが必要である、3. 学校行事にも積極的に参加してもらうことが重要である。
  - ④ ALT との効果的なティームティーチングの在り方としては、ALT 自身の持ち味を生かし、学級担任との役割分担が明確であることがポイントである。ALT も一人ひとり個性を持っている。指導の在り方や学習内容について、時間をかけてよく話し合っていくことが大切である。

## 2.5 愛知県東海市教育委員会

平成17年度「英語が話せる子ども育成事業」にかかわる意識調査報告書調査（調査目的：本市の小学校における英語活動や中学校における英語の授業について、児童・生徒、保護者及び教員の意識を把握することにより、本事業の充実・改善に生かすことを目的とする）に基づいて、東海市の小学校における英語活動の授業を改善していくためには、次の6を留意点として授業を設定していくことが大切であるとした。

(1) 子どもたちが英語でコミュニケーションをする場面を設定する：授業において、たとえば *This is a pen.* の *pen* の部分を *book*、*map*、*pencil* などと言い換えていくような機械的・断片的なドリル活動だけではなく、子どもたちが学習した英語を、達成すべき課題を伴う、具体的で意味のある場面において、自分の思いや気持ちを表現するために使用するようなコミュニケーション活動を設定したい。

(2) 誤りを細かく訂正しない：小さな子どもは、まわりの人間とのコミュニケーションを通して、自分なりにルールを構成しながら、また間違いを繰り返しながら母国語を学び、コミュニケーション能力を獲得していく。また、私たち日本人でも、ふだんの生活で日本語を使用するときに文法的な間違いなどを日常的に犯している。したがって、教室で子どもたちが文法や発音を間違えたとしても、教師がその誤りを細かく訂正する必要はまったくない。

(3) 語を使うことを楽しむ：子どもたちに、英語は世界中の人々とコミュニケーションをするための道具であり、楽しみながら、少しずつ身につければよいものであることを伝えたい。そのためにも、英語を「教える」のは中学校以降にまかせ、教師も「英語で歌う、交流する、活動を楽しむ」といった気持ちをもつとよい。

(4) 英語をたくさん聞かせ、たくさん声に出させる：特に小学校中学年までの子どもたちは、音を聞き分ける力、音をまねる力、音を記憶する力に優れている。したがって、たくさん英語を聞かせ、たくさん英語を声に出す体験をさせるようにしたい。そのためにも、英語活動の授業では、できるだけクラスルーム・イングリッシュ（教室で習慣的・継続的に使用する英語）を使いたい。

(5) 担任主導の授業を実施する：学級の子どものことをいちばんよく知っているのは担任である。たとえば消

極的な子どもをどの場面で引っ張り出すかなどを考慮しながら、担任が主導の授業を進めていくようにしたい。もちろん、ALTがもつアイデアや教材を積極的に取り入れていくことは必要であるが、授業で扱う題材や語彙は、子どもたちの日常生活にかかわりがあるものが望ましい。したがって、事前の打ち合わせにおいても、担任が主導することが望まれる。

(6) 国際理解教育を推進する： 英語活動の授業においては、いわゆる英会話だけでなく、英語によるコミュニケーション能力を身につける意義や面白さを理解させるためにも、国際理解教育を推進していくことが望まれる。たとえば、ALTが日本の行事に関連するような自分の出身国の行事について話をしたりすることから始めるとよいだろう。

## 2.6 福岡市教育委員会（平成 18 年度）

### (1) 英語活動の基本的な考え方(2006)

- ① 英語活動の目標は、「英会話活動を通じて、外国語の言語や文化に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
- ② 発達段階に応じた各学年の目標、内容、指導上の留意点については、表3のとおりである。

表3 目標、内容、及び留意点

学年	学年目標	内容	指導上の留意点
低学年	第一学年	①あいさつやものの名前などを英語で聞いたり、まねをしたりしようとする。 ②英語を聞いたり、まねをしたりして、英語のリズムや音声に触れる。 ③外国の行事や習慣、歌、遊びなどに触れる。	①歌や動作を伴う楽しい活動をするようにする。 ②学習内容を繰り返して基礎を身につけるようにする。 ③外国の行事などを通じて、外国の文化に触れるようにする。
	第二学年	①英語で挨拶したり、受け答えをしたりしようとする。 ②英語を聞いたりまねをしたりして、英語のリズムや音声に慣れ親しむ。 ③外国や日本の行事や習慣・歌・遊びなどに触れる。	①歌・動作・ゲーム・ビデオなどを使って楽しい活動をするようにする。 ②五感・想像力・体全体などを使った活動をするようにする。 ③外国の行事などを通じて、日本と外国の近くに気付くようにする。
中学年	英語を使うことを楽しむ	①身振り手振りを使って、コミュニケーションを楽しもうとする。 ②相手が伝えようとすることの大体を理解する。 ③外国と日本の言葉や、生活、習慣、文化の違いに触れる。	①既習の簡単な表現を使って、コミュニケーションを楽しむようにする。 ②場所やジェスチャーなどを考え、相手の伝えようとしていることを聞いて大体理解するようになる。 ③外国の言葉や生活・習慣・文化に関心を持ち、日本のものとの違いを体験するようになる。
中学年	英語を使うことを楽しむ	①簡単な表現を使って、コミュニケーションを楽しもうとする。 ②簡単な表現を使って、話したり質問に答えたりする。 ③外国と日本の言葉や生活、習慣、文化の違いに気付く。	① 既習の簡単な表現を使って、コミュニケーションを楽しむようにする。 ②スキットやロールプレイなどでコミュニケーション活動をするようになる。 ③外国の言葉や生活、習慣、文化に関心を持ち、日本のものとの違いに気付くようになる。
第五学年	英語が通じる喜びを味わう	①身近なことや自分のことをお互いに聞いたり、話したりする。 ②伝えたい内容を簡単な英語で表現する。 ③外国や日本の言葉や生活、習慣、文化を理解する。 ☆アルファベットの名前と音の違いに	①自分や相手の伝えたい内容を理解し、コミュニケーションを続けようとするようにする。 ②自分の伝えたい内容を、適切に表現するようにする。 ③外国と日本の言葉や生活、習慣、文化から共通点・相違点を理解するようになる。 ☆アルファベットを見せながら名前と音を発

	第 六 学 年	気付く。	音するようにする。
		①場面を考えて、身近なことや自分のことを積極的に聞いたり、話したりする。 ②伝えたい内容を、会話やスピーチなどの方法で表現する。 ③外国や日本の言葉や生活、習慣、文化を理解し、尊重する。 ☆アルファベットの名前と音の違いが分かる。	①自分や相手の伝えたい内容を、理解し、積極的にコミュニケーションを続けようとするようにする。 ②自分の伝えたい内容を、場面を考えて適切に表現するようにする。 ③外国の言葉や生活、習慣、文化と日本のものとの共通点・相違点を理解し、それぞれのよさを尊重するようにする。 ☆アルファベットの音と文字を結びつけるようにする。

③ 配当時間数は、中・高学年の配当時間を30～35時間、低学年を20時間、1トピックに2～3時間程度の配当時間数を想定しているが、あくまでも目安なので、各学校の実態に応じて配当数・扱うトピック数を調整する必要がある。また、10～15分を単位としたモジュール形式の授業計画も、実態に合わせて導入することが望ましい。各学校における英会話活動を始めてから経験年数が1～2年の学校は「導入期」という位置づけで、「とにかくできるところからはじめてみる」という姿勢で、年間指導計画・授業案・教材の蓄積をしていくことが大切である。3年以上の経験がある学校では、より児童・学校の実態に合った発展的な活動を取り入れていくことが望まれる。

④ 指導形態は、担任指導形態を基本としながらも、ALTや英語の専門的な知識を持った日本人講師とのティーエムティーチング(TT)体制を取り入れ、担任のサポート体制を整えることが、より効果的な指導につながる。また、体系的な年間指導計画・効率的な教材準備・円滑なTTを推進するためには、英語専科の設置も考えられる。

(2) 年間指導計画の作成にあたって

年間指導計画作成の基本的な考え方は、表4のとおりである。

表4 基本的な考え方

	第1・2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
導入 「はじめる」 (4～5月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 英語の単語や表現に触れる活動 (技能シラバス重視)</li> <li>○外国の人や友達との交流を楽しむ活動</li> </ul>				
充実 「深める」 (6～12月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 様々な場面での英語の表現になれる活動(場面+機能シラバス)</li> <li>○英語の単語や表現に習熟する活動 (技能+タスクシラバス重視)</li> <li>○伝える喜びを体験する活動</li> <li>○コミュニケーションを楽しむ活動</li> </ul>				
発展「まとめる」(1～3月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 英語での表現活動(タスクシラバス重視)</li> </ul>				

2.7 瑞穂市立生津小学校

平成6年に文部省の小学校における英語活動研究開発学校の指定を受ける。研究指定終了の平成9年以降も、小学校英語活動の研究実践を積み重ね、毎年公表会を実施している。これまでの取り組みは、表5のとおりである(2005)。

表5 これまでの取り組み

	研究開発テーマ	内容・サブテーマ
第 一 期	「小学校における外国語学習の在り方」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オーラルコミュニケーションを主体</li> <li>・学級担任が中心の学習形態</li> <li>・1～3年は週1時間、4～6年は週2時間で実施</li> <li>・フレンドリータイムの設定・国際交流行事</li> </ul>

第二期	「国際性を育む楽しい英語学習の在り方」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主研として英語学習活動の在り方の研究を続ける。</li> <li>・平成10年～平成11年 県教育委員会指定個性化教育推進事業</li> <li>・英語学習活動に加えて、インターナショナルフレンズタイム (IFT) の実施</li> <li>・日本や外国の生活・文化を学び尊重する総合的な学習の時間</li> </ul>
第三期	「国際性豊かな子どもの育成」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な学習時間のカリキュラム作り</li> <li>・平成12年サブテーマ～総合的な学習の時間“なまづっ子タイム”の実践を通して～</li> <li>・平成13年サブテーマ ～“共生”の力を求めて～</li> <li>・平成14年度のサブテーマ～楽しくコミュニケーションを図る英語学習活動を通じて～</li> </ul>
第四期	「豊かなコミュニケーション能力を身につけた子どもの育成」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成15, 16年度のサブテーマ～楽しく取り組む英語学習活動を通して～</li> <li>・平成17年度のサブテーマ～相手を思いやりながら楽しく取り組む英語学習活動を通して～</li> </ul>

目指す子どもの姿は、学年ごとに表6のとおりである。

表6 英語活動のねらい

低学年	身近な英語を使って、歌や遊びなどの活動を仲良く楽しむ。
中学年	簡単な英語でたのしい活動をしなが、聞いたり話したりするやり取りを楽しむ。
高学年	簡単な英語で楽しい活動をしなが、気持ちや考えを伝えあうことを楽しむ。

### 3. 報告書に見る年間活動計画のカリキュラムに取り上げられた話題とその言語材料

各の地域で行われている英語活動について、話題や言語材料について分類し、分析を試みる。概して、そのねらいなども違うにも関わらず、5・6年生の英語活動の話題や言語材料において類維持点が多くあることが推察される。

Appendixの表7(5年生)、及び表8(6年生)のとおりである。

#### 3.1 話題の類似点

##### 3.1.1 5年生の類似点

(1) 多く取り上げられた話題は「好きなもの」に関する話題であった。「好きなもの」について問答するという話題では、“What subject(s) do you like?—I like Japanese.” や “Do you like math?—Yes, I do. / No, I don’t.” といったメインダイアログが多かった。「小学校英語活動実践の手引第4章年間活動計画をどうつくるのか(題材及び場面選定のポイントを理解する ア 題材選定のポイント (ア) 子どもにとって身近なもの(遊び、食べ物、家庭や教室にあるものなど)」(文部科学省)とあるように、この話題は子どもにとって身近である。“What animal(s) do you like?—I like cats” というダイアログを用いれば、さまざまな動物の名前を扱うことができる。animal(s)の部分 subject(s), sport(s)といった子どもにとって身近な話題に代えて応用できる。また、発達段階に応じて単語の難易度を変えていくことも可能である。

(2) 次に多い話題として、「出身」、「生活」に関する話題である。「出身」についての話題では、特に “Where are you from?—I’m from Japan.” といったメインダイアログを使って国の名前を扱うものが多かった。これは、「小学校英語活動実践の手引第4章年間活動計画をどうつくるのか(題材及び場面選定のポイントを理解する ア 題材選定のポイント(キ)他教科との関連するもの(色の文化、数、世界地図、外国の生活・習慣など)」(文部科学省)と示された中の「世界地図」と関連されている。そのほかのダイアログには “Where is America?—It’s here.” と地図を示しながら国の名前を扱っている実践もあり、より関連深い内容であるといえる。社会科との関連で世界地図を扱った授業の前後で扱えばより効果的に活動できるものと考ええる。

「生活」については、一日の生活場面を表現するものが特に多く、“What time do you get up?—I get up at six.” といったメインダイアログが示されている。これが行われるためには、数字があらかじめ表現できるようになっている必要がある。既習内容を応用した文であることから考えると、高学年に適した内容であるといえる。

(3) 「場所案内」「買い物」に関する話題が第3番目に挙げられる。「場所案内」では “Go straight” “ Turn right(left)”

といった場所案内の表現が共通して使われている。「買い物」では“Can I help you?”または“May I help you?”が扱われていて、“How much is it?”はすべてに共通して扱われていた。

子どもにとって身近で興味・関心の高い活動として、自己紹介、買い物、道案内、電話、学校案内などがある。頻繁に扱われる内容はこの提示に沿ったものが多いことがわかる。

### 3.1.2 6年生の類似点

(1) 「将来の夢」が最も多く(7つの実践・手引のうち6つに共通)、すべて共通して“**What do you want to be?—I want to be a teacher.**”といったダイアログを用いていた。そのダイアログの定着と並行して様々な職種を示している場合が多かった。

(2) 次に多かった話題(7つの実践・手引のうち5つに共通)は、「自己紹介」「出身」に関する話題であった。この話題については5年生と同様のことが言える。

### 3.1.3 言語材料の類似点

(1) 5年生では、「好きなもの」に関する話題が多く扱われていた。「好きなもの」では、教科、動物を扱う内容があった。特に“**What subject do you like?—I like math.**” “**What is your favorite subject?—My favorite subject is Japanese.**”といったダイアログが多かった。

(2) 6年生では、「将来の夢」に関する話題が多く扱われていた。「将来の夢」に関する話題では、ダイアログとしては先にも述べたように“**What do you want to be?—I want to be a teacher.**”という表現がすべてに共通して用いられていた。職業としては **doctor** がすべてに共通して用いられていた。この話題を取り上げていた4つの資料のうち3つ共通していた職業としては **teacher, baseball player** があげられる。**nurse** は二つの資料において共通して扱われていた。子どもが実際に将来なりたい職業と関連しているのだろう。

### 3.1.4 文の構成

5・6年生に共通して第1文型、第2文型、第3文型が主に用いられ、第4文型、第5文型は扱われている例はなかった。質問の内容としては「**What**+名詞~?」「**How**+名詞~?」という形で扱っている例がある。こういった質問の形であれば、子どもたちは単語レベルで応答することができる。例えば、“**What animal(s) do you like?**” に対しては、“**I like cats**”と応えることが文法上丁寧であるが、短い応え方として“**Cats**”と応えても通用する。単語レベルから段階的に練習し、完全な文で応答できるようになるには扱いやすい質問内容である。

### 3.1.5 独自の話題など

東海市教育委員会が示している「フォニックス」は、2学年を通して対象とした他の資料ではなかった話題である。また、「文化」に関する内容を取り上げた話題がある。これは、文化の違い、例えば食べものなどを扱ったものがある。文化の違いを取り上げる場合も、子どもたちにとって身近な話題を取り上げている。

## 3.2 まとめ

年間活動計画で取り上げられた話題や言語材料は、2008年の試作版『英語ノート』(5年生用・6年生用)と全体的に類似している。いままで各地域でなされた英語活動の一定の成果が「英語ノート」に反映されていると考えられる。そうであるならば、英語活動を既に実施している公立小学校では、英語活動の成果を継続して、外国語活動に応用可能であると考えられる。これから外国語活動に取り組む小学校は、実施している小学校と情報交換をして、今までの英語活動を参考にすることが望まれる。

謝辞： 本稿をまとめるにあたり、八幡徳子さん(平成18年度上越教育大学学校教育学部卒業)の論文『小学校英語における高学年を対象としたカリキュラム編成の試み』の表などを活用させていただいた。活用にあたり受諾していただき感謝したい。

### 参考文献

- 秋田市教育研究所 小学校英語活動推進委員会. (2003). 『小学生のための楽しい英語活動』
- 秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター. (2006). 『第10回秋田大学教育実践セミナー—小学校における英語教育を考える—』
- 秋田市土崎南小学校. (2006). 『平成18年度英語活動実施計画』
- 糸魚川市立西海小学校. (2006). 『糸魚川市立西海小学校の英語活動 A 指導案集(平成17年度指導案集)』 報告書
- 糸魚川市立西海小学校. (2008). 『糸魚川市立西海小学校の英語活動 B 指導案集(平成18年度指導案集)』 報告書
- かほく市学校教育研究会英語活動・英語教育検討委員会. (2006). 『英語活動の手引き』

- かほく市教育委員会. (2007). 『平成 19 年度 かほく市小学校英語活動の手引き』
- 東海市教育委員会. (2005). 平成 17 年度版指導計画書『平成 17 年度「英語が話せる子ども育成事業」にかかわる意識調査報告書』
- 福岡市教育委員会. (2006). 『平成 18 年度版〈小学校〉英会話活動の手引』
- 松川禮子. (2004). 『明日の小学校英語教育を拓く』東京：APRICOT, pp. 16 - 19.
- 瑞穂市立生津小学校. (2005). 『平成 17 年度生津小学校英語活動研究発表会 指導案集・全体会資料』
- 文部科学省. (2001). 『小学校 英語活動実践の手引』東京：開隆堂出版

Appendix

表 7 5 年生のメインダイアログの分類

話題	学校名	メインダイアログ
文化	かほく市立小学校	Witch / black cat / pumpkin / skeleton / trick or treat bag / jack-o 'lanterns / ghost / monster / spider/ A wolf man is in number 1! Mummy is in number 9! Trick or treat! Treat! Here you are. Thank you. What color do you want? I want yellow.
	生津小学校	Do you have a ~card? What's this made from? I think it is made from beans. Wheat, rice, corn, bean
生活	土崎南小学校	I get up at 6. I eat breakfast. I brush my tooth. I wash my face. I go to school. I study homework. I watch television.
	西海小学校	Where do you live?-I live in Itoigawa city. Where do you go to school?-I go to Nishiumi Elementary School.
	かほく市立小学校	I get up at 6. I wash my face. I eat lunch. I go home at 4. I do my homework at 6. I take a bath. I watch TV. I go to bed at 9.
	東海市教育委員会	What time do you get up? I get up at~. What time do you go to bed? I go to bed at~. thirteen/fourteen/fifteen/sixteen/seventeen/eighteen/nineteen/twenty/thirty/forty/fifty/go to school/ go home
	生津小学校	What time do you get up? (go to bed, take a bath, study, have breakfast, have lunch,・・・) I get up at ~. It's too late (early). Me, too.
出身	西海小学校	Where are you from?-I am from America. Japan, China, France, Australia, Great Britain, India, Russia, Germany, Brazil, Canada, Italy, Korea, Spain
	かほく市立小学校	Where are you from? I'm from ~. [Japan / China / Canada / France / Australia / Korea/ U.S.A / U.K・・・]
	東海市教育委員会	Excuse me. May I talk to you? O.K. What's your name? I'm~. Where are you from?-I'm from Italy. Korea/India/China/USA/Australia/Canada/Russia/ Brazil/Egypt/Germany/France
	福岡市教育委員会	Where are you from? I'm from Japan. America, Brazil, Korea, Australia, France, England
	生津小学校	Japan, America, Germany, Turkey, Korea, China, Canada, India, Italy, Japanese, .. Which country is this? It's America. Where is America? It's here.
国の名前	秋田市教育研究所	Japan/ UK/ Korea/ China What country?
世界の食べ物	生津小学校	How's it taste? It's sweet. (bitter, spicy, hot, salty, sour) It looks yummy. (delicious) Where are they from? I think they are from Aomori. How about you? I think~. Which country is this dish from?
自分の考えを表現する	生津小学校	What do you think, ~san? I think it's ~. How about you? I think so. I don't think so. Why? Because~



学習内容について	秋田市教育研究所	What subject? math, music, science
	かほく市小学校	When do you study ~? I study ~ on ~. Where do you study ~? I study P.E. in the gym. [English→classroom] [music→music room] What day is it today? It's [Monday].
	生津小学校	Are you ready? Stand up, please. Let's start ~ lesson. That's all for today. Which is heavier (bigger, longer) A or B? I think ~ is heavier. Let's try. Draw a picture using these shapes. What's the area? Square centimeters plus, minus, times, equals, divided by
アルファベット	かほく市立小学校	A to Z 6年生は5年生よりスペルが長い単語 ex) dictionary
	東海市教育委員会	Can you say from A to Z? Yes, I can. Can you read from A to Z? Yes, I can.
	生津小学校	A, B, ..., Z Let's make the letter A. I will make "HAND". car, doll, pig, egg, hand, shoes, dog, bus, bag, lion, red, jam THANK YOU JOHN. WE LOVE YOU.
あいさつ	西海小学校	Hello. Hi. Good morning. How are you? I'm fine, thank you. And you? I'm fine, too, thank you. Hello, ~. Nice to meet you, (too). My name is ~.
	東海市教育委員会	Good morning. How are you? I'm fine, thank you. And you? I'm fine, too. Thank you. Nice to meet you. Good- by.
基数・序数	西海小学校	What grade are you in?-I am in the forth grade. first, second, third, fourth, fifth, sixth What is the number?-It is one. 1~60 First, second, third, fourth, fifth, sixth, 31 <sup>st</sup>
	かほく市立小学校	How many ~? Zero to one hundred thousand million
動作	かほく市立小学校	running / eating / drinking/ walking / studying / reading / writing / singing / sleeping / washing What are you doing? I'm ~ ing/ [6年生] 1語+α(言えたら) eating lunch washing hands
	福岡市教育委員会	What are you doing? I'm reading a book. watching TV, eating dinner, studying, playing a game, etc.
日付	秋田市教育研究所	When's your birthday. - It's in January.
	西海小学校	What is the date today?-It is October 1. When is your birthday?-It is January 13. January, February, march, April, May, June, July, August, September, October, November, December
	かほく市立小学校	[1 <sup>st</sup> ~ 31 <sup>st</sup> ] My birthday is September 2. When is your birthday?-My birthday is ~. New Year's Day The Doll's Festival Children's Day Marine Day When is Children's Day?-It's on May 5.(It's on ~.)
	福岡市教育委員会	This is my birthday calendar. My birthday is ... January~December 1 <sup>st</sup> ~31 <sup>st</sup>
将来の夢・職業	西海小学校	What do you want to be when you grow up?-I want to be a teacher. Architect. ballet dancer, barber, baseball player, carpenter, car racer, doctor, teacher, etc.
	かほく市立小学校	What do you want to be?-I want to be a doctor. Good Luck. You have a nice dream.
	東海市教育委員会	Who's this?-He's my brother, Ichiro. What does he do?-He's a baseball player. singer/soccer player/baseball player/doctor/nurse/ police officer/ pianist
仕事	かほく市立小学校	[cook/teacher/bus driver/nurse/pilot/office worker/singer/baseball player] Excuse me. Are you a doctor?-Yes, I am. Me, too. No, I am not. Thank you. Good bye.

自己紹介	西海小学校	My name is Taro. I go to Nishiumi.Elementary School. I am in the sixth grade. I live in Itoigawa. My birthday is January 2. I like Japanese. I want to be a baseball player.
	かほく市立小学校	Hello. My name is ~. I'm ~ years old. I live in ~. Nice to meet you. Nice to meet you, too.
	福岡市教育委員会	Hello. My name is ~. I'm in the fifth grade. My favorite ~ is ~. My birthday is in ~.
他者紹介	秋田市教育研究所	Who is this?-She is my favorite musician. She is Hikaru Utada.
	土崎南小学校	This is my friend~. Nice to meet you. Nice to meet you, too.
	かほく市立小学校	This is my friend ~. She/He likes~. [Foods/Drinks/Sports] Oh, I see./ Really? /Me, too./ Good! / How nice. Who is he (she)?-He (She) is Mr.(Ms.)~. He is a baseball player. She is a pianist. I'm an animal. My body is black and white. I'm from China. Guess who? Panda! This is my mother. [ father/ sister/ brother/ grandmother/ grandfather/aunt/ uncle/cousin] Her / His name is ~. She / He is ~ years old. Who's this? This is my mother. Her name is ~. (自分で調べた表現方法を用いて発表してもよい。)
天気	福岡市教育委員会	How's the weather in New York? It's sunny. rainy, windy, hot, cold, snowy, cloudy, Tokyo, Beijing, Rio de Janeiro, Sydney, Paris, London
場所案内	秋田市教育研究所	Where is ~? Go stop. Turn right(left).
	土崎南小学校	Where do you live?-I live in~. Tokyo, Akita prefecture Let's go to classroom. 1 floor, gym, 2 floor, library, science room. Go, Stop, Turn, Right, Left
	かほく市立小学校	What's this? It's a ~. [station / airport / bus stop] Where is the hospital? Go straight. Turn right [left] Stop.
	福岡市教育委員会	Where is the book store? Go straight and turn right (left) . stop / station, school, post office, etc.
料理	福岡市教育委員会	Let's make curry. Please peel the onion. Let's eat it. Wash, peel, cut, boil, mash, put in, mix, etc.
電話応答	東海市教育委員会	Hello. This is ~. Hi, ~. Let's play~. Yes, let's. / I'm sorry. I'm busy. Thank you. Good-bye.
フォニックス	東海市教育委員会	tiger/lion/goat/hat/rabbit/violin/pig/dog/witch/monkey/map/mop/bag/bug/pen/pin/ Meg/hot/six/hat/gum/fox/pig/ten/mat/mate/name/make/Tim/time/five/like/pet/ Pete/not/note/home/nose/cut/cute/use/June/fish/chocolate/phone/ship/chime/ lunch/elephant/white/whale/bath/think/this/that/sick/back/king/ring/sea/big/boat /snow/cloud/wedding dress/crown/castle/man/water/hot/soap/bed/sleep/doctor animal/gray/school/sound/time
買い物	土崎南小学校	Can I help you? Yes, please. How mach is this? It is three dollars. This one please. tomato, onion, carrot, potato, pumpkin, apple, banana, strawberry, melon, lemon, orange
	かほく市立小学校	S: May I help you? C: Two hamburgers, please. S: Here you are. C: How much [ is it]? S: Two dollars. C: Here you are. S: Here's your change. * 6年生 S: Thank you. C: Thank you. S: Have a nice day. S: 店員 T:お客

	東海市教育委員会	Can you help me? Yes, I'm looking for~. How much is it? It's ~dollars. I'll take it. skirt/jacket/shirt/blouse/T-shirt/sweater/belt/bag/tie/cap/hat/scarf/ handkerchief/necklace/dress
	福岡市教育委員会	May I help you? I want...and... How much? 2 dollars, please. Here you are. Thank you. Hamburger, French-fries, soda, juice, etc.
日本の 遊びを 紹介	福岡市教育委員会	Do you know this? Can you do this? Let me try! otedama, kendama, ohajiki, darumaotoshi, kites
科目	土崎南小学校	How many classes do you have on Monday? I have 5 classes on Monday. social study, science, math, music, P.E, Japanese, home economic
	西海小学校	How many classes do you have on Monday? I have five classes on Monday. What are they? They are Japanese, social studies, science, math, and music.
好きな もの	秋田市教育研究所	What sports do you like? What ~ do you like? I like ~. Have a nice holiday.
	土崎南小学校	What subject do you like?-I like Japanese. social study, science, math, music What subject is it?-It is Japanese.
	西海小学校	What subject (s) do you like?-I like Japanese. Japanese, social studies, mathematics, science, music, arts and crafts, homemaking (home economics) , P.E (health and physical education) , character copying, moral education
	かほく市立小学校	What food / drink do you like?-I like ~ . [sandwich / toast / noodles / orange juice / tea] These fruits are from ~ . Where are [fruits / vegetables]from? From ~ . Are you hungry?-Yes, I am. Where are [fruits / vegetables] from?(絵カードをみ せて)From ~ . That's right.
	東海市教育委員会	Do you like~?-Yes, I do. / No, I don't. What animals do you like? dog/cat/tiger/zebra/elephant/bear/rabbit/monkey/pig soccer/ tennis/ baseball/ basketball/table tennis/ dodge ball/ badminton/ swimming/ skiing/ skating/ running
	福岡市教育委員会	What's your favorite sport? My favorite sport is baseball. color, food, subject, animal, insect, etc.
	生津小学校	What's your favorite subject? (sport, color, fruit, animal, food,...) My favorite ~ is ~.
身の回 りの物	かほく市立小学校	old / new red / black big / small / tall / long What's this? Is it ~? big green red What am I?
行事	秋田市教育研究所	Merry Christmas. Happy New Year.
	土崎南小学校	Making a Christmas tree. Card and Ornaments.
	かほく市立小学校	ここでの英語表現は、カードや手紙に書くためのもので、黒板などに見本として書 いて教える。 Thank you for. See you again. It was fun. I'm happy. I enjoyed the class. I'm glad to meet you. (I wish you a merry Christmas!) to ~ , from ~ .
気分	秋田市教育研究所	How are you?-I'm sleepy.
	土崎南小学校	How are you?-I'm fine. I'm sleepy. I'm not good. I have a headache.
	生津小学校	What's the matter? What's up? What's wrong? I'm sad. (hungry, tired, sleepy, angry, thirsty, hot, cold) That's too bad. Take care. Thank you. I have a cold. (headache, stomachache, toothache, fever, runny nose, sore throat, ...)

表 8 6年生のメインダイアログの分類

文化	かほく市立小学校	Witch / black cat / pumpkin / skeleton / trick or treat bag / jack-o lanterns / ghost / monster / spider A wolf man is in number 1! Mummy is in number 9! Trick or treat! Treat! Here you are. Thank you. What color do you want? I want yellow.
気分	秋田市教育研究所	How are you?-I have a headache?
他者紹介	秋田市教育研究所	Who is this? He is my favorite baseball player. He is Ichiro.
	かほく市立小学校	This is my friend ~. She/He likes~. [Foods/Drinks/Sports] Oh, I see./ Really?/Me, too./ Good! / How nice. Who is he (she)?-He (She) is Mr.(Ms.)~. He is a baseball player. She is a pianist. I'm an animal. My body is black and white. I'm from China. Guess who? Panda! This is my mother. [father/ sister/ brother/ grandmother/ grandfather/aunt/ uncle/cousin] Her / His name is ~. She / He is ~ years old. Who's this? This is my mother. Her name is ~. (自分で調べた表現方法を用いて発表してもよい。)
	福岡市教育委員会	Tenjin is a popular place in Fukuoka. Mentaiko is a popular food in Fukuoka. 例)festival Who is this? He is Ichiro. He can play baseball. writer, soccer player, teacher, singer, actor, etc. Do you know Yamagasa? No, what's that? It's a festival. When is it? It's in July.
	生津小学校	My partner is ~. He (She) is~. He (She) likes (has, lives in)~. His (Her) favorite ~is ~.
仕事	かほく市立小学校	[cook/teacher/bus driver/nurse/pilot/office worker/singer/baseball player] Excuse me. Are you a doctor?-Yes, I am. Me, too. No, I am not. Thank you. Good bye.
	生津小学校	What's your job? I'm a ~. doctor, cook, singer, police officer, driver, announcer, bus(taxi, truck)driver, hair dresser, baseball (tennis, soccer) player, nurse, pianist, businessman, businesswoman, carpenter What do you want to be? I want to be a ~. Why? Because~.
動作	かほく市立小学校	running / eating / drinking/ walking / studying / reading / writing / singing / sleeping / washing What are you doing? I'm ~ing/ [6年生] 1語+α(言えたら) eating lunch washing hands
	生津小学校	What are you doing? Guess what? I'm ~ing. You are ~ing. (running, writing, reading, singing, dancing, speaking, cooking, cleaning, playing ~, watching TV, ...)
旅行	土崎南小学校	Where do you want to go?-I want to go to America? England/Australia/France/Greece
	福岡市教育委員会	I want to go to Korea. Why? Because I want to eat Karubi America, Japan, Brazil, Korea, Australia, France, England
	生津小学校	Where do you want to go again? I want to go to ~. Kinkakuji-temple, shrine, castle, Japanese style hotel, deer park, Great Buddha, souvenir shop What do you want to buy? What countries do you know? How do you say "Indo" in English? It's India. Where is India? Do I have clean and safe water? What food is delicious? How much is the pencil? Where do you want to live? Why? Because, I want to watch soccer.

自分の考えを表現する	福岡市教育委員会	What do you want to do? I want to play soccer. sing a song, read a book, watch TV, play tennis, etc.
	生津小学校	What do you want to do? I want to~. sing a song, read a book, watch the ~, listen to music, enjoy~, play the ~, paint a picture, cook~ What song do you want to travel? How many friends want to sing songs?
記録に挑戦	生津小学校	How many ~ did you get? I got ~ points. How heavy is it? It's ~ grams. How much is this? It's ~yen. Too light. Close. Nearly. Just right. More expensive. Cheaper. Do your best. Keep going. Go. Go. Go. Good try. Fine. Great. Good Work. That's OK. ...
自己紹介	土崎南小学校	Where do you go to school?-I go to Tuchizaki Elementary School. What grade are you in?-I'm in the six grade.
	西海小学校	My name is Taro. I go to Nishiumi Elementary School. I am in the sixth grade. I live in Itoigawa. My birthday is January 2. I like Japanese. I want to be a baseball player.
	かほく市立小学校	Hello. My name is ~. I'm ~ years old. I live in ~. Nice to meet you. Nice to meet you, too.
	福岡市教育委員会	What's your name? Where are you from? What's your favorite~? When is your birthday?
	生津小学校	My name is ~. Nice to meet you. My favorite (sports, fruit etc) is ~. This is~. Classroom, subject etc. Do you like~? I think~. I like~. How about you? Do you have any comments?
クラブ	生津小学校	What clubs do you have? What clubs do you want to join? brass band, track and field, judo, kendo, tennis, soccer, baseball, softball, tea ceremony and ikebana, ...
生活	土崎南小学校	I got up at six in the morning. I ate rice, natto, and miso soup. I washed my face. I brushed my teeth.
	西海小学校	Where do you live?-I live in Itoigawa city. Where do you go to school?-I go to Nishiumi Elementary School.
	かほく市立小学校	I get up at 6. I wash my face. I eat lunch. I go home at 4. I do my homework at 6. I take a bath. I watch TV. I go to bed at 9.
	東海市教育委員会	Excuse me. May I ask you? Sure. What time do you eat breakfast?-I eat breakfast at~. What time do you take a bath?-I take a bath at~. Thank you. You're welcome. eat dinner/watch TV/ do your/my home work/ twenty/thirty/forty/fifty
出身	秋田市教育研究所	What's your blood type? Where are you from?
	土崎南小学校	Where are you from?-I am from America. Japan/ China/India/France/ Australasia/Great Britain/Russia/ Brazil/Canada/Italy/Korea/Spain/Egypt/ Singapore/Thailand/Germany
	西海小学校	Where are you from?-I am from America. Japan, China, France, Australia, Great Britain, India, Russia, Germany, Brazil, Canada, Italy, Korea, Spain
	かほく市立小学校	Where are you from?-I'm from ~. [Japan / China / Canada / France / Australia / Korea/ U.S.A / U.K...]
	東海市教育委員会	Excuse me. May I talk to you? I'm ~. What's your name? Where are you from?- I'm from Spain. Thank you. Have a nice trip. Korea/ India/China/USA/Australia/Canada/Russia/Brazil/Egypt/ Germany/France/U.K/Thailand/Mexico Thank you. Have a nice trip.

あいさつ	秋田市教育研究所	My name is~. What's your name? Nice to meet you. I like ~.
	土崎南小学校	How are you? I'm fine thank you. Nice to meet you. What is your name? My name is ~.
	西海小学校	Hello. Hi. Good morning. I'm fine, thank you. And you? I'm fine, too, thank you. Hello, ~. Nice to meet you, (too) . My name is ~.
数 (基数・序数)	西海小学校	What grade are you in?-I am in the forth grade. first, second, third, fourth, fifth, sixth What is the number?-It is one. 1~60 First, second, third, fourth, fifth, sixth, 31 <sup>st</sup>
	かほく市立小学校	How many ~? Zero to one hundred thousand million
	福岡市教育委員会	What time is it in New York? It's 8:30. Paris, Tokyo, Beijing, Rio de Janeiro, London, Sydney
日付	秋田市教育委員会	When's your birthday?-It's March 1 <sup>st</sup> . 1 <sup>st</sup> -31 <sup>st</sup>
	西海小学校	What is the date today?-It is October 1. When is your birthday?-It is January 13. January, February, march, April, May, June, July, August, September, October, November, December
	かほく市立小学校	[1 <sup>st</sup> ~ 31 <sup>st</sup> ] My birthday is September 2. When is your birthday?-My birthday is ~. New Year's Day The Doll's Festival Children's Day Marine Day When is Children's Day?-It's on May 5.(It's on ~.)
将来の夢	秋田市教育研究所	What's your dream?-My dream is to be a doctor. I want to be a nurse.
	土崎南小学校	What do you want to be when you grow up?-I want to be a teacher. Architect/ballet dancer/barber/baseball player/carpenter/car racer/doctor/comics illustrator/engineer/fire /fighter/pilot/newscaster/interpreter/lawyer /painter/flight attendant/writer/newspaper/reporter.
	西海小学校	What do you want to be when you grow up?-I want to be a teacher. Architect, ballet dancer, barber, baseball player, carpenter, car racer, doctor, teacher, etc.
	かほく市立小学校	What do you want to be?-I want to be a doctor. Good Luck. You have a nice dream.
	東海市教育委員会	Let's talk about our dreams. Sound good. What do you want to be in the future? I want to be a vet. Why do you want to be a vet? Because I like animals. singer/chef/teacher/soccer player/baseball player/taxi driver/tracks driver/artist/pianist/nurse/doctor/hair dresser/pilot/flight attendant/ police officer/fireman/ like singing/like playing soccer/like cooking/like children/like painting/want to help people/Because it's cool.
	福岡市教育委員会	What do you want to be? I want to be a teacher. doctor, nurse, baker, baseball player, actress, etc.
科目	西海小学校	How many classes do you have on Monday?-I have five classes on Monday. What are they? They are Japanese, social studies, science, math, and music.
好きなもの	秋田市教育研究所	What subject do you like?-I like Japanese.
	西海小学校	What subject (s) do you like?-I like Japanese. Japanese, social studies, mathematics, science, music, arts and crafts, homemaking (home economics) , P.E (health and physical education) , character copying, moral education
	かほく市立小学校	What food / drink do you like?-I like ~. [sandwich / toast / noodles / orange juice / tea] These fruits are from ~. Where are [fruits / vegetables]from? From ~. Are you hungry?-Yes, I am. Where are [fruits / vegetables] from? (絵カードをみせて) From ~. That's right.
	東海市教育委員会	Hello. I'm in ~. Please call me~. What subject do you like? Japanese/English/history/science/math/P.E./Homemaking/music

		Do you like~? Yes, I do. / No, I don't. chocolate/chios/biscuit/pudding/cake /jelly/ice cream/apple pie/milk shake/cola/cocoa
場所案内	秋田市教育研究所	Let's go to classroom. 1 <sup>st</sup> floor library gym.
	土崎南小学校	Go straight. Go back. Turn to the right. Turn to the left. You look the building.
	福岡市教育委員会	Excuse me. I want to go to the Fukuoka Yahoo Dome. How can I get there? Take the subway. Get off the subway at Tojinmachi Station.
	かほく市立小学校	What's this? It's a ~. [station / airport / bus stop] Where is the hospital? Go straight. Turn right [left]
発音	東海市教育委員会	blend/black/clap/close/fly/flag/fry/frog/brush/bring/cry/crab/drive/drink/skip /skate/smile/smoke/stand/stop/swim/snap/snake/twist/twelve/strike/split/rain/ May/play/tea/tree/key/boat/row/snow/suit/fruit/glue/blue/pie/tie/die/yellow/say/c heese/sleep/day/juice/drink/play/eat/wait/tree
フォニックス	東海市教育委員会	August/sausage/straw/cloud/house/cow/town/oil/boy/enjoy/pool/noon/spoon/zoo /good/cook/look/book/draw/brown/toy/car/star/park/arm/March/house/corn/fork/ north/sport/girl/bird/shirt/first/birthday/air/hair/chair/ear/hear/near
買い物	かほく市立小学校	S: May I help you? C: Two hamburgers, please. S: Here you are. C: How much [is it]? S: Two dollars. C: Here you are. S: Here's your change. * 6年生 S: Thank you. C: Thank you. S: Have a nice day. S: 店員 T:お客
	東海市教育委員会	Can I help you? Yes, I'm looking for~. What color are you looking for? Blue. How about this? How much is it? It's ~ dollars (yen) . I'll take it. red/white/black/green/brown/blue/yellow/orange/purple/pink/
学習内容について	かほく市立小学校	When do you study ~? I study ~ on ~. Where do you study ~? I study P.E. in the gym. [English→classroom] [music→music room] What day is it today?-It's [Monday].
身の回りの物	かほく市立小学校	old / new red / black big / small / tall / long What's this? Is it ~? big green red What am I?
行事	秋田市教育研究所	Merry Christmas. Happy New Year.
	土崎南小学校	What is this?-It is a big drums. flute/sandals/samurai/doll/yama or dashi/furibo/flute/small drum/drum stick/surigane(metaldrum)/yokata/hanten/ white tabi(White socks)/mikaeri doll/lantern/ Do you play the big drum in Tsuchizaki Port Festival? Yes, I play the big drum. Do you play the flute in Tuchizaki Port Festival? Yes, I play the flute. Making a Christmas tree, card and Ornaments.
	かほく市立小学校	ここでの英語表現は、カードや手紙に書くためのもので、黒板などに見本として書いて教える。 Thank you for. See you again. It was fun. I'm happy. I enjoyed class. I'm glad to meet you. (I wish you a merry Christmas!) to ~, from ~.
アルファベット	かほく市立小学校	A to Z 6年生は5年生より長い単語 ex) dictionary
電話対応	東海市教育委員会	Hello. This is~. Hi~. How are you? Fine, thank you. Let's go to the~. OK. Sounds good./ Sorry, I'm busy. Thank you. Thank you for calling. zoo/movie/library/park/swimming/pool/concert/soccer /game/fishing/ restaurant/toy store/department store

今井裕之（兵庫教育大学） 大場浩正（上越教育大学）

中田賀之（兵庫教育大学） 山森直人（鳴門教育大学）

## 1 調査目的

大韓民国（以下では、韓国）の初等英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムについての研究を目的として、2007年3月25日～28日の間、テグ広域市の複数の小学校、中学校、テグ教育大学校などを訪問し、小学校英語教育の現状、中学校への接続、大学での教員養成プログラム等について調査を行った。

## 2 韓国における初等英語教育の現状

韓国における小学校英語教育は、1982年から選択課外活動として導入され、1997年には、第7次教育課程のもと、3年次より開始された。訪問当時の2007年には、3、4年次で週1回、5、6年次で週2回の必修科目として、国定教科書に基づき実施されていた。訪問先のひとつである慶雲小学校（Kyunwoon Elementary school）は、研究開発指定学校であり、指導開始を1年次にする開発研究を実施しており、その後2008年度からは、1年次からの導入が始まることになった。これらの変更にもない、これまで以上に、教育プログラムや教材の改訂と充実、教員養成・研修の改善が求められているのが現状である。

程度／進度の差はあるが、拡大する初等英語教育とそれに伴う教師教育のあり方が課題となるのは、日本とも同様であり、社会的、政治的、教育的な環境の差異はあるものの、韓国の現状と課題を知ることで、日本が今後抱える初等英語教育の課題を推測することは可能であろう。以下では、調査の概略を述べた後、（1）韓国における小学校英語教育の現状、（2）教員養成・研修の現状と課題の順で調査報告を行う。

## 3 調査の概略

テグ広域市にある、テグ教育大学校（Daegu National University of Education）、梨谷小学校（Eegok elementary school）、慶雲小学校（Kyunwoon Elementary school）、東都中学校（Dongdo Junior High School）の4校を訪問し、小学校英語の授業観察とビデオ記録、大学における英語教員養成授業の観察、授業実践者達への面接による情報収集と討論、大学研究者からの情報収集と討論を行った。

訪問先ごとの調査概要（面談者及び面談概要、観察授業及びその概要など）は以下の通りである。

- テグ教育大学「初等英語教育法」全学必修科目授業観察  
授業観察後、授業者からの説明を受け、初等教員養成についての意見交換を行った。
- 梨谷小学校 5年生 ソロティーチング  
授業観察後、授業者（英語専科教員）と面談し、意見交換、情報収集を行った。
- 慶雲小学校 2年生 ティームティーチング  
授業観察後、授業者（クラス担任）と英語科の主任らと面談し、意見交換を行った。
- 東都中学校 1年生 外国人教師によるソロティーチング  
授業観察後、英語科主任および授業者と面談し、意見交換を行った。

## 4 韓国小学校英語教育プログラムの現状と課題

韓国は、教育熱の高い国家として知られているが、英語教育においてその熱がひとときわ高いことは、日本でも報道を通して知ることができ、またバトラー（2005）にも、英語塾チェーンの様子（英会話に留まらず、算数や理科などの教科指導を英語で行う英語塾のクラスがあり、そこではアメリカの小学校の教材を用いていることなど）が報告されている。一方で、そのような学校外教育費用の高さが社会問題にも発展している様子も記されている。子どもは母親に伴われて英語圏に留学し、父親は国内に留まって教育費用を稼いで送金することも珍しくなく、そのような父親が「キログニアッパ（雁のお父さん）」「Penguin Dad」などと呼ばれるなどはその一例である。このことは、小学校前に待ち構える塾の送迎車からも、直接話した保護者たちの言葉からもうかがい知ることができた。

このように、公教育ばかりでなく、それ以外の塾などでの教育の両面において熱心に英語教育が進められているため、小学校での授業参観による調査分析では、韓国の初等英語教育の実態を捉えきれていないことになるかもしれないが、



今回行った授業観察および実践者への面談から分かったことを考察したい。

#### 4. 1. 小学校の授業観察から

今回訪問した慶雲小学校と梨谷小学校では、各々2年生と5年生の授業を観察記録した。また、東都中学校1年生の授業も観察する機会を得て、小中接続についても話を聞くことができた。

##### 小学校低学年

慶雲小学校は、研究開発学校に指定されており、現在、全国的に3年次から実施されている英語教育を、開始時期を早めて1年次開始にするか、3年次開始のまま授業時間数を週1時間から2時間に増やすかのいずれが良いかを実験していた。研究開発のために、教師たちは1、2年生用の教科書を作成し、それに基づいて授業を実施しているほか、“English Zone”（写真1、2参照）と名づけられた英語専用教室および英語科教員室を整備している。また、2007年1月には、児童が校内で3日間英語づきの生活をする英語合宿（Kyungwoon Winter English Camp）を企画・実施している。

観察した2年生の授業は、担任とALTによるチームティーチングで、担任によるソロティーチングを主体とする韓国では、一般的ではない形態の授業であったが、これも研究開発学校ゆえと思われる。英語学習が始まってまだ間もない2年生たちだったが、ALTと担任が共に英語主体で進める、TATE (Teaching English Through English)の方針を実践した授業であった。「あいさつ (Good morning, good afternoon, good evening, good night)」をテーマとし、ペープサートを用いた視覚情報豊かなスキットや、カードゲームなどを用いた音声中心での授業だった。言語の使用状況（いつ、だれに、なぜ表現するのか）を教師たちがスキットを演じて示し、子どもたちに状況に合わせて適切なあいさつ表現をクラス全体で発話させた後、ペアでのカードゲームにより、言語形式の定着を図るため繰り返し発話させる活動を行っていた。あいさつ表現なので、そもそも文法や語彙の説明は不要であるが、「言語の使用状況」の提示から「言語形式」「言語の意味」に気づかせ、理解させる過程を採っていた点は、小学校英語、特に低学年児童の発達に合わせた指導方法である。



写真1,2 慶雲小学校のEnglish Zone。授業用教室スペース（右）と生活シミュレーションができるスペース（左）が一体になっている。視聴覚機器も十分に備えられており、視聴覚教材を用いた授業がスムーズに行える。

##### 小学校高学年

梨谷小学校は、慶雲小学校のように研究開発を受けていない一般の公立小学校である。同校には2名の英語専科教員が配属されており、専科教員がすべての英語授業（3-6年）を担当している。観察した授業は、文部省指定教科書を用いた5年生の授業で、学習項目は「曜日」と「教科名」であった。担当のKim Mekyong（金 美京）先生は、TATEを実践し、一部ゲームのルール説明や英語学習方略指導を除いて、授業のほとんどを英語で行った。教科書(Lesson 2: What day is it today?)と付属のCD-ROMを用いて、モデルダイアログに沿った会話、歌などの活動を行った後、同教師が考案したゲーム活動を取り入れた授業を展開した。

この授業では、授業進行が英語であり、そのやり取りの中での生徒たちの反応には、児童たちの英語力が、教科書の指導内容を超えていることを示す発言が何度も見られた。総じて教師の指示に従順な児童たちだったが、例えば、ある場面で教師が Do you like Sunday? Yes! というやり取りの後に、Do you like Monday? と続けて聞くと、一斉に No! と答えて笑いが起き、教師も I don't like Monday, too.と返すなど、型にはまらない真正なやり取りが出来ていた。一部の児童

には、教師の問いに答えた後に、How about you?と問い返す場面も見られた。このようなことから、児童たちの英語力が教科書の指導内容のみで形成されたものではないことが伺われた。また、教師もその指導内容により高度なものを盛り込む様子が見られた。活動自体は歌、ゲーム、会話が中心であったが、高学年の発達段階を意識してか、例えば、歌を歌うときにジェスチャーをつけていたのだが、歌詞の内容を身体で表現することの重要性を強調し意義づけする、英語の学習方略指導を行うことで「単なる歌や踊り」になってしまうことを避けていたように思われた。

## 中学1年

東都中学校1年生の英語授業を観察する機会を得たが、その指導者は、教科担任の韓国人教師ではなく、日本でいうALT、アメリカ系韓国人がソロティーチングで担当していた。教科書を中心に進める他の授業と異なり、このクラスでは、オーラル中心の授業展開であった。グループごとに「おみせ」をつくり、その営業場所や時間、代表的なメニュー／商品と価格などを、おみせの絵を見せながらクラス全体に発表し、教師からHow much is...?等の質問を受けて答える活動が行われた。授業の後半では、となりのグループのお店で買った物に問題があったため、クレームの手紙を書く活動が行われた。中学1年生の活動としては、高度な課題のように思われたが、生徒たちは比較的短時間でノート一杯の手紙を書き、それを読み上げて発表していたことには驚かされた。もっとも、同行したKim教授も「これは公教育での英語学習の成果を超えている。」と驚いていたので、観察したクラスは習熟度が他と比べて著しく高かったものと思われる。

小学校英語と中学校英語の接続／連携については、残念ながら授業の担当者も生徒たちの習熟度も典型性がなかったもので、授業観察や面談からは伺い知ることはできなかった。生徒たちが使用している教科書を一見した印象では、1年次の教科書が日本の中学2年後半から3年生の内容レベルであり、その接続については、もう既に第7次教育課程で最初から学んだ学習者が高校卒業している現在では、少なくとも教科書の指導内容については、小中間で接続に配慮がなされ、無理や無駄のないものになっている印象を受けた。

### 4. 2. 授業分析から

今回記録した3つの授業のうち、2年生のティームティーチング授業と5年生の教科書に沿ったスタンダードなソロティーチングの授業を研究資料として、授業分析研究、教師の実践的思考に関する研究を行い、2007年9月8日にThe 1st Korea English Teachers Associations Joint Conference & 2007 ETAK International Conferenceにおいて、以下の2本の研究発表を行った。

- 発表1：Characterization of Two EFL Classrooms at the Primary Education Level in Korea
- 発表2：A Comparative Analysis of EFL Teachers' Beliefs on Classroom Activities

授業ビデオを、COLT (Communicative Orientation of Language Teaching) observation scheme を用いて分析し、授業の談話的特徴を分析した「発表1」と、各々の授業の特徴を維持しつつ15分に編集したビデオをcueに使い、日本人教師を対象に質問紙調査を行い、日本人教師の実践的思考を引き出して分析した「発表2」について、上記学会で招待発表を行った。「発表1」では、与えられた教材が必ずしもコミュニケーションを活性化させるようなものではないにも関わらず、教師たちが、それらの教材と児童たち間の“distance”（親密度）を近づけようと努力して授業を行っている点、授業における英語使用の“density”（相対的比率の高さ）は、いずれも高いものの、2年生よりもさらに5年生の方が高くなることなどが明らかになった。「発表2」では、そのような特徴を持った授業を観察した日本人教師たちが（小学校教員、中学校英語教員、教員養成中の大学生）、どのようにその授業を観て言語化するかを調査した。その結果、いくつかの差異、特徴が明らかになった。中学校教員と小学校教員の思考背景の差、現職教員と養成課程在籍中の学生の思考の深さの差、研究参加者全体に観られた「コミュニケーション活動」についての考え方の特徴の3点について議論した。特に「コミュニケーション活動」に対する考え方については、小学校、中学校の教員ともに、児童の発達段階や学習の過程に関係なく、常に“real, natural and personal”な真正なものでなくてはならないと考える傾向が見られ、このことは教員養成の課題のひとつを提議することになった。

## 5 教員養成・研修プログラムの現状と課題

### 5. 1. 教員養成課程標準化の試み

Kim (2007)では、韓国11国立大学における小学校英語教員養成の現状分析をふまえ、教員養成プログラムの標準化

を目指すための課題検討がなされた。韓国では、11国立大学がほぼ専有的に小学校英語教員養成を行ってきたが、それぞれの大学が個別に課程の開発を行っており、水準化に向かっていないことを批判的に反省し、小学校英語指導者の資質や英語教員養成カリキュラムに関する先行研究、韓国11大学の養成課程の内容の調査（授業担当者への質問紙、面接等）を通して、プログラムの開発、提案を行っている。提案された小学校英語教員養成プログラムは、目的、シラバス、教科書、CD-ROMなど網羅的、総合的な提案である。韓国の教員養成課程を持つ大学ほぼすべてを対象とした調査に基づく研究であることを考えると、非常に貴重な研究提案であると言える。

韓国の文部省は、2006年10月に、英語教育改革アクションプランを発表している。Kim (2007)によれば、その目的は以下の3点であった。

To secure qualified English teachers

To enhance practical English education

To reduce gap in English-learning opportunities between urban and rural areas

これらの課題のうち、少なくとも最初のふたつは、現在の日本の英語教育においても顕在化しつつある問題である。また文部省は、以下のサブプランを提示している。

#### An Action Sub-Plan for Plan 1

To improve elementary English teacher education programs so that in 5 years all graduates from elementary teacher education institutes will be able to teach English classes through English

#### An Action Sub-Plan for Plan 2

To revise the national curriculum for enhancement of elementary English Education (Experiments on early start at 50 schools/on class hour increase at 16 schools)

Elementary English teachers' professionalism/Programs for developing elementary English teachers' professionalism

Kim (2007)で言及された研究は、Plan1のサブプランに沿うものであり、Plan2のサブプランによる50の研究開発学校のひとつが慶雲小学校であり、小学校1年次からの英語導入の結論を導いた。開発された標準教育課程の目的とシラバス、三部構成の教科書（理論編、言語技能知識編、教室への応用編）、CD-ROMの内容については、Kim et al. (in press)を待たねばならない。ただし、詳細版は既に韓国語で韓国文部省に提出されているもので428ページに及ぶものである。

#### 5. 2. 大学での教員養成授業の観察から

テグ教育大学において、Kim教授の「初等英語教育法 (Elementary English Education I)」の授業を観察した。韓国では、小学校英語指導法の授業が必修であり、今回観察した授業は、コンピューターサイエンス専攻の学生を対象とした40名程度のクラスだった。小学校英語教科書のLesson 7 (She's tall)を題材にグループごとに指導案をつくり、ミニ模擬授業を行っていた。各グループは4人組で、Lessonを構成する4つのセクションそれぞれを4人が分担して模擬授業を実施させるという内容であった。1人あたりおおよそ5-10分程度の時間配分であり、学生はすべて英語を使って模擬授業を展開していた。模擬授業において教師役をつとめる学生の積極的な英語使用や、教材・活動の工夫に満ちた準備にも感心させられたが、教師役学生の指示やリズム・歌に楽しそうにのっていた児童役である、その他学生らの積極的な模擬授業への参加にも驚かされた。模擬授業後には、学生による討論がおこなわれ、その後、授業担当教授から英語で指導、助言（学生が用いた英語表現や発音・イントネーション、英語による活動の内容構成、クラスルームマネジメントの方法等）がなされていた。模擬授業を観察した学生らはあらかじめ配布された相互評価シートに、観察した模擬授業を(1)Classroom Management, (2)Classroom English, (3)Materialの観点から3段階(1:改善が必要, 2:平均的, 3:とてもよい)で評価するとともに、自由記述欄にコメントを書くことになっている。この相互評価シートは後に模擬授業を実施した学生個人に渡される。模擬授業を行った学生はそれをもとに自己評価を記述し、それを授業担当教授に渡すことになっている。このように個と集団の評価が相互作用する仕組みになっている。学生たちは、2, 3年時に英語指導法に関する授業を2科目履修することになる。このような演習を含む授業を英語科学生のみではなく、全学生を対象に必修化するというだけでも大変というほかないが、韓国では現在も継続的に、小学校英語の教師教育・教員養成の見直しに取

り組んでいる。

グローバル社会の名の下、教育にまでもグローバルスタンダードを求めることは賢明ではなく、それは英語教育においても言えることであろう。しかしローカルな取り組みの結果として生まれる他者との共通性はユニバーサルあるいはそれに向かう方針として生かされるべきではないかとも考える。韓国のカリキュラム標準化の試み、英語授業におけるさまざまな工夫などを参考に、日本での取り組みを問い直す中で生まれてくる共通性や更新／改善に留意して研究を継続することが求められるのではないだろうか。

#### 参考文献

- バトラー後藤裕子 (2005). 『日本の小学校英語を考える アジアの視点からの検証と提言』東京：三省堂
- Imai, H., Ohba, H., Nakata, Y., Yamamori, N., Kim, Y., Sugino, N., Koga, Y., and Kawashima, H. (2007). A Comparative Analysis of EFL Teachers' Beliefs on Classroom Activities. *Emerging Issues and Challenges in English Education: The 1<sup>st</sup> Korea English Teachers Associations Joint Conference & 2007 ETAK International Conference*. The English Teachers Association in Korea
- Kim, Y. (2007). Development of an Elementary English Teacher Education Program. *Seminar Program and Abstract. The first Oxford-Kobe English Education seminar: Understanding the Language Classroom and New Directions for Language Teaching Research*. St. Catherine's College (University of Oxford) Kobe, Japan
- Kim, Y. Kim, J., Oh, M., Park, S. and Sun, K. (in press) Development of an Elementary English Teacher Education Program. In Nakata, Y. et al. (eds.) *Researching Language Teaching and Learning: an Integration of Practice and Theory*. (pp. 181-200) Oxfordshire: Peter Lang
- Sugino, N., Koga, Y., Kawashima, H., Ohba, H., Nakata, Y., Yamamori, N., Kim, Y., and Imai, H. (2007). Characterization of Two EFL Classrooms at the Primary Education Level in Korea. *Emerging Issues and Challenges in English Education: The 1<sup>st</sup> Korea English Teachers Associations Joint Conference & 2007 ETAK International Conference*. The English Teachers Association in Korea

はじめに

本報告は、文部科学省教育課程部会 外国語専門部会（第9回）議事録・配付資料（平成17年）「中国における小学校英語教育の現状と課題」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/05120501/007/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/05120501/007/001.htm)を参考にその枠組みを概括するとともに、北京首都師範大学初等教育学部周琳(Zhou Lin)氏とのインタビュー、北京師範大学実験小学（附属小学校）及び海淀区実験校の事例を基に報告するものである。

## I. 小学校英語の必修化に関する背景、経緯

### （1）教育課程改革、教育課程の変遷、現行の教育課程

中華人民共和国の初等中等教育の教育課程は、これまで国家が定める「教学計画」（開設科目・時数配分等に関するもの）と「教学大綱」（各教科の目的・内容・方法に関するもの）の2つによって規定されてきた。それが、九年制義務教育として「九年義務教育全日制小学・初級中学課程方案」が1992年公布され、1993年度より学年進行で実施されている。これは、「課程計画」（従来の教学計画にあたるもの）と、「教学大綱」から構成されている。学校における教育課程は従来は教科のみで構成されていたが、この「九年義務教育全日制小学・初級中学課程方案」では、教科と課外活動から構成され、「実践的な道徳教育の強化」「地方裁量の課程の設定」など教育課程の多様化と弾力化を可能とした。

最終的には2001年に、教育課程の改訂が行われ「基礎教育課程改革綱要（施行）」が公表された。これは、2001年時は、試行案として提案され一部の地域で実験的試行（義務教育段階では2001年秋から全国38の県・市で、後期中等教育段階では2000年からの国内の10省・直轄市で）、その後の評価と調整を経て、2005年9月から全国実施となった。

### （2）小学校における英語の取り扱いの経緯、必修化されるまでの経緯

中国における小学校の英語教育導入は1978年～80年である。学校による条件の差があったために条件整備のなされている小学校では、小学校第3学年から英語教育を実施し、条件整備の十分でない学校では、初級中学1年（小学校6年生にあたる）から開始された。そのねらいは「基本的発音と文法をマスターし、2,800または2,200の単語と慣用句をマスターし、辞書を使って中等レベルの難度の文章を読解でき、一定程度の聞き・話し・書き・翻訳する能力を備える」であった。このねらいは難度が高すぎたため、多くの地域で実施がなされなかった。しかし、いわゆる大都市部では、英語に対するニーズが高かったため実施されていた。そして、2001年の新課程段階的实施により初等英語教育をカリキュラムに正式に入れ、一部地域から段階的に導入し、2004年までに全国実施することとした。その背景には、2008年北京オリンピック開催も大きく影響したと言われている。

## II. 教育課程、目標、内容及び指導方法

### （1）開始学年

公式には、中国における小学校での英語教育は、第3学年から開始することとなっている。しかし地域の多様性のために、地域差が激しいと言われている。北京市、上海市、天津市などの大都市では、小学1年から開始しており、逆に地域によっては、公式開始学年の小学校第3学年からの地域や農村部、少数民族地域では、条件整備が十分でなく実施に至っていない地域もあると言われている。

### （2）授業形態及び授業時数

授業形態は、教科書中心の一斉授業でいわゆる伝統的な授業形態といえる。訪問観察した2校（北京師範大学付属小学校、及び海淀区実験校）では、各学校で選択した教科書を参考にしながら、各学校で補助教材を作成しパワーポイントを活用した授業を行っていた。担当教員とのインタビューより、訪問した両校では全ての教員にコンピュータが支給され、各教室にプロジェクターが設置されているなど、非常に条件が整備された学校である。公式にも視聴覚教材を効果的に利用して、授業を進めることが奨励されているが、未だその条件整備が地域まで行き届いていないといえるだろうということであった。

英語の学習時間は、ショート・タイムといわれるモジュール形式（40分を分割して実施）の授業を週複数回（週4回以上）実施するとともに40分の授業時間を組み合わせて実施することとしている。教育課程の6～8%を当てるとしており、学校や地域の実態に応じて柔軟に対応することが可能になっている。また、この他にも様々な行事や課

外に補習授業等を実施している。

授業担当者は、訪問した2校においては、基本的に専科教員による授業であった。これは中国では、全ての教科が基本的に専科教員によって行われるという前提によるものである。ただし農村地域では、一人の教員が全ての授業を担当することも少なくないと言われている。

### (3) 授業方法

小学校入門段階では、「見る」「聞く」「話す」を中心とした学習活動を展開し高学年では中学年での学習活動を基礎に初歩的な読み・書きも導入する。このために参観した授業のようにパワーポイントやその他の視聴覚教材が有効に活用されている。また、参観した授業では、中国人教師による英語での授業が中心であり、「課程標準」にも最低限使用されるべき教室英語の事例が挙げられている。北京師範大学実験（付属）小学校では、ネイティブ・スピーカーを採用してネイティブ・スピーカーによる単独の授業も設定されていたが、国費や公費によるネイティブ・スピーカーを採用する方針とうよりも学校単位での採用が行われているということであった。

### (4) 小学校英語の教育目標

新教育課程（「全日制義務教育 普通高級中学英語課程標準（実験稿）」以下「課程標準」）では、英語教育を12年間の一貫した指導体系として組み立てている（但し義務教育は最初の9年間）。それによると義務教育機関の初等中等教育段階の英語教育のねらいは次の通りである。

- 児童・生徒の英語学習への興味を引き出し、育て、児童・生徒が自己信頼感を確立させて、のぞましい学習習慣と有効な学習ストラテジーを身につけるようにし、自主的学習能力と協力精神を発達させるようにする。
- 児童・生徒が英語についての一定の基礎知識と聞き・話し・読み・書く技能をマスターし、一定の総合的な言語運用能力を形成するようにする。
- 児童・生徒の観察・記憶・思考・想像力と創造刷新の精神を育てる。
- 児童・生徒が世界を理解し、中国文化と西欧文化の差異を理解し、視野を広げ、愛国主義精神を育て、健康な人生観を形成し、自分たちの生涯学習のための望ましい基礎を固めるようにする。

また、この「課程標準」によれば、英語教育の課程目標は、全体の目標を「総合的な言語運用能力の育成」としており、総合的な言語運用能力を構成し支える5つの要素として①言語技能（聞く・話す・読む・書くの基本4技能）、②言語知識（英語という言語についての基礎知識、すなわち発音・語彙・文（語）法・功能・話題）、③情感態度（興味・動機・自信・意志・協力精神から祖国意識・国際視野にまで及ぶもの）、④学習ストラテジー（認知・自制（律）・コミュニケーション・資源利用に関するストラテジー）、⑤文化意識（異文化に関する知識・理解・異文化間の交流意識と能力）を挙げている。

この5つの要素に基づいて12年間及び大学での英語教育の目標が9段階に分かれている。初等教育段階では第3、4学年で1級、5、6学年で2級を目指すこととされ、初級中学卒業時が5級（中学校3年生）、高級中学卒業時が8級とされている。9級は、大学での達成レベルである。

### (5) 小学校英語の教育内容（語彙数、読み書き、中学校との接続を含む）

小学校英語の教育目標及び内容については、文部科学省教育課程部会 外国語専門部会（第9回）議事録・配付資料（平成17年）「中国における小学校英語教育の現状と課題」がよくまとめている（表1）。これをみると、具体的に歌や詩歌（チャンツにあたるもの）の数が提案されていたり、アニメーションの視聴時間が提案されていたりと比較的具体的な目標・内容が提示されていることが分かる。一方で、総語彙数については具体的な例は挙げられていないものの600～700程度としている。

表1. 中学校の小学校英語教育目標（文部科学省2004より）

#### 小学校英語教育目標

級別	目標類別	具体的な目標
----	------	--------

一級	聞く行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞き取った単語を識別したり、カードや実物を指したりできる。</li> <li>・教員からの指示を聞いて反応ができる。</li> <li>・指示に従って、絵やカードを指し、色を塗り、絵を描き、体を動かし、手作業などができる。</li> <li>・カードや動作からのヒントを通じて、短い物語を聞いて理解し、反応できる。</li> </ul>
	話す歌う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テープを聴き、復唱することができる。</li> <li>・互いに挨拶ができる。</li> <li>・簡単な自己紹介、例えば、名前、年齢等を話すことができる。</li> <li>・簡単な感情や感覚、例えば、好き嫌い等の表現ができる。</li> <li>・表現を通して、意味を推測したり、言葉を発したりできる。</li> <li>・簡単な英語の歌 15～20 曲を歌い、詩歌 15～20 首を朗唱することができる。</li> <li>・絵や文を見て単語や短い文（センテンス）を話すことができる。</li> </ul>
	遊ぶ演じる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語でゲームができ、その中でコミュニケーションをとることができる。</li> <li>・ロールプレイができる。</li> <li>・英語で歌を歌ったり、簡単な童謡劇、例えば「赤ずきん」などを演じることができる。</li> </ul>
	読む書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵を見て単語を覚えることができる。</li> <li>・実物（絵）を指して読む形で、すでに学習した単語を認知できる。</li> <li>・絵の助けを借りながら、短い物語を読むことができる。</li> <li>・単語や文（センテンス）を正しく書くことができる。</li> </ul>
	視聴する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な英語のアニメーションや一級レベルの教育番組を見て理解できる。視聴時間は各学年 10 時間以上（毎週平均 20～25 分）とする。</li> </ul>
二級	聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵や手振りの助けを借りながら、ゆっくりかつ自然な口調で話された言葉や録音教材を聞いて理解できる。</li> <li>・簡単な挿絵の入った物語を聞いて理解できる。</li> <li>・教室の活動の中での簡単な質問を聞いて理解できる。</li> <li>・よく使われる指示や要求を聞いて適切に応じることができる。</li> </ul>
	話す	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口頭表現において、正しい発音、イントネーションで話すことができる。</li> <li>・よく知っている人や家族の様子について、簡単な会話ができる。</li> <li>・日常の基本的なやりとり、例えば、出会いと別れの挨拶、お礼、謝りの表現等ができる。</li> <li>・教員の助けを借りて、短い物語を話すことができる。</li> </ul>
	読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>・習った単語を読むことができる。</li> <li>・発音のルールに基づき、簡単な単語を読むことができる。</li> <li>・教材の中の簡単な要求或いは指示を読んで理解できる。</li> <li>・グリーティング・カードなどの簡単なメッセージを読んで理解できる。</li> <li>・絵の助けによって簡単な物語や短文を理解でき、意味のまとまりごとに読む習慣がついている。</li> <li>・学習した物語や短文を正確に朗読できる。</li> </ul>
	書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指示に基づき、絵や実物などに対して簡単に短いタイトルや説明を書くことができる。</li> <li>・例文にならってセンテンスを書くことができる。</li> <li>・簡単な挨拶を書くことができる。</li> <li>・センテンスを書くとき、大文字、小文字、句読点等を正しく使用できる。</li> </ul>
	遊ぶ、演じる、 視聴する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指示に基づき、英語でゲームをすることができる。</li> <li>・教員の助けを借りて、物語や童謡劇を演じることができる。</li> <li>・簡単な詩歌 30～40 首（一級での要求を含む）を朗唱することができる。</li> <li>・英語の歌を 30～40 曲歌うことができる。</li> <li>・英語のアニメーションと二級レベルの英語の教育番組を見て理解することができ、視聴時間は毎学期 10 時間以上（週平均して 20～25 分以上）とする。</li> </ul>

表注 1： 小学校の英語の話題は、数字、色、時間、天気、食べ物、服装、玩具、動植物、身体、個人の状況、家庭、学校、友人、文化・体育活動、祝祭日などを含む。

表注 2： 小学校段階の児童が触れる語彙は（上記の）話題の範囲を主とし、総量は 600～700 単語に抑える。本教育要求は、語彙については具体的に規定しない。

#### (6) 子どもの能力、態度の評価方法

子どもの学習評価については、基本方針として形成的評価をすることが求められている。試験は実施するものの、点数だけによる評価を行わず、記述による評価を行うものとしている。学年別にみると、3・4年生では基本的に筆記試験は行わず、5・6年生では口頭試験と筆記試験を結合させた方法を行うものとする。また、ポートフォリオや自己評価、相互評価など多様な手法による評価を行うものとしている。

一方で、いわゆる「英語力」と言われるものへの保護者による期待があるのは事実であり、今後「英語検定制度」等の開発も検討されているとのことである。現在はPETSといわれる英語テストも試行されている。

### III. 必修化に伴う条件整備について

#### III-1. 教科書、教材

従来は、いわゆる国定教科書が1種類あるだけであったが、1980年代後半に検定制度が確立され、現在は20～30種類あると言われている。採択については、小学校については県レベルの教育行政機関が、初級中学については省、地区が行うものとされている。

教科書の作成については、①外国から輸入したもの、②外国の専門家と協同作成、③外国の教科書を中国向けに改訂したもの、④中国独自に編集したものなどがある。今回訪問した学校の教科書については、①及び④のパターンのものを利用していた。教科書にはCD-ROMや視聴覚教材など様々な補助教材があり、補助教材の充実という国の方針に沿った教材開発が行われている。このほかにも、ペンマンシップのためのワークシートや家庭学習を可能にする教材など地域の書店で様々な準拠教材が販売されている。

教科書そのものは有償が原則であったが、農村部の貧困地域への教育の条件整備として、無償配付も試行され将来的には無償配付も検討しているということであった。

#### III-2. 教員、指導体制

##### (1) 小学校の教員養成及び採用の概要（教員になるまでの経緯）

1993年には小学校教員資格は、中等師範学校（後期中等教育3～4年）卒業以上とされてきたが、実際には師範大学において、初等教育学部卒業者が中心となっている。この制度からすると、いわゆる短期大学卒業程度の資格で小学校教員になっていたものが、現在は4年生大学卒業でないと実際の小学校教員になるのは難しくなっているといわれている。これは英語担当教員についても同様である。今回訪問した首都師範大学初等教育学部でも英語教育専攻卒業者が増加することが予想され、小学校教員の4年生大学卒業者は今後も増加するであろう。一方で、既に小学校教員となっているものも、週末や夜間に「成人教育」を受けて大学専科や大学本科（英語専攻）の学歴を取得するようになってきている。このほかにも現職教員研修として、海外への語学研修やTESOLの資格を取得するプログラムなども用意されているが、その応募・採択については地域差が大きいという印象をもっているとのことであった。

##### (2) ネイティブ・スピーカーの確保、配置、ALTの採用等の現状、地域人材、民間指導者等の活用

ネイティブ・スピーカーの採用については、市や区などでは行っていないということであった。ただし学校単位での採用をしている学校もあるということであるが、財源については本調査では詳細は得られなかった。また、地域人材の活用についてはほとんど行われていないということであった。

### IV. その他：学外学習について

本調査における関係者とのインタビューにおいて、小学校英語だけにとどまらず小学校段階での学外学習について大変興味深い情報を得た。この事例は北京市市においてのみとも解釈できるが、大都市では同様の状況だということである。児童の多くが週末などを利用して、いわゆる塾のようなものに通いその際の塾講師は高等学校教員などが行っているとのことである。また、大学生による家庭教師も盛んに行われている。これはより良い中学校へ進むための受験対策なのだそうである。

### V. 観察授業の感想



本調査では2校において複数の授業観察を行ったが、印象的であったのは学校設備の充実である。各教室にプロジェクターを含めた情報機器が整備されており、教員に一台のコンピュータが支給されているとのことであった。これは全ての学校で整備されているというわけではなく、大都市部でも一部の学校（実験学校など）においてのみということであった。授業については、教師は教科書や補助教材を活用し、オリジナルの教具・教材を開発しながら授業を進めている。授業スタイルは教師主導型で、文型練習を多く取り入れた一斉授業であった。児童の英語レベルについては、実際に1つ目の学校で授業中にゲストとして子どもとやりとりをする機会があったのみであるため、具体的な能力について記述することは困難だが、当該授業で学習している定型表現ではうまくやりとりができるものの、即興的なやりとりには不安が残った印象である（学習内容は『年中行事』）。しかし、2つめの学校では、機械的な文型練習の後に行われた活動で、児童は自分の考えや意見を理由を含めて多く発言することができていた（学習内容は『オリンピックと関連させた得意なスポーツ』）。発表者の一人は非常に文法的にも内容的にもレベルの高いスピーチであった。概して、今回の参観した授業における児童の英語レベルは高いが、同時に英語のバラツキがあるという印象も受けた。

教師については、担当教師の資格は短大相当資格を取得し成人教育（週末・夜間授業）で大学専科や大学本科（英語専攻）の学歴を得た教師と、首都師範大学初等教育学部（4年生大学）卒業生であった。両者に英語力の違いはあったものの、どちらもほぼ全ての授業で教師は英語で授業を進めていた。発音もいわゆる標準的なものであったといえる。

## VI. 成果と課題

最後に、小学校に英語教育を導入したことによる成果及び課題についてインタビューを基に記述する。

中国では、経済発展やオリンピック開催をめざして英語教育の導入が急速に具体的且つ組織的なかたちで行われてきた。その結果は社会や保護者からは高評価を得ていると言われている。これは、塾や学外学習への積極的に支援というかたちでもあらわれている。具体的な成果としての英語力についても成果調査が行われると聞いている。

一方で、都市部に見られる過度の競争及び都市部と農村部とのギャップが課題であると言われている。一部の都市部では、早期英語教育が加熱し、就学前学習も盛んに行われているとのことである。これにともなう中学校段階での英語力のバラツキ（二分化）は大きな問題となっている。また、今回訪問したような都市部の学校環境整備と農村部の状況には大きな差があるとのことである。この点についても、長期的視点で計画的に改善していく予定であると言われている。

英語力を教育の主要な要素の一つとして強調している中国で、今後どのような取り組みがなされていくのか、環境整備をしていくのか、我々も継続的に状況を調査していく必要がある。

## 0. はじめに

### (1) 調査目的

本研究は、台湾の初等教育段階における英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムに関する調査、情報収集を目的として実施した。

(2) 調査者 高橋美由紀（兵庫教育大学）

### (3) 調査日程

2006年 12月28日 百齡國民小學校  
29日 永安國民小學校/ 百大名師語文文理補習班  
30日 康軒文教事業/ 国立編訳館教科書資料中心  
31日 彩虹兒童文化事業有限公司（大衆優童教育機構）

### (4) 調査概略

訪問先ごとの調査概要（面談者及び面談概要、観察授業及びその概要など）

## 1. 言語科目としての英語

台湾の台北市や高雄市、新竹市、台中県、彰化県、南投県、台南県、台東県等では、児童は、小学校1年生から言語科目として、国語（北京語）が週5時限（1時限＝40分）、「郷土語」「母語」が週1時限、英語が週2時限を学習している。したがって、英語は、年間57時間程度導入されている。そして、小学校英語教育の目標は、小学校1・2年生はlisteningとspeaking、3・4年生はreadingとwriting、5・6年生は応用力を育成することとなっている。

小学校1・2年生の教材は主に絵本などを使用して、「英語を使用して遊ぶこと」「英語に親しませること」を学習の中心に行っている。また、文字指導は1年生から導入している。

台北市が公表した小学校英語カリキュラムでは、「卒業までに英語の児童書100冊を読む」ことが挙げられ、また、児童の能力別にクラスが分かれており、台北市内の約30校の中・高学年は3段階の能力別クラスがある。

## 2. 台湾の小学校英語教育

台湾における國民小学校（以下小学校）の英語教育導入は、1993年に課程標準<sup>1</sup>が改訂された頃から始まった。この時の英語教育は、教科ではなく、朝の会やホームルーム等の子ども達の日常生活の中で導入され、徐々に盛んになった。教科としての英語教育は、1997年7月に19の実験校にて第3学年を対象に導入されたのがはじめてであるが、この頃から、各地方教育局<sup>2</sup>の管轄内において全ての小学校で、高学年から、または、中学年から英語教育が導入され始めた<sup>3</sup>。

2001年に教育部は「國民中小學九年一貫課程暫行綱要」を施行し、小学校英語教育は第5学年及び第6学年を対象に必修となり、週2コマ（1コマ＝40分）導入された。その後、2005年には第3学年から必修となった（台湾の学暦は9月が新学期である。）（相川・林2004:97-98）。

台湾の小学校における言語教育は、国語（中国語）、英語、郷土言語（民族の母語）である。英語教育の目的は、①児童・生徒の基本的な英語コミュニケーション能力を育てること、②児童・生徒の英語学習の興味と学習方法を育てること、③児童・生徒の本国と外国文化の風俗習慣に対する認識深め、両者を比べ、その文化的差異を尊重できるようにすること、と言及されている。そして、小学校段階では、オーラル（リスニング・スピーキング）では300語、ライティングでは180語を習得すべきとされている（相川2004:112-113, Lin 2006.12.28）。

指導方法は、テキスト、音声教材、テープ、ビデオ、コンピュータ、マルチメディア、本、図などの教材を使用して、児童に自然な方法で英語に親しませることとなっており、日本と同様、歌やチャンツ、簡単な物語や漫画などで、児童のリスニング・スピーキング能力を育成することが求められている。また、文字指導として、小学校段階においては、音と綴り字を結ぶフォニックス指導を行っている。そして、機械的な暗記によるのではなく、実際に英語を使用することにより、英語学習への興味関心と効果を高めるようにすることが目指されている。

<sup>1</sup> 日本の学習指導要領にあたる。

<sup>2</sup> 日本の教育委員会にあたる。

<sup>3</sup> 小学校で教科としての英語教育は、高雄市は77の全小学校で高学年に導入された。一方、台北市は19の実験校にて小学校3年生から導入された。

### 3. 台北市の小学校英語教育

グローバル社会での人材育成と国家都市としての発展していくために、台北市の小学校英語教育は、1993年に指導できる教員や環境が整った学校から高学年を対象に英語が導入された。そして、1997年には19の小学校を対象として1年間の試験的な試みがなされ、1998年から市内の全小学校の第3学年に導入され、順次学年が繰り上げられた。現在、台北市では市の方針として第1学年から小学校英語教育の授業に週2コマを当てている。

そして、児童の英語能力の目標として、(1)言語能力としては「Listening」、「Speaking」、「Reading」、「Writing」、「Integration」、(2)学習態度としては、「Affect」、「Culture」の領域に分けられている。さらに、「低学年」、「中学年」、「高学年」別に到達度が設定されている<sup>4</sup>。以下は、4技能と学習態度「Affect (興味と感情)」・「文化と習慣 (Culture)」の目標を記したものである (Lin 2006. 12. 28, 「臺北市97年度國民小學英語圖書採購計畫」より)。

表1：言語能力としての「Listening」、「Speaking」、「Reading」、「Writing」における低・中・高学年の目標

	Listening	Speaking	Reading	Writing
低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アルファベット 26 文字が識別できる。</li> <li>・英語の音声で識別できる。</li> <li>・既習の語彙 (30 語) を聴いて理解できる。</li> <li>・低学年レベルでのクラスルームイングリッシュを聴いて理解できる。</li> <li>・センテンスのイントネーションを識別できる。</li> <li>・既習のセンテンスを聴いて理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アルファベット 26 文字が発話できる。</li> <li>・既習の語彙 (30 語) が発話できる。</li> <li>・低学年レベルでのクラスルームイングリッシュが使用できる。</li> <li>・正確なイントネーションで、センテンスが言える。</li> <li>・低学年レベルの簡単な文型を使用して、簡単な疑問文を作り、それに答えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活字体の大文字小文字で書かれたローマ字を認識できる。</li> <li>・既習の語彙 (30 語) を認識できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活字体のローマ字の大文字小文字を書くことができる。</li> <li>・既習の語彙を書き写すことや、清書することができる。</li> </ul>
中学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙・熟語を識別できる。</li> <li>・既習の語彙 (140 語) を聞いて理解できる。</li> <li>・中学年レベルでの日常会話を聴いて理解できる。</li> <li>・既習のセンテンスを聴いて理解できる。</li> <li>・簡単な日常生活会話を聴いて理解できる。</li> <li>・簡単な歌やライム韻文聴いて理解できる。</li> <li>・簡単な児童用の物語を聴いて理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確なアクセントで、語彙と熟語が発話できる。</li> <li>・英語のリズムでセンテンスが発話できる。</li> <li>・既習の語彙 (140 語) が発話できる。</li> <li>・中学年レベルでの日常会話が発話できる。</li> <li>・中学年レベルの簡単な文型を使用して、簡単な疑問文を作り、それに答えることができる。</li> <li>・簡単な歌やライムを歌うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙 (140 語) を認識できる。</li> <li>・簡単な英語の表示が理解できる。</li> <li>・中学年レベルの日常生活で使用する語を読んで理解できる。</li> <li>・英文で書かれた基本的なフォーマットを認識できる。</li> <li>・既習のセンテンスを読んで理解できる。</li> <li>・簡単な日常会話を読んで理解できる。</li> <li>・簡単な歌やライムを読んで理解できる。</li> <li>・簡単な児童向けの物語を読んで理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙を綴ることができる。</li> <li>・既習のセンテンスを書き写すことができる。</li> <li>・手がかりをもとにして、重要語彙を書くことができる。</li> <li>・英語の文章の基本的な形式を見分けることができる。</li> </ul>
高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙 (300 語) を聴いて理解できる。</li> <li>・高学年レベルでの日常会話を聴いて理解できる。</li> <li>・既習のセンテンスを聞いて理解できる。</li> <li>・簡単な物語を聴いて理解できる。</li> <li>・簡単な児童向けの劇を聴いて理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙 (300 語) が発話できる。</li> <li>・簡単な英語を使用して、家族や友人の紹介ができる。</li> <li>・高学年レベルでの日常会話が発話できる。</li> <li>・高学年レベルの簡単な文型を使用して、適切な疑問文とその答えが発話できる。</li> <li>・Show &amp; Tell ができる。</li> <li>・簡単な会話が出来る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙 (300 語) を認識できる。</li> <li>・簡単な英文の図表を見て理解できる。</li> <li>・高学年レベルでの日常会話を読んで理解できる。</li> <li>・既習のセンテンスを読んで理解できる。</li> <li>・簡単な物語を読んで理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の語彙を綴ることができる。</li> <li>・既習のセンテンスを書き直すことができる。</li> <li>・手がかりをもとにセンテンスの書き直すことや、センテンスを作成することができる。</li> </ul>

学習態度「Affect (興味と感情)」「文化と習慣 (Culture)」の目標は、全ての学年に共通したものである。

「Affect (興味と感情)」

(1)授業中、練習活動に楽しんで参加することができる。

(2)授業中にコミュニケーションや意見を表現することを楽しみ、間違いを恐れない。

<sup>4</sup> 『臺北市國小英語文領域能力指標修訂説明及對照表』によれば、2005年(台湾では94年)の公示目標が2007年(96年)に改訂されたため、取材後の2007年版で明記した。http://hswww.snes.tp.edu.tw/board5/upload/附錄4英語修訂説明及對照表960828.doc

- (3)教師や友達の質問に楽しんで答えることができる。
- (4)教師の説明やデモンストレーションに集中することができる。
- (5)積極的に教師や友達に質問をすることができる。
- (6)教師が出した宿題を誠実に終らせることができる。
- (7)積極的に予習・復習を行うことができる。
- (8)ある状況の中で、学習の補助として非言語情報を使用することができる。
- (9)英語の能力を向上させるために役立つ活動に楽しく参加する。
- (10)授業以外の英語にふれることが好きである。
- (11)日常生活の中で英語にふれる際、楽しんでその含む意味を探求し、真似をしてみる。
- (12)日常生活の中で英語を使う機会がある時、楽しんで試そうとする。

「文化と習慣 (Culture)」

- (1)授業で紹介された国内外の主要な慶事、風俗習慣を理解する。
- (2)多角的観点から異なる文化を尊重し理解することができる。

#### 4. 国民小学校等の調査

##### (1)百齡国民小学校

調査日：2006年12月28日

面談者：Winnie Lin (林慧怡) 担任教師、英語専科教師

面談概要：授業について

テストについて

台北市の小学校英語教育と教員研修について

観察授業：6年1組 (1クラス31名)

調査概要：台北市の下町にあるこの小学校は、学級数が1学年11~13クラス、1クラスの児童数28~31人であるマンモス校である。この小学校では7名の英語専科の教師と1名の担任教師が英語を教えている。

6年生のクラスは、担任教師が教える英語の授業であった。“Good morning, class”からはじまり、担任教師が英語で授業を進めた。この学校では英語の授業を低学年は100%英語で、中・高学年は80%英語で授業をするということであった。担任教師は音声を明確にするために、マイクをつけて指導していた。



(写真1:福祉教育と関連づけたスキット)

授業は、学期の復習としてテキストの内容を、グループ (4~6名で1グループ) 毎に「スキット (寸劇)」で表現するものであった。

台湾のテキストは、児童の日常生活に密着している内容であり、「家庭」「学校」「職業」「職業」「動植物」「行事」「旅行」「運動」「休暇」等がテーマとして挙げられている (相川 2004: 111)。

各グループが、英語でコミュニケーションを実践するために、テキストの内容にそって、学校、家、病院、街角、ファースト・フード点など一つの場面を設定し、テキストに含まれているセンテンスと児童が考えたオリジナルの表現を併せて英会話を発表した。スキットに適した背景の絵や小道具も作成したり、最後に「オチ」を作ったりと、児童のアイデアが豊富に盛り込まれたスキットであった。

台北市の小学校では1年生から英語を学習しているが、発話について言えば、流暢に英語を話すという感じではなく、

友人の協力を得て会話を成立させている児童もいた。しかし、最近の日本でよくみられる「発表のための仕組まれた授業」ではなく、児童の自主性を重視する授業であった。

また、児童はテキストを使用しているが、文字指導についても、「テキストを読ませる指導・書かせる指導」ではなく、「コミュニケーション活動や体験を通して、読める指導・書ける指導」をしているのが理解できた。

## (2) 永安國民小學校

面談者：Shu Ming-Chin (許 銘 欽) 校長、英語専科教師 4 名、授業提供者の英語専科教師である Mumu Shih (施 穩 穩)

面談概要：授業について

観察授業：2 年 (1 クラス 30 名)

調査概要：



(写真 2：教師自作のマルチメディア教材で学ぶ児童)

台北市の高級アパートが建ち並ぶ場所にある台北市立永安國民小學校では、英語は英語専科教員が単独で週に 2 時間 (1 時間=40 分) 指導している。クラスルームとは別に「英語ルーム」があり、子ども達は英語の時にはこの教室に集まる。この部屋の教室の掲示物は全て英語で書かれているが、その他に英語教師達が集めた絵本や英語の歌の CD、英語教材等が多く展示されていた。

また、この部屋にはプロジェクターとスクリーンが設置されており、教師がマルチメディア機器を使用して、教材を自作し、児童の興味のある内容で英語教育を行っていた。

教師は英語の時間なので、All English を心がけて授業を行っている。そして、児童の理解ができていない時だけ、母国語を使用する。

授業提供をしてくれた英語教師は、英語圏の絵本が好きで、児童が絵本を通して英語の文字や文化に触れてくれることを期待し、私費で購入した絵本を約 100 冊学校に持ってきており、児童は自由に絵本を見ることができる。

参観した授業では、はじめに、児童は、オープニングとして TPR を使用し (歌詞の内容に動作をつけて) 英語の歌を歌った。次に、“How’s the weather?” をテーマにして、教師が作成した視聴覚教材をプロジェクターに映し、“How’s the weather?” の歌と、個々の天気発音を発話する復習をした。この教材は 2 年生の児童が文字に親しみ、無意識に文字が読めるような工夫がしてあった。例えば、雨の降る様子として、rain という文字の雨が斜めに降っていることで、rain という文字と音声、語彙が理解できるように作成されていた。次に、児童が天気について尋ねる会話をドリル的なパターン練習で何度も繰り返して定着を図った。教師はプロジェクターで「天気について」の自作の教材を活用して、クイズ形式で児童に提示し、「遊びを通しての文字指導」を行っていた。そのため、児童は楽しく文字を学習していた。最後に、児童はワークブックで文字を書く練習を通して、“How’s the weather?” の学習のまとめをした。また、早くワークを仕上げた児童は、絵本の中から一冊を選んで、他の友だちが終了するまで絵本を見ながら待っていた。

日本では低学年から文字指導を行うことにはかなり抵抗感があるが、この授業では、文字指導を「言語学習」の一環として、自然に採り入れた学習をしていると思った。とりわけ、教師が作成したマルチメディア教材は、「コミュニケーション活動や体験を通して読める指導・書ける指導」であり、児童の興味・関心を高め、楽しく自然に文字に親しめるものであった。また、絵本は児童が言語と文化を学習するための教材としては価値があるが、とりわけ、低学年では母語話者のレベルと同じものを教材として使用できる点もメリットであると思った。

### (3) 百大名師語文文理補習班

面談者：Linda（孫麗萍）塾長、英語教師

面談概要：授業内容と塾生について

観察授業：9歳2名、10歳1名、11歳2名、12歳1名の計6名

調査概要：



(写真3：ゲーム感覚で文法問題を解く児童)

台湾に一般的である保育と塾を併用した塾の安親班ではなく、塾として、國小國中資優英文班、全民英検班、國小資優教學班、國中単科班（英数理）、優質作文班を開講している。参観したのはその内、國小國中資優英文班であった。

小学生を対象に週2回、1回が90分で指導している。教師は台湾人で、All Englishで指導にあっていた。

使用していた教材（テキスト）はOxfordの“Let's go”であった。

簡単な日常の挨拶で児童をリラックスさせることから始まった。また、教師の質問に対して、児童は積極的に答えており、全員英語を話すことに抵抗がない児童であった。

導入では、三人称単数の使い方を、既習のセンテンスと組み合わせて学習していた。はじめに、①What's his/her name? ②How old is he/she? ③Where does he/she live? ④Does he/she have any brothers or sisters? をコミュニケーション活動として行った後、次に、ワークブックを使用して、writingの練習をした。

その後、教師が黒板に、tall, long, young, big, fat, newの形容詞を書き、児童が反対語をノートに書き、順に教師にあてられて黒板に書いた。

展開として、形容詞の比較級を教師が説明し、“Who is younger?” “Who is older?” “Which is longer?”等、教師が実際の状況で質問して児童が答えた。

発展として、文法書“Up and A WAY in English”を使用して、複数形の復習をした後、「people, person, child, man, men, mice, children, mouse, tooth, teeth, foot, feetの語彙を単・複に分けるテスト」を実施した。なお、文法の際には、児童が質問をする時は母語でもO.K.ということになっているらしく、児童が中国語で教師に質問し、教師も中国語で説明した。さらに、ゲーム感覚で行えるように、教師は児童を2つのグループに分け、可算名詞と不可算名詞について、指示された語を黒板に書く競争をした。

最後の10分は、フォニックスについての学習であった。はじめに、[p], [b], [k], [g]の読み方を教師が教え、次に、児童は1,000字習字帖から、教師の発音を聞いて、それぞれの語彙を書き写した。授業内容は、90分ではかなり多い内容であったが、児童は集中して学習ができていた。

### (4) 康軒文教事業

小学校英語の教材費として、台北県政府は各小学校に毎年500万台湾元（約1,500万円。1台湾元＝3円で換算）の財政的支援を行っている。また、教科書は無償給付ではないが、市・県政府が出版社から一括購入して、低い価格設定をしているため、保護者の負担を軽減させることができる。台湾の小学校英語教育では8社の教科書が検定済みの教科書である。その内、2005年7月の調査で教科書の採択率がNo.1である24.27%の康軒文教事業である。

(5) 国立編訳館教科書資料中心－学校で、過去、又は現在使用されている教科書や資料・教材が閲覧できる図書館である。

(6) 彩虹兒童文化事業有限公司（大衆優童教育機構）－児童向けの英語教育教材・教具を販売している。

## 5. 成果

### (1) 小学校英語教育について

担任教師が指導する学校と英語専科教師が指導する学校の両方を参観したが、日本の小学校の現状に近いものがあつた。すなわち、担任教師が指導する小学校では、担任が児童の特性を活かして、さらに、「福祉教育等、他教科と連携した」内容であつた。また、児童が中心となって授業を創りあげていくことで、児童の英語教育に対するモチベーションを向上させる授業であつた。

英語専科教師は、自らの英語運用能力が高いため、繰り返し、英語の音声を児童に聴かせ、「教え込もうとする授業」となつていた。これは、児童の年齢との関係も無視できないと思われるが、英語専科教師の英語でのインプット量の多さから、リスニングが中心のドリル的な授業であり、児童の創造力を育成する工夫は見られなかつた。一方、担任教師の授業は、高学年の児童が役割を決めて、劇をしていたが発話に無理のない量で、全員が何らかの形で発話ができることが良かった。

文字指導は、小学校1年生から導入されているため、児童の抵抗感は全くなかつた。また、reading と writing のテストが1 Semester毎にあることも、児童が文字に抵抗を示さない一因であると思われる。

英語能力のパラツキが低学年から見られたが、これは、私塾の影響が大きいと思われる。

私塾の教育方針は、「言語能力をつける」ことであり、指導法も、語彙を定着させるために、音声と文字指導をバランス良く行っている。主に、ワークブックを使用した学習であるが、児童に4技能を習得させることが目的で実施されている。そのため、私塾でドリルの詰め込み型の英語を週2回学んでいる児童にとって、学校の英語教育は容易だと思われる。一方、塾に行っていない児童にすれば、学校だけの英語教育では文字指導やフォニックス指導等で、十分にマスターできる能力の児童は少ないと思われる。

日本の小学校英語教育も、必修化になつたことで、より良い英語環境と英語教育を求めて、私塾に走る保護者も増加することを懸念する。

### (2) 英語教師と教員研修について

台湾の小学校教師は学級担任制である。担任教師は、中国語、数学、美術、体育、保健、道徳の授業に英語をプラスして教える。一方、音楽、社会(5・6年生)、理科、英語には専科教師がいる。そのため、英語の授業は専科教員が担当している場合もある。しかし、教員不足のため、コンピュータ版のTOFELで213点以上、「全民英語検定」の中高以上の英語能力があれば、小学校の担任でも英語を教えることができることになっている(Lin 2006. 12. 28)。

一方、教員養成については、2001年からの小学校英語教育の正式導入に先立ち、1999年に、現職の小学校教員を始め国内外の学士以上の学歴を持つ人を対象に臨時的な教員採用試験(原語:「国民小学英语教師英語能力検核測驗」)が実施された。そして、約45,000人の受験生の内、3,359名<sup>5</sup>を選抜し、2001年に向けての研修を行った。

研修の内容は、英語のスキル面向上のための演習(英語技能研修)が240時間(発音演習1&II=48、文法演習1&II=48、会話演習1&II=48、Listening・Speaking1&II=48、Reading & Writing 1&II=48)、さらに、指導力育成のために、現場の小学校での演習(小学校教育研修)が120時間(小学校英語教材研究法=28、英語指導の観察と実習=24、児童の外国語習得=16、発音指導法=16、指導活動計画作成=16、英語言語評価=14、歌とリズムの指導=6)であつた。さらに、1年間の教育実習が義務づけられた。また、小学校教師の資格のない者には、小学校教員としての教職単位を同時に取得することが条件であつた(高橋2000:103)。

なお、この小学校英語専科教員採用試験は1999年の一回限りであつた。その理由としては、「小学校英語教員養成」が、教員養成機関にある英語教育学科などで設置されたためであつた。政府は小学校英語の教員不足を解消するために、中学校の英語教員を小学校に充てたり、英語の得意な小学校教員に研修を受けさせて英語を担当させた。

## 参考文献

- 相川眞佐夫・林佳子 2004「台湾一歴史・変遷」大谷泰照他(編著)『世界の外国語教育政策』95-98 東京:東信堂  
相川眞佐夫 2004 「教科書・教材」大谷泰照他(編著)『世界の外国語教育政策』111-114 東京:東信堂  
臺北市 2007『臺北市國小英語文領域能力指標修訂説明及對照表』臺北市  
台湾英語網 2008 『教育部:不能單以紙筆測驗斷英語學習成效』教育部  
高橋美由紀 2000 「アジア諸国における小学校英語教育一導入目的・教育方法・教材・教員研修の視点から」『中部地区英語教育学会紀要』30, 99-106.

<sup>5</sup> その内、約2,000人が正式に教員として採用された。

課題4

諸外国の初等教育段階での英語教育プログラムおよび教師のための教育・研修プログラムの分析  
4. フィンランド

伊 東 治 己 (鳴門教育大学)

I. 小学校英語の必修化に関する背景、経緯

(1) 教育課程改革，教育課程の変遷，現行の教育課程  
フィンランドにおいて，小学校6年間と中学校3年間の教育が基礎教育（Basic Education）として義務化されたのは，1970年代半ばに実施された教育改革においてである。それまでは，11歳試験が行われていた当時のイギリスのように，早い段階から子ども達をその学力に応じて二つの学校種に振り分ける制度が採用されていた<sup>(1)</sup>。成績優秀組が通う小学校ではその当時から英語教育が行われていたが，小学校段階で希望するすべての子ども達に英語教育が提供されるようになったのは，1970年代半ばの教育改革ですべての児童・生徒に基礎教育を提供するために総合学校（comprehensive schools）が設置されて以来である。

(2) 小学校における英語の取り扱いの経緯，必修化されるまでの経緯

後程詳しく紹介することになるが，フィンランドでは英語は昔も今も必修化されてはいない。国家教育委員会の調査によれば<sup>(2)</sup>，2000年当時，小学校で外国語を学習している児童の83.2%が英語を選択していた。国際化が急速に進展している事実を考えると，この割合はもっと高くなっており，ほぼ必修化に値する割合になっていることが十分に予想される。しかしながら，児童に選択する自由を保障しているフィンランドの教育制度からして，今後も英語が小学校段階で必修化されることはないと考えられる。その点，外国語が必修となっているが，英語は原則履修に留まっている日本と状況は似ている。

II. 教育課程，目標，内容及び指導方法

(1) 開始学年

フィンランドの学校における外国語教育は，総合学校と高等学校に限定した場合，図1のような枠組みで提供されている（FNBE, 2004b）。まず，学習者に提供される外国語が最終到達目標に応じてA言語とB言語に分けられる。A言語はさらにA1言語とA2言語に類別される。A1言語の学習は，原則として，総合学校初等課程（日本の小学校に相当）の3年次から開始され，高等学校まで継続される。初等課程6年次までの4年間で週累積8時間教えることになっており，基本的には初等課程の間は週2時間ずつ教えられることになる。場合によっては初等課程1年次からの開始も可能である。A2言語（選択科

目）の学習は原則5年次から開始されるが，これも場合によっては初等課程1年次からの開始も可能である。現在，多くの総合学校（初等課程）がA1言語の授業時間数（週2時間）に合わせるべく，4年次からの開始に移行しつつある。

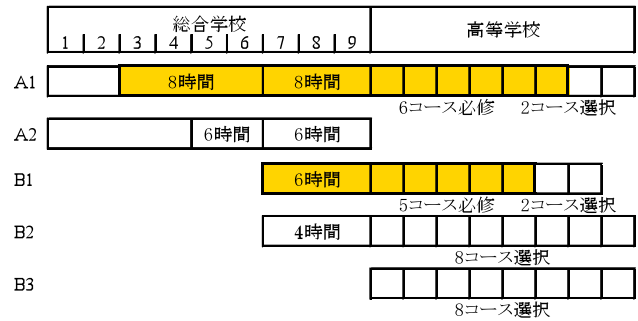


図1 外国語教育の枠組み(時間数は週累積時間数)

総合学校の中等課程入学時（7年次）から，B1言語（必修科目）の学習も開始され，高等学校へと受け継がれる。加えて，B2言語の学習も選択科目として開始される。さらに，高等学校に進学すると，B3言語（選択科目）の学習も開始される。このように，フィンランドの外国語教育は非常に多様化しており，もし希望すれば，高校卒業時まで母語以外に五つの言語を学習できる体制が整えられており，今日のヨーロッパで急速に高まりつつある plurilingualism，つまり複数言語活用能力（Council of Europe, 2001, pp.4-5）育成への社会的要請に応える形ができあがっている。なお，全ての子ども達に，A言語ひとつとB言語ひとつを履修することが義務づけられている。かつ，これらのいずれかはフィンランドの第二国語（スウェーデン語或いはフィンランド語）でなければならないことになっている。つまり，第二国語はA1言語として学習することもできれば，B1言語として学習することも可能であり，その選択は個々の学習者に任されている。とは言え，自分が通う学校にすべてこの体制が整えられているとは限らない。第二国語の学習はB1言語として総合学校の中等課程から開始されるのが一般的である。

今日のフィンランドの小学生がA1言語，つまり第一外国語として選択しているのは，圧倒的に英語である。それ故，フィンランドの小学校英語教育は基本的に3年次から開始されると言ってもよいであろう。もちろん，上で触れたように，学校によっては1年次から開始される



こともある。ただ、その場合、あくまで3年次から始まる A1 言語としての英語教育の準備的教育であり、通常 English Shower と呼ばれ、週 1 時間の割合で教えられている。また、A1 言語に英語以外の言語を選択した子ども達は、5年次から英語の学習を開始することになる。もちろん、条件が揃えば、4年次から開始する学校もある。

## (2) 授業形態及び授業時数

ここでは、A1 言語としての英語教育に限定して議論を進めることにする。英語の授業に関して日本の小学校と比較した場合の第一の特徴は、そのクラスサイズの小ささである。通常のクラスが 20 名前後である上に、外国語や図工の授業は分割クラスで実施されるため、英語授業は大概 10 名前後という極めて少人数で実施されている。指導に当たるのは、subject teacher (教科担当) か class teacher (クラス担当) である。クラスの中に slow learners がいる場合、この写真のように teaching assistant がつく場合もある。ただ、その場合もいわゆる team teaching ではなく、teaching assistant は授業の間当該児童の側にいて必要と思われる学習支援を提供している。



授業は、通常のホームルームで行われる場合もあれば、上の写真のように英語 (外国語) 授業のための特別な教室で行われる場合もある。後者の場合は、subject teacher が指導に当たることになる。

授業時数は、上の外国語教育の枠組みの議論の中で触れたように、3年次から6年次まで週 2 時間である。年間 38 週間が基本となっているので、1 年間の授業時間数は 76 時間である。なお、1 授業時間は 45 分である。小学校 3 年次から英語の学習を開始したフィンランドの小学生が高等学校卒業までに受けることになる英語の累世授業時間数を、仮に小学校 5 年次から週 1 時間の割合で英語が必修化された場合の日本の小学生が高等学校卒業までに受ける英語の累積授業時間数を比較した場合、表 1 のような結果になる。

表1: 日本とフィンランドの英語授業時数の比較(必修化後)

	小	45分×1時間×35週×2年	53時間
日本	中	50分×4時間×35週×3年	350時間
	高	50分×6時間×35週×3年	525時間
	計		928時間
フィンランド	小	45分×2時間×38週×4年	228時間
	中	45分×2時間×38週+ 45分×3時間×38週×2年	228時間
	高	45分×38時間×8コース	228時間
	計		684時間

今後、日本で外国語活動が必修化された場合の高等学校卒業時までの累積学習時間は 928 時間となり、フィンランドの 684 時間の 1.36 倍程度になる予定である。

## (3) 指導方法

ここでは、A1 言語 (第一外国語) としての英語教育に限定して、その指導方法を概観していくことにする。最近の PISA での好成績との関連で集めている注目度からすると、英語においても先端的な指導法が採用されているように思われるが、実際に授業を観察してみると、意外にも指導法はどちらと言えば伝統的である。日本の中学生や高校生を対象にした授業のような印象を受ける場合も決して珍しくはない (伊東, 2006)。

授業は、概ね教科書をベースに進められる。特にワークブックに納められている各種の活動が中心となる。適宜フィンランド語も使用されているが、英語の授業はなるべく英語でという方針が基本となっており、大量の comprehensible input (Krashen, 1982) が児童に提供されている。具体的指導内容としては、語彙指導と音読指導に力点が置かれている。いわゆる slow learners への配慮・サポート体制も充実しており、通常の授業に特別支援教育担当の教師が加わる場合もあれば、slow learners だけを取り出した補習授業も頻繁に行われている。学習習慣を早期に身につけさせるためか、毎回かなりの宿題が出され、次回の授業でその点検が行われる。理解度を点検するための小テストが頻繁に行われ、定期試験も 3~4 課ごと、年間数回実施されている。

## (4) 小学校英語の教育目標

国家教育委員会が発行している学習指導要領においては、外国語教育の目的が、次のように記されている (FNBE, 2004a, p.138)。

Foreign-language instruction must give the pupils capabilities for functioning in foreign-language communication situations. The tasks of the instruction are to accustom the pupils to using their language skills and educate them in understanding and valuing how people live in other cultures, too. The pupils also learn that a language, as a skill subject and means of communication, requires long-term and

diversified practice with communication. As an academic subject, a foreign language is a cultural and skill subject.

この記述からも分かるように、フィンランドの外国語教育の目的は、言語能力(language proficiency)・文化技能(cultural skills)・学習方略(learning strategies)の三本柱で構成されている。学習指導要領には、これら三つの目的を実現するための下位目標が示されているが、ここでは紙面の都合上、割愛することとする。

さて、これら三つの教育目標のうち、言語能力に関しては、その到達目標がヨーロッパ共通の外国語能力基準である Common European framework of reference for languages, 通称 CEFR (Council of Europe, 2001)をベースに設定されている点も注目に値する。CEFR とは、ヨーロッパ共通の外国語能力レベルを規定するもので、加盟国内にて外国語教育シラバス・カリキュラム・試験・テキスト等を作成するためのヨーロッパ共通基盤を提供するものである。CEFR は外国語能力レベルを A1 (Breakthrough)・A2 (Waystage)・B1 (Threshold)・B2 (Vantage)・C1 (Effective Operational Proficiency)・C2 (Mastery) の6段階に分けているが、フィンランドの学習指導要領では学校教育での守備範囲として下のような10段階(Cがより進んだ段階)が設定されている(FNBE, 2004a, pp. 278 -295)。

A1.1 First stage of elementary proficiency

A1.2 Developing elementary proficiency

A1.3 Functional elementary proficiency

A2.1 First stage of basic proficiency

A2.2 Developing basic proficiency

B1.1 Functional basic proficiency

B1.2 Fluent basic proficiency

B2.1 First stage of independent proficiency

B2.2 Functional independent proficiency

C1.1 First stage of fluent proficiency

この10段階スケールを基に、小学校6年生に期待される英語能力が表2のように規定されている。

言語	聞く	話す	読む	書く
英語	A2.1	A1.3	A2.1	A1.3
他の外国語	A1.3	A1.2	A1.3	A1.2

なお、それぞれの到達レベルには日本の評価基準に相当する記述子(descriptor)が準備されているが、誌面の都合上ここでは省略する。

#### (5) 小学校英語の教育内容

英語教育の目的を構成している三本柱(言語能力・文化技能・学習方略)がそのまま教育内容を構成しているとも考えることもできるが、実際の授業は教科書を中心に

進められる傾向が強いので、質量ともに充実している英語教科書の内容が小学校英語の教育内容を規定している面が強いと思われる。

教科書の中身を具体的に検討すると、学習が正式に開始される小学校3年次が高等学校卒業時まで(大学進学希望者には大学での英語授業まで)続くことになる英語学習の開始点として明確に位置づけられており、いわば日本の中学校英語の教育内容そのもの、或いはそれ以上のものがフィンランドの小学校では教えられているという印象をもった。語彙はもちろんのこと、文法構造もふんだんに取り入れられている。3年次(初年度)の教科書の最初から文字がふんだんに使われており、すべての新出単語に発音記号まで付してある。

語彙に関しては、3年次(初年度)だけで827項目が巻末の語彙リストに示されている。この数字は当然学年が進むにつれて増えていくことになる。現在の日本の中学校では3年間で900語程度を教えることになっているが、フィンランドではそれに相当する数の英語語彙を初年度に当たる3年次で消化することになっている。フィンランドの教科書がいかほど濃厚であるか如実に物語っているとと言える。また、フィンランドの小学校4年間で子ども達に提示される英文の数と、日本の中学校3年間で中学生に提示される英文の数を比較した研究(Hirao, 2009)によると、日本の教科書(New Horizon)の本文に含まれる英文は3年間で326文であったが、フィンランドの教科書Wow!(WSOY)のStudy Book(読本)に含まれる英文の数は4年間で1,280文であった。単純に計算しただけで、フィンランドの子ども達は、日本の中学生が遭遇する英文の約4倍に当たる数の英文に遭遇することになる。フィンランドの場合、後でも触れるが、英語授業は読本とワークブックの2冊併用制になっており、分量的にはワークブックが読本の2倍以上という事実を考え合わせると、実質、フィンランドの小学生は4年間で、日本の中学生が3年間に遭遇する英文の10倍以上の数の英文に接していることになる。加えて、フィンランドの小学校4年間(3年次から6年次)の英語授業時間数は228時間、日本の中学校3年間の英語授業時間数は350時間という数字を考え合わせると、フィンランドの小学生がいかほど多量なインプットに晒されているかが明らかになる。

#### (6) 子どもの能力、態度の評価方法

子どもの能力や態度の評価は、日々の授業の中や、宿題の提出状況、さらには定期的に実施されるテストを通して実施されることになる。

学年末の評価に関しては、3年生と4年生は文章表記で、5年生と6年生には評定値(4~10段階、標準は8)が示される。また、6年生対象に全国テストも希望する

学校単位で実施されている<sup>(3)</sup>。内容は日本の高校入試以上のレベルである。結果はあくまで担当教師による授業改善のために利用され、学校のランクづけには活用されていない。

評価に関しては、自己評価を多く取り入れている点も特徴的である。ワークブックの中に、通常のコミュニケーション活動に加えて、定期的にそれまでの学習を振り返る活動も組み込まれている。これも、フィンランドの学校教育の目標の一つである自律的学習の一環として機能している。

### (7) 母語習得との関係、言語技術向上の視点についての措置

母語習得と対立するものとしては捉えられていない。Plurilingualismの観点か、母語を核とした言語生活を充実していくという立場が取られている。母語の学習で培ったコミュニケーション能力を英語でのコミュニケーションにも活かす方向で授業が進められている。教室から母語を排除するという考えはない。英語の指導技術として、英語から母語への翻訳、あるいはその逆に母語から英語への翻訳も利用されている。一般に、フィンランドの人々の間での母語に対する愛着心は強力で、だからと言ってそれがすぐに英語への反発となって現れることはないようである。母語に対する自身の現れとも考えられる。また、フィンランドの大学には翻訳学部が設置されており、英語への翻訳、英語からの翻訳がフィンランドの一つの文化を形成していると言っても過言ではない。

## III. 必修化に伴う条件整備について

### III-1. 教科書、教材

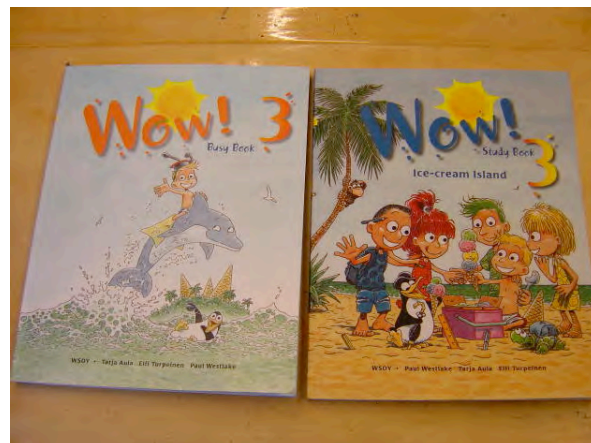
#### (1) 教科書制度

フィンランドの場合、教科書検定制度が廃止されており、かつ指導方針だけを示すという学習指導要領の性格上、教育省が教科書の在り方を拘束する要素は極めて少ない。教科書会社の経験と創意工夫と会社間の自由競争がフィンランドの英語教科書を育ててきたと言っても決して過言ではない。

日本の中学校用英語教科書と異なり、執筆者は現場の教員を含めて数人であり、それだけ執筆者の個性が発揮されやすい形になっている。さらに、教科書の採択については、各学校の英語担当教員に任されており、同じ学校の中でも異なる教科書が使用されている場合もある。

#### (2) 小学校英語教科書の現状

現在使用されている主な教科書は、*Wow!* (WSOY), *Surprise* (Otava), *What's On?* (Tammi)というシリーズで、各学年、読本 (Story Book) とワークブック (Workbook) の2冊併用システムが採用されている。



読本とワークブックの呼称は、Study Book と Busy Book など、出版社によって異なっている。読本は学年末に学校に返却することになっているが、ワークブックは児童に無償で配布されている。質量ともに実に濃厚で、発音記号も初等課程3年次 (初年度) から提示されている。一部は、海外にも輸出されている。日本にも輸入されている。

フィンランドの英語教科書が質量ともに濃厚であることを示すために、フィンランドで一人の児童が小学校から高等学校卒業時まで使用することになる英語教科書と、日本の中学生が高等学校卒業時まで使用することになる英語教科書を並べて積み上げると以下ようになった。



この写真からだけでも、以下にフィンランドで使用されている英語教科書が充実しているかが如実に理解できる。

#### (3) 教科書以外の副教材、CD やカセットなどについて

上で紹介したように、フィンランドの英語教科書は読本とワークブックの2冊で構成されており、いわばワークブックが副教材の働きをしている。ワークブックに盛り込まれている練習問題やコミュニケーション活動は実に豊富で、週2時間という時間数では到底賅いきれない程の量である。すべてを教室の授業で扱うという発想は

なく、多くが家庭での宿題用として位置づけられている。また、教科書には最初から CD がついており、子ども達は家庭でその CD を聞いて予習・復習ができるようになっている。教師用のマニュアルや追加の活動集、さらには定期テストで使用可能なテストまでも出版社によって準備されており、教師が独自に教材を開発する必要性はほとんどないと言って良いほどである。もちろん、これだけ充実した教科書を使っている、独自の教材を使って指導している教師もいる。

#### (4) 教材等についての行政の支援の状況

教科書は、どの教科も、日本と同じく無償配布であり、その意味では行政の支援を受けていると言える。ただ、英語科の場合、上で述べたように、読本とワークブックの2冊併用システムが採用されており、ワークブックは児童個人の持ち物となるが、読本に関しては学年末に学校に返却することになっている。その意味で完全な無償配布とは言えない。加えて、フィンランドの英語教科書は完全な市販となっているので、日本の教科書と比較してかなり割高である。児童数分、揃えるとなるとかなりの予算的措置が必要となってくる。さらに、教科書の選択は原則、英語担当教師の裁量となっているが、予算の関係上、毎年異なる教科書を採択するという訳にはいかない。日本の教科書と同様、教師用のマニュアルや参考資料集など、教科書に附随してくる副教材・資料が高価なためである。結果的に、行政からの支援が少なければ、教科書を変更する回数も当然減ってこざるを得ない。

### III-2. 教員、指導体制

#### (1) 小学校の教員養成及び採用の概要

小学校教員の主流は、日本と同じように class teacher (クラス担当) であるが、一部の教科(英語や図工など)は class teacher に加え、subject teacher (教科担当) によっても教えられている。class teacher は、大学の教育学部の教員養成学科 (Department of Teacher Education) で育成されている。教員養成学科への入学は、倍率が高く、極めて狭き門になっている。一方、subject teacher になることを希望しているものは、教育学部以外の学部でそれぞれの専門分野の学業を修める傍ら、教育学部で開講される教職科目を履修することが求められている。何れの場合も、修士号の取得 (最短でも5年かかる) が条件となっており、フィンランドの教員はすべて修士号を取得している。

フィンランドには、日本の教員免許状に当たるものがなく、それぞれの分野で修士号を取得することがそのまま教員免許状のような働きを担うことになる。日本で毎年実施されている都道府県ごとの採用試験というものは無く、学校長により提示された教員募集案内を見て、独自に応募する形になる。

#### (2) 小学校英語教員の養成について

小学校で英語を担当しているのは、subject teacher (教科担当) か class teacher (クラス担当) である。前者は、教育学部以外の学部でそれぞれの専門分野を修める傍ら、教育学部で開講される教職科目を履修することになっている。一旦 subject teacher としての資格を得ることができれば、校種を問わず英語を担当することができる。一方、class teacher は教育学部の教員養成学科で養成される。何れの場合も、小学校英語教員に特化した形での教員養成は行われていない。subject teacher の場合は、小学校から高等学校までのどの段階でも英語が教えられるように訓練を受ける。一方、class teacher は、小学校で教えられるどの教科も担当できるように訓練されている。なお、subject teacher と class teacher の養成カリキュラムについては伊東(2008)が詳細に紹介している。

#### (3) 現職英語教員の研修

日本の場合、夏期休暇中に教育委員会主催の現職教員対象の研修会が各地で開催されているが、フィンランドでは夏休み期間中にこの種の現職教員研修が開催されることはない。夏休みは、子ども達だけでなく、教員にとっても、さらには教育委員会にとっても完全な夏休みであり、1年の仕事の英気を養う貴重で神聖な時間とされている。高校生の中で教員志望者が多いのも、そのためである。ただ、夏休み期間中に、国内の大学で開催されている各種の公開講座やセミナーに参加したり、英語教員の場合は、2ヶ月半の夏休みを利用して海外の大学での研修に参加することは決してまれではない。

行政が主催する現職教員研修は、授業期間中に開催されるのがほとんどで、学期に合計3日程度はすべての教員に保証されている。その種の研修に参加する場合には、学校長に申請すれば、出張で抜ける授業を非常勤講師が肩代わりしてくれる制度も確立している。

#### (4) ネイティブ・スピーカーの確保、配置、ALTの採用等の現状

通常の英語授業では、ネイティブ・スピーカーとのチーム・ティーチングはほとんど行われていない。フィンランド語なまりの強い先生も堂々と一人で英語授業をこなしている。たとえ class teacher と言えども、教師に備わっている英語力の高さがそこに反映されていると言える。ただ、英語で通常の授業科目 (例えば算数や理科など) を教える特別クラスや特別コースが各地の学校に設置されているが、そのような学校にはネイティブ・スピーカーが配置されている場合もある。もちろん、フィンランド人の subject teacher や class teacher がその種の特別クラスや特別コースを担当している場合も決してまれではない。

ユバスキュラ大学には英語で通常科目を教える教員を特別に育成するためのコースが設置されている。

#### (5) 地域人材, 民間指導者等の活用

フィンランドの小学校では、必ず *teaching assistant* が数名採用されている。主にクラス内の *slow learners* に対する学習支援を提供しているが、授業で使用される教材準備などの仕事も手伝っている。高等学校卒業後に運悪く教育学部に進学できなかった若者が、教育経験を積む意味でボランティアとして *teaching assistant* を引き受けている場合もあれば、TA になるための所定のコースを修了して、教育委員会に正規の *teaching assistant* として雇われている場合もある。日本の小学校の場合は、時には地域人材が授業の主役を務める場合もあるが、フィンランドでは教員の地位が高く、地域の人材が授業の主役を勤めることは極めてまれである。

#### IV. 成果と課題

##### (1) 英語教育を導入した成果

小学校に全児童を対象にした英語教育が導入されたのは 1970 年代半ばである。その意味では、韓国・中国・台湾よりも格段先進的である。ただ、導入時期は早かったものの、その成果に関してはさほどでは無かったというのが、現地の関係者へのインタビューを通して得られた感想である。実際、英語で道を尋ねた場合、50 歳代以上の方からは、若者の場合と違って、流暢な英語は聞こえてこない。まったく通じない場合もある。中学校から大学まで英語を習っているのに、まともに会話もできないと批判されてきた我が国の状況に類似した状況がかなりの期間継続していたようである。

その状況が一変したのは、1990 年代はじめに続いた不景気の後、1995 年に EU (欧州連合) に加盟してからである。英語ができれば、ヨーロッパのどの大学でも勉強できるし、どの国でも仕事ができるという環境とインセンティブができあがったのである。それ以後のフィンランドの英語教育の発展は目覚ましく、英語を流暢に操れる多数の若者を生み出す結果となっている。

##### (2) 課題と今後の方向性

フィンランドの小学校英語は、初等教育における教科としての地位を確固たるものにしており、すでに成熟期に達していると言ってよいであろう。ヨーロッパの中学生を対象とした英語力の国際比較でも、フィンランドは極めて優秀な成績を修めており、教科書をベースにした、どちらかと言えば伝統的な教え方でも、国際化に対応できる英語力の素地が小学校段階で十分に育成できているとも言える。そのフィンランドの小学校英語にとっての課題としては、さらなく国際化に対応していくための、

小学校段階からの英語イマージョン教育の推進が挙げられる。現地では、CLIL (Content-Language Integrated Learning) という用語が使われているが (Marsh & Langé, 1999), 学習指導要領にも外国語教育の正規の選択肢として新規に位置づけられており、今後、この面での研究や実践が積み上げられていくことが十分予想できる。このように、日本よりも一歩も二歩も先を走っているフィンランドの小学校英語教育ではあるが、今後我が国が小学校での英語教育を教科化して行く上で、ひとつのモデルとして多くの示唆を与えてくれることは間違いない。

#### 注

- (1) 詳しくは国家教育委員会ホームページ参照 (<http://www.oph.fi/english/pageLast.asp?path=447,4699,4767>)。
- (2) 詳しくは国家教育委員会ホームページ参照 (<http://www.edu.fi/english/pageLast.asp?path=500,18918,18920,18931>)。
- (3) フィンランド英語教師協会 (The Association of Teachers of English in Finland, <http://www.suomenenglanninopettajat.fi>) が製作。

#### 引用文献

- Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- FNBE (Finnish National Board of Education). (2004a) *National core curriculum for basic education 2004*. Helsinki: Author.
- FNBE (Finnish National Board of Education). (2004b) *National core curriculum for upper secondary schools 2003*. Helsinki: Author.
- Hirao, M. (2009). *An analysis of English textbooks for primary schools in Finland: How the learner autonomy is fostered*. Unpublished B.Ed. thesis, Naruto University of Education.
- 伊東治己(2006)「フィンランドにおける小学校英語教育の実態調査」『日本教科教育学会紀要』第 29 巻第 3 号, pp.39-48,
- 伊東治己(2008)「フィンランドにおける小学校英語担当教員養成システムに関する研究」『教育実践学論集』第 9 号, 103-117.
- Krashen, S. (1982) *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon.
- Marsh, D. & Langé, G.. (1999). (Eds.), *Implementing content and language integrated learning*. University of Jyväskylä,

## 課題5：初等教育段階における英語教育プログラムの開発

### 1 開発原理 (1) 学習の言語学的側面

上越教育大学

大場 浩正

#### 1 はじめに

Ioup, Boustagi, El Tigi and Moselle (1994)は、21歳から第2言語（エジプト・アラビア語）に接し、母語話者並みに習得した2人の英語母語話者の例を報告している。この研究では、調査対象者の発話は母語話者並みであると判断され、母語（英語）にはないエジプト・アラビア語における非常に微妙な文法的特徴に対する直感を持っていた。一方、Lardiere (1998a, 1998b, 2000)の研究（事例研究）における調査対象者（1名の中国語母語話者）は、成人後、長期にわたり英語圏（アメリカ）に住み、英語を使用して生活していた（子どもは英語を母語として身に付けた）。彼女は、発話において、代名詞の格変化（he と him）や副詞の位置を非常に高い割合で正しく使用できたが、動詞の過去形（-ed）と3人称単数現在（-s）の形態素を正しく使用できる割合はかなり低かった。

このように、成人第2言語学習者は、母語話者並みに、微妙な文法的特徴を区別できるようになる場合もあるが、多くの場合、長期にわたり第2言語が使われている環境に住み、多量のインプット（肯定証拠）を得ているにもかかわらず、不十分な発話のままになっている文法項目もある。従って、一般的には後者の例のように、第2言語の習得においては、母語話者に近いレベルにまで達することは非常に難しいと言われている。なぜ、Lardiereの研究のように、多量のインプット（肯定証拠）にさらされているにもかかわらず、完全に習得可能な文法項目とそうでない文法項目があるのか。臨界期（critical period）仮説との関わりで、第2言語の開始年齢が重要な要因であるとの主張も多い。

このような現象に関する2つの仮説を、Hawkins (2005)を基に、以下に述べる。

#### 2 言語理論に基づく第2言語習得に関する仮説

上記のLardiere (1998a, 1998b, 2000)の研究における事例を説明する2つの仮説がある（Hawkins, 2005）。

- (1) Missing Surface Inflectional Hypothesis (MSIH) (Haznedar & Schwartz, 1997; Lardiere, 2000; Prevost & White, 2000)
- (2) Representational Deficit Hypothesis (RDH) (Smith & Tsimpli, 1995; Hawkins & Chan, 1997; Tsimpli, 2003)

MSIHの主張は次の通りである。人間が生得的に持つ、言語に関する知識である普遍文法（UG）は第2言語学習者にも完全に利用でき、十分な目標言語への接触があれば、学習者は（インプットにおける肯定証拠に含まれる）第2言語の文法特性に対する抽象的な統語表示（syntactic representation）を習得できる。つまり、統語表示に必要とされる素性（feature）の習得は可能である。しかしながら、発話の際に、音声形式を統語的表示に合わせて具現化しようとするときに問題が生じる。つまり、上記Lardiereの調査対象者の例では、彼女は英語の動詞過去形に関するすべての統語知識を持っているが、実際の発話において、これらの知識を適切な音声表示として具現化することに失敗することがある。

- (1) 動詞過去形に対する素性：[v（動詞）, finite（定形）, past（過去）, third person（3人称）, singular（単数）]
- (2) 形式：walked, walks, walk

例えば、(1)に関する形式はwalkedであるが、第2言語学習者は(1)と(2)のwalkedと連合させること出来ないときがあり、デフォルト形式（原形）walkと発話することがある。つまり、発話の際に統語形式を音声形式へうまく写像（mapping）することが難しい場合、誤りとなる（Hawkins, 2005）。この仮説に従えば、知識としては持っており、実際のパフォーマンスにおいて誤りを犯してしまうことから、成人第2言語学習者においても抽象的なレベルでの言語に対する知識を習得することが出来ることになる。実際の発話等の練習を行うことなど、実際のパフォーマンス上の問題を克服できる可能性は十分にある。

一方、RDHの主張は次の通りである。そもそも統語表示に欠陥が生じている。普遍文法は利用できるが、統語表示に必要とされるある種の素性（feature）の習得は臨界期（critical period）の影響を受ける。生成文法理論に従えば、第2言語の習得は母語には存在しない機能範疇と機能範疇や語彙に含まれる素性の習得が重要である。例えば、英語を第2言

語として学習している中国語母語話者が発話において、時制や3人称単数現在に困難を感じるのは、中国語にはこれらに関する特性が存在しないからである。つまり、英語においては動詞を過去形にするための素性[past]が存在するが、中国語にはその素性は存在しない。中国語母語話者においては、英語の動詞過去形に関する統語知識は[v, finite]だけである。walk, walked, walks の異なる形式はインプット（肯定証拠）からその存在を知るが、使うべきと時がいつなのかを知らせてくれる素性が欠如している。中国語母語話者はそれらの素性を習得しなければならないが、それらの素性の習得は、臨界期を越えた成人学習者には困難であるとの仮説は主張している。

また、日本語母語話者においては3人称単数を表す素性[third person, singular]をもたないため、臨界期を越えた成人学習者はこれらの素性を習得することが困難である。従って、英語で発話をする際に困難が生じる。仮に正確に発話できたとしても、それは母語話者と同じような言語知識から来るものではないと思われる。

### 3 仮説からの示唆

これまで、上記に述べた2つの仮説、両方を支持する研究結果が出されており、どちらが正しいかははっきりしない。しかしながら、臨界期仮説を考慮に入れるならば、後者の仮説が有力であるかもしれない。もし仮に RDH が有力であれば、日本語にない文法的素性 (features) は、(もし第2言語習得にも存在するならば) 臨界期を過ぎた成人になってからでは習得不可能である。臨界期を過ぎる前に、インプット（肯定証拠）としてそのような素性が具現化された文法形式にさらされることが大切である。この意味では、まず日本語と英語の対照分析により再度相違点を明確にすることが必要である。特に、構造的に異なる部分においては年齢の低い段階から肯定証拠として与える必要がある。つまり、日本語と英語の統語的な比較によって、英語に存在し日本語に存在しない（統語的素性を含む）構造が、小学生のうちから、音声形式として具現化されたインプットとしてさらされる必要がある。当然ながら、関係節などの高度な文法構造をいち早くインプットとして与えるということの意味しているわけではなく、形態素レベルから統語構造レベルへと、コミュニケーション活動に応じて導入していく必要がある。また、インプットがインテイクに繋がるような処理を促進する指導も必要であるかもしれない。

小学生の段階では、特に、主語と動詞の一致や複数（人称や数の概念）、時制（不規則過去形）、疑問文、前置詞、冠詞などがそのような構造にあたるだろう。もちろん、このような文法項目を明示的に教えることは避けるべきであろうが、指導者が、コミュニケーション志向のタスクの中で、このような文法項目に意識を向け、多量のインプット（肯定証拠）を与えることは決して無駄ではないだろう。また、どのようにインプット（肯定証拠）を与えるかも、これまで明らかになってきた形態素の習得順序<sup>注1</sup>や疑問文の習得過程<sup>注2</sup>などが参考になる。

### 参考文献

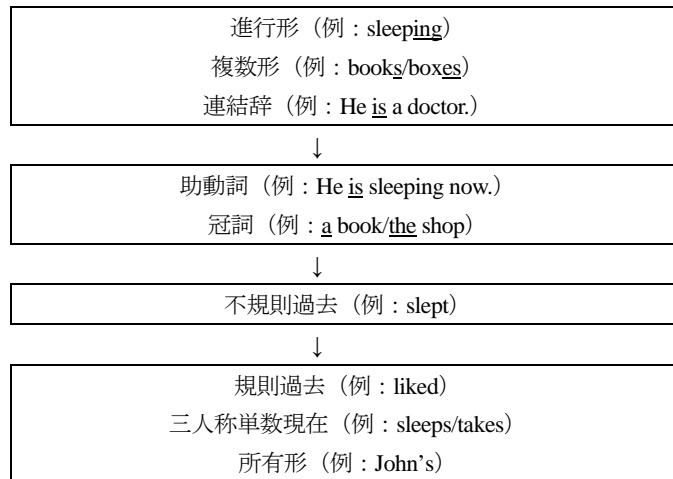
- Hawkins, R. (2005). Explaining dull and partial success in the acquisition of second language grammatical properties. *Second Language, 4*, 6-23.
- Hawkins, R. and Chan, C. (1997). The partial availability of Universal Grammar in second language acquisition: the 'failed functional features hypothesis.' *Second Language Research, 13*, 187-226.
- Haznedar, B. and Schwartz, B. D. (1997). Are there optional infinitives in child L2 acquisition? In Hughes, E., Hughes, M and Greenhill, A. (Eds.). *Proceedings of the 21th Annual Boston University Conference on Language Development*. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Ioup, G., Boustagi, E., El Tigi, M. and Moselle, M. (1994). Reexamination the crucial period hypothesis: a case study of successful adult SLA in a naturalistic environment. *Studies in Second Language Acquisition, 16*, 73-98.
- Krashen, S. (1977). Some issues relating to the Monitor Model. In H. D. Brown., C. A. Yorio, & R. H. Crymes. (Eds.). *On TESOL '77* (pp. 144-158). Washington, DC: TESOL.
- Lardiere, D. (1998a). Case and tense in the 'fossilized' steady state. *Second Language Research, 14*, 1-26.
- Lardiere, D. (1998b). Dissociating syntax from morphology in a divergent L2 end-state grammar. *Second Language Research, 14*, 356-375.
- Lardiere, D. (2000). Mapping features and forms in second language acquisition. In Archibald, J. (Ed.). *Second Language Acquisition and Linguistic Theory* (pp. 102-129). Malden, MA: Blackwell.
- Lightbown, P. M. & Spada, N. (2006). *How Languages Are Learned*. (Third Edition). Oxford University Press.

Prevost, P. and White, L. (2000). Missing surface inflection or impairment in second language acquisition? Evidence from tense and agreement. *Second Language Research*, 16, 103-133.

Smith, N. and Tsimpli, I-M. (1995). *The Mind of a Savant: Language Learning and Modularity*. Oxford: Blackwell.

Tsimpli, I-M. (2003). Features in language development. Paper presented at the 13th Annual Meeting of the European Second Language Association, Edinburgh.

注1 英語文法形態素の習得 (Krashen, 1977)



注2 疑問文の習得 (Lightbown & Spada, 2006)

Stage 1	Dog? Four children?
Stage 2	The boys throw the shoes?
Stage 3	Is the picture has two planets? What the children are playing?
Stage 4	Where is the sun?
Stage 5	What's the boy doing?
Stage 6	Can you tell me what the date is today? Why can't you go? It's better, isn't it?



1 中学年から高学年への移行と認知発達段階の変化

小学校低学年から、中学年を経て、高学年へ至る移行とその間における認知発達段階の変化を図1で示すことができる。

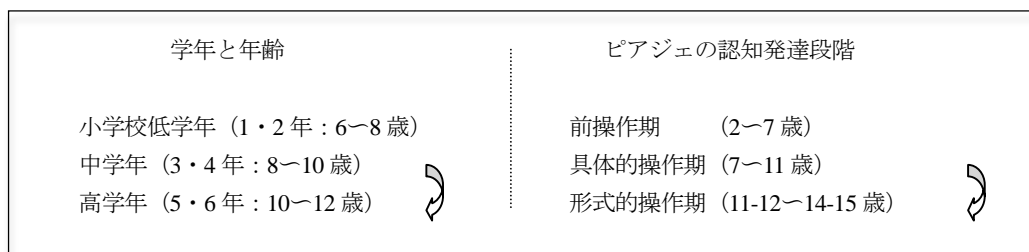


図1 小学生の認知発達段階

図1が示すように、小学生の認知発達には、ピアジェが唱える認知発達段階の前操作期から形式的操作期への移行期に当たっている。とりわけ、中学年から高学年にかけては、具体的操作期から形式的操作期への移行期に重なっており、そのことに見合う学習活動をあてがう必要がある。

2 具体的操作期から形式的操作期への変わり目

具体的操作期から形式的操作期への変わり目は、以下の2つの特徴を持つ。

(1) 具体的操作の完成 + 形式的操作への準備段階ないしはその形成期

このかわり目は、具体的操作の完成の時期であると同時に、次の形式的操作への準備段階ないしはその形成期でもある。このことは以下の引用に端的に表現されている。

- ・「具体的思考操作の発達につれて、次の段階（形式的操作の段階）へ飛躍していく前段階として、子どもが九歳頃から、具体的な場面をある程度離れても、演繹的推論ができるようになる…」
- ・「少年期の思考操作の系統的な形成において、ものごとの関係の予想を推論させ、その結果の実証をとおして次第に子どもに具体的な事実についての演繹的認識を発達させることの重要性」
- ・「このような教育的働きかけが、十二歳ごろからはじまる形式的操作への飛躍を意識的に用意するという考え方」の重要性 (坂本 1979, p. 16)

(2) 自己認識の発達

小学生の自己認識の発達という観点から見れば、それが芽生えて確立する中学年と高学年は、以下の特徴を持つ。

- ・ 中学年：自律意識の芽生え+第三者的視点から自分と他者の視点を統合する社会的視点の取得開始
- ・ 高学年：自律意識の完成+自己の多面的把握・他者の客観的把握

3 いわゆる「9歳の壁」

いわゆる9歳の壁は、小学校の中学年から高学年にかけてしばしば観察されるもので、学習を疎外する現象として現れる。これは次のように定義される。

- ・「具体的事物、事象に関連しながら、しかも具体物からは直接的には導かれないより高いレベルでの一般化、概念化された思考」を達成する際の障壁 (藤村 2005)

この定義から分かるように、この壁は、具体的操作期から形式的操作期へのスムーズな移行を疎外し、滞らせるものである。

したがって、9歳の壁を回避するためには以下のことが必要である。

- ・ 認知的発達を阻害する非教育的働きかけの排除（思考停止型活動）
- ・ 認知的発達を積極的に促す教育的働きかけの提供

前者に関しては、たとえば、スピード練習を伴った反射的な学習を強制するような思考停止型の活動を課すと、典型的に9歳の壁が出現してしまう。思考停止とは、抽象化へと向かうべき認知作用を疎外することで、その芽を潰すことにつながる。

後者については、まさに、具体例に即しながらも、具体例から直接的には導かれないより高いレベルでの一般化をすべからく促す活動を提供することである。具体的には、具体例からそこに見出される共通性を抽出する認知活動がこの種の活動の典型となる。英語活動においては、このことを英語を使った活動の中で実現しなければならない。

#### 4 「活動そのものの心地よさ」から「自分ののびの心地よさ」へ

心地よさとは、学習に伴う満足感を意味するが、大切なことは、この心地よさの内実が小学校低学年から高学年にかけて変容することである。

低学年においては、活動そのものの楽しさを喜び、それによって満足感を得ることができるが、中学年から高学年に移るにしたがって、そのような意味での心地よさは得にくくなり、異なった意味での心地よさを求めるようになる。河村（2001）はそれを「自分ののびの心地よさ」と呼び、以上のことを図2に表している。

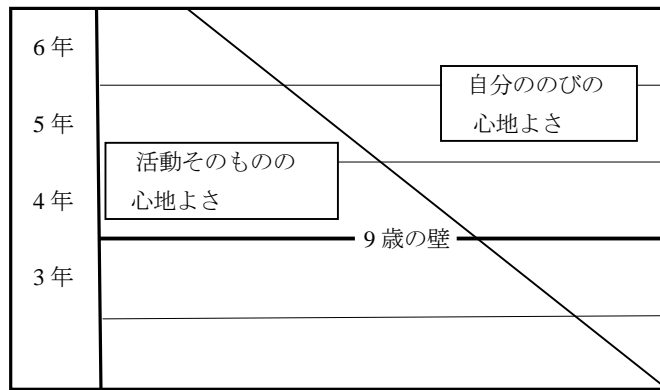


図2 心地よさの割合について（河村 2001, p. 32）

#### 5 英語活動における「自分ののびの心地よさ」

英語活動において自分の伸びの心地よさを感じるということは、生徒が英語を学んでいるという実感を得るということに他ならない。言うまでもなく、英語を学ぶということは、言語のすべてのレベルにおいて生じるが、もっともそれが強く感じられるのは、言語の本質の一つとしての創造性に直接的に関わる統語部門の学習である。統語部門の創造性は無限の新しい文を生成できることに表れ、その創造性を支えるのが一般化され抽象化された存在としての文の構造である。

したがって、小学校英語活動において、高学年に向かって必要となるのは、そのような生産性につながる一般化を自ずと促すための工夫である。言うまでもなく、この工夫は、明示的かつ意識的に一般化を導くものではなく、暗示的にそれを導くものでなければならない。

認知言語学にもとづく言語習得モデルによると、人間は経験する事例の中から共通点を見出していくことのできる型発見（pattern finding）能力を持っている。言語学習の場合、この型は文の構造として現れるが、この型は、一方では形式上の共通性を捕らえるものであるが、同時にその共通性が、それが実現する意味レベルにおける共通性に支えられている。したがって、文の型としての構文の一般化は、意味と形式の両者を捕らえ、その関係づけを把

握したときにおいて生じる。これはつまり、文の処理をおこなうということである。

以上のことを英語活動に当てはめてまとめると、図3のようになる。

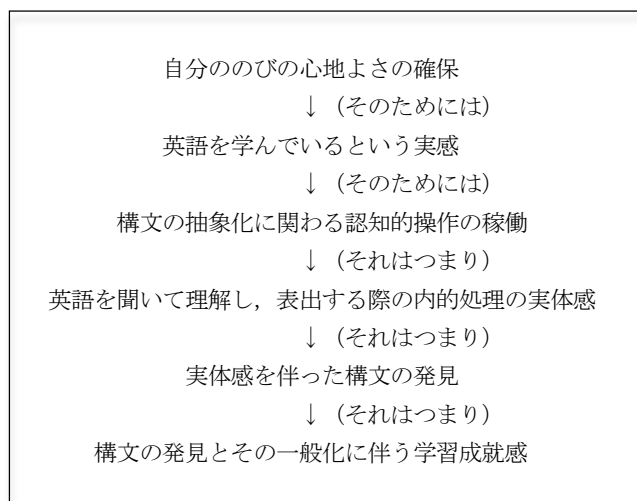


図3 英語の学びの実態

構文の一般化において処理体験されるのは、具体的な発話文であり、まさにこれは、具体例に即しながらも、具体例から直接的には導かれないより高いレベルでの一般化を実現する過程そのものである。

しかも、小学生は高学年に移るにしたがって、自己確認が強くなるので、発話文の処理体験が自己確認に整合するものでなくてはならず、そのためにはそれが小学生に関連があり、彼らの興味に即した身近な内容をもつものでなければならない。

以上の議論をまとめると、以下のとおりとなる。

- (1) 中学年から高学年にかけて子どもの認知的な発達の変化に即した教育的働きかけが必要であり、それを阻害する学習活動のタイプを排除することも必要である。
- (2) この働きかけは、構文の抽象化を促すものでなければならない。
- (3) 構文の抽象化を促すのは個々の構文のタイプ頻度の増強である。
- (4) 中学年から高学年にかけて発達する子どもの自己認識に即した教育的働きかけが必要である。
- (5) この働きかけは、自己関与と真の意味での自己表現を志向するものである。

#### 引用文献

河村信士「総合的な学習の時間で行う英語活動の一考察—楽しい英語活動の連続を求めて」『福岡県教育センター長期研修 H13』平成13年度, pp. 31-38, 2001 (<http://www.educ.pref.fukuoka.jp/kensyu/tyouken/06.pdf#search=%229歳%20の%20壁%20福岡県教育センター%2022>)

坂本忠芳「少年期における発達の特徴と教育」『少年期 発達段階と教育 2』(岩波講座 子どもの発達と教育 5) 岩波書店, 東京, pp. 1-54, 1979

藤村宣之「形式的操作期: 完成された思考形態へ」子安増生(編)『よくわかる認知発達とその支援』ミネルヴァ出版, 京都, pp. 16-17, 2005b

(注) この分析は以下の論文の概要である。

山岡俊比古(2008)「小学校英語学習における認知的側面—認知的発達段階に即した学習とその促進—」『教育学実践論集』第9号, pp. 75-86.

## 1 小学校外国語活動の教育目標

新学習指導要領では、外国語活動について以下のように目標が提示されている。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

「コミュニケーション能力の素地」を養うために、以下の3つの活動を柱にすることが唱われている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる

これら3つは「体験を通じて身につけるものであり、また、この目標は不可分に結びついている。(大城・直山 2008)」この目標に従えば、英語コミュニケーション能力そのものを養う中学校の場合とは異なり、小学校では、外国語によるコミュニケーション活動を体験することで、それを手段として、子供たちの文化理解、コミュニケーションへの積極的  
態度育成、音声や基本表現に慣れ親しみを促すことになる。英語そのものにかかる学習目標は、③の「音声や基本的な表現に慣れ親しませ」ることのみである。

韓国や中国の小学校英語教育とは、英語学習そのものを目標とはしない点で、教育理念が異なるように思われる。韓国や中国の英語学習熱は、個人でも国家的にも非常に高く、英語力が自己実現や経済力、社会的成功の基礎、手段として見なされ、それに応じた教育投資も行われている。日本の小学校外国語活動は、いわば「後発」だが、このような英語学習に対する価値観の「後追い」ではない、あらたな外国語教育理念を提議するために、コミュニケーション教育(②)、言語や文化への認識を高める教育(①)を目標に掲げているとは言えないだろうか。本節では、伝達の側面、すなわち、コミュニケーションの面から、小学校外国語活動の目指すものや特徴について考察する。

## 2 小学校外国語活動におけるコミュニケーション教育の特徴

小学校外国語活動の目標は、一見中学校の学習指導要領と文言は似ているが、英語でのコミュニケーション能力の基礎を目標とする中学校と、むしろ英語は手段として用い、コミュニケーションの楽しさや大切さを実感させようとする小学校とでは、授業実践に大きな違いが出る。中学校の英語科と小学校の外国語活動の違いを、学習指導要領解説のこ  
とばを引いてまとめると、以下の3点に集約されよう。

### ①「体験を通して学ぶ」

中学校以降の学習指導要領に比して、小学校に特徴的なのは、言語や文化について体験を通して学ぶことの意義が記されている点である。総合的な言語文化を体験することが強調されており、言語と文化それぞれを個別に知識として学ぶことや、パターンプラクティスやダイアログの暗唱などを重ねてスキル向上を目指す指導は退けられている。

しかし、英語を学びはじめる段階から、「外国語を通じて」「体験的に」「コミュニケーション能力の素地を養う」のは難しい。英語に依存しすぎずコミュニケーションを成立させる手段が不可欠になり、それが小学校外国語活動におけるコミュニケーションを特徴づけることになる。例えば「歌、チャンツ、ゲーム」等による非言語リソースの共有が、「体験を通して学ぶ」外国語活動を実現するための非常に有効な手段となることは疑いがない。

### ②「他教科等で学習したこと、言葉によらないコミュニケーションを活用する」

歌やゲーム以外にも、授業にはコミュニケーションを支えるリソースが小学校には豊富にある。学習指導要領では、ジェスチャーのほか、他教科での学習事項なども、言葉によらないコミュニケーションの支えとして挙げている。

「言葉によらないコミュニケーションの支え」を築くことは、小学校の重要な教育目標であり、一年次から徐々に

くられていく学校の生活文化である。手を挙げて発言すること、先生と同級生の発言をよく聞くことなど、授業のさまざまなルールも重要なコミュニケーションの支えであり、そういった支えが言語だけに依存せず、音楽や身体、視覚教具等々、多チャンネルに渡って用いられるコミュニケーションは、小学校ならではであろう。

### ③「ことばや文化の差異に気付くこと」

小学校の学校文化を生かすことによって、体験的なコミュニケーションの学びを促すことができるだけでなく、小学校の学校文化によって、もうひとつ促せる学びが「振り返り」「内省、省察」である。

「振り返りカード」を書かせたり、授業の最後の振り返りの発表をさせたりする際に、教師が引き出そうとするのは、児童が活動を楽しんだか、学習内容を理解したかという、授業評価の確認もあるが、より重要なのは十人十色の体験を反映した、各々の「気づき」を引き出すことであろう。体験による学びを言語化することで、語るができる実感として学習を意識化、顕在化させ残していくことができる。文法や単語の発音などを説明したり教えこんだりしない外国語活動においては、「体験的に理解する」ことが学習であり、また、授業中の活動を振り返り、言語化してクラスで共有することで学習が顕在化するのである。それが、知識の説明、習熟、使用の学習過程とは異なる、言語使用体験から起こす学習である。

## 3 外国語活動での体験的な理解のプロセス

体験重視、非言語リソースの使用、気づきで学ぶことなどの特徴をもつ外国語活動は、中学校以降の言語知識や技能への習熟を重視した指導法に比べ、コミュニケーションの体験を言語知識に先行させることを重視しており、まず言語使用の場や必然性（When and why language is used）を感じ、使用を通して言語の意味を理解し、最終的に言語形式を意識するというアプローチを採る（Use→Meaning→Form のプロセス）。言語の実際の使用体験を授業の場でさせること、言語形式と意味の理解にむしろ先行させることの意義について、中教審が2008年1月に示した『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』には以下のような見解がある。

実生活で使用する必要性が乏しい中で多くの表現を覚えたり、細かい文構造に関する抽象的な概念について理解したりすることを通じて学習への興味・関心を持続することは、小学生にとっては難しいことから、むしろ、ALTの活用等を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成等を基本とすべきとの指摘がある。（p.63）

このように、実際のコミュニケーション体験を通してコミュニケーションの必要性を感じさせることが小学生にとっては適切であると捉えられている。

小学校段階では、小学生の持つ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しにするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動（仮称）を行うことが適当と考えられる。（p.64）

以上のように、小学生を「柔軟な適応力」を持つ存在ととらえ、知識先行型の技能習得学習に依らずとも体験先行型の学習が小学校では可能であると考えられている。このことは、前述のように小学校の授業形態や展開に独自性を与え、教室を「英語を使う共同体」と見なしている点で独自の価値も与えていると言えよう。

## 4 外国語活動の想定する言語共同体

以上で述べたように、日本の小学校外国語活動には、他の東アジア諸国の小学校英語や、日本の早期英語教育、中学校以降の学校英語教育とは異なる、独自の教育目標と学習環境がある。小学校の教室でこれまで日常的に行ってきた実践が、まさに「コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。授業実践共同体の中に、少しずつ英語の要素や、外国人との交流を通じた生活文化の要素を盛り込むことで、外国語活動の授業を、英語を使って相互に理解を深める共同体とすることができよう。文部科学省が試作した『英語ノート』にも、教室の場をコミュニケーションの主要な場にする姿勢は貫かれていることが分かる。『英語ノート』では、「あなたとわたし（You and I）」が、「現在この場所（Here and now）」で言語使用することを狙った言語活動が展開されている。3人称代名詞や過去形を用いることで、言語の使用場面が教室から離れてしまうことを危懼してのことと解釈すれば、『英語ノート』は、教室をひとつの言語共同体として育

てるための教材と言えるだろう。

#### 5 積極的なコミュニケーションへの態度とはなにか

教室をコミュニケーション共同体とみなし、その中でコミュニケーションへの態度を養い、言語や文化への認識を高める教育を行う外国語活動を提議する今回の小学校学習指導要領では、言語による伝達する力「コミュニケーション能力の育成」のための知識技能の獲得という志向とは異なる、体験的な理解を通しての「素地」の育成を強調することで、どのようなコミュニケーション教育を行おうとしているのだろうか。

コミュニケーションを能力(知識技能)と捉える傾向に批判的な立場から、鯨岡(2003)は以下のように述べている。

コミュニケーションを「伝え合い」ととらえ、また子どもに「伝える能力」が必要だととらえてしまうと、「コミュニケーション能力の育成」を語ることが当然のように導かれてしまうが、なぜ人はそもそもコミュニケーションに向かうのかと考えてみると、コミュニケーションが生まれてくるための基盤が改めて見えてくる。(p.6)

さらに以下のように、伝達機能とは異なる視点でコミュニケーションに向かう態度が意味づけられている。

一人の子どもがコミュニケーションに向かうようになるのは、その子が周囲の人とそこにいて何かを一緒にすることが、楽しい、嬉しい、安心できる、といった気持ちになれるからである。(p.7)

このように周囲との同期的なコミュニケーションの意義を強調し、他者との共生を志向するのが人間の本性であることを指摘している。一方で、人間は「個として充実して生きる」という志向性もまた同時に抱えているとも述べている。これら両方の志向性を抱える人間同士が、互いに関わり合う中で、「個として生きる」志向性を一方で抱きつつも、「共に生きる」志向へと向かうことが「積極的にコミュニケーションを図ろうとすること」であるとする。現在の英語教育研究で議論されるような、自主的、積極的な「発信」や「自己表現」が大切なのではなく、対話的で協同的な関係基盤をつくり、周囲の人とその場と時を共有して何かを一緒にすることを、楽しい、嬉しい、安心できると感じられるような環境を作り出すことが、コミュニケーションを充実させる上で重要であると言えるだろう。

#### 参考文献

鯨岡峻(2003).「関係の中で育つ人に向かう力」『教育と医学』No. 603 慶應義塾大学出版会

文部科学省(2008).「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf) 2008年3月10日引用

大城賢, 直山木綿子(2008).『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』教育出版

1. 外国語学習における「社会」とは

外国語学習における「社会(social)」とは、教室や学校を取り巻くマクロな社会と、教室内で教師と児童・生徒、あるいは、児童・生徒同士でローカルに展開されるやりとりの両方を指す。本節では、このマクロな社会とミクロな社会の両者をダイナミックに捉えながら、初等教育における外国語学習の社会的側面を明らかにしたい。

2. 外国語学習におけるマクロな社会的要因

近年の北アメリカ、ヨーロッパ、あるいは、オーストラリアにおける外国語教育に関する政策やカリキュラムでは、学習の認知的側面に加え、社会文化的側面をカリキュラム構成の重要な原理として採用していることがわかる(例えば、Council of Europe, 2001; Hall, 2001; Vale, et al. 1991)。特に、ヨーロッパでは、複言語主義(plurilingualism)が提唱され、Common European Framework of Reference for Languages が発表された。オーストラリアでは、これまでのように言語能力に力点を置いたコミュニケーション能力ではなく、異文化間コミュニケーション能力(intercultural communicative competence) (Byram, 2008)が提唱され、その獲得が外国語教育の目標の一つとなっている。これらの外国語教育およびその政策の背景には、これらの地域において資本や労働力の流動性が高まり、文化の多様性を容認するだけでなく、多文化間でコミュニケーションを行う能力を獲得することが、市民に求められているためである。

一方で、わが国の情勢を考えると、中央教育審議会の答申や新しい『学習指導要領解説』の「総説」にもみられるように、学校教育におけるカリキュラム、実践、評価のあり方に、グローバルな社会の動きが色濃く影響を与えている。初等教育における外国語教育の導入も、グローバリゼーションを背景にした政治経済的な力が強く作用しており、文部科学省は、このことを小学校での必修化の理由の一つとして挙げている。しかし、ヨーロッパやオーストラリアと異なり、わが国では、こういったグローバルな情勢を移民政策や雇用といった社会における政策レベルに反映しているとは言えず、外国語教育にも諸外国でみられるような観点はまだ見られない。外国語教育の目標も、言語能力を中心としたコミュニケーション能力の育成に主眼が置かれている。このように、東アジア諸国では、グローバリゼーションの影響は避けがたく学校教育のカリキュラムのあり方に影響を与えているが、同時に、グローバルな社会に子どもたちを参加させたい、あるいは、社会文化的資本(social and cultural capital)として外国語教育をとらえるべきだと考える保護者の強い意向も、学校教育に作用している。

3. コミュニケーション活動を取りまく社会的あるいは制度的側面

当然ながら、こういったマクロな社会的要因は、教室の中での教師と児童・生徒、あるいは、児童・生徒同士の社会的相互作用にも影響を与えている。Hall (2001)は、日常生活でのコミュニケーション活動が、それを取り巻くマクロな社会的要因に影響を受けていることを図1のように示した。これによると、われわれが日常的に実践するコミュニケーション活動において、具体的にどのような言語的資源(linguistic resources)が使用されるかは、制度的に規定され、また、反対に、特定の言語使用が制度的側面を実現することもあり得る。

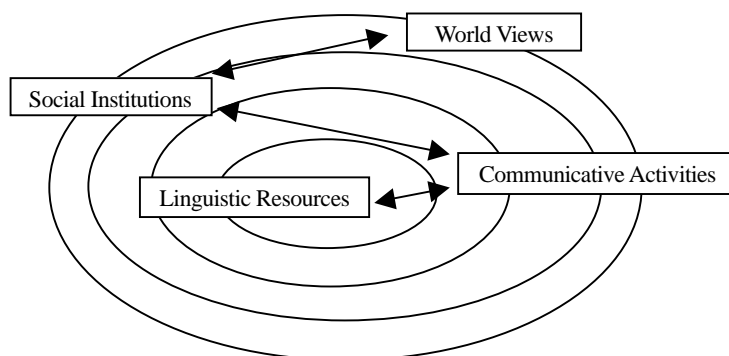


図1 Sociocultural Perspective of Communication (Hall, 1999:18)

#### 4. 教室で展開されるローカルな社会的側面：社会文化的アプローチからとらえた言語教育

ここまで、言語学習の社会的側面をマクロな視点から概観したが、さらに、教室で展開される言語学習のミクロな社会的な側面に注目したい。ここでは、「社会文化的(sociocultural)」アプローチと呼ばれる枠組みから学習をとらえる。社会文化的アプローチの起源は、ヴィゴツキーによる乳幼児、児童の発達研究にあるが、その後、M.コールやワーチらによって研究が進められ、現在も発展しており、例えば、「活動理論(Activity Theory)」(エンゲストローム、1999；山住、2004)のような理論的拡張が行われている。第二言語学習研究では、Lantolf (2000, 2003)、Lantolf and Thorne (2006)らの研究や、Kramsch (2002)や van Lier (2004)らが提唱する生態学的言語学習理論(An ecological approach to language learning)へと発展している。

社会文化的アプローチでは、学習は人工物などの物理的道具、あるいは、言語などの記号的道具を媒介(mediation)にして行われる行為としてとらえる。また、言語学習は、他者との社会的な関係における行為(精神間機能)を内化し、精神内機能を発達させる過程と考える。その際に、子どもの独力での問題解決で可能な現在の発達水準と、より高次の大人の指導下、もしくはより能力の高い仲間と共同で行う問題解決によって可能となる潜在的な発達水準の差である「発達の最近接領域(Zone of Proximal Development)」(ヴィゴツキー、2001)を構成することが重要となる。近年の言語教育研究によれば、このZPDの中に、プライベートスピーチ(private speech)、言葉遊び(language play)、模倣(imitation)が発生し、子どもたちの言語学習を促進することが報告されている。特に、言語学習において模倣は、教師の発話の反復(repetition)と同義であるにとらえられがちで、「英語活動では、教師のいったことのオウム返しばかりが行われている」という批判があるが、Tomasello (1999)や Valsinar (2000)によれば、乳幼児の発達において、モデルとなる者の行為そのものではなく、その人が持つ意図や目標を理解し、模倣することが発達にとって重要であるという。

模倣、プライベートスピーチ、あるいは、ことば遊びといった行為を通して、言語使用が内在化されるためには、これらの行為がZPDの中で発生していることが前提となる。当然ながらZPDは、教師と児童生徒の間だけに発生する者ではなく、学習者集団での協働的学習をとおしても形成されるという研究がある。

#### 5. 4技能からコミュニケーションのモードへ

教室での社会的やりとりを重視して言語教育を考えると“Knowing how, when, and why to say what to whom”(ACTFL, 1996)ということが重要となる。このような見方から外国語教育をとらえると、学習者のパフォーマンスは、話す、聞く、読む、書くといった4技能ではなく、誰に対してどんな場面で話しているかという、コミュニケーションのモードでとらえられることになる。実際、このことは、近年の諸外国における外国語教育カリキュラムを構成する一つの要素になっている(ACTFL, 1996；Vale, et al. 1991)。例えば、ACTFLのNational Standards for Foreign Language Learning (1996)における5つのスタンダード(5Cs: Communication, Culture, Connection, Comparison, Community)のうち、Communication Standardには、Interpersonal mode of communication、Presentational mode of communication、Interpretive mode of communication というコミュニケーションの有様がモードで記述されている。

#### 6. まとめ

1 でみたように、現代の学校教育及びそのカリキュラムは、グローバルな社会的情勢に、直接的、間接的影響を受けている。しかし、これらの要因は、小学校での外国語活動の実践に、どれほど反映されるべきなのだろうか。もちろん、教師は、学校を取り巻く社会的情勢が学校教育に影響を与えていることに、これまで以上に意識的に、あるいは、批判的になるべきだろう。同時に、ローカルな社会でも多文化共生のニーズが高まってきていることにも目を向けるべきだろう。しかし、これらのマクロな社会的、あるいは、教室を取り巻く外的な要因を外国語活動を推進するための動機とすることには無理があると考えられる。つまり、子どもたちが将来的にグローバルな社会の一員となるべく教育実践を行うことは重要なことなのだが、「必ず将来、英語は役立つから」と言っても子どもたちは、「それはいつ？」と聞き返してくるのが関の山だろう。それよりも、教室内における社会的やりとり、今ここのコミュニケーション活動を大切にしながら、そういった社会的関係を教室の中に構築することを体験することが重要となり、先々の言語学習を下支えするだろう。

この点について、新しい学習指導要領には、各学年の指導に対する配慮事項として、「外国語を初めて学習することに配慮し、児童に身近で基本的な表現を使いながら、外国語に慣れ親しむ活動や児童の日常生活や学校生活に関わる活動を中心に、友達との関わりを大切にした体験的コミュニケーションを行うようにすること」と記されている(下線部筆者)。教室内での関わりを重視しながら、なおかつ、言語によるやりとりをおこなう態度を育成することを目指したい。この点では、多文化社会において外国語学習者に求められる「調整能力」、そして、それを構成する「たくましさ」とし



なやかさ」は、初等教育においても外国語活動でつきたい力として注目される(ARCLE 編集委員会, 2006)。ARCLE 編集委員会(2006)は、言語使用の規範性や適切性を重視した言語学習から、多文化・多言語社会において違いをすりあわせて相互の意味を調整する「調整能力」を身に付けることを目指すと言語学習への転換を提唱している。そして、調整能力の一般定義として、自らの意見を表明し、独創力や冒険的精神を持って自己表現を行う「たくましさ」と、相手の置かれている立場を理解し、共感を伴うわかり愛を伴う「しなやかさ」を挙げている。こういった異文化間コミュニケーション能力は、社会が多言語化、多文化化したときに、さらに重要になると思われるが、この「たくましさ」「しなやかさ」は、現在の小学校における外国語活動でも十分に育成できる力であろう。グローバルな社会的側面と教室の中でのローカルな社会的側面の両者を往復しながら、児童にとってのベストの環境や関係作りを行う実践を目指したい。

#### 参考文献

- ARCLE 編集委員会. 2006. 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み-ECF-English Curriculum Framework』 リーベル出版.
- Byram, M. 2008. *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Multilingual Matters.
- Council of Europe. 2001. *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.
- Hall, J. K. 2003. *Methods for Teaching Foreign Languages: Creating a Community of Learners in the Classroom*. Prentice Hall.
- Kramsch, C. Ed. 2002. *Language Acquisition And Language Socialization: Ecological Perspectives*. Continuum.
- Lantolf, J. P. & Thone, S. 2006. *Sociocultural Theory And the Genesis of Second Language*. Oxford University Press.
- Lantolf, J. P. 2000. *Sociocultural Theory & Second Language Learning*. Oxford University Press.
- Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origin of Human Cognition*. Harvard University Press.
- Vale, D., Scarino, A. & McKay, P. 1991. *Pocket ALL: Australian Language Levels Guidelines*. Curriculum Corporation.
- Valsiner, J. 2000. *Culture and Human Development: An Introduction*. Sage.
- van Lier, Leo. 2000. *The Ecology And Semiotics of Language Learning: A Sociocultural Perspective*. Kluwer Academic Publishers.
- エンゲストローム・ユーリア. 1999. 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』（山住勝広他訳）.新曜社.
- ヴィゴツキー. 2001. 『思考と言語』（新訳版）（柴田義松訳）.新読書社.
- 山住勝広. 2004. 『活動理論と教育実践の創造-拡張的学習へ-』 関西大学出版部.

小学校学習指導要領が定める外国語活動の目標においては、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め」とあり、またその内容の一つとして「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること」が掲げられている。これらは、この段階における外国語学習の経験の重要性とその後の学習へ与える影響を示している。本節では、情意的側面から論じることとする。

#### 課題1：学習価値の認知について

どの科目を学ぶにせよ、最初の段階では誰しも学習に興味を持たない学習者はいないはずである。しかし、学習経験を重ねるにつれて、学習者の意欲が減退していくという事例は多い。Rogers (1969)は、この現象を以下の通りの確に説明している。

I become very irritated with the notion that students must be “motivated.” The young human being is intrinsically motivated to a high degree. Many elements of his environment constitute challenges of him. He is curious, eager to discover, eager to know, eager to solve problems. A sad part of most education is that by the time the child has spent a number of years in school this intrinsic motivation is pretty well dampened. Yet it is there and it is our task as facilitators of learning to tap that motivation, to discover what challenges are real for a young person, and to provide the opportunity for him to meet those challenges. (p. 131)

残念ながら、これは英語学習にもよく見られる現象でもある (Koizumi & Matsuo, 1993; Tse, 2000; Nikolov, 2001; Nakata, 2003)。小学校での英語学習の経験がその後の中学校や高等学校における英語学習意欲に与える影響については、様々な研究結果が報告されているところであり (Takagi, 2003a, 2003b; Shizuka, 2007)、これは小学校における英語学習経験の質がその後の英語学習意欲に影響しているのではないかと推測される。

Deci & Ryan (1985)は、自己決定意思論の中で、動機には内発的動機（学習内容に対する内的な個人的興味に基づく長期的に持続する動機）と外発的動機（試験、単位、仕事をえるためなど短期的な外的目的のために学習する動機）があり、学習価値の内在化 (Internalization) の程度により、後者はさらにいくつかの段階に分けられとした。

しかしながら、内発的動機自体をこのように狭義に捉えることの是非については、疑問が残る。確かに「楽しい」 (fun, enjoyable) という経験は大切ではあるが、そのような経験のみで学習が継続するとは考えにくい。つまり、「意義深い」 (meaningful) と感じるような活動の経験を蓄積することにより強い学習動機が生まれ、結果として継続的な学習をもたらすと考える方が妥当である (Nakata, 2006)。教育的観点からすれば、このような動機付けは、必ずしも外的なものではなく、実態としては内的に発生したものと理解する方が妥当ではないだろうか。この観点から考えると、内発的動機を、「置かれた環境の中で、学習内容とその学びを継続する事の両方に価値を見出し、その上で実際に英語を学習していくような内発的動機づけ」 (Nakata, 2008) として捉えなおす必要がある。特に、将来の低学年からの英語学習を想定した場合には、このような動機づけの定着が望ましい。

Nakata (2008)の研究においても、活動が楽しい (fun, enjoyable) というだけの経験では、その後の学習が継続せず、そこには子供の言語的・身体的な発達段階に相応しい活動が求められることが明らかになった。小学校段階での英語の学習内容と児童の興味・関心とを、いかに結びつけるかが重要な課題となろう。

#### 課題2：英語学習者としてのアイデンティティについて

言語学習における先駆的な動機付け理論に、Gardner and Lambert (1972)の統合的動機（学習言語文化への興味や憧れからくる外国語学習における動機）と道具的動機（仕事を探すためなど功利的目的のために外国語を学習す

る動機)がある。

英語母語話者と接触することのない日本人英語学習者にとっては、これらの区別は必ずしも有効ではない。実際、いくつかの因子分析による結果からはこれらが切り離すことの出来ない因子として浮かび上がっている(Koizumi & Matsuo, 1993; Kimura, Nakata, Okumura, 2001)。

アイデンティティの観点から動機づけを捉えた場合、日本のような英語を外国語として学び、英語母語話者との接触に乏しいEFLの環境においては、英語圏の文化に対する「憧れ」というような要素を活動に取り入れることにより、児童の統合的動機を高めること自体は妥当なことである。

しかし、日本のようなEFLの環境には統合する言語文化が存在しないので、統合的動機のみの高揚を試みることは批判もある。英語を、様々な文化を学ぶため、異文化間コミュニケーションのための道具として位置づけ、国際人としての態度を身につけるべく、*International Orientation* (Nakata, 1995a, 1995b)や*International Posture* (Yashima, 2000)の涵養を目指すべきであろう。低学年からの英語学習を考えた場合は、統合的動機に加え、このような動機づけの要素を徐々に活動に取り入れていくことが望ましい。英語母語話者による(との)コミュニケーションの道具としてのみ英語を位置づけるのではなく、異なる言語を母語する非英語母語話者間におけるコミュニケーションの道具としても英語を位置づけるような言語学習者の態度の涵養が必要となろう。

以上多様なタイプの動機づけを提示したが、児童の発達段階・環境・ニーズを考慮しながら、望ましい組み合わせを考えることが何よりも肝要である。英語学習の初期段階においては「英語学習自体が楽しい」、または「英語圏文化への憧れる」という経験を提供することにより、英語学習への興味づけを行うことができる。そして、その学習意欲を継続させるためには、「活動が楽しい・楽しくない」に影響されて学習するのではなく、「学習自体に意味がある」または「力がついている」と学習者が実感できるような、児童の発達段階やニーズに応じた活動内容を提供することが求められよう。加えて、英語を国際理解・コミュニケーションの道具と認識できるような活動がその後の英語学習意欲の継続には有効であると思われる。塾や英会話学校での学習の実態を把握するためにも、学習者の心理状況を把握するためにも、学習者を対象としたニーズ調査を実施し、採用する活動を決定する際はその結果も考慮に入れることが望ましい。生徒の情意要因の状況を把握しながら授業改善に努めることは、(特に発達段階における)英語学習者の動機付けには不可欠である(Nakata, forthcoming)。

## REFERENCES

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- Kimura, Y., Nakata, Y., & Okumura, T. (2001). Language learning motivation of EFL learners in Japan – a cross-sectional analysis of various learning milieus. *JALT Journal*, 23(1), 47–68.
- Koizumi, R., & Matsuo, K. (1993). A longitudinal study of attitudes and motivation in learning English among Japanese seventh-grade students. *Japanese Psychological Research*, 35(1), 1–11.
- Nakata, Y. (1995a). New attitudes among Japanese learners of English. In K. Kitao (Ed.), *Culture and Communication* (pp. 173–184). Kyoto: Yamaguchi Shoten.
- Nakata, Y. (1995b). New goals for Japanese learners of English. *The Language Teacher*, 19(2), 17–20.
- Nakata, Y. (2003). Japanese learners' perceptions of English language study: A qualitative analysis of English learning experience. *Studies in English Language Teaching* 26, 33–56.
- Nakata, Y. (2006). *Motivation and experience in foreign language learning*. Oxford: Peter Lang.
- Nakata, Y. (2008). The development of intrinsic motivation. A paper presented at the symposium *Good Language Learners: Motivation and beyond* of 42<sup>nd</sup> annual international IATEFL conference and exhibition held at University of Exeter, Exeter, England, April 11.

- Nakata, Y. (forthcoming). The teacher as a motivation researcher. In T. Yoshida., H. Imai., Y. Nakata., A. Tajino., K. Tamai., & O. Takeuchi (Eds.), *Researching language teaching and learning: An integration of practice and theory* (pp. 235–252). Oxford: Peter Lang.
- Nikolov, M. (2001). A study of unsuccessful language learners. In Z. Dörnyei & R. Schmidt (Eds.), *Motivation and second language acquisition* (pp. 149–170). Honolulu, Hawaii: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.
- Shizuka, T. (2007). Effects of leaning English in elementary school days on the proficiency of, and the attitude towards, the language in high school years (II). *JACET Journal*, 31–45.
- Takagi, A. (2003a). The effect of early childhood language learning experience on motivation towards learning English: A survey of public junior high school students. *JASTEC Bulletin*, 22, 47–71.
- Takagi, A. (2003b). The effects of language instruction at an early stage on junior high school, and university students' motivation. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, 14, 81–89.
- Tse, L. (2000). Student perceptions of foreign language study: a qualitative analysis of foreign language autobiographies. *Modern Language Journal*, 84(I), 69–84.
- Yashima, T. (2000). Orientations and motivation in foreign language learning: a study of Japanese college students. *JACET Bulletin*, 31, 121–133.

### 1. はじめに

新学習指導要領では、外国語活動について「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」という目標が提示されている。本節では、学習の方略的側面とは、伝達上の方略的側面に限定して述べる。この伝達上の方略的側面は、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」に関係するものである。新学習指導要領での目標によると、本報告書で上述されている「学習の伝達の側面」にあるように、中学校での、英語による積極的にコミュニケーションを図ろうとする能力や態度の基礎を養う場合とは異なり、小学校では、コミュニケーションの楽しさを実感させ、外国語によるコミュニケーション活動を体験を通して身につけ、対話的で協同的な対人関係の能力の育成を図ることに重点をおく傾向があり、この視点から、コミュニケーションへの積極的態育成を促すことになる。

しかし、本節での「方略的側面」、すなわち「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」は、言語知識を必要とせざるをえないと考える。従って、本節では、小学校外国語活動での「音声や基本的な表現に慣れ親しませる」程度の英語の目標に従って、「方略的側面」の素地を小学校で養う、という観点で考察するには限界があるので、将来、小学校英語が教科として扱われ、初歩的な言語知識や技能習得学習も想定する、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の特徴について、伝達上の方略的側面から考察する。本節では、特に高学年に向けた対処を講じる際に必要な視点として、伝達上の方略的側面、すなわち「コミュニケーション方略」に焦点をあてた小学校での英語教育プログラムの開発の原理について検討し、その問題点や今後の課題を述べたい。

### 2. 小学校英語におけるコミュニケーションの定義の問題

言語の学習と習得上、「コミュニケーション」とは何かについて、これまで、多くの研究者が議論している。例えば、Canale (1983, pp. 3-4)によると、コミュニケーションには、(1) (情報の受信者と発信者の間の) 相互作用である、(2) 情報内容や形式が予測できず、非常に創造的である、(3) context に応じて適切に言語を使用し理解しなければならない、(4) 記憶・疲労といった心理的又は他の制約を受ける、(5) 1つの目的がある (例：約束、説得)、(6) authentic language で行われる、(7) コミュニケーションの成否は、実際に何をなしたか、という実際の結果に基づいて判断される、といった特徴がある (平野, 1987, pp. 190-191)。

ここで問題になるのは、小学校英語におけるコミュニケーションをどうとらえるかということである。平成 20 年に告示された小学校学習指導要領では、外国の言語や文化について理解を深め、外国語によるコミュニケーション能力の素地を養うことを目標として小学校 5・6 年生で週 1 コマ「外国語活動」を実施することが示された。小学校英語活動では、今現在は、「小学校における英語教育の目標と内容」において、英語のスキルの向上を目標とすることより、英語を用いて言語や文化に対する理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、国際理解を深める考え方を基本としているようである。しかし、実際の小学校英語活動に関する研究では、音声上のスキル (聞くこと、話すこと) の向上を検証した研究や実践も多く、英語スキルの向上を検証することの関心も多い。また、小学校での「コミュニケーション」とは何か、また「コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度」とは何かについて、中学校以上で行われるような厳密な理論的議論は少ないように思われる。現在の英語活動としての小学校英語がいずれ、教科として英語を学習して英語の技能の向上を目標とする方向になることを視野に入れて議論されていくことと思われる。

### 3. コミュニケーション方略の定義の問題

Canale (1983)によれば、コミュニケーション能力とは、(1) 文法能力、(2) 社会言語的能力、(3) 談話能力、(4) 方略的能力、から成り立っている。4 つ目の方略的能力とは、文法、語彙、発音の知識が不足していたり、疲労、心理的要因他で思い出せなかったりして、コミュニケーションに支障をきたしたとき、コミュニケーションの修復を図ったり、コミュニケーションの効果を高めたりするためにコミュニケーション方略 (communication strategies) を使用する能力のことである (Canale, 1983, 10-11)。Færch and Kasper (1983, p. 36)は、コミュニケーション方略を、コミュニケーション上生じた問題を解決しようとする潜在的に意識的な方法である、と定義している。この方略は、コミュニケーションが途切れないように、なんとか困難な状況をきりぬけながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の

向上に役にたつ。

しかし、問題は、小学校英語は、現在、英語のルールの学習や習得としての教科ではなく、英語による体験活動であることを考慮すると、Færch and Kasper (1983)、Tarone (1977)、Dörnyei (1995) などの、コミュニケーション方略研究者が分類している方略のタイプや定義をそのまま導入するには、無理がある。しかし、実際の小学校英語活動の録画を分析してみると、英語指導教員やALTや参加している小学生が、それがコミュニケーション方略だという意識がない場合でも、上述のコミュニケーション方略のタイプの使用が認められている。「コミュニケーションに支障が生じたとき、そのとき持っている力を駆使してコミュニケーションが途切れないように、沈黙しないように、わかりやすい方法でなんらかの方略を使って困難な状況を切り抜けようとする」コミュニケーション方略の使用は、我々母語の日本語でのコミュニケーションでも使用しており、「相手の目を見て話したり、相づちを打つなどして、興味を持って、相手の話を聞こうとしたりする意欲、態度」は、小学校英語活動でも、推奨したい方略である。

#### 4. 分類と具体例

方略のタイプは、研究者によって違いがみられるし、同じ名称でも異なった方略であったりするので注意が必要である（たとえば、Færch and Kasper (1983)と Tarone (1977)の指す paraphrase の内容が異なる）。いずれにしても、コミュニケーションに支障が起きると、その問題解決には、2通りある。一つは、回避方略 (avoidance) の使用である。もう一つは、なんとかして伝達しようとする「達成方略」(achievement strategies) である。もちろん、後者が望ましい(達成方略の分類についての説明は、平野 (1987, 1993, 2005) を参照)。

#### 5. 小学校英語で使用可能なコミュニケーション方略の項目

##### 5.1 中学校の場合

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の一部として、平成 10 年（中学校）に告示された学習指導要領では、「話すことの言語活動」の「(エ) つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長くように話すこと」、また「聞くことの言語活動」の「(エ) 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること」が盛り込まれている。表 1 は平野 (2005) が提唱している、教科としての英語教育での「積極的にオーラル・コミュニケーションを図ろうとする態度」の評価項目である。

##### 5.2 コミュニケーション方略に焦点をあてた、小学校での英語教育プログラムの開発原理

###### (1) 原理 1 — コミュニケーション方略の練習教材開発の留意点

コミュニケーション方略の練習教材開発の留意点は、小学生の学習レベルより少し上の課題を用意して、なんとかして方略を使ってきりぬけなければならない状況を作ること（例、しかけとして、意図的に、わからないか難しい英単語の絵を複数見せて英語で簡単に説明させたり、また、既知の単語の絵を英語で簡単に説明させて、聞き手にどの絵のことを言っているか言い当てさせたりする。職業を英語で説明をさせたり、聞いて正しい職業の絵を言い当てさせたりする）。絵、写真、道具、イラスト、音楽など、視聴覚的に、楽しく、興味をもてる補助教材を使用し、相手に類推を促す活動を用意することが大切である。

###### (2) 原理 2 — 「態度・方略」の具体的な項目

表 1 を、小学校英語活動において言い換えると、コミュニケーション活動を実施する際の「態度・方略」の具体的な項目の例として、次のような項目になる。すなわち、

- ① 長い間、沈黙しない。
- ② 言葉につまったら、簡単な言葉（日本語使用も可）でいいかえようとする。
- ③ うまく言えないときは、聞き手に、助けを求めようとする。  
(例 What is it? How do you call it in English?, 日本語で「記者ってなんていうの」)。
- ④ 相手が理解しているかどうか、確認しようとする(例 OK? Do you understand?)。
- ⑤ 自分の理解が正しいかどうか確認しようとする(例 Am I right?)。
- ⑥ 相手の言葉がわからないとき、聞きかえそうとする (I beg your pardon? Can you say it again ?)。

表 1 「積極的にオーラル・コミュニケーションを図ろうとする態度」の評価項目

(1)	長い沈黙をおかない
(2)	(以下のように) コミュニケーションを持続しようとする
①	コミュニケーションに詰まったとき、別の言葉で言い換えようとする
②	聞き手に援助を求めて適切な語句を引き出そうとする
③	新しい情報を追加しようとする
④	自分の言っていることを相手が理解しているかどうか確認しようとする
⑤	自分の理解が正しいかどうか確認しようとする
⑥	相手の言葉が理解できないとき、説明を求めたり、聞き返そうとする
⑦	あいづちを打とうとする。
⑧	言葉につまったとき、間をとったり、つなぎの言葉を使おうとする
⑨	非言語手段（ジェスチャー、顔の表情等）を効果的に使用したり、理解しようとする
(3)	自分から進んで発言（問いかけ、応答）しようとする
(4)	相手と視線を合わせようとする

[平野 2005] ((平野, 1993) に2項目追加した)]

- ⑦ あいづちを打ったり、うなずいたりしようとする(例 日本語でも可とする)。
- ⑧ 困ったとき、日本語でもいいから、つなぎの言葉を使ってみようとする (例 ええとね…)。
- ⑨ 身ぶりや顔の表情等を使ったり、それを理解しようとする (小学校英語で頻繁に使用されている)。
- ⑩ 自分から進んで質問したり応答したりしようとする。
- ⑪ 相手の目を見て話そうとする。

## 7. 今後の課題

以上の「態度・方略」において、考慮しなければならないのは、小学校英語活動を通して何を育むのか、評価規準を明確にすることが大切である。問題点として、上記の項目が、小学生の発達段階に応じて、どのタイプがどの程度使用可能なかを明らかではない。そのためには、実証的研究を通して検討する必要がある。それによって、小学校英語で、「積極的にオーラル・コミュニケーションを図ろうとする態度」の育成を考慮したコミュニケーション方略はどのようなタイプをとりあげるのが適切であるかが明らかになるであろう。

## 引用文献

- Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J.C. Richards & R.W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp. 2-27). Harlow: Longman.
- Dörnyei, Z. (1995). On the teachability of communication strategies, *TESOL Quarterly*, 29, 55-85.
- Færch, C. & Kasper, G. (1983). Plans and strategies in foreign language communication. In C. Færch & G. Kasper (Eds.), *Strategies in interlanguage communication* (pp.20-60). London: Longman.
- Tarone, E. (1977). Conscious communication strategies in interlanguage: a process report. In H. D. Brown, A. Yorio & R. C. Crymes (Eds.), *On TESOL '77* (pp. 194-203). Washington, D.C.: TESOL.
- 平野絹枝. (1987). 「教室内コミュニケーションの指導と評価—コミュニケーション方略を中心に—」 『中部地区英語教育学会紀要』 16, 190-195.
- 平野絹枝. (1993). 「コミュニケーションにおける「態度」の指導と評価—コミュニケーション方略を中心に—」. 『現代英語教育』 6月号 (pp. 12-15). 東京: 研究社.
- 平野絹枝. (2005). 「学習指導要領における積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」 『PICOLA デジタル版英語科授業実践資料集』 理論編 3, Vol. 7 (積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成) (pp. 26-31). 東京: ニチブン.

## 1 はじめに

本稿では、小学校英語教育において導入されるべき語彙について論じる。その中で、名詞偏重を避けるべきであることを主張する。

## 2 言語習得理論の活用

このところ文法項目の習得について *natural order* の存在が議論されてきているが (Dulay, Burt, and Krashen (1982), Krashen and Terrell (1983)), 私も言語習得についてはある道筋があるという考え方に賛成である。したがって、語彙習得についても、人間には何らかの生得的能力が埋め込まれているように考えられる。してみると、小学校英語教育における語彙指導においても、語彙習得理論からの知見を取り入れる方が効率よく進むに相違ないと思うのである。

### 2.1 Network building を利用した語彙選定

*Network building* というのは Aitchson (2003) の提唱する語彙習得に関するプロセスの1つである。その提唱によると、人は語彙習得のために、*labelling* → *packing* → *network building* というプロセスを経るといふ。

*Labelling* とは、ある音連続がどの事物を示すラベルとして使用できるかを発見することである。次に、*packing* とは、1つ1つのラベルづけされた事物を、概念という箱の中に入れていくプロセスである。ラベルづけされたものを箱の中に集積して、概念が形成される。

*Network building* とは、個々の語の音韻的・意味的・統語的關係を発見してネットワーク形にするプロセスを示す。例えば、*dog* について言えば、*shepherd, bulldog, greyhound* などをまとめて意味的語彙ネットワークを形成し、*bite, bark, wag* などと共に統語的語彙ネットワークを形成する。

小学校英語教育の段階では、この *network building* を利用する指導法が有効であろう。特に、統語的語彙ネットワークの形成を助長することが大切である。なぜなら、コミュニケーションにおいて、1語文よりも複数語からなる表現の方が意思疎通に適しているからである。

複数語からなる表現については、*chunk* とか *collocation* とか呼ばれることが多く、Carter and McCarthy (1988・75) は、次のように、人は *chunk* の形で語彙を記憶し使用していると述べている。

Many theories of language performance suggest that vocabulary is stored redundantly, not only as individual morphemes, but also as parts of phrases, or even as longer memorized chunks of speech, and that is oftentimes retrieved from memory as these preassembled chunks. This prefabricated speech has both the advantage of more efficient retrieval, and of permitting speakers to direct attention to the larger structure of the discourse, rather than keeping it focused narrowly on individual words as they are produced.

なお、小学校の段階では意味的語彙ネットワークよりも統語的語彙ネットワークを重視すべきであるという主張に関して、Anglin (1970・13) が支持を与えてくれる。Anglin によると、人は5歳から10歳の間に *lexicon* の組織化を行うということである。その現象は *syntactic* → *paradigmatic* 移行と呼ばれる。例えば、*table* という語を聞くと、子どもは *eat* を連想し、大人は *chair* を連想する。同様に、*dark* に対し、子どもは *night* を連想し、大人は *light* を連想するというのである。つまり、大人は意味論的に同じ品詞の語を思考するが、子どもは統語論的に共起する語を連想するのである。

### 2.2 名詞偏重の防止

ここで注意すべきことは、*network building* のうち統語的語彙ネットワークを形成するためには、名詞だけでは不十分であるということである。*S + V* なら名詞と動詞 (及び副詞等)、*V + O* なら動詞と名詞、*Adj + N* なら形容詞と名詞、*Prepositional Phrase* なら前置詞と名詞というように、名詞以外の品詞が必須なのである。

なぜこういうことを言うのかといえば、現在市販されているテキストの中の語彙や研究開発校で指導されている語彙を見ると、名詞偏重が目立つからである。

斎田 (2007) は、市販されている3種類のテキスト (*Junior Horizon* (東京書籍)、*Kids Crown* (三省堂)、『小学校のえ



いご』(啓林館)と文部科学省の『手引』及び10校の研究開発校で指導されている語彙を分析した。そして、次のようなランク付けを行っている。

- AA ランク (テキストの4冊以上、研究開発校の7校以上に収録されているもの)
- A ランク (テキストの3冊以上、研究開発校の5～6校以上に収録されているもの)
- B ランク (テキストの3冊、研究開発校の5～6校に収録されているもの)
- C ランク (テキストの2冊、研究開発校の3～4校に収録されているもの)
- D ランク (テキストの1冊、研究開発校の1～2校に収録されているもの)

その集計によれば、AA ランクは74語、A ランクは92語、B ランクは206語、C ランクは293語で、合計すると665語である(D ランクは少数のテキストや学校のみで使用されている感じなので除外)。それらを品詞別に見ると、名詞530語、動詞66語、形容詞43語、前置詞10語、代名詞10語、その他6語である。名詞が80パーセントを占めている。

名詞偏重が望ましくないもう1つの根拠として、次にCasseli et al. (2005) による言語習得の分析を挙げることにする。彼らは、語彙の習得が文法的発達にどう影響するかを、幼児による英語とイタリア語の習得を比較した結果、その相関性が高いことを述べている。それぞれ233名のアメリカ人とイタリア人幼児が発した最も長い文を3つ親から報告して貰い、それを分析する方法がとられている。

その中で、語彙の発達につき、内容語と機能語についての報告をしている(図の中では、全体と内容語の比較になっている)。幼児たちは、年齢や個人差から50語から680語を習得している(わが国の小学校英語教育における導入語彙数に該当している点が興味深い)。習得語彙数の全体と内容語のMLU (Mean Length Utterance) を比較すると、1歳8ヶ月では3.5:1.8、2歳では3.0:2.0、2歳5ヶ月では5.0:3.0、3歳では10.8:5.5となり、数値自体は当然ながら徐々に増加している。

しかし、全体の中で内容語が占める割合は約半分あるいはそれより少し多い程度である。しかも、内容語とは、名詞、動詞、形容詞、副詞を含む範疇であり、名詞だけを指すのではない。以上のことを考慮すると、語彙導入の80パーセントを名詞が占めているわが国の現状が不自然であることが明白になってくる。

また、日本人の幼児が第2言語として英語を習得した例も参考になる。Yoshida (1978) は、3歳5ヶ月で渡米した日本人幼児の言語習得を7ヶ月にわたって観察した。2～3時間の学校生活によってその子は7ヶ月後約300語のproductive vocabulary を習得したことが判明した。それを品詞別に見ると、名詞60.6パーセント、動詞13.0パーセント、形容詞10.0パーセント、その他16.4パーセントであったという。名詞としては、飲食物(20.9パーセント、船や飛行機といった乗り物(10.8パーセント)、動物と屋外のもの(橋とかフェンスなど)(8.2パーセント)が上位であった。動詞としては、sit down, come on, please push me, take one など学校でよく使用されるものが多かったという。ここでも名詞は6割程度である。

それではどうすればいいのか。私見では、小学校で導入する語彙を600語程度とすると、名詞300語、動詞150語、その他の品詞(形容詞、副詞、前置詞、接続詞、冠詞など)150語という目安が適当であると思われる。こうすることにより、名詞偏重を避けることができるであろう。

### 2.3 Fenson et al. (1993) の習得順序を利用した導入順序

前節では選定基準や導入語彙数について検討したので、ここではその約600語をどのような導入順序にすればいいかについて論ずる。

Fenson et al. は、初期の語彙習得の順序の特徴として次の3点を指摘している。

- (1) 最初の100語までは普通名詞がほとんどである。その段階が終わると、普通名詞の割合は横ばいになり、200語からは減少してゆく。
- (2) 動詞は50語から100語くらいから増加し始め、500語くらいまで増加を続ける。
- (3) 形容詞は動詞と同じような傾向を示す。

また、Peter and de Villiers (1979・31) によると、子どもが最初に習得する50語は、身近な人、生き物、物、そして環境の変化や両親との言葉の交換 (ta=thank you, more, no, up, open) であるそうである。

以上の事実を導入順序に取り入れるなら、概略次のようになるであろう。小学生の発達段階を2学年ごとに低学年、中学年、高学年で区切って検討する。

低学年—まず100語までは身近な普通名詞を中心に導入する。その後、名詞と基本的な動詞、その他の品詞を均等に導入する。このようにして、低学年で約200語の導入を行う（目安としては、名詞140語、動詞30語、その他の品詞30語）。

中学年—中学年では普通名詞は控えめにし、固有名詞や抽象名詞の分かりやすいものを導入し始める。動詞やその他の品詞の導入を増加させる。このようにして、中学年でも約200語の導入を図る（目安としては、名詞80語、動詞60語、その他の品詞60語）。

高学年—抽象名詞などの導入とともに、少し高度な動詞や形容詞などその他の品詞の導入を継続する。このようにして、高学年でも約200語の導入を行う（目安としては、名詞80語、動詞60語、その他の品詞60語）。

#### 参考文献

- 斎田良弘. 2007. 小学校英語の指導におけるテキスト（副読本）利用の可能性. 鳴門教育大学大学院修士論文 (Unpublished).
- Aitchison, J.1994. *Words in the Mind*.Oxford: Basil Blackwell.
- Anglin, J.M.1970. *The Growth of Word Meaning*. Cambridge: MIT Press.
- Carter, R. and McCarthy, M.1988. *Vocabulary and Language Teaching*. London: longman.
- Casselli, M.C. et al.2005. A crosslinguistic study of the relationship between grammar and lexical development. *Journal of Child Language*. 32.
- Cazden, C.1972. *Child Language and Education*. New York: Rinehart and Winston.
- Dulay, H., Burt, M and Krashen, S.1982. *Language Two*. Oxford: OUP.
- Ellis, R.1986 *Understanding second language acquisition*. Oxford: OUP.
- Ervin-Tripp, S.1974 Is second language learning like the first? *TESOL Q.* 8.
- Fenson, L. et al.1993. *The MacArthur Communicative Development Inventories: user's guide and technical manual*. San Diego: Singular Publishing Group.
- Krashen, S. and Terrell, T.1983. *The Natural Approach: Language Acquisition the the Classroom*. Oxford: Pergamon.
- Mackey, W.F.1965. *Language Teaching Analysis*. London: Longman.
- Palmberg, R.1987/ Patterns of Vocabulary Development in Foreign-Language Learners. *Studies in Second Language Acquisition*. 9.
- Peter, A. and Jill, G. de Villiers.1979. *Early Language*. Cambridge: Harvard University Press.
- Taylor, B.1980. Adult language learning strategies and their pedagogical implications. In K. Croft(ed.) *Readings in English as a Second Language*. Cambridge: Winthrop.
- Yoshida, M.1978 The Acquisition of English Vocabulary by a Japanese-speaking Child. In E.M. Hatch(ed.) *Second Language Acquisition*. Massachusetts: Newbury House.

## 課題5

### 初等教育段階における英語教育プログラムの開発：1 開発原理

#### (8) 言語教育政策的側面

伊東治己（鳴門教育大学）

#### 1. 言語教育政策と小学校英語

初等教育段階における英語教育プログラムの開発に際しては、当然の事ながら、第二言語学習最適年齢をはじめとした第二言語習得（SLA）研究の知見が大きな力を発揮することになる。しかし、小学校英語教育プログラムの開発は、第二言語習得研究の成果だけに基づいて実施に移されるものではない。否それ以上に、当該国の言語政策や経済政策の一環として実施に移される場合の方が多くと考えられる。例えば、1960年代に北米で隆盛を誇った FLES（Foreign Language in the Elementary School）運動も、もとをただせば、宇宙開発ではソ連より一歩先んじていると楽観視していたアメリカが1957年10月4日のソビエト連邦による人工衛星スプートニク1号の打ち上げによって、遅れをとったことに気づき（当時はスプートニック・ショックと呼ばれた）、力強いアメリカの再生を謳い文句に展開した教育政策の結果として出てきたものであった（Andersson, 1969）。そのため、再び宇宙開発競争や軍備面でのアメリカの優位（或いは少なくとも遅れを取っていないこと）が確実となれば、そのインセンティブが失われ、次第に衰退して行ったことはよく知られている。

隣国カナダにおいても、同時期に FLES 運動が高まり、小学校から第二言語としてのフランス語教育が大々的に行われるようになった。しかし、アメリカの FLES 運動が急速に衰退して行く中、カナダの初等教育段階でのフランス語教育は縮小するどころか、イマージョン教育の開始も重なり、その後も着実に規模を拡大して行った（伊東, 1997）。その拡大を支えたのは、その当時、国内で議論が沸騰していたカナダの公用語政策であった。

言語教育政策の違いが言語教育の発展も左右した例は、韓国と日本の間にも見られる。現在の大学入試センター試験の前身である大学入試共通第一次学力試験（通称共通一次）が1979年（昭和54年）に導入されたが、導入に際してリスニング・テストも加えるかどうか、真剣な討議・調査が行われていた。最終的には、一部の試験会場で航空機の騒音等で受験条件の平等性が確保できないという理由でリスニング・テストの導入が見送られることになった。共通一次の跡を継いだセンター試験においては、2006年（平成18年）度の試験からリスニング・テストが導入された。1979年当時の問題が必ずしも解消されてはいないにも拘わらず、である。一方、お隣の韓国では、日本がリスニング・テストの導入を見送った同

じ時期から同国の大学修学能力試験にリスニング・テストが導入されている。自国の若者の英語能力を向上させるための言語教育政策の強弱がこの対照的な結果を招いたと言える。話題を小学校英語に戻すことにしよう。日本と韓国で同じように小学校英語に関する議論が沸騰した1990年代後半、韓国は1997年から小学校への英語教育の導入に踏み切った。小学校教員の研修など周到的な準備はしていたが、半ば見切り発車の面もあったことは否めない。一方、我が国は、新しく創設された「総合的な学習時間」の中での国際理解教育の一環としての「英語活動」という実に玉虫色的な導入に留まった。決して韓国の方が早期英語教育に関する研究が進んでいたわけではない。1997年と言え、今日の世界同時金融危機にも匹敵するほどのアジア通貨危機のため韓国経済も大きな打撃を被り、国際通貨基金（IMF）の管理下に入った年である。いわば、国際競争力を付ける以外に韓国が発展する方法は残されていないという強烈な危機意識に支えられた言語教育政策の結実と言えるであろう。残念ながら、バブルの崩壊を克服しつつあった日本にはその種の危機意識が無かったのである。そこに、言語教育政策と小学校英語の連携の濃淡が如実に表れていると言える。

本稿では、視点をアジアからヨーロッパに移し、その中でも今回のプロジェクトでも研究対象となっているフィンランドに焦点を当てて、言語教育政策と小学校英語教育の連携について、日本との比較を交えながら考察を加えることにする。

#### 2. 言語教育政策と小学校英語：フィンランドの場合

##### (1) 欧州連合（EU）の言語政策との関連

フィンランドの言語教育政策を論じる場合、その母体となっている欧州連合（EU）の言語政策や言語教育政策との関係に着目する必要がある。EUの加盟国は2009年2月現在で27ヶ国に昇り、23の言語が公用語として定められている<sup>(1)</sup>。EUは、「言語の多様性がEUの文化遺産である」（平尾, 2003, p.34）という観点から、域内に居住するすべての市民が母語に加えて二つの外国語を話せるような多言語使用状況を作り出すことを言語政策の基本的目的として定めている。この政策は、2002年に開催されたヨーロッパ協議会（Council of Europe）バルセロナ会議で採択された“every child in the EU should be taught at least two foreign languages from an early age”という勧告に基づいている<sup>(2)</sup>。なお、ヨーロッパ協議会は、その前

年 2001 年“The European Year of Languages 2001”と定め、言語教育の一層の推進を提唱していた。

(2) 国策としての言語教育

EU 加盟国であるフィンランドも当然、ヨーロッパ協議会の勧告を受け入れ、小学校段階での外国語教育のさらなる発展に努力している。しかも、外国語教育を国の教育政策の柱のひとつとして明確に位置づけている。例えば、国家教育委員会は今日の教育改革の柱として、次の 7 項目を挙げている<sup>(3)</sup>。

- ①The Information society
- ②Teaching mathematics and natural sciences
- ③Language teaching and internationalisation
- ④Raising the quality and the education level
- ⑤Cooperation between education institutions and working life
- ⑥Basic and in-service training of teachers
- ⑦Lifelong learning

言語教育と国際化が 3 番目に挙げられており、言語教育へのこだわりがよく理解できる。人材立国を目指すフィンランドは、次の引用に見られるように、従来から重視してきた教育の機会均等に加えて、国際化をフィンランドの教育を説明するための新たなキーワードとして設定するとともに、教育を国際競争力を育成して行く上での重要なファクターとして位置づけている<sup>(4)</sup>。

The key words in Finnish education policy are **quality, efficiency, equity and internationalisation**. Education is a factor for competitiveness.

従来は最初の三つがフィンランドの教育を特徴づけるキーワードであったが、新しく国際化が加わるようになった。それだけ国際競争力とつけることが重視されている証拠である。しかも、そのもっとも重要な手段として小学校から開始される英語教育が位置づけられているのである。

(3) Plurilingualism と小学校英語

母語に加えて二つの EU の公用語を話せるようにするという EU の公用語政策 (plurilingualism) を自国内においても実現すべく、小学校段階からの外国語教育に積極的に取り組んでいる。しかも、小学校段階から二つの公用語の学習を開始するのが望ましいとするヨーロッパ協議会の勧告を受けて、子ども達が英語に加えて他の EU 公用語を学習できる体制を整えている。既に課題 4 のフィンランドにおける小学校英語教育の分析の中でも紹介したように、総合学校と高等学校に限定した場合、図 1 のような枠組みで外国語教育が行われている (FNBE, 2004b, p.233)。

図 1 から明らかなように、フィンランドの子ども達は、

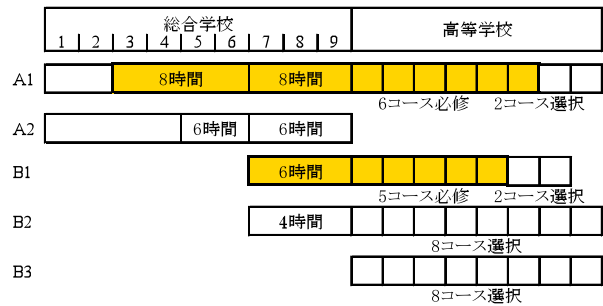


図1 外国語教育の枠組み(時間数は週累積時間数)

希望すれば小学校段階から二つの外国語が学習できることになっている。そのうちひとつは必修となっており、2005 年現在で 89.5%の児童が英語を A1 言語として履修している。その一方で、国際語としての英語の地位が EU 域内だけでなく、世界的な規模で高まるにつれて、第二外国語の履修率は、国家教育委員会による促進運動にも拘わらず、徐々に下降しているのが現状である(Hall, n.d.)。この傾向を受けて、国家教育委員会は小学校段階での第二外国語教育の推進に力を入れているが、必ずしも期待どおりの成果が上がっていないようである。

(4) CLIL の推進：経済政策との連携

第二外国語の履修率が伸び悩んでいる一方で、外国語で通常の教科を教える試みである CLIL (Content and Language Integrated Learning) には、今熱い視線が注がれている。CLIL とは、基本的には言語 (特に英語) と教科内容の統合を図る教育法で、カナダで多大な成果を収めているイマージョン教育 (伊東, 1997) の上位概念として規定されており (Marsh & Langé, 1999)、今日、フィンランドのみならずヨーロッパ各地の初等教育において急速な拡大を見せている。CLIL へ熱い視線が注がれている背景としては、改訂学習指導要領 (FNBE, 2004a) において、CLIL が第二外国語 (実質的にスウェーデン語) での教科指導とともに、初めて学校外国語教育の選択肢として明記された点を挙げることができる。日本でもごく一部の私立小学校で英語イマージョン教育の取り組みがなされているが、フィンランドでは CLIL が学校教育 (殆どが公立) の中ですでに市民権を獲得しているのである。

国家教育委員会(FNBE, 2004a, p.270)は、CLIL 推進の目的を以下のように説明している。

The central objective is that the pupils be able to acquire a firmer language proficiency than in lessons reserved for the language in normal instruction.

つまり、3 学次から週 2 時間の割合で実施されている A1 言語としての英語教育で培われる英語力以上の英語力を育成することがその中心的な課題となっている。フィンランドの国際競争力を上げるべく、急速に進展している国際化に対応できる人材の育成が CLIL に期待されているのである。

CLILの実施形態はさまざまで、A1言語として英語を学んでいる子ども達の一部が、学校で学習する教科の一部を英語で学習する形態から始まり、クラス全体がCLIL学習集団として位置づけられ、一部またはほとんどの教科を英語で学習する形態、さらには学校全体がCLIL実施校として位置づけられ、ほとんどすべての教科を英語で学習する形態まで、多様な形態を包含している。特に最後の形態は、実質的にはインターナショナル・スクールとして機能しており、現在、ヘルシンキ、バンター、エスポー、ツルク、ポリ、タンペレ、ユバスキュラ、オウルなど、主要都市に設置されている。

インターナショナル・スクールといえども、公立学校として設置されており、当然、授業料など発生しない。教材や給食も含めてすべて無料でCLILが提供されている。主要都市に設置されている理由は、インターナショナル・スクールの制度が国際競争力を高めるというフィンランドの経済政策ともリンクしているからである。つまり、優秀な研究者や技術者を世界中から呼び寄せるための経済戦略のひとつとして考えられているからである。例えば、二人の子どもを持つ若手のアメリカ人研究者が東京とヘルシンキにある研究所から招待を受けたと仮定しよう。どちらも首都圏に位置しており、給料は同額で、勤務条件も同一と仮定しよう。問題は子どもの教育である。東京では二人の子どもをインターナショナル・スクールで学ばせるためには年間200万円以上の授業料がかかってしまう。一方、ヘルシンキの場合は無料である。この優秀な研究者がどちらの研究所を選ぶかは一目瞭然である。経済政策と言語教育政策と学校教育の統合がそこに絶妙な形で実現されている。これと同じような政策をとっている国がアジアにある。日本を抜き、アジアで一番豊かな国になったシンガポールである。

### 3. 言語教育政策と小学校英語：日本の場合

#### (1) 言語教育政策と英語教育の接点

日本においても、インターナショナル・スクールを巡るフィンランドの事例にも匹敵する程の経済政策と言語教育の融合が計られた時期もあった。明治時代前半に実施された大学レベルでの英語イマージョン教育である。もちろん、当時はイマージョン教育という概念は生まれていなかったが、富国強兵政策のもと、お雇い外国人教師を英語圏から招聘して実施された英語での大学教育は、まさに英語イマージョン教育そのものであった。その後、日本語の地位や機能が向上するにつれて、英語イマージョン教育は衰退していくことになる。やがて、高等教育への進学率が向上して行く中で、英語教育は、国家の国際競争力を高めるためというより、上級学校への進学するための準備教育、具体的には受験英語という形での英語教育が幅をきかせることになる。さらに、日本の国力

が強化されるにつれて、英語教育の必要性を軽視する考え方も生まれ、藤村作（東大教授で国文学者）の英語教育廃止論へと結実して行くことになる（語学教育研究所、1962, pp.79-80）。

日本の経済政策と言語教育の連携がクローズアップされるのは、戦後になって、昭和31(1956)年に当時の日経連が「役に立つ英語」への要望書を時の政府に提出してからである。「新制大学卒業生の語学力は一般的にいて、就職のための常識面に片寄り、基礎的な掘下げ、原書などを読みこなす研究態度、勉強方法に欠けているなどの点があげられている」(語学教育研究所、1962, p.82)という厳しい指摘を受け、文部省も昭和35年に英語教育改善協議会(会長・市河三喜)を発足させた(伊村、2003, p.284)。

その後は、昭和49(1974)年に、当時の参議院議員平泉渉氏が「わが国の国際的地位、国情にかんがみ、わが国民の5%が、外国語、主として英語の実践的能力をもつことがのぞましい」として外国語教育の改革の必要性を指摘し、上智大学の渡部昇一教授との間に「英語教育大論争」を引き起こしたり(平泉・渡辺、1975)、平成12(2000)年には当時の小淵総理の私的諮問機関である「21世紀日本の構想」懇談会が英語公用語論を提唱したり、それを受けて当時の民主党が「英語の第二公用語化についての提言」(中間まとめ)を発表し、その中で「将来、国語(日本語)に次ぐ第二公用語として英語が位置づけられることを展望して、小学校から英語教育を必修化するとともに、幼稚園・保育所においても、可能な限り英会話に触れる機会を設けることができるよう支援」することを提案したこともあったが<sup>(5)</sup>、直接、国の政策が小学校英語に影響を与える段階までには達しなかったと言えるであろう。

#### (2) 小学校英語の導入

政府レベルでの言語教育政策との関連で小学校英語教育が注目を浴びるようになったのは、一連の研究指定校での実験を経た後に、平成10(1998)年に改訂された小学校学習指導要領において「英語活動」が新規に創設された「総合的な学習の時間」において実施可能な国際理解教育の一環として位置づけられてからであろう。引き続き、文部科学省は平成14(2002)年7月に「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想—英語力・国語力増進プラン—を<sup>(6)</sup>、続いて平成15(2003)年3月には「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」を発表し<sup>(7)</sup>、小学校での英会話活動の充実を謳った。

しかし、この間も、小学校に英語を導入することの是非を巡って議論は白熱し、多数の報告書や著書が刊行され、国民の間にこれまでにない小学校英語への関心が湧き起こってきたことは記憶に新しいところである(例えば、茂木、2001; 小学校英語指導者認定協議会、2004; 大

津, 2004 ; 大津, 2005)。この国民的議論は、平成 20 年 3 月に公示された新学習指導要領で「外国語活動」が小学校高学年（5 年次）から週 1 時間の割合で必修化されることが確定したことで、一応の収束を見る形になっている。

しかしながら、なぜ、5 年次から必修化されなければならないのかについては、総合的な学習の時間の中での実施では保証できなかった教育の機会均等を保証すること以外には、未だに明確な答えは出されていない。5 年次が外国語学習導入のための最適時期であるという議論も聞かれない。現状では、英語教育は中学校からでも遅すぎないとする小学校英語反対派の主張（例えば、鳥飼, 2004）に対して十分な説明ができていないと言わざるをえない。

### （3）小学校英語と言語教育政策

本節では、今回（平成 20 年 3 月）の学習指導要領の改訂で示された外国語活動の必修化の先に当然予想される小学校英語の教科化に対して、あくまで個人的な見解として（プロジェクト・チームとしてのコンセンサスが得られているわけではない）、言語教育政策との関連で理論付けを試みることにする。具体的には、初等教育、言語教育、外国語教育の立場から教科化の根拠を提示していくことにする。

#### 1) 初等教育の立場から

小学校英語を教科にするには、外国語（英語）も算数や理科と同様に子ども達の陶冶に貢献できるという立場を鮮明にする必要がある。この点では、北米での第一期 FLES 運動に対して理論的根拠を提示した Stern (1967, pp.8-9)の主張は今も大切にしたい。

The learning of a second language must be regarded as a necessary part of *total personality formation* in the modern world, since it should enable a person to live and move freely in more than one culture and free him from the limitations imposed by belonging to, and being educated within, a single cultural group and a single linguistic community. It is an essential not only from the point of view of society, but also for the individual himself and his personal education. (*italics added*)

小学校英語は、けっして効率論の立場から論ずるべきではない。外国語学習の効率性という観点からすれば、中学校からでも遅すぎないし（鳥飼, 2004）、小学校からでも早すぎないというスタンスが妥当と思われる。あくまで、初等教育の柱としての妥当性を前面に出すべきだと考える。

#### 2) 言語教育の立場から

言語教育の立場からは、小学校の段階から母語とは異なる言葉を学習することの意義、心が柔らかいうちに他

文化に触れることの意義を、異文化理解を通じた他者性の理解という点（この点は上述の Stern の主張と重なる）と、子ども達の言語生活を豊かにするという観点、つまり、EU が進める plurilingualism (Council of Europe, 2001, pp.4-5)の観点から押さえておきたい。この plurilingualism に対しては、複数言語主義や複言語主義などの訳語があてがわれているが、まだ定訳がないのが現状である。言語教育という観点からは、複数言語活用能力と訳すのがもっとも適切と考えている。その点とはともかくとして、よく比較対象概念として位置づけられる multilingualism が母語話者の言語能力を規準にした減点法的概念であるのに対して、plurilingualism は母語しか話せない状態を規準にした加点法的概念であるという点がもっとも重要な点である。

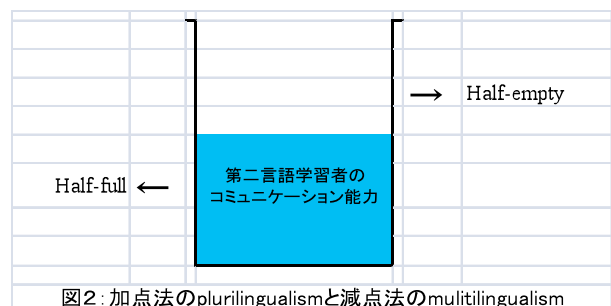


図 2 がいみじくも示しているように、コップに水が半分入っている状態（英語を少し知っている状態）を half-full と見るか、half-empty と見るかの違いであり、この違いは小学校英語教育プログラムを開発していく上で極めて重要な意味を持っている。早く始めれば母語話者並みの発音が身につくという発想（multilingualism）よりは、英語の単語ひとつ知っただけでも子どもの言語生活はそれだけ豊かになるという発想（plurilingualism）の方が、日本の小学校での英語教育を支える理論としてはより適切と考えるからである。

#### 3) 外国語教育の立場から

外国語教育の立場からは、小学校英語が日本の外国語教育の適正化と充実に寄与する点を強調したい。まず、適正化については、次の図 3 を見ていただきたい。

	小学校	中学校	
①	算数	数学	現状
	mathematics		
②	小学校英語	中学校英語	将来
	English		
③		英語	現状
		English	
④		算数 数学	架空
		mathematics	

図3: 小学校英語と外国語(英語)教育の適正化

よく、小学校英語は中学校英語の先取りをすべきではないという意見が聞かれる。今日のように、一応中学校 1

年次が英語教育の開始学年と定められている場合においてはそうかもしれない。しかし、現在中学校から行われている英語教育の中には小学校段階の方がふさわしい内容が含まれている点も事実であろう。その結果、現在の中学校での学習内容は必ずしも中学生の知的発達段階にマッチしているとは言い難い内容も含まれていると言える。すなわち、中学校1年次は英語教育の観点からすれば、入門期であるが、ピアジェの発達段階からすれば、形式的操作ができる段階であり、情意面の発達からすれば思春期に当たる段階である。このズレが現在の中学校での英語指導を難しくしている点も見逃せない。架空の話として、図3の④のように中学校から算数と数学 (mathematics) を教えるとしたら、中学生はどう感じるであろうか。本当に目を輝かせて授業に望むであろうか。現在の中学校英語教育は、極端な話をすれば、まるで中学校から算数と数学を教えているようなものである。mathematics の算数に当たる部分が中学校英語に含まれているはずであり、小学校英語の教科化に際しては、算数に当たる部分を適格に把握して、小学校段階へ再配置することが必要になってくる。その際に、必要となるのが、課題5で示された学習の言語的側面、認知的側面、伝達の側面、社会的側面、情意的側面、方略的側面、語彙的側面で明らかにされた知見である。

次に、外国語教育の充実という点については、次の図4を見ていただきたい。

	小学校	中学校	高校	大学
現 状		英語教育		第二外国語
		英語教育(必修)	選択	選択
将 来			第二外国語	第二外国語
				第二外国語
				第三外国語

図4: 小学校英語と外国語教育の充実

現状では、第二外国語は、多くの場合、大学で履修可能である。と言うことは、大学に進学しなければ、第二外国語は履修できないということになる。大学進学率を考えれば、高校生の半数近くが第二外国語を学ぶことなく学校教育を終えることになる。中学校から第二外国語が学習できる韓国とは大きな違いがそこにある。さて、小学校から英語教育を開始することによって高等学校から第二外国語、大学からの第三外国語の導入が容易になる。仮に小学校3年次から英語教育を開始するとして、義務教育段階の7年間で実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことができる。高校での英語教育は、完全に選

択制とし、英語を学習しない権利も生徒に保証することが肝心である。選択制にすることによって、高校に入れば、既に興味を失った英語に代わって韓国語や中国語が学習できる環境を整えることができるし、高校の英語教育それ自体をより学習者のニーズにあったものにすることができる。今回(平成20年12月)発表された高等学校学習指導要領改訂案<sup>(8)</sup>で示された「授業は原則英語で行うこと」という縛りより、はるかに現実に合致した選択肢と考えられる。もちろん、語学の才能に恵まれた生徒は、英語に加えて第二外国語も学習できるようにする。

さらに、小学校3年次から英語教育を導入すれば、小・中・高それぞれの段階で英語を媒介とした国際交流が可能となる。同じ世代の若者と英語を媒介とした交流が可能となり、学校教育のグローバル化を促進できる。教室の中だけでの国際理解ではなく、同世代の若者と交流することによって得られる国際理解の方がたとえ回数が少なくてもその教育効果は格段に大きいと考えられる。「日本においても、外国語としての英語教育のみならず、多様な言語学習の機会を与えるべきであろう。世界45カ国の調査結果によれば、英語一辺倒の国は、フィリピンと日本のみである。特に、アジア諸国の言語学習も取入れるべきではなかるうか。」という平尾(2003, p.54)の指摘は傾聴に値する。

#### 4. まとめ

先日のNHKの特集番組「沸騰都市」で世界中から優秀な研究者を集めて人材立国を目指すシンガポールが取り上げられていた。その中で、リー・シェンロン首相(父親はリー・クアンユー元首相)は、日本の「根回し」に言及し、シンガポールでも「根回し」はするが、日本のように時間はかけないときっぱり言い切っていた。そこには、国民の信頼を勝ち得ているという強い自信がみなぎっていた。思えば、昭和61(1986)年、臨時教育審議会第二次答申で「英語教育の開始時期についても検討する」とされてから、早四半世紀が過ぎようとしている。「根回し」にしては長すぎると言わざるを得ない。今回(平成20年3月)の改訂でも、文部科学省は小学校英語のソフトランディングを選択した。確固とした言語教育政策が欠落していたことが、小学校への英語教育の導入にこれだけ長い時間がかかり、今後もかかろうとしている大きな理由と考えられる。その意味でも、小学校英語教育プログラムの開発に当たっては、高等学校(さらには大学)までも見通した言語教育政策を確立することが急務であろう。本稿での議論がそのための触媒の役目をするようになることを切に希望する。

注

(1) <http://europa.eu/languages/en/home>.

- (2) [http://ec.europa.eu/education/languages/eu-language-policy/index\\_en.htm](http://ec.europa.eu/education/languages/eu-language-policy/index_en.htm).
- (3) <http://www.edu.fi/english/pageLast.asp?path=500,4699,4762>.
- (4) <http://www.oph.fi/english/SubPage.asp?path=447,4699>.
- (5) <http://www.dpj.or.jp/news/?num=8873>.
- (6) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm#plan](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm#plan).
- (7) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/03/03033102.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf).
- (8) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/081223/002.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/002.pdf).

#### 引用文献

- Andersson, T. (1969). *Foreign languages in the elementary school : A struggle against mediocrity*. Austin: University of Texas Press.
- Council of Europe. (2001) *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- FNBE (Finnish National Board of Education). (2004a) *National core curriculum for basic education 2004*. Helsinki: Author.
- FNBE (Finnish National Board of Education). (2004b) *National core curriculum for upper secondary schools 2003*. Helsinki: Author.
- 語学教育研究所編(1962)『英語教授法事典』開拓社.
- Hall, C. (n.d.). Recent developments in Finnish language education policy: A survey with particular reference to German. Retrieved 21 February 2009 from <http://www.gfl-journal.de/3-2007/hall.html>.
- 平泉渉・渡部昇一(1975)『英語教育大論争』文藝春秋.
- 平尾節子(2003)「EU(ヨーロッパ連合)における言語政策の研究ーギリシャの外国語教育ー」『言語と文化』No.8, 29-57.
- 伊東治己(1997)『カナダのバイリンガル教育ーイマーション・プログラムと日本の英語教育の接点を求めてー』溪水社.
- 伊村元道(2003)『日本の英語教育 200 年』大修館書店.
- Marsh, D. & Langé, G. (Eds.) (1999) *Implementing content and language integrated learning*. Jyväskylä: University of Jyväskylä.
- 茂木弘道(2001)『小学校に英語は必要ない。』講談社.
- 大津由紀雄編(2004)『小学校での英語教育は必要か』慶應義塾大学出版会.
- 大津由紀雄編(2005)『小学校での英語教育は必要ない!』慶應義塾大学出版会.
- 小学校英語指導者認定協議会編(2004)『どうなる小学校英語ー「必修化」のゆくへ』アルク.
- Stern, H. (1967). *Foreign languages in primary education*. Oxford: Oxford University Press.
- 鳥飼玖美子(2004)「小学校英語教育ー異文化コミュニケーションの視点から」大津由紀雄編『小学校での英語教育は必要か』(pp.187-217)慶應義塾大学出版会.



## 1. はじめに

中学・高等学校における英語教育実践は教室における英語科教員の「個人的な営み」であると同時に、文部科学省の教育政策のもとで実施される「組織的な営み」でもある。その組織の分析単位は、全国レベル、都道府県レベル、市町村レベル、学校レベル、があり、重層的な組織構造として捉えることができる。どのレベルも英語教育実践を司る実践共同体であり、そのなかで組織構成員（英語科教員を含む関係者）はよりよい英語教育を目指した「文化的実践」（佐伯，1995）に携わり、意識的にも無意識的にもそれぞれの共同体に特有の英語教育文化を創造・維持・継承している。したがって、英語教育実践は文化的な営みとして地域や学校により多様な特色を見せる。

このように文化的実践として英語教育を捉えるならば、英語教師（小学校教員の場合、英語指導者として）の成長とは、英語教育実践に関わる知識や技能の獲得とその実践への適用という行為以上のものである。「優れた知識や指導力」が当該校の英語教育実践において必ずしも受け入れられるとは限らない。英語教師は英語教育実践が営まれている場に働きかけることではじめて自身が立つ位置に気づかされ、自分が何をすべきかについて悟りはじめる。それはその場に存する物的・人的環境との関係の中で理解されるものである。このような知的作業は実践活動への参加なくしては成立し得ない。そして、参加の度合いが深まれば深まるほど、英語教師自身が住まう環境に関する理解も深まり、そうなれば環境へのアプローチの仕方が変わっていく。すなわち、英語教師は与えられた環境の中で何をどのように使い、いかに子どもや同僚教師に関わっていくか、といった道具や他者との関係を編み直していく。そのように自分にとっての環境を意味づけると同時に、環境から自身も意味づけられる。それが英語教師のアイデンティティであり、道具や他者との関係の仕方を変容させることで、自身のアイデンティティも変容していく。同様に同じ環境の中で英語教育実践に参加する英語教師も環境と自身の関係づくりを展開し、お互いの関係づくりの相互作用を通じて実践共同体(community of practice)である英語科組織自体も再編を繰り返すのである(c.f. レイヴ&ウェンガー, 1993, pp.21-36)。

このように関係論的視点から英語教師の成長を捉えれば、それは英語教師個々人が与えられた環境において、そこに存する道具や他者との関係を編み直すことを通してよりよい英語教育実践を展開する社会的過程ということになる。またこの過程は彼・彼女が参加する実践共同体の再編と表裏一体の関係にある。そう考えれば、従来、英語教師の成長とみなされてきた、指導力や英語運用力の向上といった英語教師個人の指導行為の可視的な変容は、英語教育実践において他者や環境に囲まれそれと関係を築く社会的行為の、ほんの側面に過ぎないということになる(加藤・有元, 2001, p.4)。

ところが、英語教育研究や実践に関わるさまざまな言説はこれまで「個人的な営み」として英語教育実践を捉える傾向があり、特に学校レベルの「組織的な営み」としては十分に議論されてこなかった感がある。もちろん、ここで「個人か組織か」といった二者択一的な論議をしたいのではない。これらの営みは英語教育実践の二側面であり、両者の相互関係のなかで英語教育実践が形成されると捉える方が自然である。ここでは「英語科教員個々人と英語科組織との相互構成的な関係を軸に当該校の英語教育を文化的実践としてデザインしていく営み」を「英語科経営」(山森, 2007)と呼び、2011年に必修化される小学校における外国語活動の実施について英語科経営の観点からその方向性について論じる。もちろん英語教育の専門集団によって担われる中学・高等学校の英語科教育と同じように英語科経営の観点から、教員の専門性や実施体制が異なる小学校の外国語活動を検討するには注意を要する。しかし、外国語活動も小学校教員の個人的な営みと当該校の組織的な営みとの関係のなかで実施されることを考慮すれば、必ずしも外的外れではないと考える。

## 2. 小学校における英語科経営の視座—外国語活動実施に関わる3つの問題

小学校において外国語活動が必修化される現実をふまえ、われわれは①小学校教員の英語指導者としての成長、②外国語活動の目標達成、③外国語活動の実施体制、に関わる問題について検討していく必要がある (c.f. 学校臨床学の3つの対象領域：近藤・志水, 2002, pp.33-36)。①は小学校教員個々人の英語指導者としての授業実践力をいかに育てるかという問題、②は学校現場において外国語活動の目標にかなった実践をいかに進めていくかという問題、③は外国語活動を実施するための教員同士の組織体制をいかにつくっていくかという問題、である。これらの問題は、①から③に進むにつれ、個人的な問題から組織的な問題へと変化する。以下それぞれの問題についてさらに具体的に述べる。

## 1) 小学校教員の英語指導者としての成長

前述したように教師の成長を、教師個々人が与えられた環境において、そこに存する道具や他者との関係を編み直すことを通してよりよい教育実践を展開する社会的過程と捉えた場合、小学校教員の英語指導者としての成長はどのように捉えられるのであろうか。一般的に、中学・高等学校の英語科教員の英語指導者としての成長とは「英語指導力の向上」「英語授業を改善する」と表現されるように、英語指導の「力量向上」を意味している。一方、小学校教員の英語指

導者としての成長とは「英語指導力の獲得」「英語授業ができるようになる」と表現されるように、英語指導の「力量形成」といった意味合いが強い。すなわち小学校教員と中学・高等学校英語科教員の英語指導者としての成長の意味合いは現時点では異なるものと考えられる。それはまた、中学・高等学校に比べ、小学校の英語指導の歴史や文化は浅く、外国語活動のための実践共同体が十分に確立していないことを意味する。すなわち、教員が実践に参加し関係を編み直していく対象である他者や道具といった社会文化的な環境が未成熟なのである。

## 2) 外国語活動の目標達成

2008年3月小学校学習指導要領が改訂され、外国語活動の目標が提示された。小学校教員にはこれまで指導経験がない外国語活動は未知の部分が多い。同時に小学校教員はその目標を達成する方向で勤務校の外国語活動に取り組んでいくことになるが、外国語活動が実施される状況は地域や学校または学年や学級によって異なる。このような中で、市販の指導マニュアルや教材を用いて外国語活動の目標が達成できるほどその指導は単純・容易なものではない。小学校教員は学校・学級の状況と与えられた環境の中で計画→実施→評価→省察というプロセスを通じた試行錯誤を繰り返し、よりよい実践を模索していくことになる。ただし、日本の英語教育界に近年普及したアクションリサーチにおける仮説検証を柱にした「問題解決」のアプローチではなく、学校現場の現実から捉えた教師の知のあり方やその成長を考えていくべきである。教師が日々直面している現実が研究者の知識や専門用語では語り尽くせないほど複雑である。そのような現実において「問題解決」がそう容易でないことは想像に難くない。教師の発達(Teacher development)に関する最近の研究では、教師が日常体験する「驚き(surprise)」(Schön, 1983)、「問い(inquiry)」(Freeman, 1998)、「戸惑い(puzzles)」(Allwright, 2003, 2005)を出発点とした、実践現場に関する「状況理解」の重要性が指摘されている。

## 3) 外国語活動の実施体制

新しいカリキュラムとして外国語活動を実施するために、小学校教員同士の組織体制を構築する必要がある。たとえば、英語専科教員や外国人講師の雇用、教員間の協働、校内研修会の開催など、外国語活動を実践していく上で必要な組織的な仕組みづくりが挙げられる。しかし、小学校において外国語活動がなされる土壌は中学・高等学校のそれとはかなり性質を異にする。このような違いを生起させる要因として、例えば小学校児童の発達段階、小学校では基本的に学級担任制が採用されていること、地域のボランティアや外国人など多様な背景をもつ人材が授業を担当していること、などが挙げられる。そのため中学・高等学校とは性質の異なる英語教育がなされ、小学校に特徴的な実施体制上の課題が存在していると思われる。

以上の3つの問題は個別に存在しているのではなく相互に重複・関連している。その根本には、外国語活動を担う小学校教員個人に求められる力量が不明確で、中学校・高校の英語科教育の指導法や指導体制が必ずしも参考にはならないという背景がある。すなわち、外国語活動について語るための知識や場が整っていないのである。

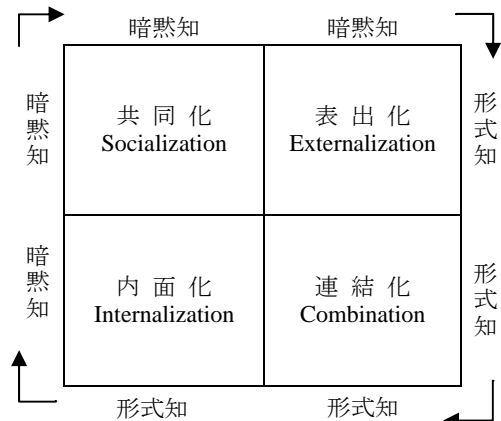
## 3. 知識創造の経営と小学校における英語科経営

小学校教員が外国語活動について語るための知識や場をどのようにつくることができるであろうか。それを検討するうえで野中(1990)や野中他(1996, 1999)の知識創造の経営論が参考になる(山森, 2004)。野中の経営論は「個人レベルから始まり、メンバー間の相互作用が、課、部、事業部門、そして組織という共同体の枠を超えて上昇・拡大していくスパイラル・プロセス(野中他, 1996, p.108)」という、大型企業における組織的知識創造の過程を想定したものである。したがって、当該小学校の教員集団でなされる英語科経営に無批判にあてはめるには注意を要する。しかし、個と集団の関係のダイナミズムのなかで組織が知識を自律的に編み上げていく過程を説明しているという点で、同理論は、外国語活動という小学校教員にとって未知の指導技術を場を同じくする同僚教員とともに創り上げていく術を検討する上では示唆的である。以下、簡潔に野中の経営論について説明し、それをもとに外国語活動のための英語科経営のあり方を想定する。

野中は人間の知を形式知と暗黙知の2つに大別する。前者の形式知は「言葉や文章で表現できる客観的で理性的な知」のことであり、コンピュータやデータベースといった情報技術(IT)を用いて簡単に編集や蓄積ができる知識であり、一方、後者の暗黙知は「言葉や文章で表すことの難しい主観的で身体的な知」のことであり、具体的には「思い、視点、メンタル・モデルや、熟練、ノウハウなど」があげられる(野中他, 1999, p.36)。このような形式知と暗黙知の関係は排他的なものではなく相互循環的あるいは相互補完的な関係にあり、両者がある関係の中で相転移することによって知識が拡張されていく(野中, 1990, pp.56-57)。この暗黙知と形式知が相互に変換することでもたらされる知識創造の営みはその内部に葛藤やエネルギーを秘めており「連続と非連続を往還する創造的で弁証法的なプロセス(野中他, 1999, pp.36-37)」である。このプロセスにおいて新たな知が「共同化(Socialization)」「表出化(Externalization)」「連結化(Combination)」「内面化(Internalization)」という4つの知識変換モード(SECIモデル: 図参照)によって生み出されるという(野中他, 1999, p.37)。以下、野中他(1999, pp.37-39)にもとづき知識創造の4つのプロセスについて説明する。

まず「共同化」は「経験を共有することによって、他者のもつ暗黙知を獲得する(p.37)」プロセスである。小学校外国語活動を例に考えると、外国語活動の授業実践を観察し合うことを通して同僚が使った指導方法や教具・教材あるいは学校外の他者の経験（例えば市販の指導方法・教材）を見様見真似で自分の授業実践に取り入れる経験的な過程に相当する。この過程のなかで新たな意味（「驚き」「問い」「戸惑い」）の生成を体感する。次に「表出化」は「組織的知識創造で最も重要な、暗黙知を明確な言語ないし概念として表現する(p.37)」プロセスである。ここでは同じ場を共有する者同士が「対話」を通して、暗黙知を第三者にも理解できる明瞭な言語や図などに変換する。外国語活動の実践経験を同僚と語り合うことで、自身の身体で感じた「驚き」「問い」「戸惑い」が言語化される段階である。さらに「連結化」は表出化によってさまざまに言語化された形式知の断片を収集、分類、整理、体系化し、新たな形式知へとまとめるプロセスである。外国語活動の経験を通じて体感された「驚き」「問い」「戸惑い」が言葉として統合的かつ体系的に整理され、将来に向けての「課題」「方向性」あるいは明確な「目標」「カリキュラム」「授業計画」へとまとめられる段階である。この段階での知識は場を同じくする同僚教師による共同作業にもとづき理解され編集されたという意味で「集団の知」でもある。そして、最後の「内面化」は以上の過程を通して頭で理解した知識を、あらためて体験を通して自己の身体に暗黙知として取り込むプロセスである。前段階で体系化し集団の知として拡張した外国語活動を改めて身体を通して体験する段階である。

以上の4つのプロセスを通して「当初個人がもっていた暗黙知は、集団や組織に共有・正当化されて増幅されていく(p.39)」。外国語活動にたとえば、その授業実践に関わる暗黙知と形式知が循環的に変換されると同時に、外国語活動に関する教員個々人の知識が集団の知識へと拡張される。そして、その学校で共有される外国語活動の歴史や文化が生まれる。それはすなわち外国語活動の実践共同体という場の誕生を意味し、さらに4つのプロセスが継続的に循環することで同実践共同体の歴史と文化が発展的に継承されていくと考えられる。



【図. 4つの知識変換モード】  
(野中他(1996, p.93)の図 3-2 を複製)

#### 4. さいごに—小学校における英語科経営の方向性

4つのプロセスの中でも、暗黙知と形式知の変換がなされる「表出化」と「内面化」は野中(1990, p.62)が「知の創造のダイナミズムを内在させ、知の創造を最も豊かに生成させる可能性を秘めている」と述べるように、外国語活動に関わる知識を組織的に拡張するための英語科経営の重要な契機でもある。外国語活動の経験を通して教員が身体に感じた「驚き」「問い」「戸惑い」をいかに言語化するか（表出化）。また、あらたに整理・体系化した目標やカリキュラムをいかに個々の教員に身体化していくか（内面化）。そのための組織体制づくりが求められる。

#### 引用文献

- 加藤浩・有元典文(編著). (2001). 『認知的道具のデザイン』東京: 金子書房.
- 近藤邦夫・志水宏吉 編. (2002). 『学校臨床学への招待—教育現場への臨床的アプローチ—』京都: 嵯峨野書院.
- 佐伯胖. (1995). 「文化的実践への参加としての学習」佐伯胖他(編)『学びへの誘い』(pp.1-48) 東京: 東京大学出版会.
- 野中郁次郎. (1990). 『知識創造の経営 —日本企業のエピステモロジー』東京: 日本経済新聞社.
- 野中郁次郎・遠山亮子・紺屋 登. (1999). 『知識創造企業』再訪問『組織科学』33(1), 35-47.
- 野中郁次郎・竹内弘高(梅本勝弘訳). (1996). 『知識創造企業』東京: 東洋経済新報社.
- 山森直人. (2007). 「学校英語教育実践の社会的構成—英語科経営の分析枠組みを求めて—」『鳴門英語研究』20, 1-17.
- 山森直人. (2004). 「情報変換活動としての英語科経営に関する試論」『鳴門英語研究』18, 23-40.
- レイヴ, J. & ウェンガー, E. (佐伯胖 訳). (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』東京: 産業図書.
- Allwright, D. (2005). Developing principles for practitioner research: The case of Exploratory Practice. *The Modern Language Journal*, 89(iii), 353-366.
- Allwright, D. (2003). Exploratory Practice: rethinking practitioner research in language teaching. *Language Teaching Research*, 7(2), 113-141.
- Freeman, D. (1998). *Doing Teacher Research: From Inquiry to Understanding*. Canada: Heinle & Heinle Publishers.
- Johnson, K.E. (2006). Sociocultural turn and its challenges for second language teacher education. *TESOL Quarterly*, 40(1), pp.235-257.
- Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.

1. タイトル 「果物の言い方を知ろう」の導入と活動例

2. 本時で使用する単語と会話文

(1) 単語

banana, melon, peach, apple, orange, strawberry, cherry, pear, pineapple, watermelon, lemon

(2) 会話文

① What is this?

② It is an apple.

3. 準備

【教師】果物の絵カード (banana, melon, peach, apple, orange, strawberry, cherry, pear, pineapple, watermelon, lemon)

絵カードと同一の絵が描かれているスモールカード (単数用)

ハンカチ

ハエたたき (※ゲームで使用する)

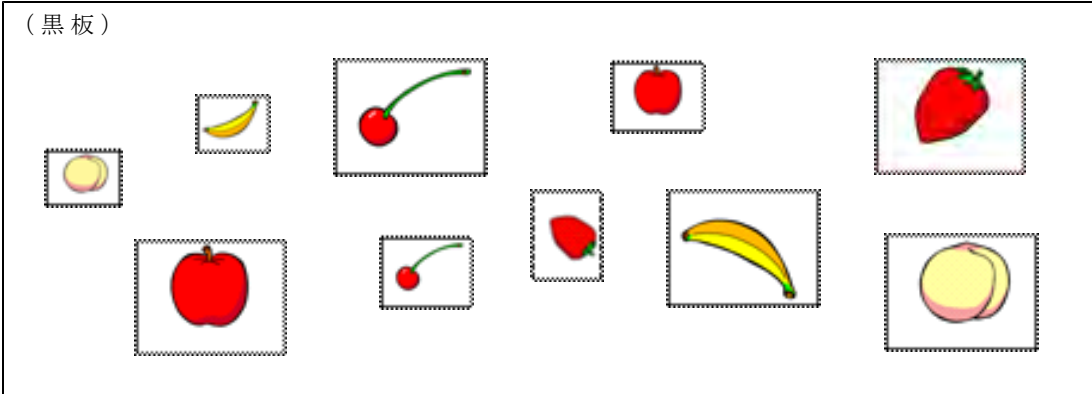
4. 展開

活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>1. 果物の絵カードで復習をする。</p> <p>T: banana, melon, peach, apple, orange, strawberry, cherry, pear, pineapple, watermelon, lemon</p> <p>C: banana, melon, peach, apple, orange, strawberry, cherry, pear, pineapple, watermelon, lemon</p> <p>2. 本時のねらい</p> <p>(1) 会話のモデルを提示する。</p> <p>T: (バナナの模型をハンカチで隠して)。 What's this?</p> <p>C: It's a banana.</p> <p>(果物を別のものに変えて練習する)</p> <p>T: (リンゴの模型をハンカチで隠して) What's this?</p> <p>C: It's an apple.</p> <p>(2) 答え方の練習をする。</p> <p>① 教師のリポートをする。</p> <p>T: It's a banana.</p> <p>C: It's a banana.</p>	<p>果物の単語は、既習である。一時間目の授業なら4つほどの単語を扱う。単語を覚えること以上に、児童同士がコミュニケーションすることが重要である。</p> <p>ここでの会話のモデルは、教師と児童全員である。ハンカチで何かを隠していること状況そのものが What's this? という会話と結びつく。</p> <p>What's this?と問うてから、相手に触らせたり、ヒント、たとえば "Its color is red." と言ったりする。</p>

活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>② 教師が問い、児童が答える。</p> <p>T: What's this?</p> <p>C: It's a banana.</p> <p>(3) 問い方の練習をする。</p> <p>① 教師のリピートをする。</p> <p>T: What's this?</p> <p>C: What's this?</p> <p>② 児童が問い、教師が答える。</p> <p>C: What's this?</p> <p>T: It's a banana.</p>	

(4) はえたたきゲームをする

(黒板)



It's a banana.

What's this?

ハエたたき

【点数】

大きいカード...1点

小さいカード...2点

1. タイトル 「バナナは好きですか。はい／いいえ」の導入と活動事例

2. 本時で使用する単語と会話文

(1) 単語

bananas, melons, peaches, apples, oranges, strawberries, cherries, pears, lemons, pineapples, watermelons,

(2) 会話文

① Do you like apples?

② Yes, I do./ No, I don't.

3. 準備

【教師】果物の絵カード (bananas, melons, peaches, apples, oranges, strawberries, cherries, pears, lemons, pineapples, watermelons)

絵カードと同一の絵が描かれているスモールカード (複数用)

カルタ

4. 展開

活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>1. 果物の絵カード (複数形) で復習をする。</p> <p>T: Bananas, melons, peaches, apples, oranges, strawberries, cherries, pears, lemons, pineapples, watermelons, watermelon.</p> <p>C: Bananas, melons, peaches, apples, oranges, strawberries, cherries, pears, lemons, pineapples, watermelons, watermelon.</p> <p>2. 本時のねらい</p> <p>(1) パペットで会話のモデルを提示する。</p> <p>T: (サルの人形に向かって)</p> <p>Do you like melons?</p> <p>サル: No, I don't.</p> <p>T: (サルの人形に向かって)</p> <p>Do you like peaches?</p> <p>サル: No, I don't.</p> <p>T: (サルの人形に向かって)</p> <p>Do you like bananas?</p> <p>サル: Yes, I do.</p>	<p>果物の単語は、既習である。一時間目の授業なら4つほどの単語を扱う。単語を覚えること以上に、児童同士がコミュニケーションすることが重要である。</p> <p>Yes が肯定、No が否定を表すことは、小学校の児童にも分かる。</p> <p>サルが2回続けて、“No, I don't.”と答えたところで、問う側の教師が困った顔を児童に向ける。そうすると児童から「先生、バナナだよ。バナナを聞いてみたら。」という反応が起こる。そのように、日本語でも良いので、児童から言葉を引き出すことはコミュニケーションの力を高める上で重要である。</p>

活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>(2) 答え方の練習をする。 教師のリピートをする。</p> <p>T: Do you like baseball? Yes?(挙手を促す) Yes, I do.</p> <p>C: Yes, I do.</p> <p>T: No?(挙手を促す) No, I don't.</p> <p>C: No, I don't.</p> <p>(3) 問い方の練習をする。</p> <p>① 教師のリピートをする。 T: Do you like bananas? C: Do you like bananas?</p> <p>② 児童が問い、教師が答える。 C: Do you like bananas? T: Yes, I do. / No, I don't.</p>	<p>答え方の練習ではあるが、自分の気持ちを子どもたちに表現させたい。つまり、好きでもないのに"Yes, I do."と言わせたり、逆に好きなのに"No, I don't."と言わせたりすることは、練習であってもできるだけ避けたい。</p>
<p>(4) カルタ      ルール： T2が "Yes, I do."と答えたときのみ、手元のカードを取る。 ""No, I don't."の場合、カードは取らない。</p>	

1. タイトル 「スポーツは好きですか」の導入と活動例

2. 本時で使用する単語と会話文

(1) 単語

volleyball, skating, soccer, badminton, golf, skiing, table tennis, baseball, tennis, basketball, softball, swimming, rugby, dodge ball,

(2) 会話文

- ① Do you like baseball?
- ② Yes, I do. / No, I don't.

3. 準備

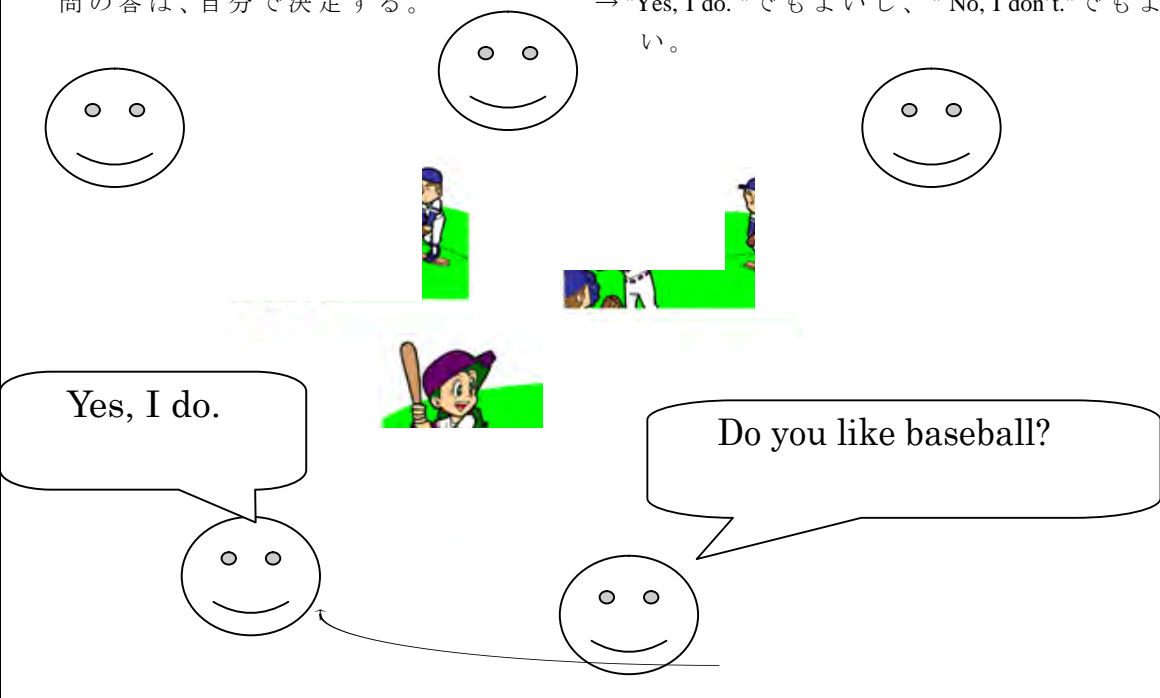
【教師】 スポーツの絵カード (volleyball, skating, soccer, badminton, golf, skiing, table tennis, baseball, tennis, basketball, softball, swimming, rugby, dodge ball)

絵カードと同一の絵が描かれているスモールカード、及びパズル用カード

4. 展開

活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>1. スポーツの絵カードで復習をする。</p> <p>T: volleyball, skating, soccer, badminton, golf, skiing, table tennis, baseball, tennis, basketball, softball, swimming, rugby, dodge ball</p> <p>C: volleyball, skating, soccer, badminton, golf, skiing, table tennis, baseball, tennis, basketball, softball, swimming, rugby, dodge ball</p>	<p>スポーツの単語は、既習である。一時間目の授業なら4つほどの単語を扱う。単語を覚えること以上に、児童同士がコミュニケーションすることが重要である。</p>
<p>2. 本時のねらい</p> <p>(1) 児童一名と教師でモデルを提示する。</p> <p>T: (少年野球を習っている児童に) Do you like tennis?</p> <p>C: No, I don't.</p> <p>T: Do you like rugby?</p> <p>C: No, I don't.</p> <p>T: Do you like baseball?</p> <p>C: Yes, I do.</p>	<p>指名する児童には、授業前に打ち合わせをしておいてもよい。みんなの前で発表することがその児童の自信につながる。</p> <p>Yes が肯定、No が否定を表すことは、小学校の児童にも分かる。</p>
	<p>モデルに指名された児童が2回続けて、“No, I don't.”と答えたところで、問う側の教師が困った顔を児童に向ける。そうすると児童から「先生、野球じゃない？A君は野球してるよ。」という反応が起こる。そのように、日本語でも良いので、児童から言葉を引き出すことはコミュニケーションの力を高める上で重要ある。</p>



活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>(2) 答え方の練習をする。 教師のリピートをする。</p> <p>T: Do you like baseball? Yes?(挙手を促す) Yes, I do.</p> <p>C: Yes, I do.</p> <p>T: No?(挙手を促す) No, I don't.</p> <p>C: No, I don't.</p> <p>(3) 問い方の練習をする。</p> <p>① 教師のリピートをする。 T: Do you like baseball? C: Do you like baseball?</p> <p>② 児童が問い、教師が答える。 C: Do you like baseball? T: Yes, I do. / No, I don't.</p>	<p>答え方の練習ではあるが、自分の気持ち子どもたちに表現させたい。つまり、好きでもないのに“Yes, I do.”と言わせたり、逆に好きなのに“No, I don't.”と言わせたりすることは、練習であってもできるだけ避けたい。</p>
<p>(4) パズルゲームをする。 パズルを完成させ、そのパズルの中に出てくるスポーツについて対話をする。 問の答は、自分で決定する。 → "Yes, I do."でもよいし、"No, I don't."でもよい。</p> 	

1. タイトル 「将来の夢を語ろう」の導入と活動例

2. 本時で使用する単語と会話文

(1) 単語

architect, barber, baseball player, carpenter, cartoonist, doctor, engineer, farmer, fire fighter, flight attendant, newscaster, office worker, pianist, pilot, police officer, singer, president, soccer player, teacher, hair dresser, vet, nursery school teacher, computer programmer

(2) 会話文

① What do you want to be (when you grow up)? あるいは What do you want to be?

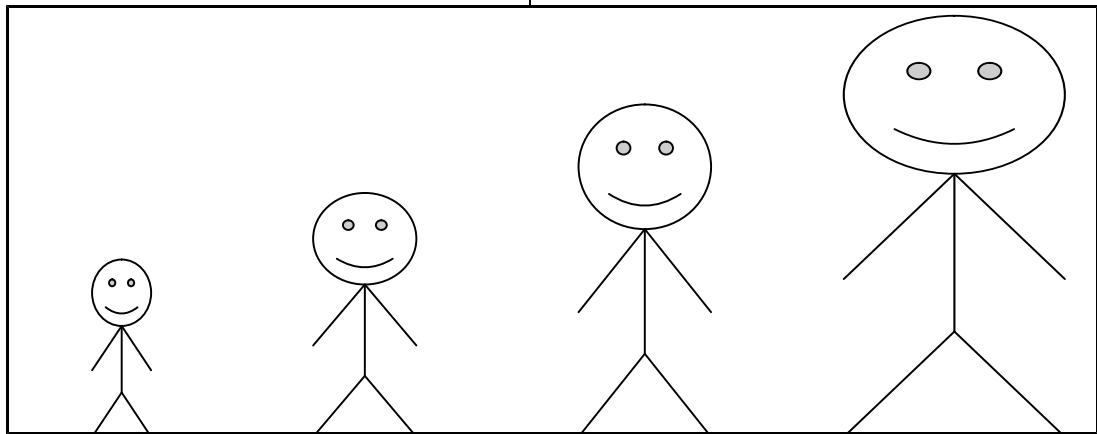
② I want to be a pilot.



3. 準備

【教師】 職業の絵カード (architect, barber, baseball player, carpenter, cartoonist, doctor, engineer, farmer, fire fighter, flight attendant, newscaster, office worker, pianist, pilot, police officer, singer, president, soccer player, teacher, hair dresser, vet, nursery school teacher, computer programmer)

4. 展開

活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>1. 職業の絵カードで復習をする。 T: Pilot, teacher, soccer player, doctor. C: Pilot, teacher, soccer player, doctor.</p> <p>2. 本時のねらい (1) 会話のモデルを提示する。 黒板に絵を描く。</p>	<p>職業の単語は、既習である。一時間目の授業なら4つほどの単語を扱う。単語を覚えること以上に、児童同士がコミュニケーションすることが重要である。</p>
<p>① 教師によるモデルの提示 T1: What do you want to be when you grow up? T2: I want to be a soccer player.</p> <p>T2: What do you want to be when you grow up? T1: I want to be a doctor.</p>	<p>教師の小さい頃の写真、学生の頃の写真、社会人になった頃の写真、そして今の写真にすると、子どもたちの興味をさらに引くことになる。また、小さい頃の写真の前で “I want to be a pilot.” と言えば、「そうか、先生は小さい頃パイロットになりたかったんだ。」と日本語で説明せずとも分かる。</p>



活動内容 T:教師 C:児童	指導上の留意点
<p>③ 児童とかかわりながらのモデルの提示</p> <p>T: What do you want to be?  C: えーっと、「獣医」です。  T: What is 'jyuu-i'?'  C: えーっと、「動物の・・・」  T: What did you say?  C: 動物の医者だ。  T: What?  C: 動物ドクターだ。  T: 動物ドクター？  C: えーっと、animal doctor?  T: Good. It is a vet.</p> <p>(2) 答え方の練習をする。  教師のリピートをする。  左記の絵を見せる。  T: I want to be a doctor.  C: I want to be a doctor.</p>  <p>(3) 問い方の練習をする。  ① 教師のリピートをする。  T: What do you want to be?  C: What do you want to be?  ② 児童が問い、教師が答える。  C: What do you want to be?  T: I want to be a pilot.</p>  <p>(4) 児童同士でアクティビティをする。  T: What do you want to be?  C: I want to be a pilot.</p>	<p>職業の単語は、既習である。一時間目の授業なら4つほどの単語を扱う。</p> <p>習っていない職業の単語があれば、教師がその場で教える。事前に、児童がなりたい職業について調べておくのがよい。  児童が自分自身のことを語れるように教師が準備し、配慮する。</p>

1. タイトル — 「どんな果物が好きですか。-バナナが好きです。」の発表とその活動例—

2. 導入の言語材料

1) 文

(1) What fruit do you like?

(2) I like bananas.

2) 単語

what, do, you, like, bananas, melons, peaches, apples, oranges, strawberries, cherries, pears, pineapples, watermelons, lemons,

3. 授業の整理の段階： 復習として本時のねらいの言語材料を使う。その際、児童に発表させながら「三人称単数現在形」を気づかせる

1) HT（学級担任）と ALT（外国人教師）で、言語材料の復習のモデルを示す。

HT: What fruit do you like?

ALT: I like bananas.

HT: Now, we are going to change our role.

ALT: What fruit do you like?

HT: I like apples.

2) 児童に「好きなくだもの」を個別に発表・表現させるように試みる。

ALT: Who's the volunteer?

Keiko が挙手をする。

ALT: Keiko, what fruit do you like?

Keiko: I like oranges.

ALT: Good. Keiko likes oranges.

HT: Anyone else?

Taro が挙手をする。

HT: Taro, what fruit do you like?

Taro: I like strawberries.

HT: OK. Taro likes strawberries.

Arata が挙手をする。

ALT: What fruit do you like?

Arata: Melons.

ALT: Arata likes melons.

.....(続く).....

整理の段階で、ねらいの言語材料を使いながら、児童に好きな果物を表現させたい。そこで、学級担任もしくは ALT が質問し、児童が好きな果物を答える。その際、上記のような方法で他の児童に伝えれば、「三人称単数現在形」を児童に気づかせることができる。実際に、石濱が公立小学校で授業実践をした中で、上記のような方法で指導した。

開発原理の事例（6）： 異文化理解を指向した場面・状況を類推させることの事例  
上越教育大学  
石濱博之

1. タイトル 「どこの国に行きたいか。-イタリアに行きたい。」の場면을類推させる活動例一

2. 導入の言語材料

1) 文

(1) Where do you want to go?

(2) I want to go to Italy.

2) 単語

what, do, you, want, to, go, Japan, China, France, Australia, England, India, Russia, Germany, Brazil, Canada, Italy, Korea, Spain

3. ねらいの新言語材料を提示する。モデルを示して、児童に場면을類推させたり、場面を気づかせたりする。

例1： 図書館で地図帳を見ながら、海外のことを考えている場面である。(HT 学級担任、ALT 外国人教師)

ALT: Hello.

HT: Hello.

ALT: There are a lot of national flags. Where do you want to go?

HT: I want to go to Italy.

例2： 旅行代理店でお客さんが海外旅行のパンフレットを見ながら外国に行きたいと思っている。

スタッフ: Can I help you?

お客: Yes.

スタッフ: Where do you want to go?

お客: I want to go to Italy.

6つの活動事例は、実際に石濱が糸魚川市立上早川小学校、糸魚川市立西海小学校、石川県かほく市の公立小学校、及び入善町立上青小学校の授業で指導・実践したものである。

謝辞： この開発原理の指導例を作成するにあたり、絵（イラスト）を挿入した。その絵（イラスト）が必要となり、参考文献『小学校英語活動 365日の授業細案』のCD-ROMから絵（イラスト）を活用した。CD-ROMの著作権者である前田康裕氏（熊本市立飽田東小学校）に掲載することを承諾していただいた。感謝したい。

#### 参考文献

糸魚川市立上早川小学校. (2007). 『平成18年度小規模校の特性を活かした楽しい英語活動の取り組み』報告書.

糸魚川市立西海小学校. (2006). 『糸魚川市立西海小学校の英語活動 A指導案集（平成17年度指導案集）』報告書.

糸魚川市立西海小学校. (2008). 『糸魚川市立西海小学校の英語活動 B指導案集（平成18年度指導案集）』報告書.

かほく市教育委員会. (2007). 『平成19年度 かほく市小学校英語活動の手引き』.

熊本大学教育学部附属小学校編. (2005). 『小学校英語活動 365日の授業細案』 東京：明治図書.

かほく市教育委員会. (2007). 『平成19年度 かほく市小学校英語活動の手引き』.

入善町立上青小学校. (2008). 文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」委託『英語活動研究発表会 学習指導案』.

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科  
共同研究プロジェクトG 国際シンポジウム

# アジアにおける初等英語 教育の今後の展開

開催日：2008年7月20日（日曜日）

開催時間：9:30～17:00

開催地：ニチイ学館 神戸ポートアイランドセンター

（〒650-0047 神戸市中央区港島南町7丁目1番地5号 Tel 078-304-5991）

主催：兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科  
後援：兵庫県教育委員会，神戸市教育委員会

## パンフレット構成

1. プログラム	116
2. 国際シンポジウム趣旨	117
3. 基調講演 1 「アジアにおける初等英語教育ーグローバルとローカルな要素の影響力ー」 バトラー後藤裕子（米国・ペンシルバニア大学）	119
4. 基調講演 2 「韓国の初等英語教育における制度と教員研修」 金 榮 淑（韓国・大邱教育大学校）	123
5. 実践報告 1 「韓国の初等英語教育の現状」 金 美 京（韓国・邱臥龍初等學教）	127
6. 実践報告 2 「中国の初等英語教育の現状」 周 琳（中国・中国首都師範大学初等教育学院）	131
7. 実践報告 3 「日本の初等英語教育の現状」 伊田 隆（兵庫教育大学附属小学校） リチャード スタインジーク（兵庫教育大学附属小学校）	137
8. 小学校英語活動拠点校の取組 拠点校 1：兵庫県神河町立栗賀小学校 拠点校 2：兵庫教育大学附属小学校 拠点校 3：兵庫県三田市立狭間小学校 拠点校 4：大阪府吹田市立千里たけみ小学校 拠点校 5：兵庫県相生市立相生小学校 拠点校 6：大阪府寝屋川市立点野小学校 拠点校 7：富山県入善町立上青小学校	141
9. 小学校英語活動地域サポート事業などの取組 文部科学省の地域サポート事業：石川県かほく市かほく市教育センター 大学の地域協力校 1：新潟県糸魚川市立西海小学校 大学の地域協力校 2：新潟県糸魚川市立上早川小学校	149
10. 英語発音向上のための練習	155

プログラム(英語での講演・発表には日本語への同時通訳がつきます)

受付開始 9:00～

開会 9:30～

基調講演1 10:00～11:00

「アジアにおける初等英語教育ーグローバルとローカルな要素の影響力ー」(日本語)  
バトラー後藤裕子(米国・ペンシルバニア大学)

基調講演2 11:00～12:00

「韓国の初等英語教育における制度と教員研修」(英語)  
金 榮 淑(韓国・大邱教育大学校)

昼 食 12:00～13:30

各国における初等英語教育の現状報告 13:30～15:20

ビデオによる韓国, 中国, 日本の小学校の実践報告

実践報告1 「韓国の初等英語教育の現状」(英語) 13:35～14:10

金 美 京(大邱臥龍初等學教)

実践報告2 「中国の初等英語教育の現状」(英語) 14:10～14:45

周 琳(中国首都師範大学初等教育学院)

実践報告3 「日本の初等英語教育の現状」(英語・日本語) 14:45～15:20

伊田 隆(兵庫教育大学附属小学校)

\*当日は、今井裕之(兵庫教育大学)が代わりに発表する予定です。

リチャード スタインジーク(兵庫教育大学附属小学校)

休 憩 15:20～15:35

各国における初等英語教育の現状報告にもとづくパネルディスカッション(日・英語)

15:35～17:00

閉会挨拶 16:50～17:00

レセプション(会場1階レストラン) 18:00～20:00



## 国際シンポジウム

### 「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」の趣旨

山岡俊比古（兵庫教育大学）

本シンポジウムは、平成23年度から日本の公立小学校に導入される外国語活動においてもっばら行われる英語活動について、そのあり方を探り、検討すべき課題を明らかにするために、アジアの各国ですでに行われている初等英語教育を広く視野に入れ、国際比較的な観点から考察を加えるために開催するものである。とりわけ、初等英語教育の先進国である韓国と中国の実践例に学び、そこで生じている課題を確認し、それに対してとるべき対処法について共に議論することによって、アジアに共通する研究課題として初等英語教育を共有することを目的とする。

なお、本シンポジウムは兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科における共同研究プロジェクトの一つであるプロジェクトG「初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協働開発ー連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとしてー」（平成18年度ー平成20年度）の一環として行われるものである。

**Theme of the International Symposium on  
“Prospects of English Language Teaching at Elementary School in Asia”**

Toshihiko Yamaoka (Hyogo University of Teacher Education)

This symposium is held to help its participants to have a broad and clear understanding of English language education at primary school currently being conducted in Asian countries and to have an international comparative perspective for exploring the possibilities of and examining the issues of English language activities in public elementary schools in Japan to be introduced in 2011 as a main part of foreign language activities.

Special emphasis is placed in this symposium on attaining an understanding of the need for researching English language education at primary school as a subject to be pursued commonly in Asian countries by learning the current situations and problems of English language education at primary school in Korea and China and by discussing measures to be taken for the improvement of English language education at primary school in general.

This symposium is given as a part of Joint Research Project G (a three-year research project to be carried out from 2006 to 2008) entitled “Cooperative Development of a Teacher Education Program for English Language Education at Primary School: As a Model for Constructing the Science of School Education in Practice Drawing on the Characteristics of the Joint Graduate School” which is funded by the Joint Graduate School (Ph. D. Program) in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education.

## 基調講演 1

バトラー後藤裕子

ペンシルバニア大学



東京大学文学部東洋史学科卒。カリフォルニア大学ロスアンゼルス校（UCLA）より MA（比較教育学）、スタンフォード大学より MA（言語学）、Ph. D.（教育心理学）を取得。

スタンフォード大学教育研究センターのリサーチ・フェローを経て、現在ペンシルバニア大学教育大学院言語教育学部の准教授を務める。主に年少者の第二言語習得におけるメタ認知の役割、言語アセスメントの研究を行っている。最近では、東アジア諸国における小学校での英語教育や、日本の小学校での日本語の学習言語に関するプロジェクトに携わっている。

**Yuko Goto Butler**

University of Pennsylvania, U.S.A.

Yuko Goto Butler is an Associate Professor of Language and Literacy in Education at the Graduate School of Education at the University of Pennsylvania in Philadelphia, Pennsylvania.

Her research interests include assessment and the role of awareness in learning and teaching, especially among young learners. Her most recent project examines various issues that have arisen in conjunction with the introduction of English language instruction at the elementary school level in select Asian countries.

## 要 旨

### 「東アジアの小学校英語教育ーグローバルとローカルな要素の影響力」

近年、グローバル化に伴う様々な変化が、多くの国の言語政策に大きな影響を与えている。その顕著な例がグローバル・コミュニケーションとしての英語の普及であり、小学校における外国語としての英語教育（EFLES）の導入であろう。東アジア諸国もそうした国々の一つである。しかし、多くの国は EFLES の導入にあたり、さまざまな問題に直面している。その中には、複数の国にまたがる共通な問題点もあれば、地域特有の問題点もある。言語教育政策が、一連の憶測に基づいて決められていることもあれば、英語圏から発信された人気のあるアプローチやメソッドを、そのまま直輸入していることもある。しかしそのような導入の仕方では、地域特有の様々な教育事情に対する配慮が欠けていることも少なくない。それぞれの地域の状況を十分に加味しながら、英語圏から持ってきたアプローチやメソッドの導入にあたり、再検討、再解釈を行うことが大切である。

今回の講演では、東アジアを例にとりながら、グローバルとローカルな要素が、どのように複雑に絡み合いながら、EFLES の導入に影響を与えているかを検討する。東アジア諸国の中でも、私が研究を行ってきた韓国、日本、台湾の例を中心に見ていく。これらの国が直面している様々な課題の中でも、(1) アクセスの平等を保持しながら、多様化するニーズにどのように答えていくか、(2) ネイティブ・スピーカーの採用と、現地の教員の養成をどのように行っていくか、(3) 人気のある英語教育法の採用と、それをどのようにそれぞれの現場に適応した形で使っていくか、という3点に焦点をあてて話を進めたい。

この3つの地域では、共通の課題もあるものの、EFLES に関してはしばしば、地域の事情にあわせ、別々のアプローチをとっている。地域の状況を十分考慮しない英語教育方法の直輸入は、うまくいかないようだ。グローバル化の要請に答えつつ、ローカルな要素を十分に考慮することが、EFLES 導入の要であろう。

## **Abstract**

In recent years, a number of global changes have exerted a sizable impact on language-in-education policies in various countries. One of the most notable examples has been the spread of English as a means of global communication and the ensuing introduction of English as a foreign language at primary schools (refers to as EFLPS hereafter). The countries of East Asia exemplify this trend. Case studies have revealed, however, that many such nations have encountered a number of challenges in implementing EFLPS. Some challenges have been commonly observed across multiple countries, whereas others are specific to local contexts. Policy decisions in some cases have been made based on a series of “assumptions,” or by directly importing globally popular ideologies and methods that originated in English-speaking countries. But such implementations frequently do not pay sufficient attention to local factors. In such cases, educators need to reexamine and reinterpret popular ideologies and methods in order to make sense of them in their respective local contexts.

In this talk, I draw from examples in East Asia to illustrate how both global and local factors can influence EFLPS implementations in relatively complex ways. This talk specifically refers to three East Asian regions or countries in which I have done extensive fieldwork: namely, South Korea, Taiwan, and Japan. Among the various challenges that these countries face in implementing EFLPS, I focus on the following three major challenges in particular: (1) accounting for diversity while providing equal access; (2) the dilemma between hiring native English speaking teachers versus training local teachers; and (3) the challenges involved in using popular ELT methods and adapting them to local contexts.

While the policies of the three countries studied herein face certain common challenges, they also have different views towards EFLPS and often incorporate different approaches within their respective local contexts. Directly importing popular ELT methodologies does not seem to work well without having major adaptations to accommodate local contexts. Indeed, successful implementations do not appear to be possible without giving serious consideration to local factors while at the same time addressing global factors.

## 基調講演 2

金 榮 淑

大邱教育大学



大邱教育大学校教授。大学では英語指導法を担当。国立教育研究所研究員、仁荷大学校専任講師、ソウル大学非常勤講師など歴任。

ソウル大学で学士と修士を取得。また、英国ニューキャッスル大学でも修士号を、東国大学校で博士号を取得している。

研究分野は、早期英語教育と教師教育。主な研究業績としては、国定小学校英語教科書、大学英語教科書、語彙学習書の執筆のほか、小学校英語教員養成カリキュラム開発、小学校英語教科書の分析、小学校英語への歌やチャンツの活用などに関する論文など多くの著作を発表している。問い合わせ連絡先 [kvs@dnue.ac.kr](mailto:kvs@dnue.ac.kr)

## **Kim, Yong-suk**

Daegu National University of Education, Korea

Dr. Kim, Yong-suk is a professor at Daegu National University of Education in Korea. She offers English teaching methodology courses to undergraduate and graduate students at the university. Previously, she has worked as a full-time instructor at Inha University, as a researcher at Korea Education Research Institute, and as a part-time instructor at Seoul National University. As for her academic background she received her BA and an MA from Seoul National University. She also got another MA at Newcastle University, UK and a PhD at Dongguk University.

Her research interest is early English education and teacher education. She is an author of the current Elementary School English textbook series, two course materials compilations for university students, and a resource book on vocabulary. She has also published articles on curriculum development for future elementary English teachers, an analysis of elementary English textbooks, the application of songs & chants in elementary English classes, and more. She can be contacted for discussion of her work at [kys@dnue.ac.kr](mailto:kys@dnue.ac.kr)



## 要 旨

### 「韓国の初等英語教育における制度と教員研修」

たいていの EFL 諸国と同様に、大韓民国においても、英語教育は現在大きな社会課題である。過去 20 年間に渡って、大韓民国は、あるジレンマから自由にはなれずにいた。一方では、国民の英語運用能力の指導改善を目指しながらも、もう一方では、英語学習に対して国民が国の内外であまりに熱心になりすぎることを懸念せねばならないジレンマである。多くの人々が、英語学習に膨大な時間と労力とお金を費やし、その結果、過度の投資によるさまざまな問題、（家族の離別や経済格差の問題）に苦しんでいる。それにも関わらず、TOEFL や TOEIC が示す韓国人の英語力は低いままである。

大韓民国政府は、国家の英語教育は深刻で解決すべき問題を抱えた不十分なものであると結論づけ、その状況を修正するための施策を実施することを決定した。2007 年 12 月、前政権は英語教育改善のための戦略構想を策定・発表し、現政権はその政策をさらに発展させ、5つの計画が導入された。その5つとは、1) 英語で英語を教える、2) 国定の英語テストをつくる、3) 英語体験センターを学校につくる、4) 英語図書館をつくる、5) インターネットや放送メディアで英語を採用する、である。これら各々について批判的視点から検討したい。

## **Abstract**

Currently, English education is one of the hot social issues in Korea as in most EFL countries. For the past couple of decades, Korea has not been free from a dilemma: on the one hand it has been concerned about how to improve the English proficiency of the people, and on the other, worried about how to cool down the people's overheated zeal for English learning both inside and outside the country. Many people have spent a huge amount of time, energy and money on learning English, and suffered from various problems accompanying the overinvestment including separation of family members, broadening the gap between haves and have-nots, etc. However, statistics shows the Korean people's English proficiency measured with TOEFL and TOEIC still remains at a low level.

The Korean government has concluded that English education in the country is inefficient, brings about serious problems and needs to be controlled. The government has decided to take steps necessary to rectify the situation. In December of 2007, the previous administration announced a policy for the enhancement of English education with some strategic plans, and the current government has developed that policy further. In the presentation five plans will be introduced: Teaching English in English, the Development of a national English test, the Establishment of English Experiential Centers at schools, the Establishment of English libraries, and the Application of English in broadcasting and on the Internet. Each of them will be examined from a critical viewpoint.

## 実践報告1

### 「韓国の中等英語教育の現状」

金 美 京

大邱臥龍初等學教



大邱広域市，大邱臥龍初等學教英語科教諭。

16年間の教員経験を持ち，英語教師としての指導は8年間。大邱教育大学校を1992年に卒業後，2003年に同大学から英語教育の修士号を取得。2002年には大邱教材コンテストで2位を獲得。2004年から，大邱教育庁が支援する5，6年生対象のストーリーテリングプロジェクトにも参加。2006-2008年には大邱南部教育事務所後援による英語キャンプを運営した。大邱教育委員会から派遣され，2000年にはハワイ，2006年にはカリフォルニア大学アーバイン校での英語教師トレーニングプログラムに参加している。そして2008年，啓明大学校で，教育測定学の博士課程を修了した。

## **Kim Me-Kyoung**

Waryong elementary school in Daegu, Korea

Kim Me-Kyoung is an English teacher at Waryong elementary school in Daegu, Korea.

She has been teaching for 16 years, but as an English teacher for 8 years. She graduated from Daegu National University of Education in 1992 and earned a master's degree in English education at the same university in 2003. She won the second prize at the Daegu Education Material Contest in 2002. She joined the Project for Storytelling Development for 5th and 6th grade, supported by the Daegu education office in 2004. She managed the 2006, 2007 and 2008 English Camp supported by Nambu Education Office in Daegu. She attended an English Teacher's training course at Hawaii in 2000 and at University of California-Irvine in 2006. Both were supported by the Daegu Education Office.

She finished a doctoral course in Educational Measurement at Kei-myung University in 2008.

## 要 旨

### 「韓国」の初等英語教育の現状」

大韓民国では、小学校3年生から英語学習を始める。児童たちは3、4年では週1回、5、6年では週2回の英語科授業を受けている。今回紹介するのは、6年生の英語科授業である。教科書ユニット4「誕生日はいつですか」の全4時のうちの第2時である。第1時と第2時では、リスニングとスピーキングが中心となる。第3時はリーディングとライティング、第4時は復習という構成で、授業では、日付と誕生日に関する表現の学習と使用を目標としている。

本授業の構成は6つに分かれている。「前時の復習」「見て話す」「聞いて繰り返す」「歌を歌おう」「遊ぼう（ゲームをしよう）」「復習」である。前時の復習では、「特別な日と月を組み合わせよう」と呼ばれる活動と簡単なチャンツを用いる。次に、教師は2つのビデオクリップをみせて内容を確認する（「見て話そう」）。「聞いて繰り返そう」では、児童たちは対話練習を行い、「歌おう」では1月から12月までの月が入った歌を何度も歌い、「遊ぼう」では Time Bomb（時限爆弾）ゲームをして、各月の言い方を覚える。最後の復習では、有名人の写真と誕生日をパワーポイントを用いて提示して Q&A を行う。

## Abstract

In Korea, elementary school children begin to learn English as a regular subject in the 3rd grade. They take one English class a week in the 3rd and 4th grade and two English classes in the 5th and 6th grade. Today, the presenter will introduce a lesson for a 6th grade English class. The lesson is for the second period of *Unit 4 When is your birthday?* One unit is covered in 4 periods. The first and second periods put an emphasis on listening and speaking. The third period puts an emphasis on reading and writing and the fourth period is for review. The class aims to help the students learn and use expressions concerned with dates and birthdays.

The lesson is composed of 6 parts: Review of the last class, Look and Speak, Listen and Repeat, Let's Sing, Let's Play, and Review of the current class. For review of the last class the teacher uses an activity called "Matching Special Days and Months," and a simple chant. Next, the teacher shows 2 video clips and asks about the content for "Look and Speak." For "Listen & Repeat" the teacher makes the students practice with new dialogues. At the "Let's Sing" stage, the teacher introduces a song about the months and lets the students sing the song repeatedly. Then, the teacher let the students play a game called "Time Bomb" in order to help them memorize the months. Finally, for review of the class the teacher presents pictures of famous entertainers and their birthdays with a Powerpoint presentation and then asks questions.

## 実践報告 2

### 「中国の初等英語教育の現状」

周 琳

首都師範大学



中国首都師範大学初等教育学院助教授。

大学で英語の講座と小学校英語の教育方法などを担当。中国陝西師範大学で卒業。奈良教育大学で教育修士号、奈良女子大学で文学博士号を取得。研究分野は小学校英語教育と関連性理論。小学校英語教育に関する三冊本の一部を執筆、河北省小学校英語教科書の四冊練習書の主編、関連性理論に関する論文を発表している。

## **Zhou Lin**

Capital Normal University, China

Zhou Lin is Assistant Professor at Capital Normal University, College of Elementary Education, China, where she teaches English courses and teaching English methodology for elementary schools.

She graduated from Shaanxi Normal University, China, obtained her MA from Nara University of Teacher Education, Japan and her Ph.D from Nara Women's University, Japan.

Her research interests include teaching English at elementary school and Relevance Theory. She co-authored three-volumed books on research in teaching English at elementary school. She is the chief editor of four-volumed supplementary books for elementary school textbook published by Hebei Province. She also published academic articles on Relevance Theory.



## 要 旨

### 「中国の初等英語教育の現状」

#### 1. 中国の小学校英語教育の背景

WTO への加盟，北京オリンピックの開催，2010 年の上海エキスポの開催を控え，中国の大都市での英語コースや英語学校はとても盛況である。中国のテレビやラジオ局は英語の語学番組を毎日，放送しているし，英語を教えるネイティブ・スピーカーの数もかつてより増加した。しかし，中国の学習者にとっては，学習環境はまだ足りない。学校では 1 週間に 2～3 時間程度英語にふれるくらいで，オーラルコミュニケーションを練習する時間は非常に限られている。

必修教科としての英語は，かつては中学校から開始されていた。小学校から始めるかどうかの議論を重ねた後，教育省は，2001 年に「小学校での英語教育促進」という通達を出し，小学校では 1 週間に最低 4 時間の英語の授業を実施することとなった。

#### 2. 英語カリキュラムスタンダード

さらに，教育省は 2 年間の歳月を費やし，2001 年に「英語カリキュラムスタンダード」を公表した。これは，中国の英語教育を大々的に変革する内容を含んでおり，教育実践の内容は，知識獲得やスキルトレーニングから，学習への興味・関心，学習習慣，学習方略の獲得へと重点が移り，また，教師中心の授業から生徒中心の授業へとシフトした。

小学校から高等学校まで，児童生徒の英語の熟達度は 9 つのレベルに分けられている。このうちレベル 1 と 2 は，小学校で到達することが必須となっている。小学校での英語教育の目標は，児童の興味・関心，自信，英語学習への積極的な態度の育成，児童の言語感覚を育て，発音やイントネーションなどの音声スキルを獲得させること，日常生活で英語を使うことができ，卒業後の英語学習の基礎作りのための初歩的な能力を育てることにある。

### 3. 教科書

教科書は通常どの学年のものも人民教育出版社によって編集、出版される。県や市によっては独自の教科書を刊行する場合もあるが、その場合は、教育省から認可を受ける必要がある。

人民教育出版社による英語教科書以外では、北京師範大学、清華大学、外国語教育研究所出版局、華南師範大学によるものがある。最新の教科書に掲載されているトピックの多くは、子どもたちの日常生活を取りあげており、学校や家庭でのやりとりが多数扱われている。さらに、子どもたちの文化的理解の意識を高めるための教材も含まれている。

### 4. 教室での英語教育実践と英語学習

伝統的に、教室では、教師が語彙や表現、文法や文の意味を説明し、生徒達は、語彙や文を記憶し、暗唱することが求められてきた。練習といえば、パターンプラクティスや書き換え、中国語と英語の翻訳、そして音読が中心であった。

生徒達の興味・関心を引き出し、居心地の良い雰囲気の中で教室での活動に参加できるように、小学校での英語教育では、ただ暗記するのではなく、活動しながら教える・学ぶ、他の生徒の前で使ってみる、模倣する、絵を描く、歌う、ゲームをするといったことを取り入れている。

外国語学習の入門期の子どもたちに対して、発音や文字の指導から始め、次いで(カードや絵や実物を使った)単語の指導、そして、(歌やリズムを使った)文の指導、そして、(お話、ロールプレイ、劇、ゲーム、プロジェクト活動を取り入れた)文章の指導へと移行する。子どもたちは、歌ったり、チャンツしたり、演技をしたり、遊んだりしながら、とてもよく学んでいる。そして、音声と文字によるコミュニケーションスキルを伸ばしていく。

しかし、暗記とドリルといった伝統的な方法は残っており、現在でも授業で使用されている。いずれにしても、生徒の自発的な学習やコミュニケーションに対する積極的な態度を育成することが、現在の指導の重点となっている。

## Abstract

### **The Actual Situation of Teaching and Learning English in Primary Schools in China**

#### **1. The Background of English Education in Primary Schools**

With China's accession to the World Trade Organization, the Olympic Games held in Beijing and the 2010 World Exposition in Shanghai, English training courses and schools are flourishing in the big cities. Chinese TV and radio have daily English language programs. There are now more foreigners teaching English than ever before. However, Chinese learners lack of English language environment. The majority of students are exposed to English for a few hours per week in class and they have extremely limited chance for oral practice.

English as a required subject used to be taught from junior high schools. After a much discussed issue on whether or not starting early to teach English to primary school pupils, Ministry of Education in 2001 published the document of *Actively Promotes the Teaching of English in Primary Schools*, and primary school students began to have at least four periods of English education per week.

#### **2. The Standards of English Curriculum**

The Ministry of Education spend nearly two years and published *the Standards of English Curriculum* in 2001 which reflects a great changes of English education in China. Some shifting emphases from mastering knowledge and training skills to learning interests, habits and methods, from teacher's centre to students' centre.

There are nine levels of English proficiency from primary school to high school, among which the first and the second are the levels required in primary schools. The goals of English teaching in primary schools are to develop pupils' interests, self confidence and positive attitude towards learning English, to cultivate the pupils' language sense and enable the acquisition of good pronunciation and intonation, and to develop the pupils' preliminary ability to use English in daily exchange and to lay a good basis for further study.

#### **3. English Textbooks**

The textbooks normally for all levels are compiled and published by the People's Education Press. Some provinces and cities could produce textbooks, but they should be submitted to the

Ministry of Education for official approval.

Except for English textbooks by the People's Education Press, there are textbooks compiled by Beijing Normal University, Qinghua University, the Foreign Language Teaching and Research Press, the South China Normal University, etc. Most topics in the new textbooks focus on children's daily life, and are full of everyday interactions in school and at home. Moreover, cultural information is covered for pupils' awareness of culture understanding.

#### **4. Teaching and Learning English in Classrooms**

Traditionally, the teacher explains points of words and expressions, grammar and the meaning of sentences in English classes, and students asked to memorize and recite vocabulary and sentences. Exercises for practicing were substitution drills, combination drills, translation between Chinese and English, and reading aloud.

In order to keep the students interested and make them participate in the class activities in a relaxed atmosphere, primary schools adopted a new English teaching model which is teaching and learning by doing, demonstration, imitating, drawing, singing, doing games, doing things, not just by memorizing.

Children learning a foreign language start from teaching of pronunciation, sounds and letters, then vocabulary (the use of cards, pictures, and objects), then sentences (the use of songs and rhymes) and then passages (the use of stories, role plays and drama, games and projects). They learn best by singing, chanting, acting and playing. Developing oral and written communication skills.

However, some traditional methods such as the use of memorization and drilling are still evident, and can be used to facilitate teaching. Anyhow, the attention has been paid to students' positive attitudes towards active learning and their communicating abilities.

## 実践報告 3

### 「日本の初等英語教育の現状」

伊田 隆

兵庫教育大学附属小学校教諭



リチャード スタインジーク

兵庫教育大学附属小学校教諭



ワシントン州シアトル近郊に生まれる。父はアメリカ人で母は日本人。幼少の頃日本には何度か訪れていたが、1997年に西ワシントン大学を卒業後日本に移り住み、1998年兵庫教育大学附属中学校で英語指導助手 (ALT)として教え始めた。4年後同大学附属小学校の英語指導とカリキュラム開発支援を依頼され、現在に至る。妻とともに神戸在住。旅行、映画、英語会話指導を楽しんでいる。

**Takashi Ida**

Elementary School attached to Hyogo University of Teacher Education

**Richard Steinsiek**

Elementary School attached to Hyogo University of Teacher Education

Richard Steinsiek was born near Seattle, Washington to an American father and a Japanese mother. He traveled to Japan several times during his childhood and moved to Japan in 1997 following his graduation from Western Washington University. In 1998 he began working for Hyogo University of Teacher Education's junior high school as an ALT and 4 years later was asked by the University's elementary school to teach and help develop the school's English curriculum, where he works to this day. Currently he lives in Kobe with his wife and enjoys traveling, movies, and teaching English conversation in his free time.

## 要 旨

### 「夏休みにしたいことを英語でスピーチしよう」

本校の英語授業は、「活動から学びをつくる英語学習」というテーマを設定し「実践する意義のある活動を行う」「活動を通して気づきを引き出す」「知的な楽しさを実感させる」ことを目標に授業づくりを行っている。今回提案する英語学習は、小学校最後の夏休みを控えた6年生に、夏休みにしたいことを英語でスピーチする4回の授業からなる単元である。第4回目は授業参観日でもあり、子どもたちそれぞれが自分の夏休みについてのスピーチを行い、保護者に聞いてもらうというコミュニケーションの場を設けた。既習の言語知識やこれまでの授業体験と今回の授業で新たに学ぶ内容を結びつけ、親とのコミュニケーションを通して、理解してもらう喜びを実感させることを授業の目標とした。

## **Abstract**

Let's make a speech, "What I want to do this summer."

Our school has set forth a theme for developing an English teaching program: "Language learning emerges out of language using experience." Our principle of language lesson design is to provide the students with; meaningful language using activity, chances to raise language awareness, and intellectual enjoyment.

In the lesson we present you today, the students prepare, rehearse and make a speech. On the parents' visiting day (the 4<sup>th</sup> period), they tell their parents what they want to do in summer. This activity is designed to give students a sense of achievement and a pleasure of communication. We hope to show you that the students are enjoying their speech and at the same time working hard to connect new learning with their previous learning experience.



## 小学校英語活動拠点校の取組

文部科学省では、「小学校外国語活動サイト」が開設されており、その中に「小学校英語活動等国際活動拠点校」があり、全国の拠点校の一覧が紹介されています。そこでは、拠点校は以下のように紹介されています。

文部科学省では、平成 19 年度から、小学校における英語活動等国際理解活動について指導方法等の確立を図るため、地域の学校のモデルとなる拠点校を全国に 40 校に 1 校程度指定し、ALT や地域人材の効果的な活用も含めた実践的な取組を推進しています。平成 20 年度は、各拠点校で英語ノート（試作版）を活用した取組を進めることとしています。

([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gaikokugo/kyoten/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/kyoten/index.htm))

ここではプロジェクトGのメンバーである兵庫教育大学の今井裕之・吉田達弘、上越教育大学の石濱博之が指導助言をしている拠点校を紹介したいと思います。

## 拠点校 1：兵庫県神河町立粟賀小学校

兵庫県神崎郡神河町粟賀町 561 679-2414 Tel. 0790-32-0025

<http://can.town.kamikawa.hyogo.jp/awaga-es/>

### 1. 英語活動実施の形態や歴史

本校の英語活動は、ALT の導入により 10 数年前に始まり、3 年前の町村合併により町内全小学校で共通カリキュラムを活用し、各学年で月に 1, 2 度の頻度で実施している。そこへ本校が拠点校事業の指定を受けたため、町内全校実施の授業に加え 5, 6 年生では隔週で地域の人材を招いて授業を実施し、計月 4 回の英語学習を行うようになってきている。

### 2. 指導者の実感

地域の人材 (JTE) とのティームティーチング (TT) は、ALT に依存してしまいがちな普通の授業と異なり、短時間ながら打ち合わせを確保している。「ALT との授業は見てだけの時もあるが、JTE との授業は参加している実感があり、TT がスムーズに行えた。それが担任自ら授業を創っていくきっかけになり、オープンスクールではひとりで英語授業をした。JTE との授業を通して自信がついた」という担任の発言もあり、日本人同士の TT の意義を感じている。

### 3. 課題

- ・ALT の活躍の場面と児童の様子を観ながら指示する担任としての活動をうまくデザインする必要性を感じる。これは、取りも直さず、打ち合わせ時間の確保につながっていく。語りつくされた課題であるが、大変難しい。
- ・常に文字の取り扱いが問題になる。小学生の英語活動で書くということをどのように考えればいいのか。
- ・今後の外国語活動は 5, 6 年を対象であり、歌やゲーム活動では物足りない高学年での活動の深め方や興味関心を持続させる題材選びが課題である。

## 拠点校 2 : 兵庫教育大学附属小学校

〒673-1421 兵庫県加東市山国 2013-4 Tel.0795-40-2219

<http://www.school.hyogo-u.ac.jp/element/index.html>

### 活動から学びをつくる英語学習

兵庫教育大学附属小学校は、平成 19, 20 年度のいわゆる「拠点校」指定を受け研究開発に取り組んでいる。本校では英語活動を全学年で週 1 時間実施するようになって既に 6 年を経過しており、現在の 6 年生は、1 年次よりネイティブスピーカー教師と担任教師によるティームティーチングの授業を週 1 回受けている。系統性のある長期のカリキュラム作りを志向する中で、文字の指導をカリキュラムに位置づけているのも本校の特徴である。

平成 19 年度には「活動から学びをつくる英語学習」というテーマを設定し「実践する意義のある活動を行う」「活動を通して気づきを引き出す」「知的な楽しさを実感させる」ことを目標に授業づくりを行っている。小学校での英語学習は、ゲーム、歌、クイズ、show & tell、スキット、行事体験などの活動中心に進められるが、活動の楽しさや面白さに終始することなく、これらの活動と子どもの言語経験や既有知識を結びつけ、コミュニケーションする中での「気づき」を仲間と共有することで「日本語とは異なる英語やそれに付随する文化のおもしろさ」「英語を使ってコミュニケーションするよさ」「英語を学ぶ楽しさ」など知的な楽しさを実感できる授業の提案ができればと考えている。

### 拠点校 3 : 兵庫県三田市立狭間小学校

〒669-1545 三田市狭間が丘 4 丁目 4. Tel 079-562-2145

[http://edu.area-sanda-hyogo.jp/com/school\\_up/hasamasho/](http://edu.area-sanda-hyogo.jp/com/school_up/hasamasho/)

本校では、2002 年度より「総合的な学習の時間」において英語活動：Hello, World! Project (H.W.P.)として実施してきた。H.W.P. では、「日常生活や身近な事柄から英語に親しむ」「簡単な英語を聞いたり話したりする活動を通じて、英語活動を楽しむ」「日本や世界の国々関心を持ち、異文化を理解し、大切にできるようにする」という目標を掲げている。昨年度から、1～6年生の全学年で実施しており、授業は、学級担任とALTあるいは地域人材を活用したティームティーチングを行っている。「聞く」「話す」を主体とし、遊ぶ、歌う、会話するという活動を大切にしながら、子どもたちが毎回楽しめるカリキュラムにそって進めている。6年間を見通したカリキュラムでは、低学年で、「身体を動かしながら英語を楽しむこと」、中学年で、「英語を使った友達同士の簡単なやりとりを通じて楽しむこと」、高学年で、「習った英語を使って楽しむこと」といった大きな目標を持って開発されている。また、「H.W.P.カード」をつかった振り返りを毎時間実施している。活動前にH.W.P.カードを児童に配布し、1時間の見通しを持たせること、また、活動後すぐに振り返り、次時のめあてにつながるようにしている。

今後の課題としては、ALTとの打ち合わせの日を定期的に確保すること、また、子どもの姿から単元をくんでいくことが挙げられている。

なお、今年度の研究発表会を11月14日(金)に予定している。

## 拠点校 4：大阪府吹田市立千里たけみ小学校

〒565-0863 大阪府吹田市竹見台 3 丁目 3 番 1 号 Tel 06-6834-0448

<http://www.suita.ed.jp/gak/es/35-sentak/>

本校では、1年生～6年生まで英語活動を行ってきた。AET や地域人材を活用しながら、担任と AET との T.T ですすめる授業を基本としている。指導案の作成などは担任が行い、担任主導の活動を進めてきた。今年度も校内で作成したカリキュラムを基に、一時間毎の指導案を作成し、授業を行っている。

本校が、低中高学年でめざす児童像は以下の通りである。低学年では、「身近な場面や事柄の英語を聞いたり、まねたりする活動を楽しむ」ことを目標としている。授業では大きな声で歌い、発音し、本当に活動そのものを楽しんできた。さらに、中学年では、「身近な場面や事柄に関する英語を聞いたり、話したりする活動に慣れ親しむ」ことを目標としている。「買い物」などの活動の中で、会話の相手と積極的にコミュニケーションをとろうという態度が育まれてきた。高学年では自己表現する力を培うため、「身近な場面や状況に応じた英語を聞いたり、話したりする活動を理解し積極的に取り組む」ことを目標に取り組んだ。6年生の最後に「私の夢」という単元を設定し行っているが、自分の夢を言ったり、書いたりということは、日常の中で行くと照れくさいが、英語を通して活動していくことで、単元の終わりには、クラスの他の児童の夢をほとんど全員が言えるまでにお互いのことを知ることができた。

このように、高学年では、普段の活動では照れや恥ずかしさがあっても、英語を通してみんなに発表し、返事をもらうことで、自信がつき、それが児童の良好な関係作りの手助けとなっている。今後も、児童にとってコミュニケーション能力育成の大きな力になっていくと考えている。

なお、今年度の研究実践発表会を 12 月 10 日(水)に予定している。

## 拠点校 5：兵庫県相生市立相生小学校

〒678-0042 兵庫県相生市川原町 31 番 1 号 Tel. 0791-22-7146

<http://www.city.aioi.hyogo.jp/gakkou/aioishou/>

本校の英語活動の目標は、「豊かなコミュニケーション能力の育成～伝え合う楽しさを体験できる英語活動をめざして～」である。これは、「自分の思い・願いを伝え合い、お互いの気持ちをわかり尊重し合うコミュニケーション能力」や「自国や他国の文化を理解し、共に生きていこうとする態度」の育成を重視していくことが大切と考える本校の教育のねらいと目標を同じにするものである。今年度、児童たちは以前にもまして英語活動を楽しむようになってきている。昨年度は、授業時間を 20～25 分と短くし、実践を始めたが、これが無理のないスタートとなり、今年度、学級担任自身が中心になった英語の授業の実践へとつながっている。児童の一番の理解者である担任が ALT の支援を得て、英語活動の指導に当たるということでいろいろな成果を収めることができた。しかしながら、指導者の力量を高める必要があるなど、多くの課題が生まれてきている。この点今後さらに研究を深めていきたい。

昨年度に引き続き、心が柔軟で、好奇心旺盛である児童が、音やリズム、イントネーションに慣れる言葉遊び、非言語によるコミュニケーション、人と関わることの楽しさの体験、異文化理解の心を身につけていく活動など、豊かな体験的な学習を積み重ねていくことで、豊かなコミュニケーション能力を育成していきたいと考えている。

なお、今年度の研究発表会を 10 月 31 日(金)に予定している。



目隠しをして英語で「福笑い」

## 拠点校 6：大阪府寝屋川市立点野小学校

〒572-0077 寝屋川市点野 5 丁目 26 番 1 号 Tel 072-838-9758

<http://www.city.neyagawa.osaka.jp/school/e/shimeno/>

本校は、文部科学省指定「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校である。また、寝屋川市は平成 16 年に小中学校英語教育特区の認定を受け、平成 17 年度より、小中一貫教育として、「国際コミュニケーション科」の研究開発も行っている。授業は、学級担任と本校の英語担当教員、本市採用の英語教育支援者及び英語の堪能な地域人材や ALT の 3 人のティームティーチングで進められている。昨年度、2 学期末に実施した本市アンケートによると、「国際コミュニケーション科の授業の時間は楽しい」と答えた児童の割合は、3・4 年生が 93%、5・6 年生が 89%となっている。このように、学年を問わず、児童の学習意欲は、数値の上では一定の高さを維持しているが、この背景には、英語担当教員や英語教育支援者の指導によるところが大きい。

本年度、拠点校の取り組みとしては、学級担任が中心となり、無理なく進められる授業のあり方を模索する授業実践研究と、担任の指導力向上を図る研修のあり方を検討している。また、効果的な指導方法の工夫改善として、「自己を表現しつつ相手のことを知ろうとするような、コミュニケーションを図ることのできる活動」を展開し、「伝え合いを促す授業づくり」を考えている。特に高学年の児童たちには、知的好奇心をゆさぶる教材や活動を授業に織り込むよう工夫している。また、クロスカリキュラム（社会科・図画工作科等との連携）も充実するように、学級担任、英語担当教員、英語教育支援者、ALT が協力して、幅広い視野で活動内容の工夫も行っている。

なお、今年度は、11 月 28 日(金)に研究発表会を予定している。

## 拠点校 7 : 富山県入善町立上青小学校

〒939-0642 富山県下新川郡入善町上野 210 番地 Tel: 0765-72-0164  
<http://www.jousei-e.tym.ed.jp/>

平成 19 年度・20 年度の文部科学省の委託による「小学校英語活動推進事業拠点校」の 1 つである。「自ら学び、共に高め合う子供の育成」を主題に掲げ、平成 20 年度も国際理解教育を柱にしている。そして、「自己理解」と「他者理解」によって、自分の視野を広め、人間性を豊かにしていくこと（共生）が大切であるとした。平成 20 年度は、「聞く力」（相手を感じる力）、「話す力」（自分を伝える力）を身につけ、相手意識のあるコミュニケーション能力を育成するとした。国際理解教育の一環としての英語活動に取り組みながら、外国の人々や文化に触れるきっかけとして、誰とでも気軽にコミュニケーションが図れる能力を育成することとしている。具体的に、英語活動では、外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりすることを大切に活動工夫する。また、交流活動や調べ学習など児童の発達段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにする。その活動の工夫では、(1)歌と踊り、(2)チャンツ、(3)ゲーム活動、(4)外国の行事の導入 ハロウィンなど、(5)給食・清掃・休み時間 ALT と一緒に活動、(6)全校児童活動 である。なお、平成 20 年 11 月 21 日に成果発表研究会を予定している。



## 小学校英語活動地域サポート事業などの取組

小学校英語活動の取組みには、拠点校以外にも文部科学省の地域サポート事業としての取組みや大学が独自で行っている地域協力校の取組みなどがあります。

ここではプロジェクトGのメンバーである上越教育大学の石濱博之が指導助言している、文部科学省の地域サポート事業の小学校と上越教育大学の地域協力校を紹介したいと思います。

## 地域サポート事業：石川県かほく市 かほく市教育センター

〒929-1193 石川県かほく市北浜ハ6番地1 Tel: 076-283-7170

平成18年度と平成19年度の2年間、石川県かほく市は文部科学省小学校英語活動地域サポート事業の委嘱を受け、『児童が楽しく取り組む英語活動の在り方を求めて～小中の連携を視野に入れた指導と評価の工夫～』という主題で市内全小・中学校で国際コミュニケーション能力の育成を目指して取り組んだ。実際、小・中学校の連携を視野に入れた教職員の指導力向上を目指しながら、かほく市の6つの小学校で「国際コミュニケーションを重視する考え方」で共通認識を持った。「英語大好き100%」をキーワードとして楽しく取り組む英語活動のあり方を追求した。

平成18年度は基礎固めと位置づけて、英語活動の教育実践を推進する教員組織「小学校英語活動推進委員会」（教育内容検討部会、評価検討部会、教材教具検討部会、及び調査広報部会）の各委員会が相互協力しながら、6つの小学校で同一の「年間カリキュラム計画」で英語活動を推進した。英語活動の「ねらい」、教育内容、授業改善、児童の意識の確認などのように、サポート事業を推進する基礎固めとした。平成19年度は、6つの小学校で「平成19年度かほく市小学校英語活動の手引き」に基づく教育内容で英語活動が実施された。更に、6つの小学校で地域に根ざした独自の英語活動にも創意工夫があった。1年目の教育実践を継続して小・中連携も推進した。小学校の学級担任と中学校英語教師、及びALTがチーム・ティーチングで英語活動を実施した。

2年間の地域サポート事業をまとめると、ねらいに合致した教育内容（年間指導計画）に基づいて、3つの学区による学習者の特性に応じた授業実践がなされた。その際、教材・教具の選択も検討された。授業実施後に評価基準に基づき評価がなされ、フィードバックされた。英語活動をとおして、児童が変容したばかりでなく、「教師自身」も成長した。なお、その事業内容は、『平成18・19年度文部科学省委嘱 かほく市小学校英語活動地域サポート事業まとめ』（かほく市教育委員会 平成20年3月発行）に報告されている。

## 地域協力校 1：新潟県糸魚川市立西海小学校

〒941-0046 新潟県糸魚川市大字羽生 1937 番地 Tel: 025-552-3811

<http://academic1.plala.or.jp/umikawa/>

平成 17 年度から英語活動を導入して、現在も継続している。どの年度も、高学年（6 年生・5 年生）・中学年（4 年生・3 年生）・低学年（2 年生・1 年生）を枠組みとして、実施時間は年間 35 時間を目標としている。全学年でコミュニケーションスキルを向上させるために英語活動を積極的に推進している。また、教員研修をしながら、学級担任が主体的に英語活動の授業を展開できるように実践を積み重ねている。平成 17 年度・平成 18 年度は、上越教育大学教員が主体となり、学級担任と協力して英語活動を展開した。平成 19 年度・平成 20 年度は、学級担任が中心となり英語活動を展開している。上越教育大学教員は、月 1 回程度の教員研修に協力している。その英語活動の目標は、「英語活動を通して、外国の言語や文化に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」こととしている。指導内容は、2 年間で完結するような内容を作成した（A 年度指導案・B 年度指導案）。実際の活動内容に関しては、低学年は、動作を取り入れて楽しく活動する内容などである。中学年は、基本的な身近な事柄（自分のことも含む）の内容などである。高学年は、基本的な身近な事柄（自分のことも含む）を使ってやりとりする内容などである。なお、その教育実践の内容は、『「だれでもできる」「ためになる」「楽しい」英語活動ー学級担任主体の英語活動指導の取り組みー理論編』（平成 20 年 3 月発行）、『糸魚川市立西海小学校の英語活動 A 指導案集（平成 17 年度指導案集）』（平成 18 年 3 月発行）、及び『糸魚川市立西海小学校の英語活動 B 指導案集（平成 18 年度指導案集）』（平成 20 年 3 月発行）として 3 つの報告書にまとめている。





## 地域協力校 2：新潟県糸魚川市立上早川小学校

〒949-1223 新潟県糸魚川市大字中川原新田 1 2 番地 Tel: 025-559-2300

<http://academic1.plala.or.jp/kamisho/>

糸魚川市立上早川小学校では、平成 18 年度から英語活動を導入して 3 年目となる。平成 18 年度は 30 時間、平成 19 年度は 17 時間、英語活動を実施した。平成 20 年度は、17 時間予定している。上早川小学校は、全校児童は 20 名たらずの複式学級で授業が展開されている小規模校である。小規模校である特性を活かしながら、上越教育大学教員が上早川小学校の小規模校向けの年間活動計画を作成した。その際、近隣の西海小学校の教育実践を参考にした。その英語活動の特性は次の 3 つである。(1) 全校児童での取り組み：1 年生から 6 年生までの児童全員で簡単な英会話をする。ゲーム・歌の活動では、異学年の児童同士がグループ編成をする。仲良く活動しながら協力し合う。(2) 学級担任全員で英語活動を指導：原則として学級担任と上越教育大学教員によるティーム・ティーチングで授業展開する。年度数回、ALT と共に児童に英語活動を提供する。(3) 中学校英語教師との授業展開：中学校英語教師、学級担任、上越教育大学教員による英語活動を展開したこともある。小・中連携を意識した英語活動の一つの実践事例である。なお、その実践の内容は、『平成 18 年度小規模校の特性を活かした楽しい英語活動の取り組み』（平成 19 年 3 月発行）として報告されている。平成 19 年度の報告書は作成中である。



## 英語発音向上のための提案

ここでは小学校で英語を教える先生方の発音向上のための提案をしています。

### 英語発音再チャレンジ

#### — 日本語と比較して —

山岡俊比古 (兵庫教育大学)

**とりあえず以下の日本語と英語を発音してみましょう。**

- (1) 日本語：「シートベルト」の「シート」と「スコアシート」の「シート」  
英 語：seat ([si:t]) と sheet ([fi:t])
- (2) 日本語：「サッカーチーム」の「チーム」と「パックツアー」の「ツアー」  
英 語：team ([ti:m]) と tour ([tuə])
- (3) 日本語：「ヒートアイランド」の「ヒート」と「フーズフー」の「フー」  
英 語：heat ([hi:t]) と who ([hu:])

**上の英語の発音が難しいのは訳があります。**

下の (a) ～ (e) 音の組み合わせは日本語にありません。したがって、日本語になつた場合には、かっこで示すように、日本語にある別の音で代用します。

- |          |   |                 |
|----------|---|-----------------|
| (a) [si] | → | ([fi] : 「シ」)    |
| (b) [ti] | → | ([ʧi] : 「チ」)    |
| (c) [tu] | → | ([tsu] : 「ツ」)   |
| (d) [hi] | → | ([çi] : 「ヒ」) *  |
| (e) [hu] | → | ([φu] : 「フ」) ** |

\*[çi] の音の [ç] は、上あごの前半部 (硬口蓋) と舌の間で息をこする音で、[çi] (「ヒ」) は悲鳴のように響きます。「昼」「ヒント」「光り」で確認してみてください。

\*\*[φu] の音の [φ] は、上唇と下唇の間で息をこする音で、[φu] (「フ」) はロウソクなどを吹き消すときに出る音です。「笛」「ふとん」「ふろしき」で確認してみてください。

もっとよく理解するために日本語の50音の発音を確認しましょう。

ア : [a]	イ : [i]	ウ : [u]	エ : [e]	オ : [o]
カ : [ka]	キ : [ki]	ク : [ku]	ケ : [ke]	コ : [ko]
サ : [sa]	シ : [ʃi]	ス : [su]	セ : [se]	ソ : [so]
タ : [ta]	チ : [tʃi]	ツ : [tsu]	テ : [te]	ト : [to]
ナ : [na]	ニ : [ni]	ヌ : [nu]	ネ : [ne]	ノ : [no]
ハ : [ha]	ヒ : [çi]	フ : [ɸu]	ヘ : [he]	ホ : [ho]
マ : [ma]	ミ : [mi]	ム : [mu]	メ : [me]	モ : [mo]
ヤ : [ja]		ユ : [ju]		ヨ : [jo]
ラ : [Ja]	リ : [Ji]	ル : [Ju]	レ : [Je]	ロ : [Jo]
ワ : [wa]				
ン : [n]				

(1) サ・タ・ハ・ラ行に注意しましょう。

- ・ サ行では、最初の子音が「シ」以外ではすべて [s] ですが、「シ」だけ [ʃ] に変わっています。
- ・ タ行では、「チ」と「ツ」において最初の子音が他と違って、それぞれ [tʃ] と [ts] になっています。
- ・ ハ行では、「ヒ」と「フ」において最初の子音が他と違って、それぞれ [çi] と [ɸ] になっています。
- ・ ラ行では、舌端と歯茎で息を止め、舌の側面を軽く弾く [J] 音が一貫して使われています。

(ナ行でも、[ni] だけが他と違って、上あごの前半部（硬口蓋）で息を止めて鼻に抜かす音 [ɲ] を使いますが、この音は歯茎で息を止めて鼻に抜かす音 [n] とあまり変わらないので、敢えて取り上げないことにします。)

(2) 英語音を取り入れた変則サ・タ・ハ・ラ行を発音してみましょう。

- ・ 変則サ行 [sa] [sɪ] [su] [se] [so]
- ・ 変則タ行 [ta] [tɪ] [tu] [te] [to]
- ・ 変則ハ行 [ha] [hi] [hu] [he] [ho]\*
- ・ 変則ラ行 [ra] [ri] [ru] [re] [ro]\*\*

\*[h] の音は声門音といわれ、喉のいちばん奥から出す音です。

\*\*[r] は舌先を上あごに近づけますが、くっつけないまま発音します。

実際に英語を発音してみましよう。

(1) [si]

- (a) ABC: Let's sing the ABC song.
- (b) seatbelt: Fasten your seatbelt.
- (c) season: Which season do you like best?

(2) [ti]

- (a) team: I'm on the baseball team.
- (b) steal: Ichiro sometimes steals third base.
- (c) steel: The desk is made of steel.

(3) [tu]

- (a) tour: I like packaged tours.
- (b) two: It's two o'clock now.
- (c) tool: What do you use this tool for?

(4) [hi]

- (a) he: He is my hero.
- (b) history: History is interesting to me.
- (c) hymn: We sing hymns in church.

(5) [hu]

- (a) who: Who is he?
- (b) hood: Put your hood up. It's cold.
- (c) whose: Whose bag is this?

(6) [ra] [ri] [ru] [re] [ro]

- (a) rabbit, red: I have a rabbit with red eyes.
- (b) rain, rural, area: It rains much in this rural area.
- (c) reach, rainbow: You cannot reach the end of a rainbow.

(おまけ) 次の日本語をわざと英語音を使って発音してみましよう。

- (a) しんぶんし [simbunsi]
- (b) つつじ [tutuji]



そもそも日本語にない音にも注意が必要です。

- (1) [f] [v]  
(a) **f**resh **f**ish  
(b) **f**ive **w**ives  
(c) **v**itamins in **v**egetables

[f] [v] は上の歯に下唇を当て、息を擦って発音します。

- (2) [θ] [ð]  
(a) **Th**anks a lot.  
(b) Look at **th**at **th**eater.  
(c) **th**ese **th**ree **th**eaters

[θ] [ð] は舌先を上の前歯に当てて、引き離しながら息をこすって発音します。

- (3) [æ]  
(a) **cat**, **cap**, **camera**  
(b) **Myanmar**, **man**, **mat**, **map**  
(c) **tap dance**, **tack**, **tag**

[æ] は舌の高さが「ア」と「エ」の中間で、唇を横に引きながら発音します。

- (4) [ɜ:]  
(a) **first**, **burst**, **thirst**  
(b) **bird**, **third**, **curd**  
(c) **purse**, **nurse**, **curse**,

[ɜ:] は舌の中央部分を盛り上げて発音します。

語末の [n] の発音にも注意が必要です。

英語の語末の [n] はあくまで [n] で、歯茎で息を止めて鼻に抜かします。日本語の語末の「ン」はそうでないことが多いので注意が必要です。以下の発音を比べてみてください。

- (1)      {   ピン    ペン    パン  
日本語    { [pin]    [pen]    [pan]  
  
英語      {   pin    pen    pan  
          { [pin]    [pen]    [pæn]

[ŋ] は上あごの後ろの部分（軟口蓋）で息を止めて鼻に抜かす音で、[N] はのどひこ（口蓋垂）で息を止めて鼻に抜かす音です。

## プロジェクトG 国際シンポジウムメンバー

- 平野 絹枝 (上越教育大学教授：英語教育)
- 大場 浩正 (上越教育大学准教授：英語教育)
- 石濱 博之 (上越教育大学准教授：小学校英語教育)
- 山岡 俊比古 (兵庫教育大学教授：英語教育)
- 今井 裕之 (兵庫教育大学准教授：英語教育)
- 吉田 達弘 (兵庫教育大学准教授：英語教育)
- 中田 賀之 (兵庫教育大学准教授：英語教育)
- 太田垣 正義 (鳴門教育大学教授：英語教育)
- 伊東 治己 (鳴門教育大学教授：英語教育)
- 山森 直人 (鳴門教育大学准教授：英語教育)
- 兼重 昇 (鳴門教育大学准教授：小学校英語教育)
- 高橋 美由紀 (愛知教育大学教授：小学校英語教育)

## プロジェクトG 国際シンポジウム事務局補佐員

曾 罍 (D2 : 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 (博士課程) 教科教育実践  
専攻言語系教育連合講座)

谷本 美智子 (M2 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教  
学専攻言語系コース)

中林 佳奈 (M2 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育  
専攻言語系 コース)

梶 昌彦 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育  
専攻言語系 コース)

棟安 都代子 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教  
学専攻言語系 コース)

尾池 美知 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育  
専攻言語系コース)

神原 克典 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育学  
専攻言語系コース)

川上 典子 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育  
学専攻言語系 コース)

山本 恭子 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育学  
専攻言語系) コース)

納村 祐貴 (M1 : 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 (修士課程) 教科・領域教育学  
専攻言語系コース)

## 2 筆記記録

以下の筆記記録は、国際シンポジウムにおいて記録担当者が速記した内容、その際に録音した音声資料、および配布資料をもとに、当日の発表や質疑応答などの内容を概略的に書きおこしたものである。また、英語による発表については記録担当者が日本語に翻訳した。なお、音声資料には音質の不明瞭さや雑音のため書きおこしの不可能な箇所が一部あった。その箇所については本記録に△印で記している。（記録担当者・筆記内容責任者：鳴門教育大学・山森直人）

### 国際シンポジウム「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」

日時：2008年7月20日（日）9:30-17:00 場所：ニチイ学館神戸ポートアイランドセンター

#### ◎開会(9:30)

##### 山岡俊比古（兵庫教育大学）

2011年度より小学校に外国語活動が導入される。外国語活動において中心となるのは英語活動である。その活動の役割や可能性あるいは問題点等を明確にする必要がある。そのために国際的視点、すなわち小学校英語教育の先進国である韓国と中国からゲストを迎え、特にアジアという共通の視点から英語教育の課題を共有することが本シンポジウムの課題である。なお、本シンポジウムは兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科博士課程の協同研究プロジェクトの一環として実施する。

##### 安部崇慶（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科長）

本シンポジウムは、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の共同研究プロジェクトとして「初等教育段階における系統的英語教育に関わる教師教育プログラムの協同開発—連合大学院の特性を生かした学校教育実践学構築のモデルとして—」（プロジェクトG）と題し平成18年度から上越教育大学、兵庫教育大学、鳴門教育大学が取り組んできた共同研究プロジェクトの一環であり、韓国・中国・米国からゲスト、パネリストを迎えて実施する。また、兵庫県教育委員会ならびに神戸市教育委員会のご支援を受けている。実りある大会であることを願う。

#### ◎基調講演1(10:00-11:00)

##### 「東アジアの小学校英語教育—グローバルとローカルな要素の影響」パトラー後藤裕子(米国・ペンシルバニア大学)

外国語教育のひとつの大きな目的は違う視点を学ぶ、違う視点にふれるということだと思う。日本の世界地図とイギリスの世界地図では、日本の位置が違う。普段我々が見慣れている日本の形も多少異なる。しかし、どちらが正しい、間違っているという問題ではない。同じものを見ているが視点が異なっているだけである。そのような驚きが、これからますますグローバル化する社会の中で子どもたちにとってとても大切な力となる。そのひとつのきっかけとして外国語教育があると思っている。

今日の話のポイントは、言語政策が決定・実行され、現場で実際に行っていくひとつひとつのステップにおいてグローバルな要素とローカルな要素の両方が影響しているということである。平たく言うと、小学校英語を成功させるにはグローバルな視点とローカルな視点を持っていなければならないということである。本発表では3つの東アジアの国、日本を含め韓国、台湾の事例から、アジア全体でいったい何が起きているのか、について述べる。

先に用語の整理をする。小学校の英語教育は国の言語教育政策の一環として行われ、グローバルな潮流の影響を受けている。グローバルな視点とは、国境を越えている人々やものが行き来したり、さまざまな共通文化が我々の日常生活の中に入ってくるということである。例えばスターバックスに行けばある程度同じようなメニューで同じようなものが出てくる。これはグローバル化を象徴している。言語教育に関して言えば、世界中どこでも英語教育が行われているということ、また英語圏で開発された英語の指導法も広がっているのもグローバル化の共通項のひとつである。一方、グローバル化は相違点も浮き彫りにしている。例えば、多文化、多民族、多言語主義といったものが人々の意識に昇ってくる。同時にニーズが多様化してきている。またテクノロジーの進歩もグローバル化の流れの中で進展してきている。例えば日常生活におけるe-mailの使用や教室の中でのテクノロジーの使用など我々は大きな影響を受けている。これらのグローバルな要素は同時に、さまざまなローカルな要素の影響を受ける。学習言語の選択についても英語が重要というのはどこの国でもそうであるが、地域によっては他の言語が重要かもしれないし、伝統的に教えられてきた英語教授法を新しいやり方と統合してやっていくという場合、ローカルな部分が重要になっている。Cooper(1988)によれば、言語政策を行っていく上で直接的方法と間接的方法がある。国が言語政策を行うときに教育システムのなかで行うのが直

接的方法で、教育システム外で行うのが間接的方法である。国の政策のなかでなされる小学校への英語教育導入は直接的方法である。間接的方法とは、例えば、国民の英語力を上げようとするときに、国の公用語を英語にしようという動きがある。小学校への英語教育の導入は、間接的な部分、直接的な部分、ローカルな部分、グローバルな部分といった何層にも分かれたレベルから影響を受けて議論されている。

日本に先駆けて小学校で英語教育を始めている東アジアの国々が抱えている問題として、1) アクセスの平等を保証しながら、多様化に対応する、2) ネイティブスピーカーの採用と地元の教員への研修、3) 英語圏から入ってきた英語教授法をどのようにローカルの事情に合わせて適応させていくか、がある。今回は3つの観点から話をしたい。

まず課題1) についてである。アジアでは一般的な学力としてのバロメータとして英語力が使われてきたため、入試を無視して英語授業を展開することは難しいという背景がある。グローバル化のなかで「コミュニケーションの道具としての英語」がある反面で、ローカルな面で「学力の指標としての英語」が求められている。ローカルな面で、英語教育へのアクセスの平等を保証する必要がある。一方、グローバルな面では、進行する多様化と多様化するニーズへの対応が必要である。このようななかでアジアの国々は異なる政策をとってきた。韓国は政府のトップダウンという形で全国統一的に教科として英語の導入をしてきた。台湾は中間的な導入をしてきた。日本は学校、自治体の選択を重視しその裁量をもとめてきた。ただし地域によってばらつきが出てきた。しかし、韓国型のようにトップダウン的にやったらよいかといえばそう簡単なことではない。韓国では、民間セクターの塾の役割が大きく、保護者の経済力による格差があった。しかし1997年の小学校英語導入によって格差が解消されたかといえばそうではなくむしろ拡大傾向にあるように思う。台湾は多民族国家であり、学校では北京語で授業を受けるが、みんなが英語幼稚園・バイリンガル幼稚園に通うようになり、政府は北京語習得への悪影響を懸念し制限を加えた。韓国では、子どもが親元を離れ海外で生活する。しかし、何年もアメリカにいても、英語の読み書きができない子どもが増えている。そのような子どもがアメリカの大学に入るために、夏休みに韓国に戻って塾でSATやTOEFLの準備をするという状況が起きている。ネイティブ同様の口頭言語を話すか、英語の読み書きができない、また、韓国語自体も不十分な状況になってきている。韓国政府もこの格差を是正するための努力をしており、それを目的の一つとして作られたと言われている韓国の英語村がある。意見はさまざまであるが、それは国内に英語圏をつくることで、みんながある程度英語に触れる機会を作ろうということであると考えられる。グローバルな視点からはコミュニケーションの道具としての英語というニーズ、一方、ローカルな視点からは学力の指標としての英語のニーズ、両者はこれまで歴史的にもシーソーゲームを繰り返してきた。その間に挟まれて小学校への英語教育の導入を考えるときに、民間の塾や親の経済力の差を無視することができない。

次に課題2) はネイティブスピーカーの採用と地元教員の研修である。グローバルな視点からはコミュニケーション・スキル(特に話す、聴くといったオーラルの部分)が重要とされ、ネイティブスピーカーが最良の言語教師だとする考えが流布してきていることが指摘されている。ローカルな観点からは、地元の小学校教員は基本的に言語教育のスペシャリストではなく、自信がない教員も多い。韓国は専科教員と担任教員の混在型。中国は専科制。台湾では台北は専科教員が英語を指導しているが地方では担任教員が英語を教えている。日本では、担任教員が中心に英語を教えている。韓国や台湾に比べ日本の教員はネイティブスピーカーが教える方がよいと思う割合が高い。また、保護者はネイティブスピーカーが英語を教えるべきという希望が強い。小学校教員自身の英語力に関する自己評価について、最低必要な英語力が身につけていないと思う教師の割合は、韓国が91.1%、日本は85.3%、台湾は80.1%である。特にプロダクションの部分、書く・話す分野で教員は自信がない。特に話す際の文法に気を使っているという結果が各国共通で出てきている。グローバルな点では、ネイティブ教員が必要であり、ネイティブを採用するという政策になり、ローカルな点では地元の教員の教員養成を行わなければならないことになり、二段方式で政策が進められていく。国々により人事政策が違う。日本では国レベルで組織的に教室で英語を使って授業を行うための研修はほとんど行われていない。韓国・台湾では少しずつ増えてきている。日本ではネイティブ教員の採用に積極的である。アジアの国々でネイティブ教員の争奪戦が行われ、国の間で格差が生じている。アジア全体でネイティブ教員なしに実施できるカリキュラムを立てていく必要があると思う。小学校の英語の成功は地域の教員研修にあると確信している。この人事問題を考えるにあたって、小学校で英語を指導するのに必要な資質とは何かという問題がまだ明らかにされていない。それは誰が指導するのかによって、また英語教育の目的によって左右される。またネイティブ教員をどのように位置づけるか、また、予算がどれだけ使えるのかにより異なる。

最後に課題3) である。グローバルな観点からは何をもちょう良いコミュニケーションとするのかについて欧米の影響を強く受けていると思う。現在我々が英語教育のなかでやっている良いコミュニケーションの仕方は文化的に必ずしも中立的なものではない。また、CLT、タスク、Content-based instruction、学習者中心指導が全世界の英語教育の中に流布している状況がある。一方、ローカルな側面については、欧米特有の英語教授法を応用してもさまざまな困難点が

出ている。また、CLTなどの概念に関する理解がさまざまに一致していない。言語的な部分の違いもある。これらの解釈の見直しやコンテキストを配慮した対応が必要である。たとえば、大きな教室での学習者中心の指導の意味合いが異なってくる。もともとは10-15人のクラスサイズをもとにした概念。それを直輸入するだけでは十分ではない。何をもち「良い」教室運営かは文化によって異なる。日本の教室の映像をアメリカの教員にみせると騒がしいと絶句する。自由に子どもに話をさせる教員があり、見方を変えればとても活発で活力に満ち楽しい。別の見方をすれば、騒がしく、教室運営ができていないという印象になる。アメリカの授業はとても静かで、教員が権威的存在で、それが良い教室運営とされている。また、「生きた教材」についても、誰にとって生きた教材かが重要である。国際語として英語を学ぶ子どもにとっては口語的な“*What's up?*”という表現は不適切ではないか。そして、オーラル中心のアクティビティだけで進めていくのは不自然であるし、認知発達上問題がある。読み書きを入れるか入れないかの問題ではなく、どうやって入れていくかということが問題である。アジアは読み書きが重要な社会である。そのような文化的背景を考慮すべき。

コミュニケーション活動に対して教師はどのような考えを持っているのか。multivocal ethnography をもちいて3カ国(韓国・日本・台湾)の授業ビデオを3カ国の教員に見てもらい、自由に意見交換をしてもらうということを実施した。その結果、教師が抱えている課題として、①コミュニケーション活動の動機・目的の設定に関わる問題、②児童の発達年齢に応じた活動・ゲームに関わる問題、③教室運営に関わる問題、がある。今回は①について述べる。ロールプレイ活動を例として挙げたい。日本の教師によるケース1では言語材料が決められたスキットをALTと担任教師がモデリングし、子どもがその表現を練習した後、ロールプレイが行われる。肯定的なコメントは、ネイティブ教員とのティームティーチングや言語に焦点を定めたモデリングがよいというものである。しかし、モデリングの焦点をいったい何に定めるべきか(言い回し、態度、外国語でコミュニケーションを体験すること、国際理解?)という問題がある。焦点の設定によって、どのような学びが行われ、その学びがどれだけ達成されたかについて評価も変わってくる。否定的なコメントとしては活動が閉鎖的で不自然というものが出てきた。一方、台湾の教師によるケース2は教科書にあるスキットをもとに子どもたちが自分のスキットを自由に創作しロールプレイを行う。肯定的なコメントは、本物の衣類を使用し言語活動が自然であり、「コミュニケーションを体験する」という点に焦点をあてているところがよいというものである。その一方で否定的なコメントもある。教師がもっと主導的な役割をする必要があること、塾などに行っている児童が活動を独占してしまうこと、「正確な英語」をインプットできないかもしれないということ。簡単にまとめると、文科省から奨励されているコミュニケーション活動をそのまま導入することが難しいとしている教員が多いということです。また、多くの教員は、なぜそのようなコミュニケーション活動を導入する必要があるのか、そしてその効果の程度には疑問を抱いている。これはアジア3カ国共通の疑問点になっている。そして、活動の目標をどのように定めているか、活動のやり方、効果への期待に関しては(同じ国の中にあっても)それぞれの教員の間で大きな違いがある。その結果、それぞれの教育現場で児童は異なった学習を行い、何をもち「コミュニケーションのための指導」と考えるかによって見解が異なってくる。最後にまとめると、グローバルな要素として、何が良いコミュニケーションなのかについて欧米中心の考え方が非常に強くなってしまい、欧米中心の教授法が小学校のなかに入ってきている。その一方で、ローカルな面では複雑な要素があり、それをひとつひとつ考えていかなければならない。具体的には、それぞれの教員がそれぞれの教室の中でどのようにするかを判断することが重要になってくる。同じ活動をやったとしても、先生がどのような目的でそれをするかで、全く異なる学びが起こってくる。

最後にまとめとして、日本の小学校英語を成功させるためにはグローバルな視点とさまざまなローカルな視点とを十二分に配慮したかたちで行っていかねばならない。困難ではあるが、やり出すと子どもの方が逆に動いてくれる。それが楽しいと述べる教員がどの国にでもたくさんいる。最初に述べたように、子どもに違う視点を身につけるチャンスを与えるという意味でもこれから外国語学習の意味は大きい。

## ◎基調講演2(11:00-12:00)

### 「韓国の初等英語教育における制度と教員養成」金榮淑(韓国・大邱教育大学校)

本発表では韓国においてどのような戦略でどのような実践が行われているかについて述べる。講演の柱は1)韓国の英語教育の現状、2)小学校英語教育の概要、3)小学校英語教育を推進するための戦略計画、そして4)今後の展望、である。

まず、1)韓国の英語教育の現状についてである。韓国では現在英語教育が社会問題の一部となっている。多大な時間とエネルギー、そしてお金が英語学習に使われている。ある統計によれば2005年には15兆wonが塾(cram schools)での英語学習に費やされており、国家年間予算の約7%にあたる巨額の投資である。また、韓国の父親はいまペンギンダディ(Penguin Daddy)と呼ばれている。母親ペンギンは卵を陸上で産んだ後、食べ物を探す。その間、父親ペンギンが卵を温める。卵から雛がかえったとき父親ペンギンの体重は40%ほど減っている。家族のために子どものために自己

犠牲をする父親のことをペンギンダディと呼ぶようになった。このように過剰な投資が英語教育に対してつぎ込まれている。

しかし、巨額の投資にかかわらず国民の英語力は十分とは言えない。2005年のTOEFLの結果では、全体的な英語力については227カ国中93位で、アジア32カ国では16位、スピーキング能力についてはさらに悪く、2001年のデータでは108カ国中105位であり、韓国における英語教育は、コストは高いが効率が低いと言われるようになった。このような過剰な負担がかかる現状を踏まえ韓国政府が英語教育に関して乗り出す決断をした。この政府の行動には2つの方向性があり、一つは英語教育に対する社会の過熱状況を冷ますという方向であり、もう一つは国民の英語力を育成していこうという方向である。このような英語への熱狂ぶりをクールダウンすることと英語力を向上させることとの間にはある種のジレンマがあり、政府はこのジレンマを取り除こうと、公的機関を活用することにした。2006年ノ大統領政権下で戦略的計画による公的英語教育補強政策を打ち出し、2008年のリ大統領政権下において上記政策は補強されさらなる新しい計画が追加された。今回の発表ではこれらの計画について述べる。

その前に2)韓国における小学校英語教育の概要と歴史的展開について話したい。まず小学校英語教育の歴史であるが、1982年にはじめて小学校で英語教育が課外活動としてはじめられた。1992年には各学校の裁量に任せられ、中国語、英語、コンピュータという3つの選択肢があり、英語が最も選択されていた。そして1997年に英語が正規教科になった。

次に小学校英語教育の目標に関しては、1つ目の目的は英語に関する興味と自信を育成することである。小学校英語教育は生涯教育の初期段階であり、英語に関する興味と自信を育成すれば中等教育段階でより熱心かつ積極的に英語を学ぶと思われる。2つ目の目的は基本的なコミュニケーション能力を養うことである。授業時間数については1997-2000年は3年次から6年次まで1週間に平均2回の40分授業が行われ、2001年から現在までは3、4年次に週1回40分授業、5、6年次に週2回の授業が行われている。英語授業の数が減らされた理由は週6日制から5日制に変わったことによる。

指導方法に関しては3つの原則がある。1つ目の原則は、書き言葉のスキルよりも話し言葉のスキルを、産出スキルよりも受容スキルを優先すること。2つ目の原則は子どもの発達段階による特徴を反映した指導方法を用いること。3つ目の原則は学習だけではなく習得を目指すこと。1つ目の原則については、リーディングやライティングよりもリスニングやスピーキングを、スピーキングやライティングよりもリスニングやリーディングをとという方針の結果、3年次にリスニングとスピーキングスキルのみを学び、4年次にリーディングスキルが導入され、5年次にライティングスキルが加えられる。2つ目の原則については、まず子どもは集中力を持続させることができないため、子どもの興味を刺激するような活動が望まれる。次に児童は具体的操作期に属しており、目や耳や口などといった感覚器官を使って経験したり行動するため、教室での活動では「今」「ここ」に存在する物を使えば児童は自身の感覚器官を使うことができる。3つ目の原則について言えば、学習のための練習（practice）においてはインフォメーションが共有されており言語の意味よりも形式に焦点があり、習得のための本物の言語使用（real language use）においてはインフォメーションギャップがあり焦点は形式よりも意味にある。練習にはCD-ROMの視聴、歌やチャンツが使われ、本物の言語使用にはゲーム、ロールプレイ、ストーリーテリングが使われる。

教材に関しては、1997-2000年には教科書とビデオテープと指導書が提供された。16の教科書が教科書会社により開発された。2001年からは教育省が開発した1つの教科書とCD-ROMおよび指導書が使われている。指導書には教師を支援するための詳細な指導計画に関する情報と教室英語（Teacher Talk in English）が提供されている。

単元構成は基本的にP-P-Pモデルに基づいている。最初のPはPresentation（導入）、二番目のPはPractice（練習）、三番目のPはProduction（産出活動）を意味している。3年生は8単元を学ぶ。1単元は4時限の授業から構成される。1限目は3つの主要な活動から成り、まず導入（Look & Listen）、次に練習（Listen & Repeat）、そして産出活動（Let's Play(1)）という流れで授業が進む。2限目は練習にチャンツ（Let's Chant）が加えられる。3限目は1限目と2限目に学んだことを練習（Look & Speak, Let's Sing, Let's Play(3)）し、4限目はロールプレイ（Let's Role-Play）と復習（Let's Review）が行われる。授業レベルでは1限目と2限目はP-P-Pという授業構成がなされているのと同時に、単元レベルでは1限目と2限目がPresentation（導入）、3限目がPractice（練習）、4限目がProduction（産出活動）という役割を果たしている。4年次は3年次の単元構成と同じであるが、3限目にリーディング（Let's Read）が加えられている。5年次は3限目にライティング（Let's write）が導入され、4限目にロールプレイに加えコミュニケーション活動（Activity）をすることが可能である。これはこの時期の児童の発達段階が形式的操作期に入るためであり、身体を用いて演技すること嫌うようになる。6年次では、5年次に3限目にあったリーディング（Let's Read）とライティング（Let's Write）が、それぞれ2限目と3限目に分けられ学ぶことになる。これは読んだり書いたりする量が増

えるからである。

英語を教える教員については4つの場合がある。学級担任が教える場合、英語専科教員（English Specialist）が教える場合、学級担任と補助言語教員（Assistant English Teacher: ネイティブスピーカー）によるチームティーチングの場合、英語専科教員と補助言語教員によるチームティーチングの場合があり、現在最も多いのは英語専科教員による指導であり、英語専科教員と英語補助教員によるチームティーチングが増加してきている。また、英語を英語で教えることが強く求められている（Teaching English in English (TEE)）。これは EFL の状況において主要な問題、すなわち、理解可能なインプット、意味あるインターアクション、内的動機づけの不足、にある程度対処するためである。平均的に 15%の小学校教員しかおもに英語を使って教えていない。たいていの教員は英語と韓国語の両方を用いて英語授業を運営している。11-12%の教員がおもに韓国語を使っている。教員は自分の英語力に自信を持っていないため、英語で英語を指導する教員の割合が少ない。

英語授業は学級室（Homeroom）か英語教室（English Room）で行われている。どちらもコンピュータ、テレビあるいはプロジェクターとスクリーンが設置されており、たいていの部屋にビデオがある。英語教室は活動のためにより広く、英語向きの環境が整っている。また英語教室では児童は床に座る場合が多い。児童が床に座ると気分がリラックスし情意フィルターが下がると思う人もいるが、学年が上がると身体が大きくなり、床に座ることが難しくなるとも言われている。また、英語教室には児童の自主学習用のコンピュータが設置されている。

評価(Assessment)については、児童は英語の標準テストによって評価されず、教室でのパフォーマンスをもとに評価される。教師は児童の参加状況や態度面をチェックリストで観察し、行動(anecdote)を記録する。また児童にインタビューをする場合もある。ポートフォリオを使用している教員も少数いる。評価結果は原則、評定(grade)や点数(score)ではなく、児童の得意な点と苦手な点の記述として報告される。

小学校英語教育の成果としては、概して、肯定的な結果が報告されている。まず、Lee, W.K. et al (2001), Lee, J.W. et al (2003), Choi, Y. H. et al (2003) による、小学校の英語が中学校の英語に与える影響に関するアンケート調査の結果において、児童の英語に対する態度や興味、英語のリスニングスキル、教室での活動について肯定的な効果が確認された。一方、英語の文法やライティングにおいて、小学校と中学校の英語教育の不十分な接続によると考えられる否定的な効果が現れている。そしてこの結果から、小学校における英語の話し言葉と書き言葉の指導のバランスを改善することが提案されている。また、Kwon, O.R. et al (2006) では小学校時に英語教育を受けた経験のない高校生と経験のある高校生の英語力を GTEC およびアンケートにより比較することで小学校英語教育の高校英語教育への影響を調査している。調査結果から、まず、小学校英語経験者のほうがリスニング、リーディング、ライティングにおいて統計的に有意に向上していることが確認された。次に、教師は生徒のオーラル面に加え、リーディング・ライティングも含む全体的な言語力の向上を肯定的に評価していることが明らかになった。また高校生については自分自身が受けた小学校英語教育の影響を否定的に捉える者の方が多いが、中学生は肯定的・否定的に捉える者の割合が類似している。

次に 3)小学校英語教育を推進するための戦略計画についてである。

授業時間については、2008年その増加が検討され、3年次から6年次まで週3限の授業が提案されたが、批判もあり議論が必要である。2008年7月下旬あるいは8月上旬には教育省が結論を出すことになっている。また、授業時間が変われば、新しい教材が必要になってくる。2010年には出版会社が開発し教育省に許可されたさまざまな新しい教科書が使われる。教科書にはCD-ROMや指導書が含まれる。

TEEの鍵は教員の英語力を伸ばすことにある。そのため現在教員採用試験を改善中であり、英語による面接試験の導入を検討している。今のところソウルとデジョンで教員採用試験で英語による面接が行われており、おそらく国家レベルで行われるようになる。また、英語の模擬授業も含まれていくと考えられる。さらに教師教育プログラムの強化も行われ、教員養成(pre-service education)のカリキュラム改訂や現職教育(in-service education)プログラムの準備が行われている。

オーラル英語の授業のための場所は学級室や英語教室であるが、最近では小規模な英語村（English Village）をもつ学校が出てきている。また、これらの英語村が授業やその他イベント（英語キャンプ）で使用されている。

評価については KICE（Korean Institute of Curriculum & Evaluation）が国家英語テストを開発している。韓国では今までたいていの英語テストがリスニングとリーディングだけを評価してきた。その波及効果として教員はリスニングとリーディングのみを重視しスピーキングとライティングを(△)。この問題を克服するために、国家英語テストはより包括的に4技能を含む方向で開発されている。新しい国家テストは能力テストとしての役割とともに、2012年から大学入試のための国家学力到達度試験の英語試験として到達度テストの役割を果たす。

英語インプットやインターアクションの不足といった EFL 環境に関わる問題を克服するために放課後プログラム



(After-School Program) を提供している。現在教育省により実施されている TaLK (Teach and Learn in Korea, <http://talk.mest.go.kr>) は地域経済格差による英語教育のギャップを埋めるために英語圏の国から母語話者を募集し奨学金を与え地方や山間部で英語を教えるプログラムである。また政府は英語に親しみやすい環境 (English-Friendly Environment) も提供している。まず英語図書館 (English Library) があり、子どもが多読を楽しんだり、専門家によるストーリーテリングや子どもによるストーリーテリング大会などが行われる。このように図書館が地域の英語学習センターとして機能している。次に英語教育放送 (English Education Channel) があり、就学前児向け、初等教育児童向け、中等教育生徒向け、教員と保護者向けの4つのレベルに分かれている。また、放送後はインターネットでもアクセスできる。

今年のはじめ、政府がイマージョンプログラムの導入について発表したが大々的な強い反対にあった。しかし、自由経済区であるプサン、インチョン、チェジュは韓国語と英語を公用語として使用することを計画し、バイリンガル社会を追求している。これらの地域では教育委員会がイマージョンプログラムの導入を強く推奨している。またまれではあるが教員のイニシアチブでイマージョンプログラムが導入されるケース (ゴヤン) もある。また最近ソウルでも学校にイマージョンプログラムの実施を推奨することが発表された。

最後に、4)今後検討されなければならない課題としては、現在実験的に進められている1,2年次における英語教育の導入とデジタル教科書の開発である。

#### ◎各国における初等英語教育の現状報告 (13:30-15:20)

伊東：前半は3名の発表者による30分ずつの現状報告を行う。後半は討論をする。まず、指定討論者として後藤バトラー先生に質問をしてもらい、発表者に答えてもらう。その後フロアから質問を出してもらう。

#### ○実践報告1:韓国「韓国の初等英語教育の現状」金美京(韓国・大邱臥龍初等學教)

大韓民国では、小学校3年生から英語学習を始める。児童たちは3,4年では週1回、5,6年では週2回の英語科授業を受けている。今回紹介するのは、6年生の英語科授業である。教科書ユニット4「誕生日はいつですか」の全4時のうちの第2時である。第1時と第2時では、リスニングとスピーキングが中心となる。第3時はリーディングとライティング、第4時は復習という構成で、授業では、日付と誕生日に関する表現の学習と使用を目標としている。

本授業の構成は6つに分かれている。「前時の復習」「見て話す」「聞いて繰り返す」「歌を歌おう」「遊ぼう (ゲームをしよう)」「復習」である。前時の復習では、「特別な日と月を組み合わせよう」と呼ばれる活動と簡単なチャンツを用いる。次に、教師は2つのビデオクリップをみせて内容を確認する(「見て話そう」)。「聞いて繰り返そう」では、児童たちは対話練習を行い、「歌おう」では1月から12月までの月が入った歌を何度も歌い、「遊ぼう」では Time Bomb (時限爆弾) ゲームをして、各月の言い方を覚える。最後の復習では、有名人の写真と誕生日をパワーポイントを用いて提示して Q&A を行う。

(シンポジウムパンフレットより)

#### ○実践報告2:中国「中国の初等英語教育の現状」周琳(中国・首都師範大学初等教育院)

WTO への加盟、北京オリンピックの開催、2010年の上海エキスポの開催を控え、中国の大都市での英語コースや英語学校はとて盛況である。中国のテレビやラジオ局は英語の語学番組を毎日放送しているし、英語を教えるネイティブ・スピーカーの数もかつてより増加した。しかし、中国の学習者にとっては、学習環境はまだ足りない。学校では1週間に2~3時間程度英語にふれるくらいで、オーラルコミュニケーションを練習する時間は非常に限られている。必修教科としての英語は、かつては中学校から開始されていた。小学校から始めるかどうかの議論を重ねた後、教育省は、2001年に「小学校での英語教育促進」という通達を出し、小学校では1週間に最低4時間の英語の授業を実施することとなった。

さらに、教育省は2年間の歳月を費やし、2001年に「英語カリキュラムスタンダード」を公表した。これは、中国の英語教育を大々的に変革する内容を含んでおり、教育実践の内容は、知識獲得やスキルトレーニングから、学習への興味・関心、学習習慣、学習方略の獲得へと重点が移り、また、教師中心の授業から生徒中心の授業へとシフトした。小学校から高等学校まで、児童生徒の英語の熟達度は9つのレベルに分けられている。このうちレベル1と2は、小学校で到達することが必須となっている。小学校での英語教育の目標は、児童の興味・関心、自信、英語学習への積極的な態度の育成、児童の言語感覚を育て、発音やイントネーションなどの音声スキルを獲得させること、日常生活で英語を使うことができ、卒業後の英語学習の基礎作りのための初歩的な能力を育てることにある。

教科書は通常どの学年のものも人民教育出版社によって編集、出版される。県や市によっては独自の教科書を刊行す

る場合もあるが、その場合は、教育省から認可を受ける必要がある。人民教育出版社による英語教科書以外では、北京師範大学、清華大学、外国語教育研究所出版局、華南師範大学によるものがある。最新の教科書に掲載されているトピックの多くは、子どもたちの日常生活を取りあげており、学校や家庭でのやりとりが多数扱われている。さらに、子どもたちの文化的理解の意識を高めるための教材も含まれている。

伝統的に、教室では、教師が語彙や表現、文法や文の意味を説明し、生徒達は、語彙や文を記憶し、暗唱することが求められてきた。練習といえば、パターンプラクティスや書き換え、中国語と英語の翻訳、そして音読が中心であった。生徒達の興味・関心を引き出し、居心地の良い雰囲気の中で教室での活動に参加できるように、小学校での英語教育では、ただ暗記するのではなく、活動しながら教える・学ぶ、他の生徒の前で使ってみる、模倣する、絵を描く、歌う、ゲームをするといったことを取り入れている。外国語学習の入門期の子どもたちに対して、発音や文字の指導から始め、次いで（カードや絵や実物を使った）単語の指導、そして、（歌やリズムを使った）の指導、そして、（お話、ロールプレイ、劇、ゲーム、プロジェクト活動を取り入れた）文章の指導へと移行する。子どもたちは、歌ったり、チャンツしたり、演技をしたり、遊んだりしながら、とてもよく学んでいる。そして、音声と文字によるコミュニケーションスキルを伸ばしていく。しかし、暗記とドリルといった伝統的な方法は残っており、現在でも授業で使用されている。いずれにしても、生徒の自発的な学習やコミュニケーションに対する積極的な態度を育成することが、現在の指導の重点となっている。（シンポジウムパンフレットより（一部改編））

### ○実践報告3: 日本「日本の初等英語教育の現状」 今井裕之(兵庫教育大学)

1992年小学校英語教育の研究が始まり、1998年に総合的な学習の時間において小学校で国際理解の一環として、英語活動が始められ、その成果をもとに、2001年に小学校英語活動の手引きがつけられた。さらに7年を経た現在、開発拠点校が全国に設けられ『英語ノート試作版』が配布され外国語活動が試行されている。また『小学校外国語活動研修ガイドブック』が刊行された。

新学習指導要領では、外国語活動の目標には次の3つの柱がある。「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを測ろうとする態度の育成を図る」「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」。このなかでも中学校・高等学校の英語教育と比較して特徴的な部分は「体験的に理解を深める」ということである。この点を我々がどのように解釈するかを考えた。週一回の割合で授業を行っている。兵庫教育大学附属小学校では外国語活動の開発テーマである「活動から学びをつくる」ことを主眼とし、「歌やゲームなども含めての、広い意味での言語活動を通して、児童に知的な楽しさを感じさせること」を重視している。具体的には(1)音声文字指導を位置づける、(2)子どもの学びを意味づけたり価値づけたりする、(3)子どものアウトプット（言語使用体験）に対する評価、という3点を心がけてやっている。これらをベースに低学年では“sing” “say”をテーマにALTの英語を真似る（声を合わせる）ことを重視する。中学年では“answer” “ask”という対話的な要素を入れる。高学年では“tell” “talk”をテーマに自分の考えや気持ちを入れ多少長めの英語を話すことを重視する。また、これらは、達成目標ではなく、言語活動デザインの視点として位置づけている。

今回は6年生の授業のビデオである。授業の流れは次の通りである。第1時：先生のスピーチを聞こう、第2時：スピーチづくりとリハーサル、第3時：同左、第4時：保護者に対するスピーチプレゼンテーション。

まず第1時においてスタインジーク先生と伊田先生それぞれが夏休みなにをしたいのかというテーマでスピーチし、児童はそのスピーチを理解した。次に第2時と第3時には児童は自分のスピーチをワークシートを用いて作った。そしてスピーチを相手をかえながらいろんな人に聞いてもらいリハーサルをした。最後に第4時のスピーチプレゼンテーションでは、授業参観日であったこともあり保護者に児童のプレゼンテーションを聞いてもらった。

#### リチャード・スタインジーク(兵庫教育大学附属小学校)

児童の英語については少しの進展しか見られなかったが、4つの授業は上手く進んでいたと思う。十分な時間がなかったが子どもたちはよくやっていた。しかし、使われていた英語については、語彙や文法、アウトプットの量、また友だちや保護者の前で話すプレッシャーなどから考えると多少難しかったと思う。私たちの学校では7年間英語が教えられ、ビデオに出ていた児童は英語を学んで6年目である。そのため児童たちも今回のチャレンジングな活動においてやる気に満ちていた。もうあと1つ、練習とポスターづくりの授業があったらよかったと思う。しかし、時間的制約はあったが子どもたちは良くやったと思う。スピーチや多くの語彙が必要なこの種の授業では電子辞書がとても役立つと考える。辞書で新しい単語を調べれば私に尋ねるより速い。また子ども同士が授業中助けあっている点が良かったと思う。速くスピーチが終わった児童が他の児童を助ける。現在私が抱えている問題はリーディングとライティングである。音読に関してはカタカタを使用する児童が出ている。児童は2年間フォニックスを学んでいるが、リーディングに課題を

抱える児童もいる。フォニックスは毎回 10 分程度しか教えられないため児童には十分ではない。

昨年からもっと自然な英語を使おうと思っている。I wanna play...のほうがI want to...より自然である。より自然な方法で子どもに表現させれば発音やリスニング力を向上させるだけでなく、英語を音声学的に学びやすくする。昔は twenty と発音していたが今は tweny と発音している。

最後に私の学校の英語授業について話す。週一回全学年で教えている。授業時間は 45 分間である。1 年生では、あいさつや天気から授業を始める。3 年生では時間、4 年生では日付を尋ねる。授業の初めにはこのようなことを復習できるので有効と思う。教科書を使用していないので、カリキュラム作成に自分も加わっている。自由にカリキュラムを作るよりも教科書があれば時間をかけず容易に教えられるが、中学校に比べ小学校英語授業のほうが楽しいと思う。学級担任教員と 50-50 で教えるスタイルをとりたいと思っている。そうすればどちらかの教師のみに負担が偏らない。クラスによっては私の方が授業をして学級担任は観察しているというときもある。授業前に学級担任と授業内容について確認したいと考えている。また教えているときは私は日本語は使用しないようつとめている。学級担任が私の言ったことをひとつひとつ翻訳するのではなく、簡単な英語や例を出して児童の意味理解を促している。ときに時間的制限から児童と一対一対応をしているときには日本語を使う場合もある。

**今井：**伊田先生のコメントをハンドアウトにそって紹介する。まず担任によるスピーチについては、子どもが夏休みに同じようなことをやってみたいのではないかと考えて作った部分と、目標のようなものを語ってもよいということを示すために、たくさんの本を読んで英語と理科を勉強したいということをスピーチに盛り込んだ。I want という表現を自然に何度も使うことを心がけた。リハーサル場面では、子どもたちが相手を見つけて、その人に対してリハーサルを行う。これは、自然と手が動く様子に現れているように、友だちを目の前にすることで相手に伝えるという意識が子どもの中に芽生えているからである。この相手を意識することはコミュニケーション能力の素地になるところでもあり、大切にしているところである。と述べられている。この場面だけでなく授業全般を通して、何か子どもたちが常に誰かに向かってしゃべっている。誰かに対して話しかけている。そういうような授業だったと思う。そして振り返りの場面で、多く出されているコメントとして、自分で英語を話してみてもうまく相手に伝わったとき楽しかったとか、友だちとのやりとりの中で気づいた良さがあつた、新しい言葉や表現を学習したときの充実感があつた、が挙げられていた。最後に授業参観でスピーチをした意図については、保護者を相手にすることでいつもとは異なる人に対して英語を使うにはどうするのかについて考えることで相手意識が芽生えたと考えた。次に、子どもの学習評価をしてもらい良い機会になったと思った。今回は保護者にポストイットにスピーチを聞いての感想、意見、コメントを書いてもらい、子どもが作ったポスターに貼ってもらった。子どもたちは喜んでた。このような形のコミュニケーションの取り方もあると思う。

最後に私が参観して感じてきたことを 3 つ述べる。まず、常に言語使用体験において相手を意識するということを大切にしている。次に、そのなかで言葉の違いや仕組みに関心が向いていく。そして最後に、子どもの言葉にもあるが、言葉に慣れ親しんでいく自分自身の変化を自覚したときの喜びを、ふり返りを通して育てていこうとしている。その事例として今回お見せした授業を解釈していただけたら幸いである。

#### ◎各国における初等英語教育の現状報告にもとづくパネルディスカッション(15:35-16:50)

**伊東：**指定討論者のバトラー先生から 3 つの韓国・中国・日本からの報告に関する質問やコメントをお願いする。

**バトラー後藤：**3 つの授業実践を見て、授業の中に豊かなものがあると思う。率直な感想はビデオに出てきた先生方の英語力が高いということ。韓国では英語だけで授業を行うという国の方針がとられている。すべての教師が自信をもって英語を使用できているわけではないと思うが、その点がテクノロジーで補われており、テクノロジーが上手く使われているという印象をもった。2 点目は教師の授業のテンポがよいということ。TPR を上手く使いテンポが良かった。そして、子どもの興味を引く、実用性が高い授業内容になっていた。例えば中国の場合は北京オリンピックが開催されるので外国人に道案内をしましょうとか、日本では保護者に見てもらおうとか、子どもの興味を引く、動機づけが与えられる授業内容になっている。practice と language use の兼ね合いが難しい。言語習得という点で特に practice は重要でそれをいかに楽しくするのがポイントである。そこで質問であるが、アジアでは子どもの英語力に大きな差が出てしまおうとされている。特に高学年になると差が出て一斉授業をするのが難しくなる。英語力の差に対する方策があれば教えて欲しい。また、アクティビティを選ぶときにどのようなところに基準を置いて選んでいるのか。この 2 点をうかがいたい。

**金美京：**学力の高い児童と低い児童には異なるアクティビティを与えている (△)

**バトラー後藤：**子どもにアクティビティを選ばせることもあるか。

**金美京**：子どもに選ばせることもある。私は英語専科教員として全部で9学級を教えているので児童のレベルを理解しなければならない。だからときどき子どもたちにアクティビティを選ばせている。学級担任が教える場合は、彼・彼女はすでに子どもたちのレベルを知っているのが容易である。

**周**：アクティビティの選択は、授業の目的や計画に基づいてアクティビティを選ぶ。

**今井**：低学年の場合、歌などシンプルに声を合わせる。中高学年の場合、ゲームであれ、タスク的な活動であれ、判断を要求される、ゴールや勝負など条件をクリアするなかで、ことばが活動の方向性を決めるのに役割を果たすこと、子どもが役割を意識してできる活動をデザインしている。

**金榮淑**：教師により異なるが、原則として児童の学力差に応じたアプローチが薦められている。1レッスンは4つの授業からなっている。毎授業、学力差に応じた指導が行われる場合もあるが、多くの場合は3つめの授業において学力差を考慮し、低学力児のために既習内容を繰り返す。その間、できる児童は自主学习をしている。中学校レベルでは学力に応じてクラス分けがあるが、小学校では学力差にかかわらず一つのクラスで学習している。その場合コンピュータやその他教材を使用して対応している。学力差は言語的な面だけを意味するのではなく、興味なども含まれる。したがって教師は子どもの興味を考慮し複数のアクティビティを用意したり、グループ分けをしたりする。

**伊東**：金美京先生、学力差への対応について追加やご意見などあるか。

**金美京**：学力差のある児童に対して異なるアクティビティを設定することは韓国のカリキュラムの重要なポイントだと思う。韓国の教員はそのようなアクティビティをすることに取り組んでいる。先生によっては学力差に対応することに困難を感じている。最近では(△)。ロールプレイが人気がある。レベルの高い児童は自分自身の物語を作る。またレベルの低い児童はすでに教えた表現を練習する。など、学力差に応じたさまざまなアクティビティを提供している。

**周**：中国では1年生から6年生まで英語専科教員が英語を教えているため、あまり大きな差が出てこない。しかし、ある学校では先生の実力によって差が出てくる。中国では英語教育が流行っており、子どもが3,2歳から英語教室に通っている。したがって学校によっては差が出ている。個々人の違いを考慮して活動をデザインしている。いろいろなレベルの要求に応じて、音読やスピーチなど子どもに合わせてアクティビティを選んでいく。

**バトラー後藤**：学力差に関する質問をしたのは、日本ではまだ本格的に問題になっていないが、政府が英語を必修化した場合、学力差の問題が大きく現れるのはどこの国でも見えているため、他の国の事情を知りたかった。また、授業研究をクロスカルチャーで行ったとき、ある一つの授業が国境を越えて人気があった。それは、タスクやアクティビティを考えた場合、目標の言語材料を使ったとかタスクの目標を果たしたということが重視されているが、先生方に人気があったのはそのような点ではなく、意外性があるゲーム。すなわち英語がうまく使えた、使えないにかかわらず誰が勝つか分からないようなゲーム。動物園でパンダが何所にいるかを尋ね、パンダがどこにいるかを説明させるアクティビティであるが、すべてに幕が掛かっている質問する側も応える側もわからない。応える側がだいたいこのあたりにいるだろうということで説明する。質問した側が道順通りに行ってみて実際幕を開けてみて、ライオンが出てがっかりしたり、パンダが出て大騒ぎする。このアクティビティの良さは、必ずしも英語ができる子どもが勝つとは限らないゲームであったこと。クラスの中でできる児童とできない児童という雰囲気ができ、できない児童は英語に対する興味を失ってしまう現状がある。そのような学力格差がある状況でもそのゲームに参加するときはみんな同じ。一生懸命参加すれば、できない児童でも十分に勝つチャンスがある。高学年になるとどうしても学力差の問題が出てくるが、それを排除したアクティビティを考えていく必要がある。この話を聞いたとき、アクティビティの選択は難しいと思った。だからいまの2つの質問をさせていただいた。

**伊東**：フロアのみなさんから質問をうかがう。

**フロア**：兵庫教育大学附属中学校での授業を日本以外の先生方がどのように感じたかを聞きたい。自然な表現といえどもwannaよりもむしろ標準的な英語表現を使うべきではないか。

**金美京**：韓国ではwannaとwant toといった2つの表現がCD-ROMなどを通して教えられている。ネイティブスピーカーが使用しているので教えるべきである。

**伊東**：どの学年からwannaを使って教えるか。

**金美京**：6年生からである。

**金榮淑**：難しい質問で私が十分に答えることはできないが、子どもは2つの表現にふれるべきだと思う。しかし、初めの頃はwannaが本来2つの語から成っていると知らない。あとで書き言葉で気づく。私が教師なら教えても良いと思う。

**周**：中国の小学校ではオーセンティックな英語が目標となっている。What's up? やwannaは教えて良いと思っている。

**バトラー後藤**：私は少し抵抗がある。標準とは何という問題とも関わっている。応用の範囲が狭まる、また、使うコン

テキストを間違えると使用するとこの人の英語は大丈夫かと思われてしまう。理解レベルではよいが、産出レベルで小学校で実施するのはどうか。これはスペルの問題と関わってくる。小学校児童は音を聞いて、音の蓄積があった上でスペルの学習にはいる。書き言葉の学習に入るときに音とスペルが一致していた方が混乱は少ないのではないかと。wanna という表現が悪いわけではないが、いつ導入するか、それまでにどの程度の英語を学んでいるかによる。口語英語の導入は慎重にすべきと思う。

**今井**：言語カリキュラム作成という意味ではその通りだと思う。授業者が子どもたちに wanna と言ってもらった方が自然と思うなら、向かい合う同士の関係の中で wanna のほうが自然ならばそれでもよいかと思う。ただし、選択でいきましようということで、伊田先生が want to で、スタインジーク先生が wanna で表現した。子どものなかには want to を使っている児童もいた。

**スタインジーク**：英会話の学習者になぜ英語を学ぶのか尋ねると字幕なしで映画を見るためにと言う。映画のなかでは wanna だけでなく haveta や liketa も使われる。ただ、両方を与え説明すれば、子どもが選ぶことができる。

**伊東**：教師側の発音の問題とも関わる。この点についてフロアから質問を得ている。教師と児童の発音の良さは何が要因か。また、中国の地方ではどうか。

**周**：中国語自体の発音が難しい。英語発音については聞く場合も話す場合もわれわれにはあまり問題はない。小学校の教師として重視されているのは発音である。子どもの耳がよいということで小学校から英語を始めることになった。小学校では特に教師の発音はよくなければならない。慣れていない先生には付属のテープや CD-ROM もあり、子どもは良い発音ができるようになる。

**フロア**：中国で英語を教えている先生は専科教員か、それとも担任教員か。

**周**：専科である。地方では全科を教えている場合もある。上海、北京などの都会は小学校英語教育が進んでいる。

**フロア (同上)**：大都市以外でも専科の先生か。

**周**：ほとんど専科教員である。

**金美京**：韓国で英語教育が始まったとき、(△)。今では英語教師は多くの研修コースがある。120 時間の基礎コースや上級者用の 6 カ月コース。6 カ月間寮で過ごし、1 カ月間アメリカ合衆国で過ごす。また ESL プログラムや TESOL プログラムがある。新政府が (△)、多くの人々が職を得るために TESOL 資格に興味をもっている。英語教育が導入されたときには学級担任が英語を教えていたが現在では (△)。新政府は発音を向上させるために多くのネイティブの講師を雇った。今年私にはシカゴ出身の同僚がおり、私は児童が自然な発音を学ぶ良い機会だと思っている。

**金榮淑**：韓国語は英語のような強勢拍(stress-timed)の言語ではなく音節拍(syllable-timed)の言語であるため韓国人に理解可能な発音の習得は難しい。特に中学生に比べ小学校児童にとって発音は重要である。したがって教員には理解可能な発音をトレーニングする必要がある。教師教育のプログラムには発音コースが含まれている。そこでは個々の音素の発音というよりも、リズムの学習を重視すべき。そのような点から、音節拍の want to という発音よりもストレスタイムの wanna のほうが子どもには適切と思う。

**伊東**：教師自身の英語力に関する自信という観点から、日本の小学校教師による発音指導についてどう思うか。

**パトラー後藤**：必ずしも発音が下手な教師だと英語を教えられないということでもない。テクノロジーを上手く使うという方法もある。英語の歌でもリズム的におかしなものもある。教材の選び方を慎重にすべき。発音に関しては子どもたちと少しずつやっていくべき。

**伊東**：フロアからの質問ですが、フォニックスを授業に導入しているか。

**周**：以前中学校から英語が教えられていたときはフォニックスがあった。今は義務としては教えていない。あったら教える程度である。

**金美京**：韓国では教科書にフォニックスに関する部分はない。教員はフォニックス指導は重要だと思っており、外国人教師もフォニックス指導を好んでいる。学校によってはフォニックスブックを使っている。我々の教科書によればフォニックスを教えなくてもよいことになっているが、教員の多くがフォニックスを重要と思っている。私は自分が指導している児童にフォニックスを用いている。(△)

**伊東**：発音以外のことについて質問はあるか。

**フロア**：英語を使用する場面が生活の中にないので、英語を習っても使わない中で忘れてしまう。コミュニケーションを大切にすることは大切だと思うが、それ以上のことを求めていくとすると、何をモチベーションに英語を学んでいけばよいのか。韓国や中国の状況はどうか。

**金榮淑**：複雑な状況です。韓国では就職競争がとて厳しい状況にある。よい職業を得るには良い大学に入学すべき。そのためには高い言語能力が必要である。また、たくさんの多国籍企業が仕事を提供しているため、そのような企業に

入るためには言語能力が必要である。韓国企業もある程度の英語力を求めている。そのためわれわれは英語フレンドリーな環境をつくらうとしている。英語で英語を教えることがその一例であるが、英語でコミュニケーションできない子どもは授業について行けないためにモチベーションを失うという可能性がある。その一方で英語の必要性を感じる可能性もある。われわれは子どもが自分の言語能力を高めようと努力することを期待している。英語図書館、英語テレビ番組などもある。韓国では英語は外国語であるが、第二言語に向かっている。そのなかで子どもが英語の必要性を感じている。

**伊東**：実際に子どもを指導していて、子どもたちがどの程度英語の必要性を理解していると思うか。

**金美京**：授業では英語を熱心に学ばなければならない。さもないと試験にパスできない。児童は友だちとゲームをすることが好き。英語を練習しないとゲームに勝てない。勝つために練習をしたり、友だちと一緒にやったりする。そして高いモチベーションを維持する。

**周**：中国では今英語を勉強しなければならない環境にあります。中国、日本、韓国は同じ環境にあると思う。大きくなれば英語が必要な状況であることを知る。小学校から中学校までが義務教育であるが、ほとんどの小学校で中国語、算数、英語の試験をやっている。政府はダメと言っているが、一人っ子政策のためみんな良い学校に行きたいと思っており、最終的に勉強しなければならない。子どもは先生や親から褒められたらモチベーションが上がる。

**伊東**：この問題はわれわれにとって重要なこと。コミュニケーションの必要性がないところで、教室の中で子どものモチベーションを促さなければならない。この点について苦労されている点があれば、スタインジーク先生、今井先生どうですか。

**スタインジーク**：日本で英語を使う機会は少ない。子どもは私に話すしか英語を使う機会がない。テクノロジーを使うことが一つの方法。金沢の児童がスカイプを用いてベトナムの児童と会話をしている授業を観察した。モチベーションに関して言えば、HRT 次第である。よい HRT が退屈な授業をする。私は英語しか使えないが HRT は児童をやる気にさせることができる。モチベーションについては、中学校では試験があるため、小学校よりも問題になる。

**今井**：小学校の時点でやる気を失わない指導。そのために学習指導要領でも体験重視がうたわれている。P-P-P と言えば production であり、実際に使用することを重視することである。小学校英語はやる気を失わせないように、実際に使うことに向かおうとしている。英語を使う場所がないというが、児童は聞く人がいれば話すし、読む人がいれば書く。そのような場を作ることが教師の仕事であるし、友だち同士のすべきことだと思う。中高での英語教育でどこまでそれをやってきたか。P-P までいったが最後の P までやらなかったとか。子どもたちがやったことをちゃんと私たちは聞いたか読んだか。あるいは一緒にやる人として一緒にいたか。何か一緒にやることをつくったか？ということを考えていくことが一つの答えと思う。できた喜びを教室で保証していくことが必要である。

**バトラー後藤**：将来役に立つとかということを小学生に言ったところで無理な話である。今井先生が言ったように、わかった、使えた、通じた、という実感できる場をつくっていくことがおそらく唯一の方法である。韓国と中国の状況と日本の状況とは異なる。韓国・中国では英語ができることが重視され、それが直結して授業に現れている。日本はそのような社会状況になっていない。日本では児童の内面的な自発的な動機づけをできるだけ強めること。それが地道ながら最強の方法ではないか。

**フロア**：小学校の英語と中学校の英語の連携について、韓国や中国ではどうか。

**金榮淑**：小中の連携は難しい問題になっている。中等教育が先にあり、その後、初等教育が付け加えられた。これが問題だと思う。したがって、まず小学校英語のカリキュラムと教科書を開発して、その後中等学校の英語教育の内容を決めるというのが一つの方法である。もう一つは、初等と中等の教員が英語授業を観察し合えば、少しずつ理解し合える。いまだ小中連携については問題があるが、少しずつ良くなっている。一つの証拠として、小学校で活動重視の英語授業を学んだ子どもが翻訳中心の中学校英語授業を受けると困難があり、中学校英語授業でも活動が取り入れられてきている。

**周**：中国でも同じ問題があるが、2001 年から新しい英語カリキュラムにより小学校ではレベル 1-2、中学校ではレベル 3-5、高校ではレベル 6-7、そして選択レベル、大学では 2 年生まで必修。このように一貫性を保っている。

**金美京**：小学校カリキュラムではスピーキングとリスニングに焦点をあて文法は直接は扱っていない。一方、中等教育では文法を教えている。中等教員とのコミュニケーションが必要である。

**フロア**：文字が入る手前の音だけで学習している子どもの学びに関して大切なことはなにか。

**周**：小学校 1 年生から 6 年生までリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングそれぞれに関する欲求がある。1 年生は聞いて真似をする、見て聞く段階。3 年生は聞いて言う。文字の認識は文字を指を使って読む。6 年になると作文の欲求が出てくる。さらに思考力育成は難しい。中学校になると多元的知能がある子どもは音楽や体育などいろいろな活動をさせて言語を学んでいる。

**金美京**：リスニングとスピーキングが重要。過去には文法が重視されていた。最近では4つの技能を統合することがよい英語学習と考えられている。まずリスニングとスピーキングを導入し、リーディングとライティングを導入する。英語教師はあれこれ試し、最近では同時に4技能を統合しようとしている。

**スタインジーク**：4技能を統合することはよい方法である。日本では「歩く」前に「走る」ことを教えている。リスニングやスピーキングを重視すべき。その後リーディングとライティングを教えるべき。

**バトラー後藤**：日本語と英語の文字体系は異なる。子どもは英語のアルファベットに意外と親しんでいる。それをうまく利用すればわれわれが思っている以上に子どもはアルファベットに抵抗がない。パソコンにアルファベットが入っているため、我々が思っている以上にアルファベットの認識能力は高い。しかし、文字に最初から頼り切ってしまうと、音をあまり聞かなくなってしまう。そうするとどうしても日本語読みになってしまう。発音が日本語風になってしまうという危険性がある。かなりたくさんインプットが必要と思う。極端な話、私はアウトプットをせかす必要はないと思う。子どもにより個人差がある。聞いたことをすぐに使ってみたいと思う子もいれば、しばらく心にとめておきたいという子もいる。サイレントピリオドは子どもにより長短がある。子どもの個人差を大切にしながら、基本的にはできるだけインプットを聞かせることを大切にしたい。また英語は綴りと音が一対一対応ではない。それを組織的に教えようとしたのがフォニックスである。しかしフォニックス使用についてはかなりの力量が必要である。中途半端にフォニックス的なものを導入するよりは、インプットを大切に、個人差（文字がある方が安心する、覚えやすいという児童もいる）に応じてさまざまなオプションを持っていることが必要である。

**フロア**：中国では小中連携について具体的にどのようなことをやっているか。

**周**：小学校中学校のお互いの交流はあまりない。

**フロア**：小学校教師の英語力の向上については、韓国や中国ではどのようなかたちで行われているのか。

**金榮淑**：小学校で英語が教えられるのと同時に教師はトレーニングを受けてきた。基本的に全ての小学校教師が120時間の教員トレーニングプログラムを受けなければならない。教員によっては120時間のトレーニングを2回受け計240時間のトレーニングプログラムを受けた者もいる。最初は基礎的トレーニング、次は上級トレーニングである。ほとんどの小学校教員がプログラムを受けた。過去10年間教師教育機関において大学教育を通して見込みある英語教師を育成した。彼らは大学時代に英語教育に関する単位を取っている。また最近、教員採用試験で英語面接試験を実施することを検討中である。教職に就くには言語スキルを伸ばしていかなければならない。また教員採用試験に英語の模擬授業の導入を検討している。一方、現職教育については地方政府が国内での集中教員研修プログラムを準備している。昔は、研修一クラス20-40人の受講生だったが、この夏は私の大学では各クラス10人の受講生で、英語指導法の授業はない。昔は韓国人教授は英語指導法を担当していた。この夏休みはすべてのクラスは英語力の向上が目的であり、すべて講師はネイティブである。小学校教員は韓国人教授が英語を指導することを好まない。さらに私の大学のような教師教育機関において、教育省は韓国人教授は英語で英語指導法コースをするように薦めている。受講生はネイティブによる英語クラスを英語で受けているため、そのほうが自然であると考えている。研修終了後、小学校教員は英語授業を英語で実施しなければならないので、われわれ韓国人教授はその模範でなければならないためストレスを感じている。

**金美京**：プサンでは20人以上の英語教員をニューヨークへ送る。彼らはそこの小学校で補助教員として働き、6か月後に帰国して英語教員として働く。

**周**：中国のほとんどの大きな都市では教師の研修学校がある。そのスタッフは10年間の小学校での指導経験がある。そこで集中講座がある。大学の外国部で2年間教育修士をとる。政府の海外留学プロジェクトがある。教師個人個人が英語資格試験を受ける。小学校の英語教員にはオーラルテストがある。

**伊東**：「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」というテーマでいろいろな勉強ができた。現場に持って帰り、現場で共有してもらえたらと思う。

◎閉会4(16:50-17:00)

平野絹枝(上越教育大学)

本シンポジウムは兵庫教育大学・上越教育大学・鳴門教育大学の協同研究プロジェクトとして行われた。有意義な一日であったことを祝して閉会のことばとしたい。

作成したプログラムを、(1) 全体概要、(2) 概要の項目的説明、(3) 各項目の内容の3つのレベルに分けて示す。

**(1) 全体概要** (10時間)

(1 から 4 および 6 は集中方式で、5 は個別対応式でおこなう。)

(「段階づけ」は受講者(学校)のレベルに対応すべく内容を段階づけするもの。)

1 目的論の理解 (1時間)

1.1 小学校学習指導要領

1.2 『英語ノート』

2 英語の研修 (2時間)

2.1 発音 (段階づけ)

2.2 教室英語 (段階づけ)

2.3 英会話 (段階づけ)

3 授業の改善 (2時間)

3.1 授業づくりのノウハウ

3.2 授業づくりの実際 (段階づけ)

4 授業方法の理解 (2時間)

4.1 活動タイプ (歌・チャンツ・クイズ・ゲーム・タスク) (段階づけ)

4.2 TT (段階づけ)

5 授業研究・分析 (2時間)

5.1 授業観察

5.2 授業分析

6 総括 (1時間)

6.1 総括

6.2 自己研修の維持



## (2) 概要の項目的説明

### 1 目的論の理解（1時間）

#### 1.1 小学校学習指導要領

指導要領に記された目標の確認と中学校指導要領のそれとの違いの理解

#### 1.2 『英語ノート』

目標の具体化の確認

### 2 英語の研修（2時間）

#### 2.1 発音（段階づけ）

音素 → 音節 → かぶせ音素 → デリバリー

#### 2.2 教室英語（段階づけ）

挨拶（1）→ 挨拶（2）→ 指示（1）→ 指示（2）

#### 2.3 英会話（段階づけ）

基本表現（現在時制：肯定・疑問・否定）→ Wh 疑問 → 相（進行形）→ 時制（過去・未来）

### 3 授業改善（2時間）

#### 3.1 授業づくりのノウハウ

授業づくりの基本的視点と方法論とその具体

#### 3.2 授業づくりの実際（段階づけ）

教案作成 → 単元化 → カリキュラム編成（適宜、他校の実例を紹介する。）

### 4 授業方法の理解（2時間）

#### 4.1 活動タイプ（歌・チャンツ・クイズ・ゲーム・タスク）（段階づけ）

各タイプの基本型 → 各タイプの展開（1）→ 各タイプの展開（2）

#### 4.2 TT（段階づけ）

基本的知識（タイプと役割）→ 基本的知識（各教員の役割）→ 観察 → 実践

### 5 授業研究・分析（2時間）

#### 5.1 授業観察

研究授業の観察

#### 5.2 授業分析

研究授業の検討

### 6 総括（1時間）

#### 6.1 総括

総括的アンケート

#### 6.2 自己研修の維持

自己研修の計画

### (3) 各項目の内容

#### 1 目的論の理解（1時間）

##### 1.1 『小学校学習指導要領』

学習指導要領に記された目標の確認と中学校指導要領のそれとの違いの理解

###### ・目標

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」

Cf. 「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」

(中学校指導要領)

###### ・違い

- (1) 言語や文化に関する理解における体験の強調（体験的学習）
- (2) 外国語の音声と基本的表現への限定性（限定的学習範囲）
- (3) 慣れ親しませることの目標（限定的学習到達度）
- (4) コミュニケーション能力の素地（限定的学習到達度）

##### 1.2 『英語ノート』

目標の具体化の確認

###### ・5年生 Lesson 2：ジェスチャーをしよう

- (1) 本単元のねらい：異文化間コミュニケーションにおける言葉に付加される表情やジェスチャーの重要性を体験させる。
- (2) 話題：相手に自分の思いを伝えるためのジェスチャー
- (3) 場面：日常生活の中の挨拶
- (4) 表現：How are you? I'm happy.
- (5) 主な語彙：fine, happy, hungry, sleepy, how, are, I, am, (I'm)
- (6) 第1時の流れ（全体4時間）
  - (i) Let's Listen：ふさわしい表情を考えよう
  - (ii) Let's Play ①：いろいろな表情をしよう
  - (iii) Let's Play ②：先生の気持ちをあてよう
  - (vi) Let's Sing：Hello Song

###### ・6年生 Lesson 9：将来の夢を紹介しよう

- (1) 本単元のねらい：理由を含めて、自分が将来つきたい職業を紹介する。
- (2) 話題：将来の夢
- (3) 場面：理由を含めて将来の夢についてスピーチを行う。
- (4) 表現：What do you want to be? I want to be a teacher.
- (5) 主な語彙：teacher, doctor, driver, singer, nurse, earth, be
- (6) 第3時の流れ（全体4時間）
  - (i) Let's Chant：When I Grow Up
  - (ii) Let's Play：チェーン・ゲーム
  - (iii) Activity：インタビューをしよう
  - (vi) Activity 1：スピーチ・メモを作成して、それをもとに自分の夢を紹介しよう（準備）

## 2 英語の研修 (2時間)

### 2.1 発音 (段階づけ)

音素 → 音節 → かぶせ音素 → デリバリー

・音素：日本語にないもの

#### (1) 子音

- (i) [f, v] (無声唇歯摩擦音、有声唇歯摩擦音) : five wives
- (ii) [θ, ð] (無声歯摩擦音、有声歯摩擦音) : these three theaters
- (iii) [r] (有声歯或は歯茎接近音) : red ribbons
- (vi) [l] (有声歯或は歯茎側面接近音) : a local hotel

#### (2) 母音：

- (i) [æ] (準開前舌非円唇母音) : a cat on the mat
- (ii) [ʌ] (半開後舌非円唇母音) : a bug on the rug
- (iii) [ɑ] (開後舌非円唇母音) : hotpot
- (vi) [ə:] (R音性中段中舌母音) : a bird on a perch

・音節：閉音節と注意を要する音の組合せ

#### (1) 子音連結

- (i) tr- : tree, try, triple
- (ii) dr- : dream, dragon, dress
- (iii) str- : street, strike, stress
- (vi) spr- : spring, spray, sprint

#### (2) 子音で終わる語

- (i) -t : bat, pot, but
- (ii) -d : sand, hand, and
- (iii) -p : wrap, cap, lip
- (vi) -b : rib, tab, rub
- (v) -k : milk, bike, snack
- (vi) -g : pig, bug, frog

#### (3) 注意を要する音の組合せ

- (i) [si] : seat [si:t] (cf. [fi:to] : シート)
- (ii) [ti] : team [ti:m] (cf. [fi:mu] : チーム)
- (iii) [tu] : tour [tuə] (cf. [tsua:] : ツアー)
- (vi) [hi] : heat [hi:t] (cf. [çi:to] : ヒート)
- (v) [hu] : hood [hu:d] (cf. [φu:do] : フード)

・かぶせ音素：リズム

(1) 英語のリズム：強勢拍リズム (アクセントのある音節が等間隔に現れる。)

**Cats                      eat                      mice.**  
The **cats**    will    **eat**    the    **mice.**  
The    **cats**    will    have    **eaten**    the    **mice.**

Cf. 1 日本語のリズム：モーラ拍リズム

こ・こ・は・ど・こ・で・す・か。

Cf. 2 英語母語話者による日本語の発音傾向

ここ、どこですか。

Cf. 3 日本語母語話者による英語の発音傾向

**The cats will eat the mice.**

(2) 文中におけるアクセントの有無

内容語と機能語の区別

内容語：通常アクセントを受ける

名詞、形容詞、副詞、動詞、疑問代名詞、疑問副詞、指示代名詞、指示副詞、数詞

機能語：通常アクセントを受けない

冠詞、人称代名詞、前置詞、接続詞、助動詞、be動詞、関係代名詞、関係副詞、不定形容詞など

・デリバリー：流暢さ

(1) 処理の速度

(i) 表現単位や文型のアクセス

(ii) 語のアクセス

(iii) 音声化の速度

(vi) 文脈的・場面的整合化

(2) 音変化：音声化の速度を上げる要因（松澤喜好 2004.『英語耳』アスキーによる）

(i) 語尾の子音と次の語の語頭の母音がつながる。

Take it easy. [teiki ti: zi]

look at [lukət]

come on [kʌmən]

(ii) 同じ子音が連続するときには2つ目だけを発音する。

Take care. [tei\_keə]

get to [ge\_tu]

write down [rai\_daun]

(iii) 語尾の子音（破裂音）は消える。

all right [ɔ:lrai(t)]

make up [meikə(p)]

talk about [tɔ:kəbau(t)]

(vi) あいまいな母音は消失気味になる。

animal [ænəm(ə)]

family [fæm(ə)li]

kitten [kitn]

(v) [t] は「ラ行」に近い音になる。

Get up. [ゲラップ]

Get out. [ゲラウ]

Shut up. [シャラップ]

2.2 教室英語（段階づけ）

挨拶 (1) → 挨拶 (2) → 指示 (1) → 指示 (2)（金森強 2007.「クラスルーム・イングリッシュの活用」による。岡秀夫・金森強（編著）『小学校英語教育の進め方』成美堂に所収。pp. 134-143.）

・挨拶 (1)

Hi, everyone! / Hello, class!

How are you? / How is everyone?

Good morning / afternoon, class (everyone / everybody)!

I'm fine. / I feel good. / I feel great.

I'm great. / I'm good. / I'm OK.

I don't feel well. / I don't feel good.

I have a cold (a headache / a sore throat / a stomachache).

・挨拶 (2)

- 〔How's the weather today?  
Is it sunny? Cloudy? Yes. It's sunny.  
Look! It's a beautiful day today.
- 〔What day of the week is it today?  
Is it Monday? Tuesday? Yes, it's Tuesday.  
Now let's begin! / Now let's start today's lesson!  
Are you ready to start? / Is everyone ready to begin?

・指示 (1)

- (1) ALTやゲストを紹介する。  
〔We have a special guest today.  
This is Ms. White. She's from Australia. Welcome to our class!
- (2) 質問をする、させる。  
〔OK, let's ask him / her questions.  
Anybody?
- (3) 聞き返す。  
Sorry! / Pardon? / Say it again, please.  
Slowly, please.
- (4) 子供をほめる。  
Good job, (Emi)!  
Great! / Well done! / Super! / Terrific! / Excellent!

・指示 (2)

- (1) 次の活動に移る指示をする。  
First, let's sing a song together. / Let's watch a video.
- (2) 活動のめあてを伝える。  
Please listen to your friends carefully. / Make good eye contact.
- (3) ボランティアを募る。  
We need one person to come up to the front. / Any volunteers? Raise your hands.
- (4) ゲームの説明をする。  
Let's play a gesture game. Guess what they are doing.
- (5) 注意を引く、集中させる。  
OK! Calm down! Raise your hands! / Stop talking, please.
- (6) グループ分けをする。  
Now we'll make five groups.  
Let's make pairs. / Work in pairs.
- (7) 教材を配布する。  
Here's some cards.  
Take one and pass the rest. / Take one and pass them on.
- (8) 活動を説明する。  
Listen carefully. Raise the correct card quickly.  
Stop talking, please.
- (9) 手元で作業をさせる。  
Point to the correct picture. / Choose the right picture. / Color the circle yellow.
- (10) ゲームの得点や結果を発表する。  
That's right! / Close! / One point for group A! / Group B is the winner. / You all did a good job.
- (11) 教材を回収する・片付ける。  
Are you finished? / Are you done?
- (12) ゲストにお礼を言う。

OK. It's time to say goodbye.

Let's say, "Thank you," to Mr. Baker.

(13) まとめをし、授業を終える。

Did you have a good time? / You did a very good job.

Goodbye, everyone! See you next time. ) :

## 2.3 英会話 (段階づけ)

基本表現 (現在時制 : 肯定・疑問・否定) → Wh 疑問 → 相 (進行形) → 時制 (過去・未来)

・ 現在時制

(1) 肯定文

I am sad. / I am a teacher. / I am from Japan. (You are ~. / He is ~. / She is ~. / We are ~. / They are ~.) : } S+be+C  
This is my pencil. / This is Mr. Baker. (That is ~. / These are ~. / Those are ~.) : }  
It is an apple. (They are apples) :

I like swimming. (You ~. / We ~. / They ~.) : S+V (主語が3人称単数以外)

She likes swimming. (She ~. / My mother ~. / Taro ~.) : S+V (主語が3人称単数)

There is a book on the desk. (There are some books on the desk.) : There+be+NP

Here is a book. (Here are some books.) : Here+be+NP

(2) 否定文

I am not happy / a teacher / from Japan. (You are ~. / She is ~. / He is ~. / We are ~. / They are not ~.) : S+be+not+C

I don't like swimming. (You ~. / We ~. / They ~.) : S+don't+V (主語が3人称単数以外)

She doesn't like swimming. (She ~. / My mother ~. / Taro ~.) : S+doesn't+V (主語が3人称単数)

There is not a book on the desk. (There are not any books on the desk.) : There+be+not+NP

(3) 疑問文

Are you happy? (Am I ~? / Is she ~? / Is he ~? / Are we ~? / Are they ~?) : Be+S+C?

Do you like swimming? (Do I ~? / Do we ~? / Do they ~?) : Do+S+V? (主語が3人称単数以外)

Does he like swimming? (Does she ~? / Does your mother ~? / Does Taro ~?) : Does+S+V? (主語が3人称単数)

Is there a book on the desk? (Are there any books on the desk?) : Be+there+NP?

(4) 法助動詞 can を含む文

(i) 肯定文 I can swim. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+can+V

(ii) 否定文 I can't swim. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+can't+V

(iii) 疑問文 Can you swim? (Can you ~? / Can he ~? / Can she ~? / Can we ~? / Can they ~?) : Can+S+ V?

・ Wh疑問

(1) 5W

Where am I? / Where do you live? / Where does she live?

When is your birthday? / When do you get up? / When does he get up?

Why are you here? / Why do you go there? / Why does she go there?

Which is your bag? / Which do you like? / Which does he like?

Who is he? / Who are you? / Who goes there?

(2) 1H

How are you today? / How do you play the game? / How does he play the game?

・ 相 (進行形)

(1) 肯定文

I am doing my homework. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+be+Ving

(2) 否定文

I am not doing my homework. (You are ~. / He is ~. / She is ~. / We are ~. / They are ~.) : S+be+not+Ving

(3) 疑問文

Are you doing your homework? (Are you ~? / Is he ~? / Is she ~? / Are we ~? / Are they ~?) : Be+S+ Ving?

・時制（過去・未来）

(1) 肯定文

I was sad. (You were ~. / He was ~. / She was ~. / We were ~. / They were ~.) : S+was/were+C

I played soccer yesterday. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+Ved

I will be 15 next month. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+will+be+C

I will play soccer tomorrow. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+will+V

(2) 否定文

I was not sad. (You were ~. / He was ~. / She was ~. / We were ~. / They were ~.) : S+was/were+not+C

I did not play soccer yesterday. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+did+not+V

I will not be 15 next month. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+will+not+be+C

I will not play soccer tomorrow. (You ~. / He ~. / She ~. / We ~. / They ~.) : S+will+not+V

(3) 疑問文

Were you sad? (Was I ~? / Was he ~? / Was she ~? / Were we ~? / Were they ~?) : Was/Were+S+ C?

Did you play soccer yesterday? (Did I ~? / Did he ~? / Did she ~? / Did we ~? / Did they ~?) : Did+S+ V?

Will you be 15 next month? (Will you ~? / Will he ~? / Will she ~? / Will we ~? / Will they ~?) : Will+S+be+C?

Will you play soccer tomorrow? (Will you ~? / Will he ~? / Will she ~? / Will we ~? / Will they ~?) : Will+S+V?

### 3 授業改善（2時間）

#### 3.1 授業づくりのノウハウ

授業づくりの基本的視点と方法論とその具体

・基本的視点

(1) 環境づくり

校内：英語専用教室の設置・英語教材室の設置・英語校内放送の活用・英語コーナーの設置

校内研修の実施と校内共通理解の確保

地域：地域の人材活用・中学校との連携

(2) カリキュラムと単元の中での位置づけの明確化

1 単位授業の全体の中での相対的位置づけ

1 単位授業の目的の絞り込みと明確化

(3) 多様な活動の配置

多様な活動の配置

活動そのものの楽しさ

(4) 各活動の目標の明確化

学びの楽しさの保障

多様な学びの提供

(5) 形成的評価視点の確保

観察による評価

気付きノート等による評価

・方法論

(1) 人材

担任の役割・ALTの役割・ゲストの役割

(2) 教材

教材の選択・教材の活用

(3) 活動

目標に整合する活動の選択・活動の実施と統制

(4) タスク活動

タスクの達成・協同性の効果・成果報告の意義

・具体的例

### 3.2 授業づくりの実際（段階づけ）

教案作成 → 単元化 → カリキュラム編成（適宜、他校の実例を紹介する。）

- ・教案作成
  - (1) 目標・方法・教材
  - (2) 単元およびカリキュラムの中での位置づけ
- ・単元化
  - (1) 各単位時間の総計的視点
  - (2) カリキュラムから見た視点
- ・カリキュラム編成
  - (1) 年間計画および年間間計画

## 4 授業方法の理解（2時間）

### 4.1 活動タイプ（歌・チャンツ・クイズ・ゲーム・タスク）（段階づけ）

各タイプの基本型 → 各タイプの展開（1） → 各タイプの展開（2）

- ・各タイプの基本型
  - (1) 活動形態・使用技能・目標
  - (2) 使用用具・活動時間・評価視点
- ・各タイプの展開
  - (1) 展開例の説明
  - (2) 展開例の視聴

### 4.2 TT（段階づけ）

基本的知識（タイプと役割） → 基本的知識（各教員の役割） → 観察 → 実践

- ・タイプと役割（影浦功 2001.『小学校英語活動マニュアル3巻：ティーム・ティーチングの展開プラン』明治図書による）
  - (1) HRT + ALT：HRTによる授業進行とALTによる自然な英語使用の提供
  - (2) HRT + JTE：HRTとJTEによる授業進行とJTEによる英語使用の提供
  - (3) HRT + ALT + JTE：(1) と (2) の結合
  - HRT + GT（+ ALT）：国際交流活動
- ・各教員の役割（兼重昇 2007.「指導者と指導形態、よりよいティーム・ティーチングの進め方」による。岡秀夫・金森強（編著）『小学校英語教育の進め方』成美堂に所収。p. 116.）
  - (1) 分析視点：授業づくり・設計者、モデル、教授者、支援者、授業運営者、評価者
  - (2) 各教員：HRT、ALT、JTE
- ・観察と実践
  - (1) 各タイプの実践例観察
  - (2) 各タイプの模擬的実践

## 5 授業研究・分析（2時間）

### 5.1 授業観察

研究授業の観察

- ・観察視点の設定
  - 教師の発問・指示、児童・生徒の反応・応答、教師の対応行動、授業運営、教材解釈など



- ・観察方法
  - (1) 直接的観察と間接的観察
  - (2) 全体的観察と項目的観察
  - (3) 量的観察と質的観察

## 5.2 授業分析

### 研究授業の検討

- ・分析視点
  - (1) 分析目的による観察視点の決定
  
- ・分析方法
  - (1) 量的分析と質的分析の区別
  - (2) 分析目的との関係
  
- ・分析結果

## 6 総括（1時間）

### 6.1 総括

#### 総括的アンケート

- ・アンケート実施
  
- ・自己総括

### 6.2 自己研修の維持

#### 自己研修の計画

- ・自己研修の意義
  
- ・自己研修の計画立案

## 課題7：研修プログラムの基本理念と実例に基づくプログラム開発

高橋美由紀（愛知教育大学）

### 0. 緒言

2011年度から、新学習指導要領により「外国語活動」が必修化されることとなった。しかしながら、現職教員の研修が喫緊の課題となっている。現在約97%の小学校で「英語活動」が実施されている<sup>1</sup>が、小学校英語においては、2002年度の「総合的な学習の時間」が新設され、その枠組みの中で「英語活動」が導入された時から、指導者養成・指導者研修が課題の一つに挙げられている。

「英語特区」に認可された岐阜市内の全公立小学校48校の調査によると、小学校担任教師から、「何をどのように教えたいのか」「市から配布された教材が『高度すぎて活用しづらい』」等の意見があった。また、音声指導の問題等、多くの担任教師は、英語活動に悩みや不安を抱えていることがわかった（朝日新聞2005. 8. 18）。また、梶田(2006)は、「小学校英語教育の方向性」をテーマにした講演<sup>2</sup>で、小学校英語の課題として、「誰が教えるのか」という点について、「ALTの不足、日本人教師への負担増の意見が常にある」ことを挙げ、「国策として抜本的にやるなら財政の裏打ちが必要である」ことや、「一部の先生の情熱に頼るのではだめ」であることを強調した。

文部科学省は、「外国語活動の指導者研修」を県の指導主事クラスを対象に5日間の研修を2007年度と2008年度に実施した。全小学校で教員研修の内容を浸透させるために、①国の研修を受講した人が、都道府県、政令指定都市、中核市での中核教員研修の講師となり、各学校で「外国語活動」を中心になって進める中核教員の研修を実施して伝達することとしている。そして、②中核教員が各学校で校内研修を担当し、2年間で30時間程度実施することが義務付けられている。また、研修会の内容が正確に伝達されるように、『小学校外国語活動教員研修ハンドブック』も作成された。

また、「外国語活動の進め方」、「外国語活動をはじめのために」等をテーマにして、全小学校教員を対象にした教員研修会が市区町村及び都道府県の教育委員会主催で多く開催されているが、これらの教員研修を実施する際には、①研修目標を明確にし、的確な研修を実施すること、②研修内容の充実を図ること、③受講者の個々人の要望に即した研修が必要不可欠であることが、筆者が実施した調査から分かった（第2章を参照のこと）。

本稿では、教員研修プログラムの基本理念と研修プログラムの実際、さらに、受講生による調査の検証から、教師のための系統的な教員研修プログラムを構築し、その事例研究として実施した教員研修について述べる。

### 1. 教師研修プログラムの基本理念

#### 1.1. 研修の内容

文部科学省は、第14回中央教育審議会外国語専門部会における配付資料「小学校における英語教育について（外国語専門部会における審議の状況）」で、小学校英語の教師に求められる内容や程度を明らかにする必要があるとして、以下のように具体的に言及している（文部科学省2006）。

#### ①小学校英語の技能を習得するための研修

「英語の基本的な技能については、例えば、身近な生活・文化関係の語彙、基本的な文法などが考えられる」として、「高等学校段階までに学習した英語の基本的な技能の保有状況を確認しつつ、既に獲得している語彙や既に身につけている文法事項等の再習得、身近な生活・文化関係の語彙の習得、基本的な英語運用技能の習得などが考えられる」

#### ②小学校英語を指導するための能力を養成する研修

「小学校の英語活動への理解、所定の教材の活用方法や指導方法などが考えられる」として、「英語活動に関する教育法、校内研修等での模擬授業等が考えられる」

そして、『小学校外国語活動研修ガイドブック』では、教員研修の内容として、(1)授業指導力向上研修と(2)英語運用能力向上研修を挙げている（文部科学省2008:13）。

一方、高橋・青木（2005：201-211）は、松川(2004：182)、Curtain & Dahlberg（2004：470）らの知見から、小学校英語活動に必要な教員の能力として、小学校教員養成課程の科目を優先させた上で、(1)英語の専門的な基礎技能、(2)外国語教育や国際理解教育における関連諸科学に関する知識・技能、(3)カリキュラム・デザインができる企画力が必要であると結論づけた。

また、Doyé（2004：152）は、小学校で外国語を指導する教員に必要なものとして、教育学的準備（外国語教育を主対

<sup>1</sup> 文部科学省2007年度の調査より

<sup>2</sup> 2006年12月27日に開催された兵庫教育大学教育・社会調査研究センター主催の「初等教育段階における英語教育のための教師研修」での基調講演

象とする教育分野である外国語教授法) と他分野の重要な知見を十分に参考にすることを挙げている。そして、以下のような図で、直接的に関係する諸科学の相互関係を示した (吉島・長谷川 2004:152)。

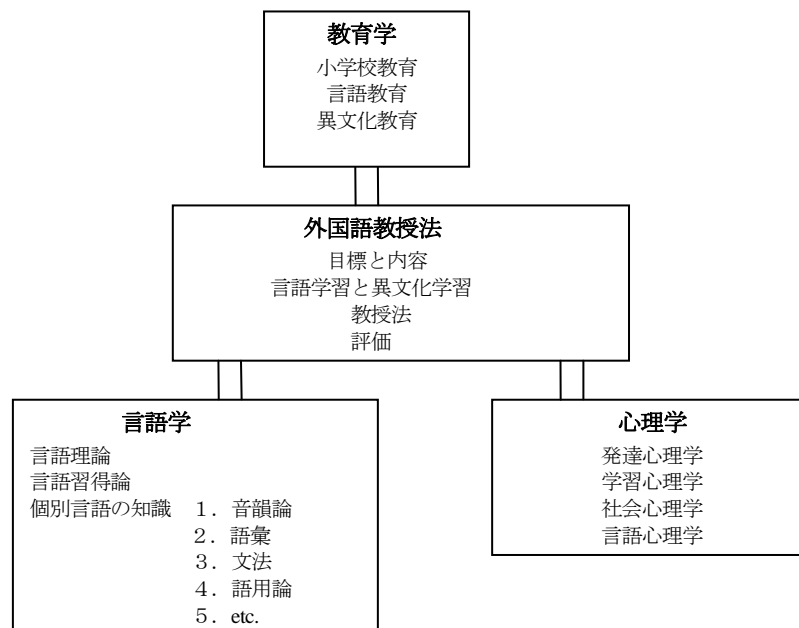


図1: Doyé が示した小学校の外国語教育に直接的に関係する諸科学の相互関係 (吉島・長谷川 2004:152)

以上の点から、教員研修プログラムは、現場での実践力を育成するために、(1)外国語活動の指導力向上、(2)英語運用能力の向上、(3)外国語教授法に関する諸科学に関する知識・技能の理解と習得、(4)カリキュラム・デザインや教材・教具を作成するための企画力や創造力の育成を網羅した内容で実施することが望ましい。

## 1.2. 実践力を育成するための研修の形態

研修の形態として、「講義」や「演習」、「講義と演習」がある。講義形式は、一度に多人数の研修ができる。そのため、少ない研修回数で多くの受講生を受け入れることが可能になり、企画・運営面での負担が他の研修形態と比較すると少ない。演習形式は、10~50名程度の少人数での研修が多い(第2章参照)。ワークショップや模擬授業等による実践的な研修は、受講者が体験を通して学ぶことが大切であることから、少人数でしか実施できない。筆者が講師を務めたワークショップの研修で、約200名を一度に行った時には、8~10名を一グループ(全体で20グループ)の形態で行った。そして、発音チェックや言語表現指導の補助として、グループの中に、ALTや英語専門教師、中学校英語教師を均等に配置した。

Richards & Farrell (2005)は、ワークショップについて、「具体的な知識と技術を習得するための機会を提供するために企画された、集中的で短期間の活動である」と定義し、「参加者は、授業観察やアクションリサーチのように、扱ったトピックを実践的な経験を通して得ることができ、また、彼らの授業に応用することができる」ことを述べている(Richards & Farrell 2005:23)。さらに、言語教師の実践指導においてワークショップは、最も効果的なものであり、教員研修におけるワークショップの長所を以下のように挙げている(番号は筆者記入)。

- ①Workshops can provide input from experts.
- ②Workshops offer teachers practical classroom applications.
- ③Workshops can raise teachers' motivation.
- ④Workshops develop collegiality.
- ⑤Workshops can support innovations.
- ⑥Workshops are short-term.
- ⑦Workshops are flexible in organization.

Richards & Farrell (2005:25)

ワークショップは、専門家から実践指導における知識や実践指導方法について、受講者がその場で体験的に学ぶ機会を得ることができる。外国語を体験的に学ぶことを目的としている外国語活動において、実践面の指導方法は最も重要なものである。そして、実践で使用される教材や教具の知識、実践内容、指導法などは、文献よりもワークショップで学んだ方が、受講者にとって容易にイメージが可能であり、明確であるので効率良く習得できると思われる。

また、外国語活動のカリキュラムやレッスンプランを組み立てる際にも、受講者はワークショップを受講しながら、具体的にクラスの児童のレベルや英語の能力、学習経験年数を考慮して、適宜な実践指導の内容、教材、教具などをアレンジして活用することができる。なお、ワークショップは特別なトピック等に限定されている場合も多いが、受講者のアイデアで新しいプランに練り直して導入することも可能である。さらに、受講者はワークショップを通して実際に実践を体験しながら、その活動における指導法の問題点や活動内容の疑問点について、その場で解決することができる。さらにまた、ワークショップはグループワークで行われる場合が多いが、受講者同士が外国語活動についての意見交換や情報交換等がしやすい雰囲気も生まれる。以上のことから、ワークショップは外国語活動の実践面の指導において、受講者の積極的な参加を促し、実践指導に対するモチベーションも向上するという理由から有効なものである（高橋 2005:191-193）。

また、授業指導力向上を目的とした研修には、「講義」「演習」といった従来の研修形態に加えて、授業観察（授業公開）や模擬授業が効果的である。

Richards & Farrell (2005)は、教員研修で授業観察（授業公開）の効果については、観察する側だけでなく、授業提供者にとっても有効であると以下のように述べている。

In teaching, observation provides an opportunity for novice teachers to see what more experienced teachers do when they teach a lesson and how they do it. But experienced teachers can also benefit from peer observation. It provides an opportunity for the teacher to see how someone else deals with many of the same problems teachers face on a daily basis. A teacher might discover that a colleague has effective teaching strategies that the observer has never tried. Observing another teacher may also trigger reflections about one's own teaching. For teacher being observed, the observer can provide an "objective" view of the lesson and can collect information about the lesson that the teacher who is teaching the lesson might not otherwise be able to gather.

For both teachers, observation also has social benefits. It brings teachers together who might not normally have a chance to interact and provides an opportunity for the sharing of ideas and expertise, as well as a chance to discuss problems and concerns.

Richards & Farrell (2005:86)

以上のことから、研修内容に適した研修形態で実施することが重要である。また、これらの研修は主に、受講者を集めて一斉に行う「集中型研修」について言及してきた。しかしながら、小学校英語を指導するための能力を養成する研修を組み入れた場合、受講者参観・参加型が重要なポイントであるが、「集中型研修」のみでは困難である。また、担任教師主導の小学校英語を実施するためには、小学校の全教員を対象にすることが必要である。「集中型研修」では、全ての教員に小学校英語の指導方法のノウハウを浸透させることは難しく、積極的な一部の教員や英語担当の教員のみには負担がかかってしまうことが懸念される。したがって、全教員を対象に、各学校に応じた内容で研修を行うためには、講師が学校を訪問して実施する「訪問型研修」がより効果的である。また、訪問型研修では、授業提供者の授業参観や模擬授業が容易にできることも長所である。なお、「集中型研修」と「訪問型研修」の事例は、2章「兵庫教育大学文部科学省委嘱事業サポート事業」で述べた。

## 2. 小学校外国語活動の教師のための系統的な教育・研修のプログラムの構築にむけて

本節では、「教師のための系統的な教育・研修プログラム」を構築するにあたり、実践学的研究として、前節の基本理念を基にし、また、2006～2008年度に筆者が中心となって企画・運営した「小学校英語及び外国語活動の教員研修」の事例研究（Appendix 参照）から論じる。なお、これらの研修の内、「兵庫教育大学文部科学省委嘱事業サポート事業」は、既に課題2で詳細を述べた通りである。

筆者が実施した「小学校英語及び外国語活動の教員研修」のプログラムは、研修の基本的理念や文部科学省の研修内容も参考にし、さらに、研修直後に受講生を対象に実施するアンケート調査と筆者が小学校現場での指導・助言の際に

研修が必要だと感じたことや教員からの要望を取り入れて企画している (Appendix 参照)。

研修プログラムの具体的な内容としては、(1)授業指導力向上として、指導技術 (担任のみ、ALT の活用法)、教材作成、模擬授業、モデル授業の参与観察、カリキュラムや指導案作成、(2)英語運用能力向上として、4 技能及び発音、基本的な表現、文法事項、歌やチャンツ、ゲームの紹介と実際、(3)小学校外国語活動の基本的知識として、言語教育政策、子どもの学習者の特性と効果的な教授法、コミュニケーション能力の育成、国際理解教育等、(4)教員の自己開発として、日本の小学校外国語活動に適した指導法の開発、教材やカリキュラム・デザインの創造、評価や児童のコミュニケーションを図る態度の検証方法の開発、等が挙げられる。

筆者が企画した 3 年間の研修プログラムを振り返ると、教員研修の内容が、受動型から能動型へと変化していることがわかる。すなわち、「講義」を聴く、「実践方法」を学ぶ、「教材等」を知る、という研修プログラムが中心であったものが、受講者が模擬授業やモデル授業を行ったり、実践報告をしたりすることによる、「教員の自己開発力の育成」に重点が置かれた研修となった。また、研修の対象者は、2006 年度は、「英語担当教員」や「英語を専科で教えている教員」が大半であったが、2008 年度は、文部科学省が外国語教育の指導は、「担任教師主導」を提唱しているため、「全小学校の教員」が受講していた。更に、小中連携の英語教育を実施している学校では、「中学校教員」の受講者も増加している。

しかしながら、現在、「外国語活動の教師研修」については、諸外国のような国家単位で、全教員を対象にした詳細なカリキュラムが存在していない。また、研究者間においても、「効果的な研修」として検証されたデータもなく、統一された見解もみられない。一方、研修を企画する場合には、企画者が受講者の意向を把握することが必要である。企画段階で、受講者に「研修に対する要望」を尋ねることや、小学校現場での疑問点や問題となっていることを挙げてもらうこと等、研修を行う側と受講者側間が、研修に対して相互理解を行った上で研修プログラムを構築することが望ましい。

『小学校外国語活動研修ガイドブック』では、「校内研修を企画・運営する上で大切なことは、自校の教員がどのような研修を望んでいるかを中核教員がしっかりと把握しておくことである。」(文部科学省 2008:13)と発言されているが、研修プログラムを構築する上で、受講者のニーズに適した研修を行うことは大切である。また、研修後には、「どのような研修が指導力や指導能力の育成として効果的であったのか」といったような調査を行い、研修の効果について長期的に検証することも必要である。

しかし、筆者が実施した調査によると、研修内容で受講者が「役立った」と感じている研修の第一位と第二位の内容は、2006 年では、「小学校・児童英語の実践指導方法 80 名」「小学校・児童英語の指導アイデアや教材 73 名」、2007 年では、「小学校・児童英語の指導アイデアや教材 179 名」「小学校・児童英語の実践指導方法 138 名」、2008 年では、「小学校・児童英語の指導アイデアや教材 127 名」「小学校・児童英語の実践指導方法 107 名」。「小学校の授業に直結する研修」であり (Appendix 参照)、単なる「理論面」の講義ではなく、具体的な指導方法が「役立つ」と感じている。したがって、「理論と実践を融合させた研修」を実施することが大切である。

また、「今後の研修の要望」についても「授業に役立つ指導方法」、「活動に必要な教材づくり」等であり、「小学校外国語 (英語) 語教育」の基本的理念や言語習得の理論面、英語運用能力向上についての要望は少ない。

今後の課題としては、教員研修の本来の目的である「小学校外国語活動を指導できる能力を育成すること」のプログラムとして、(1)授業指導力向上のための「授業に役立つ指導法」や「教材作成」、「模擬授業」等も大切であるが、(2)小学校外国語活動の基本的知識としての「基本理念」や「教授法」、(3)「英語運用能力向上」等、全ての観点を網羅した上で、受講者が望む効果的なプログラムを構築することである。そして、その研修プログラムに必要な時間数、研修の形態等を提示し、これらを検証することである。例えば、研修時間について言及すれば、東アジアの小学校英語教育の教員研修と比較すると日本の教員研修の時間数はかなり少ない。韓国は 120 時間、台湾は 360 時間 (高橋 2000:106) であるが、日本では『小学校外国語活動研修ガイドブック』によれば、30 時間 (年間研修は、①授業指導力の向上研修 10 時間、②英語運用能力向上研修 5 時間の計 15 時間×2 年間=30 時間) となっている。

また、これまでの研修の多くは、「講義」と「演習」が分かれて行なわれていた。そのため、受講者から「講義のみでは授業に活かさない」、「演習のみでは、単にアクティビティをしているだけで、活動の背景が見えてこない」等の不満があった。したがって、研修形態としては、講師が研修しやすい形態、及び、受講者が研修を受けやすい形態について検討した上で、それぞれの講義・演習に適した効果的な研修 (例えば、「講義と演習を組み合わせた方法」) で行うべきである。さらに、研修内容は、受講者個々人のニーズやレベルに適した研修プログラムとするべきである。

最後に、これらの研修は、日本教育新聞等、教育に特化したメディア媒体だけでなく、朝日新聞や読売テレビ等でも取り上げられた (Appendix 図 2・3・4)。これは、社会的にも「小学校英語教師研修」は注目されていることが認識できる。したがって、保護者をはじめとし、社会の要請や価値観に適した「小学校外国語 (英語) 教師研修プログラム」を開発することが重要である。

## 参考文献

- 朝日新聞 2005 「児童楽しみ「英語話したい」先生お悩み「どう教えれば」小学校の実態報告へ教研集会」8.18.26.
- ベネッセ 2006 『第1回小学校英語に関する基本調査（教員調査）報告書』東京：Benesse 教育研究開発センター
- Curtain, H. and Dahlberg, C. A., 2004 *Language and Children—Making the Match*. Boston, MA: Pearson Education.
- Doyé, P. 2004, 「小学校の教員養成および研修のためのプログラム」（吉島茂訳）吉島茂、長谷川弘基（編著）『外国語教育—幼稚園・小学校篇—』152-170 東京：朝日出版
- 梶田叡一 2006 「小学校英語に対する、中教審の動向」2006.12.27 講演
- 松川禮子 2004 『明日の小学校英語教育を拓く』東京：アプリコット
- 文部科学省 2001 『小学校英語活動実践の手引』東京：開隆堂出版
- 文部科学省 2008 『小学校外国語活動研修ハンドブック』東京：旺文社
- 文部科学省 2006 「教育課程部会 外国語専門部会（第14回）議事録・配付資料」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/015/06032708/003.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/015/06032708/003.pdf)
- 日本教育新聞 2006 「どう進める小学校英語—大学教員が小学校訪問も」7.10.8.
- Richards, Jack, C. and Thomas. S. C. Farrell. 2005 *Professional Development for Language Teachers*. New York: Cambridge University Press.
- 高橋美由紀 2000 「アジア諸国における小学校英語教育—導入目的・教育方法・教材・教員研修の視点から」『中部地区英語教育学会紀要』30, 99-106.
- 高橋美由紀 2006 「小学校英語活動における指導力育成のための教員養成カリキュラム」『日本児童英語教育学会研究紀要』25, 35-56.
- 高橋美由紀 2007 「小中連携のための教員研修のあり方」松川禮子, 大下邦幸（編著）『小学校英語と中学校英語を結ぶ』159-180. 東京：高陵社書店
- 高橋美由紀（編著）2009 『これからの小学校英語教育の構想』東京：アプリコット
- 高橋美由紀 2009 「外国語活動で育てる「言語力」」梶田叡一, 甲斐睦朗（編著）『言語力を育てる授業づくり 小学校編・中学校編』印刷中 16頁 東京：図書文化社
- 高橋美由紀, 青木昭六 2005 「公立小学校の英語活動における教員養成の理論的枠組みについて」『兵庫教育大学研究紀要』27, 201-211.
- 高橋美由紀, 米田尚美 2003 「小学校英語活動における指導者養成—大学での小学校英語教育講座」『LET 中部支部研究紀要』14, 79-90.

## <Appendix>

### 1. 兵庫教育大学教育・社会調査研究センター主催 「初等教育段階における英語教育のための教師研修会」

研修会実施日時 2006年12月27日（水） 9:00～17:30

実施場所 兵庫教育大学連合大学院大阪サテライト教室

参加者：事前申し込み者 225名内（男性は64名）スタッフ参加者 13名 講師8名 講演者助手（業者）2名

【目的】小学校で英語教育を指導できる教師を育成するために、小学校英語活動の実際とその理論的背景についての講座を行い、現場での実践に結びつくスキルを身に付ける。

#### 【内容】

講演	「小学校英語に対する、中教審の動向」	梶田叡一（兵庫教育大学学長）
講義	「児童の言語習得と教授法」	青木昭六（兵庫教育大学名誉教授）
	「小学校英語教育教授法・マルチメディアを使用した小学校英語指導」	柳 善和（名古屋学院大学教授）
	「絵本を使って英語を教える—国際コミュニケーションの育成」	中本幹子（児童英語の実践・著述業）
	「児童の発達段階に適した英語教育とその指導法・理論と実践」	高橋美由紀（兵庫教育大学助教授）
	「小野市の小学校英語活動の取組と実践のワークショップ」	榎 珠妃（小野市立中番小学校教諭） 友藤智栄美（小野市立市場小学校教諭）
	「小学校英語でつきたい自身の英語力 UP 指導」	柴田里実（名古屋学院大学講師）

## <プログラム>

9:00～	受付開始 4階（エレベータ前）
9:30～9:40	開講式 10階（メモリアルホール）
9:40～10:40	基調講演 10階（メモリアルホール）「小学校英語教育の方向性」梶田叡一兵庫教育大学学長
10:50～17:20	教員研修講座の担当者と時間・会場

	第一会場	第二会場	第三会場
10:50～12:10	1. 柴田先生	2. 青木先生	3. 高橋先生 (受講者超過のためメモリアルホールに変更)
13:00～14:20	4. 柳先生	5. 青木先生	6. 槇先生と友藤先生
14:30～15:50	7. 柳先生	8. 中本先生	9. 槇先生と友藤先生
16:00～17:20	10. 柴田先生	11. 中本先生	12. 高橋先生
17:20～17:30	閉講式 受講証書授与式 勝野眞吾センター長		



図2: 大学が主催する「実践学術を基にした小学校英語研修会」として注目された。(日本教育新聞 2007年1月15日)

### 【研修の成果】

小学校の英語教育指導者養成の目的に即し、理論面では、①基本的な理念、②教授法、③子供の発達と外国語習得法、④小学校で使用できる教材の知識、実践面では、①指導者として必要な英語コミュニケーション能力をつけるための指導・効果的な英語の使い方・発音矯正、②小学校での学習に適した指導法のワークショップのより、参加者のレベルアップと現場での即実践内容を身につけることができた。

#### <受講生によるアンケート調査>

参加者に資料等の中にアンケートを配布し、当日回収した。紙面の関係上抜粋したものを掲載する。

回答者：151名 (回答率69%) 男性29%、女性71%

調査結果：年齢 20歳代25%、30歳代16%、40歳代41%、50歳代17%、60歳以上1%

職業：小学校教員60%、大学院生11%、教育委員会勤務9%、その他20%

小学校英語の指導経験：有り62%、無38%

#### これまで受講した研修会の内容 (複数回答可)

- ① 小学校・児童英語の方向性等の言語教育政策 53名
- ② 小学校・児童英語の教授法や言語教育についての理論面 49名
- ③ 小学校・児童英語の指導アイデアや教材 73名
- ④ 小学校・児童英語の実践指導方法 80名
- ⑤ 自らの英語力や指導法のスキルアップ 41名
- ⑥ その他 3名

#### 今回の研修会を受講して役立つ内容 (複数回答可)

- ① 小学校・児童英語の方向性等の言語教育政策 57名
- ② 小学校・児童英語の教授法や言語教育についての理論面 78名
- ③ 小学校・児童英語の指導アイデアや教材 108名
- ④ 小学校・児童英語の実践指導方法 104名
- ⑤ 自らの英語力や指導法のスキルアップ 64名
- ⑥ その他 6名

#### 今後の研修会の要望 (複数回答可)

- ① 授業に役立つ指導方法 119名
- ② 模擬授業形式での研修 78名
- ③ 小学校・児童英語の教授法等の理論面 43名
- ④ カリキュラム 84名

- ⑤ 活動に必要な教材づくり 90名
- ⑥ 教育言語政策 19名
- ⑦ その他7名

2. 愛知教育大学 外国語教育講座主催 「小学校英語教育教員研修」

研修会実施日時 2007年12月27日(木)・28日(金) 9:30～17:00

実施場所/参加者数 愛知教育大学/ 延べ人数 約520名

【目的】 小学校で英語教育を指導できる教師を育成する。実践に結びつくスキル向上と、指導法の実験を体験する。

【内容】

- 講演 「小学校英語教育の方向性」(小学校英語に対する、中教審の動向) 太田光春(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官)
- 講義 「児童とことばの学習について」 杉浦正好(愛知教育大学教授)
- 「児童の発達段階に適した英語教育とその指導法・理論と実践」 高橋美由紀(愛知教育大学教授)
- 「小学校英語でつきたい、自身の英語力UP指導」 Anthony Robins(愛知教育大学教授)
- 「小学校英語教育教授法・マルチメディアを使用した小学校英語指導」 柳 善和(名古屋学院大学教授)
- 「小学校英語でつきたい、自身の英語力UP指導」 Anthony Ryan(愛知教育大学准教授)
- 「ALTとのティーム・ティーチングの工夫やつきあい方」 巽 徹(岐阜大学准教授)
- 「児童の言語習得と外国語習得・脳科学との関係」 大石晴美(岐阜聖徳学園大学准教授)
- 「国際理解教育と小学校英語教育」 米田尚美(岐阜聖徳学園大学講師)
- 「小学校英語教育の実践的な活動例 Songs & Chants」 清水万里子(トライデント外国語専門学校講師)
- 「小学校英語でつきたい、自身の英語力UP指導」 柴田里美(名古屋学院大学講師)
- 「ホームページを利用した小学校英語の授業づくりの指導」 犬塚章夫(愛知県総合教育センター)
- 「絵本を使って英語を教えるー国際コミュニケーションの育成」 中本幹子(児童英語の実践・著述業)
- 「小学校英語の取組と課題」 河木恵美子(豊田市教育センター)
- 実践報告「小学校での取組」 山田修司(愛知教育大学附属名古屋小学校教諭)
- 池田 大(愛知県豊田市立古瀬間小学校教諭)
- 森 真由子(岐阜県大垣市立興文小学校教諭)
- 林 佳織(三重県津市立安東小学校教諭)

<プログラム>

12月27日(木)

- 9:30～ 受付開始 1階(共通講義棟前)
- 10:00～10:10 開講式 3階(301教室)  
挨拶:杉浦正好(愛知教育大学外国語講座長)
- 10:10～12:00 東海三県の小学校における英語教育の取組み 3階(301教室)(20分×4校)  
愛知教育大学附属名古屋/愛知県豊田市立古瀬間/岐阜県大垣市立興文/三重県津市立安東、各小学校
- 12:00～12:50 ランチョンセミナー 3階(301教室)  
「小学校英語教育の取組みと課題」 河木恵美子(豊田市教育センター)・高橋美由紀(愛知教育大学)

13:00～14:10 第一講座

14:20～15:30 第二講座

15:40～16:50 第三講座

<教員研修講座の担当者と会場>

	第一会場(304教室)	第二会場(305教室)	第三会場(306教室)	第四会場(307教室)	第五会場(310教室)
第一講座	1. 中本	2. ロビンズ	3. 杉浦	4. 大石	
第二講座	5. 中本	6. 清水		7. 大石	8. 柳
第三講座	9. ロビンズ	10. 清水	11. 杉浦		12. 柳

12月28日(金)

10:00～ 受付

10:30～11:40 第四講座

11:50～12:30 ランチョンセミナー 受講者と講師の交流会(Q & A)

12:40～13:50 第五講座

14:00～15:10 第六講座

<教員研修講座の担当者と会場>

	第一会場(304教室)	第二会場(305教室)	第三会場(306教室)	第四会場(307教室)	第五会場(310教室)
第四講座	13. 巽	14. ライアン	15. 高橋		16. 犬塚
第五講座	17. 巽		18. 米田	19. 柴田	20. 犬塚
第六講座	21. 高橋	22. ライアン	23. 米田	24. 柴田	

15:20～16:50 講演 3階(301教室)

タイトル:「小学校英語教育の方向性」(小学校英語に対する、中教審の動向)



講師：太田光春（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官）

司会・講師紹介：高橋美由紀（愛知教育大学）

16:50～17:00 閉講式 3階（301教室）

挨拶：高橋美由紀（愛知教育大学）



図3：研修会での受講者の熱心な様子が掲載された（朝日新聞 2008年2月16日）

【研修の成果】（回答者 248名）

今回の研修会を受講して役立つ内容（複数回答可）

- ① 小学校・児童英語の方向性等の言語教育政策 92名
- ② 小学校・児童英語の教授法や言語教育についての理論面 92名
- ③ 小学校・児童英語の指導アイデアや教材 179名
- ④ 小学校・児童英語の実践指導方法 138名
- ⑤ 自らの英語力や指導法のスキルアップ 65名
- ⑥ その他 10名 ⑦ 特になかった 5名

今後の研修会の要望（複数回答可）

- ① 授業に役立つ指導方法 188名
- ② 模擬授業形式での研修 120名
- ③ 小学校・児童英語の教授法等の理論面 72名
- ④ カリキュラム 101名
- ⑤ 活動に必要な教材づくり 138名
- ⑥ 教育言語政策 36名 ⑦ その他 9名

3. 愛知教育大学外国語教育講座主催「小学校外国語活動教員研修会：授業指導能力・英語運用能力の育成を目指して」

研修会実施日時 2008年12月26日（金）・27日（土） 9：30～17：00

実施場所/ 参加者数 愛知教育大学/ 約900名

【目的】「新学習指導要領に基づいた小学校外国語活動」及び「小中連携の英語教育」を指導できる教師を育成する。

【内容】

- |    |                                   |   |
|----|-----------------------------------|---|
| 講演 | 「小学校外国語活動必修化により、小中高の英語教育がどう変わるか？」 | 太田光春（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官） |
| 講義 | 「小中連携による一宮市英語教育特区の試み」             | 杉浦正好（愛知教育大学教授）  |
|    | 「効果的な教授法と『英語ノート』活用法」              | 高橋美由紀（愛知教育大学教授）   |
|    | 「English through storytelling」    | 南 隆太（愛知教育大学教授）・加藤佳子（相山女学園小学校）                           |
|    | 「ことばと国際理解：コミュニケーション能力を育成する」       | 安武知子（愛知教育大学教授）  |
|    | 「言語習得の立場から児童英語の指導法を考えよう」          | 稲葉みどり（愛知教育大学教授）   |
|    | 「ICTを活用した『英語ノート』の指導」              | 柳 善和（名古屋学院大学教授）   |
|    | 「Classroom English 英語力アップ」        | ライアン・アンソニー（愛知教育大学准教授）                                   |
|    | 「英語運用能力アップ・発音矯正」                  | 柴田里実（常葉学園大学講師）  |

「高学年に適した外国語（英語）活動」 米田尚美（岐阜聖徳学園大学講師）  
 『英語ノート』と他教材を組み合わせた指導法 清水万里子（愛知淑徳大学講師）  
 「愛知県の小学校外国語活動教員研修プログラム」 犬塚章夫（愛知県総合教育センター）  
 「Classroom English 英語力アップ」 レイ・ロバンジャ（愛知県豊田市立古瀬間小学校 ALT）

模擬・モデル授業

「拠点校でのティーム・ティーチング形式での指導」

梅田由美子 & レイ・ロバンジャ（愛知県豊田市立古瀬間小学校教諭・ALT）

「マルチメディア教材・電子黒板を活用した指導」 小川 恵子（愛知県安城市立里町小学校教諭）

「小中連携へ向けての担任主導の指導」 槇 珠妃（兵庫県小野市立中番小学校教諭）

実践 報告

「附属小学校での取組」

山本 宗雄（愛知教育大学附属名古屋小学校教諭）

籠橋 亮介（岐阜大学教育学部附属小学校教諭）

「拠点校での取組」

中浜 和子（三重県鈴鹿市立長太小学校教諭）

前嶋 弥生（静岡県袋井市立袋井南小学校教諭）

澁川久美子（福井県福井市立啓蒙小学校教諭）

角藤 典子（富山県射水市立太閤山小学校教諭）

大参小百合（愛知県安城市立新田小学校教諭）

「指導助言者」

河木恵美子（愛知県豊田市教育センター・元豊田市立古瀬間小学校校長）

山田 誠志（岐阜県大垣市教育委員会指導主事）

稲積 玲子（富山県西部教育事務所指導主事）

<プログラム>

12月26日（金）

9:45-10:00 受付

10:00-10:15 開会式（301 教室） 総合司会：小塚良孝（愛知教育大学）

挨拶：松田正久（愛知教育大学学長）

挨拶：道木一弘（愛知教育大学外国語教育講座長）

10:20-11:00 拠点校等の取組紹介（ダイジェスト版）（301 教室）

①愛知教育大学附属名古屋小学校 ② 岐阜大学教育学部附属小学校

③三重県鈴鹿市立長太小学校 ④ 静岡県袋井市立袋井南小学校

③福井県福井市立啓蒙小学校 ⑥ 富山県射水市立太閤山小学校

11:10-12:20 セミナー<1>

教室	304 教室	310 教室	305 教室	303 教室	306 教室	307 教室
講師名	ライアン	柳	柴田	高橋	稲葉	杉浦

12:20-13:30 昼食

13:30-14:40 セミナー<2>

教室	305 教室	310 教室	303 教室	306 教室	307 教室
講師名	柴田	柳	高橋	稲葉	杉浦

15:00-17:00 拠点校・附属小の報告会

【1】（301 教室）福井市立啓蒙小学校・鈴鹿市立長太小学校（指導助言 河木恵美子）

【2】（303 教室）愛知教育大学附属名古屋小学校・岐阜大学教育学部附属小学校（指導助言 山田 誠志）

【3】（310 教室）射水市立太閤山小学校・袋井市立袋井南小学校（指導助言 稲積 玲子）

12月27日（土）

9:30-10:00 （201 教室）『英語ノート』のワンポイントアドバイス（講 師 高橋美由紀）

『英語ノート』を活用した拠点校での実際（発表者 大参小百合）

10:00-11:10 （201 教室）講 演 講演者：太田光春

司会 & 講師紹介：高橋美由紀

11:20-12:30 セミナー<3>

教室	304 教室	305 教室	310 教室	307 教室	303 教室
講師名	安武	南	犬塚	米田	清水

12:40-13:45 昼食 講師との懇談会

14:00-15:10 セミナー<4>

教室	304 教室	305 教室	310 教室	307 教室	303 教室	306 教室
講師名	安武	南	犬塚	米田	清水	レイ

15:25-16:25 課題別公開模擬授業

【1】（201 教室）拠点校でのティーム・ティーチング形式での指導（授業者 梅田由美子&レイ・助言者 柴田里実）

【2】（310 教室）マルチメディア教材・電子黒板を活用した指導（授業者 小川恵子・助言者 柳 善和）

【3】（303 教室）小中連携へ向けての担任主導の指導（授業者 槇 珠妃・助言者 高橋美由紀）

16:30-16:35 閉会式 (201 教室) 司会：高橋美由紀 (愛知教育大学)  
 挨拶：杉浦正好 (愛知教育大学)



愛教大、小学校外国語活動教員研修会を開催  
 愛知教育大学では、去る十二月二十六日、二十七日の二日間、同大第一共通棟を会場に、「小学校外国語活動教員研修会」を開催した。この研修会は、新学習指導要領に基づいた小学校外国語活動・小中連携の英語教育を指導できる教員を育成することを目的として開催したもので、愛知県内をはじめ全国各地から小学校外国語活動の担当教員や関係者ら延べ九百余名余りが参加した。

一日目の開講式では、愛教大の松田正久学長から開講の挨拶があり、引き続き、文部科学省小学校外国語活動の拠点校等の取り組みをダイジェスト版で紹介。その後、同大の外国語教育講座及び日本語教育講座の教員や他大学の教員を講師にセミナーが開催され、各教室とも満席の状況で活発に意見交換などが行われた。

二日目は、「英語ノートのワンポイントアドバイス」と題して愛教大の高橋美由紀教授が講義を行った後、文科省初中局の太田光春教科調査官が「小学校外国語活動必修化により、小中高の英語教育がどう変わるか？」と題して講演、参加者は熱心に聞き入っていた。プログラムの最後には課題別公開模擬授業が行われ、盛況のうちに研修会を終了した。

図4：研修会が大盛況であったこと（参加者 900 名余）と、研修内容等が掲載された（文教速報 2009 年 1 月 19 日）

【研修の成果】（回答者 210 名）

今回の研修会を受講して役立った内容（複数回答可）

- ① 小学校・児童英語の方向性等の言語教育政策 69 名
- ② 小学校・児童英語の教授法や言語教育についての理論面 61 名
- ③ 小学校・児童英語の指導アイデアや教材 127 名
- ④ 小学校・児童英語の実践指導方法 107 名
- ⑤ 自らの英語力や指導法のスキルアップ 36 名
- ⑥ その他 9 名 ⑦ 特になかった 3 名

今後の研修会の要望（複数回答可）

- ① 授業に役立つ指導方法 168 名
- ② 模擬授業形式での研修 112 名
- ③ 小学校・児童英語の教授法等の理論面 51 名
- ④ カリキュラム 75 名
- ⑤ 活動に必要な教材づくり 116 名
- ⑥ 教育言語政策 22 名 ⑦ その他 6 名

## 1. はじめに

ここでは、小学校外国語（英語）活動について考える際に参考とすべき知識ベース（Knowledge Base）を提示する。知識ベースとは、特定の課題に対して、重要となる問題点や解決方法やテクニックなどを要約してメモ的に文書化した資料である。

この趣旨に基づき、以下で、小学校外国語（英語）活動について、その目的、国際比較、英語の知識と技能の3つの部門に分けて、関係する知識ベースを示す。

## 2 目的

### 2.1 2つの方向性

小学校外国語（英語）活動の目的について中央教育審議会の外国語専門部会では以下の2つの方向性が検討され、最終的に、(2)を重視し、(1)を従とすることになった。

- (1) 英語力の向上を目指す英語スキルの重視
- (2) 興味・関心を重視し、異文化・自国文化の理解とそのためのコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指す国際コミュニケーションの重視

具体的にみれば、『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』（平成20年6月）では、目標にある「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り」と「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」のそれぞれに対応する内容の要点説明において、前者に関しては、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための内容と、日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めるための内容との二つとした」と述べ、後者については、「目標にある「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませ」ることは、日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めさせる内容の中に含めた」と限定的に述べている。

### 2.2 国際理解教育としての英語教育

萬谷（2007）によると、国際理解教育における目標の達成は、以下の3つの観点からみるのがよい。

- (1) 知識の育成
- (2) 態度の育成
- (3) 技能の育成

(1)の知識には、生活文化に関わる知識と言語に関わる知識がある。前者の知識は、自分の文化とは異なる外国の習慣や事物に対する興味を喚起するものとなる。後者の言語に対する知識は、言語に対する子供の興味を呼び起こす役割を持ち、おもに日本語との対比的な視点を軸にする。

(2)の態度は以下の4つに分類される。

- (i) 積極的にことばで通じ合おうとする態度
- (ii) 明確に理解し表現しようとする態度
- (iii) 異文化への理解と尊重の態度
- (iv) 自文化理解と自己肯定の態度

(i) は、ともかく伝えようとする意欲と、その結果として何とか通じるということの自覚である。(ii) は、明確な自己表現の基盤となるもので、具体的には、相手の言ったことが分からなかったときの対処法とか、“Yes.” や “No.” などによるはっきりとした自己主張の仕方の学習となる。

(iii) は、異なった文化の理解とその相対化を意味する。つまり、異なった文化を自国との対比において崇拝することもなく、卑下することもない「文化はみな対等である」という態度を培うことである。(iv) は、(1) の知識の育成と(2) の態度の育成を目指して行われる活動において、その媒体となり、それを促進するものとしての英語そのものの技能を高めることを意味する。体験的活動が単なる経験主義に陥っていけないということである。

### 2.3 コミュニケーション能力の「素地」の養成から「基礎」の育成への連携

1.1 で取り上げ、とりわけ『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』の文言を引用して説明した、目標の主従関係、つまり、言語や文化について体験的な理解の深化と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が主となり、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しませとコミュニケーション能力の素地の養成が従となる関係にもかかわらず、以下のことは厳然たる事実として存在する。

つまり、英語をもっぱらとする小学校英語科活動のねらいとして『学習指導要領』に規定してある「コミュニケーション能力の素地を養う」ことの実現は、英語の技能の学習という形で行われなければならない。このことについて、以下の3つの観点から説明を加える。

- (1) 活動はもっぱら英語を用いて行われること
- (2) 『学習指導要領』の「目標」の文章の解釈
- (3) 学習者の学習者としての心理

外国語活動が日本語ではなく英語を用いて行われることは、そこでの活動体験が必然的に英語の体験を内包すべく仕組まれていることになる。そこでの目標が英語の技能の学習ではないといくら言っても、活動を活発化するためには、その中で用いられる英語によるやりとりが少しずつでもスムーズになされることが必要となる。

『学習指導要領』の「目標」の文章構造を図示すると、図1のとおりとなる。

図1 『学習指導要領』の「目標」の文章構造

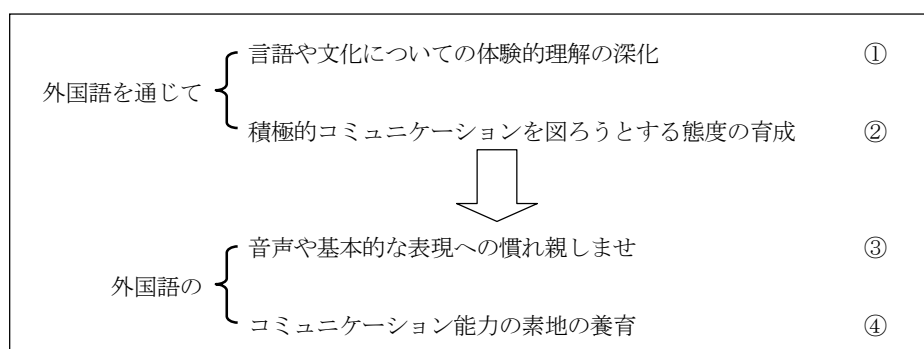


図1において、①と②の目標は、英語を通じてその達成が企てられる。それぞれの目標の達成においては、そこに行き着くための言語媒体としての英語の通用性の向上が常に求められる。英語の通用性の確保がなされなければ、それぞれの目標の達成はおぼつかない。とりわけ、②の目標におけるその関係は密着的である。英語の通用性の漸進なしに、積極的にコミュニケーションを測ろうとする態度の育成はあり得ない。

図1の③は、①と②の結果であり、④は、①と②の③の総括的な結果である。③が示すように、子供に英語の音声と基本的な表現を慣れ親しませることは、子供それらを学習することを意味する。慣れて親しむとは、学習が成立したことの具体的現れである。

以上のように、『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』の内容説明の要点に現れた文言にもかかわらず、『学習指導要領』の「目標」を提示する文章において、もっとも強く一貫して通底しているのは、英語技能の学習への指向性で

ある。同解説の「目標の要点」において、「外国語活動の目標をコミュニケーション能力の素地を養うこととし、中学校との連携を図った」ことが、「外国語を用いて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点を置いた」ことに先じて述べられていることは印象的である。

英語活動に取り組む学習者の視点から見ても、目標に関して同じことが主張できる。言語や文化の理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が、日本語ではなく英語を用いて行われることの意味とそこに必然的に関知せざるを得ない意図を学習者は十分に心得ているのである。それゆえに、活動媒体としての英語の学習成果が実感として得られなければ、学習者は意欲を消失する。とりわけ、認知様式が変容する時期（ピアジェの言う具体的操作期から抽象的操作期への移行期）に当たる高学年においては、学習者は単なる活動そのものの楽しさのみでは満足を得られず、活動の楽しさよりも学ぶ楽しさを求めるようになる。その学びの対象は英語そのものであり、そうでなければならぬ。

初期の小学校英語の実践に伴いがちであった英語学習の欠如は、以下の調査結果に如実に表れている（長瀬、2001）。この調査は、ある小学校の5・6年生で、課外活動としてJTEとALTのチーム・ティーチングを週1回受けた子どもたちに対して、中学1年時に行われたアンケート調査であり、以下はその中で小学校時代の学習についての一般的な意見である。

- (i) 見通しがなく、何のためにその授業をしているか知らされなかった。
- (ii) 英語だけでしゃべられるので意味がわからなかった。
- (iii) よく教えてくれないのに、「やってみなさい」と言われて困った。
- (iv) ずんずん進むから、もう少しゆっくり覚えたかった。
- (v) 日本の先生と外国の先生が話し合っていないくて、よく中断した。
- (vi) 日本の先生と外国の先生の言うことや発音が違っていた。
- (vii) 書けなかった。
- (viii) 先生に頼ってばかりいた。

### 3 国際比較

#### 3.1 英語に関する2つの現状

現在、英語は以下の2つの際立った特長を持っている。

- (1) 英語は国際的に普及し、もっとも優勢な国際言語となっている。
- (2) 英語が多様化し、異なった種類の英語が存在している。

(1) については、英語が母語話者のみならず、非母語話者によって第2言語としてあるいは外国語として世界中で使われており、非母語話者数が母語話者数を上回るという希な現象として現れている。Jenkins (2003) によると、英語の話者数の内訳は以下のとおりである。

母語話者：約3.5億人  
第2言語話者：約3.5億人  
外国語話者数：約10億人

英語は母語としてイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどで話されており、インド、バングラデシュ、ナイジェリア、シンガポール、フィリピンなどで第2言語として話されている。外国語としての英語は、その母語話者や第2言語話者とのコミュニケーションに使われるのみならず、異なった母語を持つ者同士のコミュニケーションにも使われている。例えば、中国語話者と日本語話者が英語を用いてコミュニケーションする場合である。まさに英語は国際言語である。

(2) については、“world Englishes”のように“English”の複数形が使われることに現れている。Jenkins (2003) によると、英語の世界への普及は図2に示す2つの経路を取った。

図2 英語の分散と2つの経路

第1次分散：移民による → アメリカ英語、オーストラリア英語、カナダ英語、ニュージーランド英語など

第2次分散：植民による → インド英語、フィリピン英語、ナイジェリア英語、シンガポール英語など

移民による第1次分散の結果は、それぞれ異なった英語となっているが、いずれもイギリス英語の直属であり、母語として使われているので、緊密な連続性があり、その変異は方言的変異としてとらえることができる。これに対し、植民による分散の結果は、英語を第2言語としてあるいは多言語地域の中における1つの言語として学んだ結果である。ここで生まれた英語の変化は独自のものであり、元の英語が持つ基準によって考察すべきでないといわれる。したがって、この分散経路によってもたらされた英語の変化は英語の変種の誕生として解釈される。

Jenkins (2003: 22) によると、新しい変種としての英語は以下の基準的特徴を持つ。

- (i) 教育制度の中で発達した。つまり、英語は教科として教えられ、多くの場合、英語以外の言語が主要である地域において教育言語としても使われてきた。
- (ii) 元の英語が大部分の人々によって使われることのない地域において発達した。
- (iii) その地域において英語を話したり書いたりする人々の間で多様なコミュニケーション機能のために使われる。
- (iv) その地域固有のある言語の特徴を取り込んで地方化 (localize) ないしは土着化 (nativize) されている。

このような特徴は、外国語として英語を学ぶ学習環境との対比において、きわめて興味深い。

### 3.2 アジア諸国における比較

本名 (2002) によると、英語の普及ないしはそのための教育的企てがアジアにおいて目立っている。とりわけ、アジア諸国においては、英語教育に力を入れている。英語を国内における公用語つまり第2言語としているインド、シンガポール、フィリピンなどはずっと以前から英語教育を小学校から開始している。英語を外国語とする国においても小学校での英語教育が始まっている。このような国々の制度的な特徴も含めた小学校英語教育の実態については本名 (2002) に詳しい。

### 3.3 比較の視点

比較においては、印象的な記述による比較が目につきやすく、異なっているものに目を奪われやすく、それらを個別的に把握しがちであるが、以下のことについての注意が必要となる。

- (1) 信頼性のあるデータを用いる。
- (2) 違いの確認が目的ではなく、比較による日本への収斂が目的である。
- (3) 個々の現象をトータルな視野に収めることが必要である。

(1) については、例えば、バトラー後藤 (2005: 33) は、英語への関心・意欲について、「目の色が輝いていた」とか「大きな声で発言していた」のような評価は信頼性を欠いていると指摘している。

(2) に関しては、例えば、韓国では1997年から公立小学校で正規の科目として英語が導入されたが、それまでに小学校教員に対する英語の研修を中心とした周到な準備がなされていることを見逃してはいけない。

(3) については、例えば、台湾では2001年に国民小学 (小学校) の5・6年で導入され、2003年からは3年からの導入を行っているが、これは地方の先行の実施を中央政府が追隨的に総括したもので、その結果として、英語学習へのアクセス度と達成学力において、都市間の格差、家庭間の格差が生じているという現状がある (バトラー後藤 2005: 66-96)。

なお、国際比較においては、すべての国に共通するグローバルな現象と地域に固有なローカルな現象の両方に目を配

り、地域のローカル性を十分に考慮に入れて比較検討する必要があるとするバトラー後藤の指摘は傾聴すべきものである（国際シンポジウム「アジアにおける初等英語教育の今後の展開」における基調講演「東アジアの小学校英語教育—グローバルとローカルな要素の影響力」、2008年7月20日実施）。

#### 4 英語の知識と技能

##### 4.1 音

英語の音のレベルに関し、日本人英語学習者一般にとって問題となることとして、少なくとも以下を上げることができる。

###### (1) 日本語にない子音

[f] (無声唇歯摩擦音) : fish, fight, finger	[v] (有声唇歯摩擦音) : violet, violin, velvet
[θ] (無声歯摩擦音) : three, theaters, think	[ð] (有声歯摩擦音) : these, they, this
[r] (有声歯或は歯茎接近音) : red, ribbon, rose	[l] (有声歯或は歯茎側面接近音) : local, lobby, hotel

###### (2) 日本語にない母音

[æ] (準開前舌非円唇母音) : cat, pat, mat	[ʌ] (半開後舌非円唇母音) : cut, bug, rug
[ɑ] (開後舌非円唇母音) : hot, pot, soccer	[ə:] (R音性中段中舌母音) : bird, first, shirt

###### (3) 子音連結 (Kreidler 2004: 88-94)

子音+[r]- : pray, brave, train	-[r]+子音 : harp, arch, work
子音+[l]- : play, blade, clay	-[l]+子音 : help, belt, milk
子音+[w]- : twin, quit, swim	-[n]+子音 : ant, hand, bank
[s]+子音- : spy, sky, snow	-[m]+子音 : lamp, nymph, camp
[s]+子音+[r]- : spray, street, scream	-[s]+子音 : list, risk, ask
[s]+子音+[l]- : splendid, splash, splinter	-閉鎖音+閉鎖音 : apt, act,
[s]+子音+[w]- : square, squint, squeeze	

###### (4) 個々の音は日本語に存在するが組合せとして日本語にない音

[si] : seat [si:t] (cf. [ʃi:to] : シート)	[hi] : heat [hi:t] (cf. [çi:to] : ヒート)
[ti] : team [ti:m] (cf. [ʃi:mu] : チーム)	[hu] : hood [hu:d] (cf. [φu:do] : フード)
[tu] : tour [tuə] (cf. [ʧu:a:] : ツアー)	

###### (5) 弱い発音

- (i) 弱音節 about [əbaut], album [ælbəm] restaurant [restərənt], etc.
- (ii) 弱形 on [ən], and [ənd / nd / n], can [kən / kn], etc.

###### (6) 音の連続に現れる諸現象

- (i) 脱落 Take care. [teɪ\_keə]
- (ii) 同化 meet you [m:ʃu]
- (iii) 連鎖 Take it easy. [teikiti:zi]
- (iv) [r] 連結 far away [fa:rəwei]

(3) に関しては、根本的には、日本語の音節が開音節（母音で終わる音節）であるのに対し、英語は閉音節（母音で終わらない）であることの違いが問題となる。日本語の音節構造は CV（C=子音、V=母音）で表されるのに対し、英語は CCCVCCC で表される。

(4) については、[s] [t] [h] の子音と [i] [u] の母音はそれぞれ日本語に存在するが、その組み合わせである [si] [ti] [tu] [hi] [hu] の各音は日本語では使用しない音である。したがって、このような組み合わせ音が英語で使われるときに、日本人英語学習者が間違っってそれぞれ代入しやすい音は、表 1 に示す日本語の五十音における該当行の網掛け部分の影響



である。

表1 日本語のサ・タ・ハ・ラ行と注意すべき音（網掛け部分）

サ行	サ：[sa]	シ：[ʃi]	ス：[su]	セ：[se]	ソ：[so]
タ行	タ：[ta]	チ：[tʃi]	ツ：[tʃu]	テ：[te]	ト：[to]
ハ行	ハ：[ha]	ヒ：[çi]	フ：[ɸu]	ヘ：[he]	ホ：[ho]
ラ行	ラ：[la]	リ：[li]	ル：[lu]	レ：[le]	ロ：[lo]

[çi] の音の [ç] は、上あごの前半部（硬口蓋）と舌の間で息をこする音（無声硬口蓋摩擦音）

[ɸu] の音の [ɸ] は、上唇と下唇の間で息をこする音（無声両唇摩擦音）

[l] は舌端と歯茎で息を止め、舌の側面を軽く弾く音（有声歯茎側面弾き音）

日本語から来るこのような影響は、日本語化している表2に示すような外来語の発音によってさらに強化されることに注意が必要である。

表2 英語と外来語の発音比較

英語	日本語
seat ([si:t])	シート ([ʃi:to])
team ([ti:m])	チーム ([ʃi:mu])
tour ([tuə])	ツアー ([tʃua:])
heat ([hi:t])	ヒート ([çi:to])
hood ([hu:d])	フード ([ɸu:do])
racket ([rækət])	ラケット ([laketo])

このような習慣化している日本語の五十音図による束縛を解き、新しい英語音としての組み合わせ音を練習するために、表3に示す変則サ・タ・ハ・ラ行を敢えて練習してみるのもよい。

表3 変則サ・タ・ハ・ラ行

変則サ行	[sa]	[si]	[su]	[se]	[so]
変則タ行	[ta]	[ti]	[tu]	[te]	[to]
変則ハ行	[ha]	[hi]	[hu]	[he]	[ho]
変則ラ行	[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]

[r] は舌先を上あごに近づけ、くっつけないまま息をこする音（有声歯或は歯茎接近音）

(5) については、国際語としての英語の観点から、弱音節と弱形を別々に考察する必要がある。弱音節は、語の中で強勢を置かれない音節のことで、その中の母音が弱く、典型的にはあいまい母音 (schwa: [ə]) で発音される。これは英語が基本的に音の強弱を意味の区別に用いる強勢アクセント言語であることの反映である。弱音節は強音節に対する相対的な現象であるが、そのコントラストを実現するために必須であり、必ず身に付ける必要がある。国際語としての英語という観点からみても、この要件は聞く側にとっても、話す側にとっても必須の要件となる。

これに対し、弱形は国際語としての英語という観点からして、聞く側にとっては必要ではあるが、話す側にとっては必ずしも必要とはならない (Jenkins 2000: 146-147)。英語母語話者のスピーチにおいて、文の中において通常強勢を置かれない語は当然のことながら弱く発音されるが、弱形とはこのような弱い発音のことを言う。これらの語は、何らかの特別の理由によって強勢を置かれるときには、強い強形としての発音となる特徴を持つ。弱形を持つ語は冠詞、前置詞、接続詞、人称代名詞に多い。

弱形が国際語としての英語という観点からして、聞く側にとって必要となるのは次の理由による。つまり、聞く側においては、国際語としての英語の中に、英語母語話者の英語が含まれており、彼らは弱形を多用するので、それを聞き取ることが必要となる。これに対し、話す側からすれば、必ずしもそれが必要とならないのは、以下の理由による。弱形は典型的に自然な速さのスピーチにおいて、その速さを実現するためにも用いられており、その習得は容易でなく、教授も簡単にはかなわない。また、弱形の特徴は、それを強形で置き換えても、意味の伝達においては何の支障もないということである。したがって、国際語としての英語において、弱形を表出用として学ぶ必要はない。

(6) の音の連続に現れる諸現象についても、弱形と同じことが主張できる (Jenkins 2000: 148-149)。このような現象は、英語母語話者の英語に必ず現れる現象であり、その意味において聞く側にその対応力が求められるが、表出における意味の伝達という観点からすれば、必須の現象ではないので、表出用としてこれらを身に付ける必要はないと言えることができる。

#### 4.2 語

中條他 (2006) は、国内の英語教科書出版社 5 社より出版された *Let's Have Fun!*, *JUNIOR COLUMBUS 21*, *Junior Horizon Hi, English!*, *ONE WORLD Kids*, *KIDS CROWN* の 5 種のテキストシリーズのすべてに共通して使われている語として 267 語を確認した (表 4)。

表 4 国内の英語教科書 5 種類に共通する 267 語

代名詞	: he I it she they that this we you (9)
前置詞	: about after at by for from in of on over to (11)
果物	: apple banana cherry melon orange strawberry watermelon (7)
食物	: bread cake candy carrot chicken chocolate cookie cucumber curry egg fish hamburger juice melon milk onion potato pumpkin rice sandwich shrimp tomato (22)
動物	: bear cat cow dog duck elephant giraffe koala lion monkey panda tiger zebra (13)
人	: boy brother father friend man mother nurse player police scientist sister teacher (12)
スポーツ	: baseball basketball soccer tennis volleyball (5)
動詞	: be bring clap clean close come cook do eat fly fry get go guess have help jump let like listen live look make open play put read ride run say see show sing sit ski sleep stand start study swim take tell thank tire touch try walk want watch write (50)
助動詞	: can may will (3)
色	: black blue brown green purple red white yellow (8)
疑問詞	: how what where who (4)
身体	: foot hand mouth nose (4)
天候	: cold fine hot rainy sunny (5)
文具	: eraser notebook pencil ruler (4)
乗物	: bus taxi train (3)
形容詞	: all big fun good great happy hungry long many much new next nice old ready right sad small social some sure (21) (天候関係除く)
副詞	: again back down here home no not now o'clock only so there together today too up very well yes yesterday (20)
名詞	: afternoon animal art ball bed book card chair change circle class clock color computer country day desk door fall family fire fruit game glass guitar hospital house ice lesson lunch morning music name night office paper piano post question room school science scissors shop sport station store subject supermarket table time tree violin water weather week weekend world year yen (60)
接続詞	: and but (2)
冠詞	: a the (2)
その他	: good-bye please (2)

一方で、中條他 (2009) によると、2008 年に出版された『英語ノート』(試作版) 2 冊において、テキスト自体、CD、指導資料において教員が教室で話すことになる部分のそれぞれの中で出てくる単語をすべて数えると、以下のとおり 581 語となる。

家族関係 10 語 (grandpa, grandma, etc.) ; 人間種関係 4 語 (girl, friend, etc.) ; 職業関係 38 語 (player, teacher, etc.) ; 身体関係 9 語 (toe, knee, etc.) ; 動物名関係 27 語 (ペット 4 語 (dog, cat, etc.) ; 家畜等 3 語 (horse, mouse, sheep) ; 動物園動物 13 語 (panda, koala, etc.) ; 海洋動物 5 語 (fish, jellyfish, etc.) ; 鳥 1 語 (bird) ; 蝶 1 語 (butterfly)) ; 花 1 語 (flower) ; 自然関係 10 語 (star, beach, etc.) ; 乗物関係 5 語 (bus, car, etc.) ; 建物施設関係 16 語 (station, bookstore, etc.) ; 文房具関係 11 語 (book, paper, etc.) ; 教科名関係 10 語 (music, math, etc.) ; 学習関係 15 語 (name, chant, etc.) ; 家の中関係 7 語 (table, bed, etc.) ; 衣類関係 10 語 (pant, T-shirt, etc.) ; 所持品関係 4 語 (cap, glove, etc.) ; 靴 1 語 (shoe) ; 室内物関係 4 語 (box, TV, etc.) ; 料理名関係 23 語 (soup, pizza, etc.) ; 野菜関係 4 語 (turnip, tomato, etc.) ; 果物関係 7 語 (apple, banana, etc.) ; 菓子関係 6 語 (cake, cream, etc.) ; 飲み物関係 2 語 (juice, milk) ; 遊具関係 3 語 (ball, kendama, unicycle) ; スポーツ名関係 9 語 (soccer, baseball, etc.) ; 楽器名関係 2 語 (guitar, piano) ; 行事関係 4 語 (birthday, Christmas, etc.) ; 抽象名詞関係 13 語 (time, matter, etc.) ; 色関係 7 語 (red, blue, etc.) ; 形容詞関係 32 語 (fine, hungry, etc.) ; 動詞関係 40 語 (do, like, etc.) ; 挨拶関係 9 語 (Hello, Good-bye, etc.) ; 数関係 72 語 (one, three, etc.) ; 地名関係 25 語 (Japanese, Japan, etc.) ; 人名関係 51 語 (Ken, Mai, etc.) ; 月名関係 12 語 (February, December, etc.) ; 曜日関係 7 語 (Monday, Tuesday, etc.) ; 季節関係 1 語 (summer) ; 擬声語関係 4 語 (meow, bow-wow, etc.) ; 副詞関係 14 語 (yes, no, etc.) ; 前置詞関係 6 語 (to, in, etc.) ; 代名詞関係 7 語 (you, it, etc.) ; 接続詞関係 2 語 (and, but) ; 助動詞関係 3 語 (can, will, be) ; 疑問詞関係 6 語 (what, how, etc.) ; 冠詞 1 語 (the) ; アルファベット文字 26 語 (A, B, etc.) ; エイ・ビー・シー 1 語 (ABC)

小学校英語活動においては、学習者に興味のある以下のような範疇の語を用いた活動がしばしば行われる。活動としては、チャンツ、名前記憶ゲーム、“What do you see?” ゲームなどがある。絵本やフラッシュカードを使い、色の名前と組み合わせた活動も行われる。

昆虫 : ant, beetle, cicada, ladybug, dragonfly, grasshopper, butterfly, stag beetle, etc.

動物 (陸上) : pig, cow, chicken, bear, bird, duck, horse, frog, cat, dog, sheep, etc.

動物 (海洋) : fish, starfish, shell, crab, octopus, dolphin, shark, squid, etc.

#### 4.3 文

文のレベルに関しては、まず第一に英語の基本的な文の型に慣れる必要がある。基本的な英文の型は日本の中学校の教科書で扱っている範囲に含まれる。いわゆる教室英語で使われる表現も、この中に含まれる。したがって、小学校の教員にとっては、中学校の英語教科書を復習することが薦められる。たとえば、和田・山本 (2006) 『小学校で英語を教えるあなたへ 再勉強のポイント』の内容は、中学校で学んだものである。

以上のような、文法規則に基づいた知識による基本的な文の生成能力に加えて、スムーズな言語運用を確保するためには、いわゆる事例に基づいた知識が存在することも見逃してはならない。事例に基づいた言語知識とは、丸覚えの表現単位で、その運用においてその内部構成について分析を加えることなく、一つの塊 (チャンク) として処理されるものである。このような表現単位の典型は語であるが、それだけでなく、複数の語からなるもので同じ処理を受けるものがある。これらは決まり文句とか定式発話と呼ばれるものである。その処理の特徴と、複数の語で構成されていることから、このような表現単位を語彙的成句 (lexical phrase) と呼ぶ。事例にもとづく知識を構成するのは、語彙的成句である。

英語母語話者の場合、以下が語彙的成句の例である。

by the way; at any rate; beside the point

as it were; all in all; by and large

how do you do?; have a nice day; a watched pot never boils

long time no see; be that as it may

in short; see you later; yours sincerely  
the sooner, the better; for better or worse; for instance  
I think (that) X; my point is that X; let me start by X  
Would you VP?; it seems (to me) (that) X; that reminds me of X

英語母語話者が持っているこのような表現単位としての語彙的成句（定式発話）の数はかなり多く、ある日常的な話し言葉の分析によると、全発話の 58.6% が定式発話で占められているという（Ellis 2008: 76）。

母語話者による語彙的成句の使用は、その処理速度の速さとして特徴づけられる。これはその運用において分析的処理を必要としないからである。このことは話す側と聞く側の双方に当てはまる。しかも、これらの成句はそれが表す意味や機能が固定的で、使用場面も固定されているので、表出における速さのみならず明瞭さにも影響を与え、完璧な明瞭さが要求されない。

母語話者同士の会話の速度がその言語の外国語話者にとってきわめて早く感じられるのはこのためである。したがって、外国語の学習の一部として、このような語彙的成句の学習が含まれる。

小学校で英語の決まり文句を教えることに躊躇を覚える向きもあるが（英語活動が小学校へ総合的学習の時間に導入された初期に、その中で行われていることを「歌と踊りと決まり文句」の三種の神器として批判的に評価がなされたことがある。山岡 2008 参照。）、語彙的成句が通常の言語運用において果たす重要な役割を考えると、その指導において躊躇する必要はないと言えることができる。

しかしながら、その指導においては、以下の 2 つのことを考慮に入れなければならない。

- (1) 決まり文句が表す意味・機能が明確に感じられる場面設定をすること。
- (2) 決まり文句を基にして、規則に基づく知識の構築への導きを加えること。

(1) に関しては、これが決まり文句のもっとも大切な特徴であることに加え、何にしる、言語の使用は常に有意義的（意味的にも機能的にも）でなければならない。意味の関知できない言語の使用は、使用者の興味と意欲を減衰させるものでしかない。

(2) は、小学生が高学年になるに連れて示す、単なる活動の楽しさの満足から、何らかの学びの楽しさを求めるようになることへの移行との関連において、とりわけ重要である。固定的な場面における固定的な意味と機能の決まり文句の繰り返しだけでは、学習者は明らかに飽きてしまう。彼らが求めるようになる学びの楽しさの保障として、英語を学んでいるという実感を与えることは必須であると思われる。

英語を学んでいるという実感は、生産性へとつながる英語の仕組みを関知し、それを身に付けることで達成可能であると思われる。つまり、決まり文句からそれをも生み出す一般的な規則を見出すことである。ただしこの過程は演繹的であってはならず、個別事例に基づいた帰納的な過程でなければならない。しかもそれを明示的ではなく、暗黙的に導かなければならない。その具体例をいくつか以下に挙げる。

#### 例 1 前置詞 around の学習

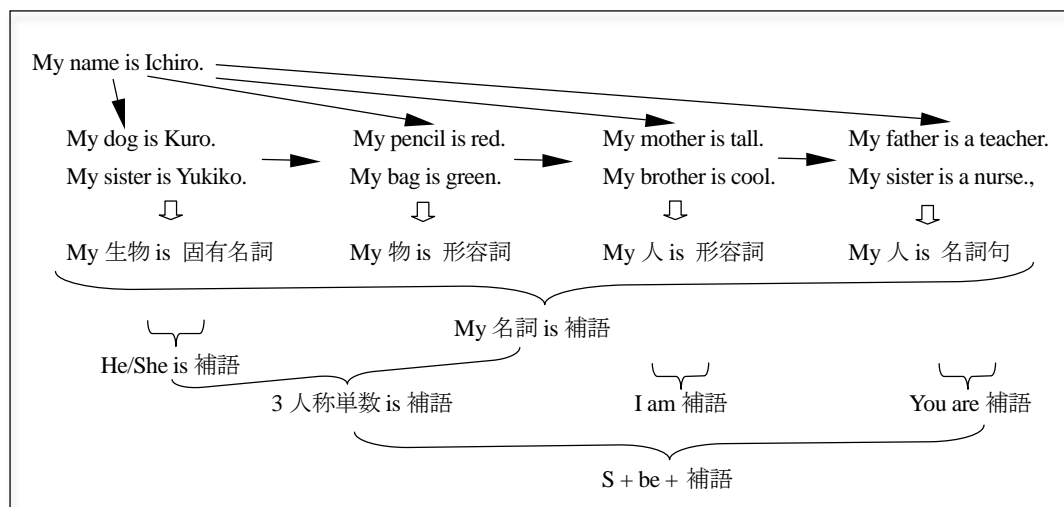
絵本の読み聞かせで、主人公が池の周りを回る状況を“around the lake”で表現すること（“lake”が池を意味し、“around”が「周回動作」を表すこと）を知った子どもたちが、別の機会に学んだ“desk”を利用して、休み時間に机の周りを回りながら“around the desk”と繰り返した。これは、“around the lake”を分析し、“around”の意味・機能を一般化する過程の第一歩を示している。この事例で興味深いことは、この子どもたちが、“around the desk”と言ったのは、何らかのコミュニケーション意図があったのではなく、彼らの行為が英語でまさにそのよう表現されることを確認し、そのように自ら言うことができることの楽しみを確認していると思われることである。子どもたちはこのような意味での英語の学びの楽しさを求めているのである。繰り返し述べるが、彼らはコミュニケーションに動機づけられて英語の学びを行っているのではなく、英語を学ぶことそれ自体に喜びを見出しているのである。

（この事例は、谷口美智子 2008『絵本を媒介とした小学校外国語活動における言語の学び』平成 20 年度兵庫教育大学大学院修士論文による。）

例2 S + be + 補語 への一般化

当初において導入される表現は、それを支える文法規則へ至る方向付けが必要である。“My name is Ichiro.” を例としてその一般化の道筋の例を図3に示す。

図3 S + be + 補語 への一般化の道筋例



ちょうど、前置詞 *around* に関してその用法が開かれていくのと同様に、決まり文句としての “My name is ~.” も開かれなければならない。その過程が進み、「S + be + 補語」に至り、これが「S+Vi」や「S+Vt」と対比され、体系化されるのは遙か先のことであるが、それに向けて多少の踏み出しが必要である。子供が “around the desk” と自己発言してその学びを実感するのと同様に、“My mother is Yukiko. She is kind.” と自ら表現できることが学びの証であり、学びの糧になる。もちろんのこと、このような一般化への道筋は、表出においてのみ起きるのではなく、理解においてまず生じる。図3はまず理解のける発見の道筋であり、その次の条出における道筋を表している。

したがって、高学年に行くほど、活動の選択においては、その中に盛り込まれる言語材料の見極めが重要になってくる。

引用文献

中條清美・西垣知佳子・西岡菜穂子・山崎淳史・白井篤義 (2006) 「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学部研究報告B』第 39 巻, pp. 79-109.

長瀬荘一 (2001) 『小学校校英会話の授業・成功させるポイント』東京：明治図書.

中條清美・西垣知佳子・宮崎海里 (2009) 「小学校5・6年生「英語ノート」の語彙一覧」『日本大学生産工学部研究報告B』第 42 巻.

本名信行 (2002) 『事典 アジアの最新英語事情』東京：大修館書店.

山岡俊比古 (2008) 「小学校英語学習における認知的側面—認知的発達段階に即した学習とその促進—」『教育実践学論集』(兵庫教育大学連合学校教育学研究科) 第9号, pp. 75-86.

萬谷隆一 (2007) 「国際理解教育と英語教育」、岡秀夫・金森強 (編著) 『小学校英語教育の進め方』成美堂に所収。pp. 134-143.

和田勝昭・山本元子 (2006) 『小学校で英語を教えるあなたへ 再勉強のポイント』東京：明治図書.

Ellis, R. (2008) *The study of second language acquisition*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.

Jenkins, J. (2000) *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.

Jenkins, J. (2003) *World Englishes: a resource book for students*. Abingdon, Oxon: Routledge.

Kreidler, C. W. (2004) *The pronunciation of English: A course book*. Malden, MA: Blackwell.